

ARIA ~cavaliere storia~

ソール

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2300年代の未来、火星はテラフォーミングされ水の惑星となり、アクアと呼ばれていた。アクアに築かれた入植地の一つ、ネオ・ヴェネツィアは地球のイタリアである。ヴェネツィアの風習や街並みを再現した観光都市である。

そんな観光都市に惑星マンホームから（地球）やる気の無い警察官がやってきた

「うえ〜〜、仕事ダライ〜〜」

これはネオ・ヴェネツィアの警察官の話

目次

第一話	ネオ・ヴェネツィアによるこそ	1
第二話	蒼い男	32
第三話	バカにする理由	58
第四話	彼は意外と便利屋	74
第五話	晃との出会い	87
第六話	グランドマザー	101
第七話	三人目の水の三大妖精	115
第八話	サラマンダー	127
第九話	ノームのアル	149
第十話	綾小路宇土51世	159
第十一話	四大天使騎士	168
第十二話	愛人はかけがえない人	177
第十三話	階級墮天使 ジャステイス・ルシファー	198
第十四話	ブラットオレンジ・プラネット	220
第十五話	ケット・シー	233
第十六話	夜光鈴とアリシアとの関係	245
第十七話	愛人とアテナの間の赤子!?	262
第十八話	マンホームの料理	292
第十九話	愛人のレデントーレは夢いっぱい?	314
第二十話	決して一人じゃない	340
第二十一話	幽霊より怖い男	353
第二十二話	グランドマザーの合宿	375

第一話 ネオ・ヴェネツィアによろこそ

西暦2300年の未来、火星はテラフォーミングされ水の惑星となった、今は火星で無くアクアと呼ばれ。ネオ・ヴェネツィアと呼ばれる。地球のイタリアに存在した都市・ヴェネツィアの風習や街並みを再現した観光都市である。地球のヴェネツィアはすでに水に沈んでおり、多くの建築物がネオ・ヴェネツィアに移設されていた。また、日本人の入植地が近接していたことにより、日本文化の影響もみられる。

「はあく、ここが火星アクアでネオ・ヴェネツィアか」

彼の名前は七海・愛人

高等部卒で警察官になり、転勤により火星『アクア』のネオ・ヴェネツィア警察本部に移動された

彼はここ火星『アクア』に来るのも初めてであり、ネオ・ヴェネツィアのこと、聞いたことはあるだけであって、行ったことも一度も無い
更にこの男

「ヤベエ、警察本部どこだろう？」

ネオ・ヴェネツィアの地図も持ってないし

調べもしなかった

ネオ・ヴェネツィアはとても広く、迷子になりやすいほどの広さの都市だった

普通行つた事の無い場所は必ず前日に場所を把握し、地図を買って調べるのが常識なのだが

この男は

「ま、地図を買うのもダルイし、とりあえず歩いてれば着くだろう」

面倒くさがり屋なのだ

しかも場所もわかっていないのに、そこら辺歩いて着く訳が無い場所もわからないのに、普通に歩いただけで着くほど、ネオ・ヴェネツィアという都市は甘くない

ただでさえここには

「ん？へえ、あれがウンディーネか？」

歩いている途中ゴンドラを漕いでいる女性がいた

ウンディーネとは

ネオ・ヴェネツィアでは地球のヴェネツィアと異なり、ゴンドラ漕ぎによる観光案内を女性が担っていた。それがこの職業をウンディーネだ。観光産業で重要な役割を持っている。ちなみに女性専用

つまりは、それほどここは広く。案内人がいないと迷う可能性が大というわけだ。ここは観光としても評判であり、それと同時にウンディーネという職業も評判である

だが、彼には

「へえ、あれがウンディーネなんだ」

どうでもいいみたいに、ゴンドラを漕いでいるウンディーネを少し見て通り越す

しばらく観光客みたいに町を回る

というか、警察本部に行くということ忘れてないか？

10分後

「あ、ここか。ネオ・ヴェネツィア警察本部」

どうやらマジで適当に歩いてだけで着いたらしい

運がいいのだろうか、ここは広いし、ここは愛人は来た事の無いはず

どうして歩いてだけで着いたのだろうか、運がいいだけとは思えないのだが

そんなことはともかく中に入って転勤したってことを報告し、この仕事を聞いてさっさとここの警察の仕事に慣れる様にするのだった

けど、めんどくさいなうって心で思っている

「君が、こちらに転勤した七海・愛人君だね？」

「そうです、七海・愛人です。よろしやす」

「え？あ…うん。よろしく。僕はここの巡査部長のアクト・ハーヴィだ。よろしく」

「うす、よろしやす」

(あれ？なんかやる気なさそうだけど?)

お互い握手するも愛人の顔はダルそうな顔していた

一番大事な第一印象をダルそうな顔で終わらせた

アクト・ハーヴィ

ここネオ・ヴェネツィアの警察本部の巡査部長

ここの本部の責任者である

ちなみに愛人は巡査

「それで君はどうして転勤したんだい？あつちの方が仕事が慣れているだろう？」

アクトは本人が転勤してこちらに来るとい話話についているが、なんで彼がこんなところに来たのだろうか、プロフィールが届いていて見てみたのだが、彼はネオ・ヴェネツィアに来た事も無いらしい、なのになぜここに転勤したのだろうか

ちなみにこちらは人手不足でも無い

なにかあったのではないかとアクトは聞いてみる

「ああ、ちよつとやらかしてこつちに転勤されたんだよね」

「え？やらかした？」

愛人の言葉にやらかしたと出た

まさかルールを破るようなマネをしたのだろうか

警察としてなにかしたのだろうか

「ああ、実は喧嘩して、こつちに飛ばされたんだ」

「喧嘩!?なにをしたの!？」

「ああ、実は居酒屋で喧嘩したんだ」

「居酒屋!?!」

アクトは考えた

居酒屋ってことは酒を酔った勢いで喧嘩をしたのだろうか

「まさか!?!酒の酔い!?!」

「いや・・・オレは酒飲まないよ?」

「え?」

酒は飲まないのなら?

じゃあなんで喧嘩に

「酒で酔ったのは上司で、その上司がムカつくひっこいくらい虐めてきてさ?だから病院送りにして、あの上司が嫌でこっちに来たのさ?」

「上司を病院送りにした!?!お前なんてことしているんだよ!!」

「ちなみに上司は警部で、なかなか面白かったぜ?」

「誰が感想を言えって言ったよ!?!ていうかよくクビにならなかったな!?!警部相手に喧嘩売って!?!只ではすまないはずだよ!?!」

「大丈夫だって、もしそうだったら、オレあの上司の隠し持っているエロ本、みんなにばらすし、あっちもあっちで脅迫してくるオレが嫌でこっちに転勤されたんだよね?」

(なんて奴だ!?!警部相手に脅迫!?!なんなんだこいつは!?!)

アクトはこんな危険人物を手元に置くのが怖くなった

いつか自分も脅迫されるだろうか

というよりこんな奴をネオ・ヴェネツィアに置く訳にはいかないとも考えがある

まあ、まだ初日だし、ここは様子見でってことで

そういえばとアクトは思い出した。確か彼のプロフィールに問題児という用語があったことに彼の扱いは少し難しくなりそうだなと思った

「と、とりあえず、ここ町の仕事を教えよう。ついてきてくれ?」

「へい?」

やる気の無い返事で仕事の内容を説明した

「とういわけな？今日は僕のやることを見てもらいたいから、このまま外にパトロールしに行こう？」

「わかりやした」

「あの？僕には敬語じゃなくていいけど、市民の人にはできれば敬語でお願いね？」

「了解しやした」

（大丈夫かな〜）

意外と敬語もなつてない敬意つてもものがないのだろうか、まさかマンホームでもこうなのだろうか

とにかくボートを用意し、海の上でパトロールをしようとする

「へえ〜？やっぱりボートで見回りをするのか？」

「うん、ここ水の都だからね。ボートで見回りをするか、もしくは歩いて観光客を迷った人を案内させるとかだからね、後は船やゴンドラの駐車かな？」

「へえ〜、てつきりスリとか、取り締まるしか仕事無いかと思ったけど？」

「それは全然無いね。ここは優しい星でもあるからな、そんな悪い事件は今までに一度も無いからね？」

「へえ〜、平和でいいじゃん」

「まあね、とにかく僕たちネオ・ヴェネツィア警察は見回ることと、ルールを守るようにするのが観光客が困った時は助けるのが仕事だ」

「そう？見回るだけなら楽でいいや、おかげで疲れずに済むぜ？」

「お前？それでも警察官？いくらなんでも警察官の言葉とは思えないぞ？」

「は？だってめんどいじゃん？警察官なんて公務員なんて税金をむさぼるだけの無能集団じゃん？金貰えるだけで動いているだけじゃん、警察官なんてそんなもんだろ？」

「お前本当に警察官!?警察官じゃねよ!?お前警察官じゃなくてもはやゲスだ!!」

「あゝゝ、働かないでござるゝゝ」

「ついに働きたくないって言いやがった!?こいつどんだけやる気が無いんだよ!?!」

こんなバカに仕事の説明もするも

ボートに乗り、とりあえず町をパトロールする

そんな中

「やつぱりウンディーネが多いな?」

パトロールしている途中ウンディーネのすれ違う事が多かった
気になったせいかな聞いてみる

「なんだ?ウンディーネには興味はあるんだな?」

「いや、無えよ?ただ多いなって思っただけ?」

「その割にはよくわかったじゃない。あの制服だけでウンディーネだって?」

「まあな、ニュースでも結構やってたからなく、まあそれなりにはな・・・ん?」

喋っている途中、愛人が何かを見つけたのか、喋るのをやめた
彼が見つけたのは

ゴンドラを漕いでいた人だった

その美貌をより一層際立てるブロンドのロングヘアを後ろで編み込んでいる人

それは

アリシア・フローレンスだった

愛人がそれを見つめていた

彼は彼女のゴンドラの漕ぐ姿を見つめていた

「・・・あの人」

「お?なんだ?お前も一目惚れか?」

「は?なんで?というか知っているのあの人?」

「え？お前は知らないのか？」

「いや、知らないけど？なに？そんな有名なの？」

「はあく、まさか知らないとは、雑誌によく載っているだろう？アリスア・フロレンスだよ？」

「アリスア？・・・ああ、確かによく載っているな？」

アリスア・フロレンス

ネオ・ヴェネツィアの人気を誇るウンディーネである

『水の3大妖精』と称えられている存在で、通り名は『白き妖精（スノーホワイト）』

その舵さばきは無駄がなく、かつ美しさも兼ね備えている

そして何よりアリスア自身が美しいので全く隙がない

彼女が優雅にゴンドラを操る姿は、まさに水の妖精の如

その魅力ゆえ、彼女を指名する客も多く、非常に多忙な生活を送っている

彼女の漕ぐゴンドラに乗るため、ARIAカンパニーへ直接足を運ぶ客も多い

ARIAカンパニーが現在社員2名で成り立っているのも彼女の業績が大きい

ファンも多いと聞く

「へえ、あれがそうなんだ？」

「ああ、どうした？やっぱり惚れたか？」

「いや・・・・・・腹黒そうだなって思ってた」

「お前はあのアリスア・フロレンスをどう見たらそう見えるんだ!？」
一体彼はあの美しさをどう見たら、そういう風に見えるのだろうか

そんなことをしている間にも昼になり、昼食を取っていた

「ふくん、このパスタうまいな？」

「だろ？ここは君でも気に入るぞ？」

アクトのオススメのレストランに行き。今はパスタを食べて、いろいろここでの仕事を話していた

「ま、そんなことよりも、まだ見回りやるのか？正直ダルいんだけど？」

「はつきり言うなお前は？仕方ないだろ？これも立派な仕事だ？お前だって仕事ってやったろ？」

「ああ、やってたよ？……ちよくちよくコンビで『プリマをねらえ』ってのを 読んでたけどね？」

「お前は本当にそれでも警察官かよ!？」

アクトは呆れた

まさかパトロール中にサボっていたとは、そろそろこいつに渴でも入れてやる気出せるようにしないと、こいつから問題を起こすかもしれない

というかよくクビにならないと思っている

「さて、食い終わったし、行こうぜ？」

「え？」

「パトロールの続き？するんだろ？」

「……」

これは意外だった

まさか彼はあれほどやる気が無く。パトロールもめんどいと言っていたはずなのに

まさか自分から仕事に専念するとは、

彼もやる時はやるみたいなのだろうか

アクトは未だに彼の考えていることがわからない

「ほらっ、行こうぜっ！」

「あ、ああ」

そう言いながらも、今度は愛人が船を漕ぎ、パトロールを続ける

1時間後

「お前？漕ぐのうまいな？」

「そうか？漕ぐのは初めてだぜ？」

「マジで？」

実は愛人はこう見えて船を漕ぐのは初心者だった

なのに、船を動かすのがうまく。船が全然揺れなかった

「まるでウンディーネみたいだよ？」

「オレはオカマかよ？」

「別にそう言っているわけじゃない。ただウンディーネみたいに漕ぐのがうまいって言っているだけだ？」

愛人はその言葉を聞いて、質問する

「なんだ？ウンディーネって、ただお客を乗せて目的地まで、ゴンドラで漕ぐ仕事じゃないのか？」

「簡単じゃないさ、漕ぐって言ってもお客様を安全に案内し、なおかつあまり船の揺れを出さず、お客様を案内するんだぞ？簡単じゃないさ？」

「へえ、そうなんだ……ん？」

「ん？どうした？」

愛人はまたもや、なにかを見つけた。

それは

「あ~~~~いけない！洗濯物が!!」

漕いでいる途中、窓の方から洗濯物を回収しようとしたお姉さんが誤って手から落ちてしまい

海水へ洗濯物が落ちようとしていた

「まずい!!」

アクトは急いで助けようと立ち上がり、愛人から權を取ろうとするが

「掴まっている!!」

「え?」

なんと愛人の顔が真剣になり、立ち上がったアクトを押し、無理矢理座らせ

力を大きく權に振り

「ふ!!」

一人で船を漕いでいるのにも関わらず

大体80キロで車を走るような速度で進んだ、船を漕いでできるとは思えない早さで

「よつとー!」

洗濯物をキヤツチした

「な!?!.....」

アクトは驚いた

もしかしたら、愛人が上司を病院送りにしたのにも関わらず、クビにならなかったのは

仕事が自分以上にできる男だからだろう

一人で漕いだのにも関わらずあんなスピードは出せない

こいつは生活面はダメだが、仕事はできる人間だ

「おーいー!これ?あんたか?」

「そうです!ありがとうございます!」

「今、そっち行くからな!」

愛人は洗濯物を持ちながら、洗濯物を落したお姉さんのところに入った

「あいつことを少し改める必要があるな」

さつきはとんでもない程に情けない男だと思ったが

やる時はしっかりやる男、彼には彼なりの良さがあったのだと

アクトは改めて彼を認識した

更に2時間後で

16時

「ホントいいところだな?ここ?」

「ん?」

愛人の言葉とは思えない言葉が出て来た

「ホントにおもしろいな。こんな場所があったなんてな?」

「気に入ったのか?」

「ああ、地球にはこんなのは無かった。いや、本当に面白いし、いいところだネオ・ヴェネツィア」

「どうやら、まだ初日ではあるが、この町のことが気に入ったらしい
アクトは自分が褒められるようなくらい嬉しかった

だが

「ホントサボりたい放題だぜ?こんな仕事」

「お前って奴は・・・」

いいムードで終わるかと思えば、ぶち壊しやがった

やはり改める必要も無い。こいつは自分の手で教育し直さないと
ならないと思った

「お前!!サボったら許さないからな!!」

「大丈夫だつて?お前の目の届かないところでサボるから?」

「全然大丈夫じゃねえわ!!お前は警察官なんだからそれなりの誇りを
持て!!」

「へーい、持ってやす」

「テメエ・・・」

さすがのアクトも怒りそうになった

「サボったら、給料減らすからな!!」

「じゃあもういつそニートに転職しようかな?」

「ニートは職でも無いだろ!!?なにお前『そろそろ転職しようかな?』というノリで言ってるんだよ!!」

「オレの中じゃあニートも職の扱いにしているから」

「お前の中どうなっているんだ!?!」

もはやツツコミ疲れそうになった

そんなことを話していると

船で曲がり角で曲がろうとすると、今にもぶつかりそうな程、前方にゴンドラが近づいて来た

「おわ!!」

愛人は急激にブレーキをかけるが

「どわ!!」

「きゃ!!」

ぶつかってしまった

相手の方はどうやらウンディーネらしく、二人の女の子が乗っていた

「灯里!!大丈夫!!」

「愛人!!大丈夫か!!」

お互い付いていた仲間に心配かけられるが

「ああ、大丈夫だ」

「こっちも、大丈夫だよ藍華ちゃん」

どうやらお互い怪我は無く。乗っている船も損傷はなかった

「悪かったな?ぶつかったりして?」

「いいえ!!私たちの方こそ!ごめんなさい!」

「君たち?ウンディーネだね?その制服からして・・・」

「はい!私はARIAカンパニーで働いています!まだ半人前ですが、水無・灯里です!!」

「同じく私も姫屋の半人前の藍華・S・グランチェスタです!」

どうやら練習帰りらしく、偶々偶然ぶつかったらしい、このカーブは急でぶつかることも多い

「そうか、とりあえず御詫びしよう。私はエンジェル騎士を務めるア

クト・ハーヴィだ」

「アクト・ハーヴィ!? ってことは騎士団長!! それは申し訳ありませんでした!!」

藍華はアクトの名前を聞いた瞬間、しっかりとお辞儀した

「藍華ちゃん? なんなの騎士団長って?」

「知らないの灯里!? このネオ・ヴェネツィアには警察官はいるけど、でも私たちがアクアの人たちは警察官とは呼ばず騎士って呼んでいるのよ!!それが“天使騎士団”よ!!マンホームじゃあ特殊部隊って呼んでいるんだけど、このアクアではそのエンジェル騎士団がネオ・ヴェネツィアの治安を守っているのよ!!そして、今私たちの目の前にいるこの人がその騎士団の団長のアクト・ハーヴィなのよ!!」

「はひ!!そんなすごい人なんですネ!!」

その藍華の言葉を聞き、愛人が質問する

「どういうことだ? アクト? ネオ・ヴェネツィア警察じゃないのか?」
「確かに君の言う通り僕たちは警察官だ。でもここでは僕たちが特殊部隊“エンジェル騎士団”と呼ばれているんだ。僕が初めに巡査部長として紹介したのは、それに近い階級だからだ」

「わざわざ何も知らないオレに合わせたのか?」

「君が僕たちの職業は警察官と同じ仕事だと言い、更に君が僕たちに対して警察官と呼んだ。 ってことは僕たちの特殊部隊『エンジェル騎士団』という騎士団だと言う事に気づいてないらしいからね?」

「そんなに偉いのか? エンジェル騎士団って?」

「まあ、特殊部隊だからね? それなりにには偉いほうだよ? とにかくこの事はこちらにも責任があるから、お互い無かったことにしよう?」
「は、はい!! ありがとうございます!!」

アクトはゴンドラがぶつかった事は無かったことにし

愛人の方へ向き

「言うのが遅くなったが、転勤とは言え、おめでとう。君もエンジェル騎士団の一員だ!」

アクトは握手しようと手を伸ばす

「な? アクト?」

「なんだ？」

アクトはこう考えていた

愛人はあの特殊部隊『エンジェル騎士団』に入られて嬉しいのでは無いかと思っただが

「この仕事やめていい？」

「「え？」」

ウンディーネの灯里たちも含め、ポカンと口を開けたまま立ち尽くした

「え？なんで!？」

「いや……面倒くさそうじゃん？」

だってさ？それだけ有名だろう？つまりは忙しいじゃん？オレ面倒なのは勘弁だしさ？やめてもいいよね？」

「テメエは!!なんで入って早々やめんだよ!?!テメエはホントにやる気の無い野郎だな!？」

「はいくく、やる気の無い警察官でくくくす」

「本当によくそれで警察官になれたな!？」

どうやら、愛人はこの仕事は気に入らないらしく、ダルそうな顔で返事した

「仕方ねえな？じゃあこの一週間くらいはやってやるよ？仕様がなから」

「テメエくく!!マジでクビにするぞ!!」

アクトは呆れるよりもイラついた

やる気無い以上に限度を考えない言葉も出して来たのだ

ま、怒って当然なのだがな

「あ、あのー?」

「ん??」

そこへ灯里が二人に声をかける

いや、かけたのは愛人の方だった

「なんだ?」

「そんなに嫌なら?なんで警察官に入ったんですか?」

「.....」

灯里はとてもいい質問した

確かにこんな面倒なら、なんでこの警察官に入ったのか理解できなかった

彼にも彼なりの努力があるはず、警察学校で頑張っただけで入ったというのに

やめるのが勿体ないはず

彼の答えは

「そんな時の気分かな?」

「え?」

「き.....気分?」

藍華もその言葉も聞き、口を漏らしてしまった

「1年前の就職活動かな?この職業がおもしろそうだから、入っただけ?」

「面白そうだから.....」

「そう、まあでも上司もめんどい奴ばっかでき、あんまうまくやってなかったんだよね〜」

(やる気の問題じゃないよ!?!この人!?!)

もはや愛人はダメ人間に等しかった

というかもうダメ

「だから今までオレに喧嘩売った上司を全員病院送りにしたんだよね?」

「上司を病院送り!?お前なんでクビにならねえんだよ!」

「なったよ?でも転勤でこっちに来させられたんだよ?」

どうやら明日からとんでもない男がネオ・ヴェネツィアに来てし

まったようだ

「それにしても、悪かったな？ぶつかったりして？」

「あ、ああいえ、こちらこそごめんなさい」

「ん？よく見たらゴンドラにぶつけた傷が残っちまったな？」

「あ、本当だ！痛そうです！」

「……………」

愛人は灯里たちの乗っていたゴンドラに自分が乗っていた船のぶつかった跡が残っていた

「ごめん？…………私が不十分なばかりに」

灯里はそんな傷ついたゴンドラに謝っていた

それほど大事にしているのか、もしくはウンディーネとしてゴンドラも友達のような物なのか

すごく大事にしていた

彼女は泣きそうな顔していた

愛人はそれを見て

「おい？お前の会社どこだ？」

「はひ!?えつとARIAカンパニーです!!」

「ARIAカンパニー…………おいアクト!!そのARIAカンパニーってどこだ？」

「え？ああ…………すぐそこだけど？」

「よし、おい？確か…………水無灯里だったよな？」

「は、はい！そうです!!」

愛人はそれだけを聞き、愛人は突然

「おいアクト？自分で焦げ？」

「は？おい!!」

「ちよつと借せ？」

「え？あー！」

愛人は突然アクトに權を渡し、灯里が乗っているゴンドラに乗り移り、灯里が持っていた權を奪い、そしてアクトが言っていた方向へ漕いだ

「ちよつと!!なにするんですか!!」

「うるせえな!! テメエは黙ってる!! おい水無!! ぞ? ARIAカンパニーってどこだ?」

「は、はい! その角を曲がって、そのまままっすぐです!」

「よし! そこまでオレを案内しろ! 舵はオレが取る! そこでオレがこの傷ついたゴンドラを治してやる!!」

「え?」

あれだけ仕事かめんどいと嘆いていた彼が、やる気を出し、自分でゴンドラを漕いだのだ

確か彼は漕ぐ事自体も初めてなはず

そんな彼にゴンドラが漕げるはずが無い

だが

「あ、でも!!」

「いいから!! 行くぞ!!」

そして彼は漕ぐと

「!」

「嘘!」

そう、彼は漕げたのだ

ただでさえ、灯里たちは散々練習しているのにも関わらず

彼は初めてなのに漕げたのだ

ゴンドラというのは、舳先に向かって立つゴンドリエーレが、片方だけのオールで、引くのではなく押す力によって推進する。一般に考えられているのは違い、ゴンドラは海底を棒でつついて進んでいるわけではない。それにはヴェネツィアの海が深すぎるのである

オールとは、オール留めで留められている。オール留めは複雑な形をしており、オールを充てるポジションを変えることによって、ゆっくりにした前進、速い前進、回転、減速、後進に対応できる。

それが彼には完璧にできていた

二人が驚いていたのはそこだけでなく、彼がゴンドラを漕げるのもそうだが

彼のうまさだった

ほとんど・・・いや、彼の漕ぎ手の技術が完璧だった

揺れはまったく無く前進し、狭い水路を容易く抜ける

二人は彼を見てこう思った

彼はまるで・・・プリマのようだ

それほど完璧だった

彼は初心者なはず、なのにこうもうまくゴンドラの操縦がうまかった

彼は何者なのだろうか？とアクトは思った

自分たちの船もそうだ。あれだけの操縦がうまいはずが無い。

アクトは彼を追いかけるも。心の中でそう思い続ける

「ねえ!? あんたってゴンドラ漕いだことあるの!？」

藍華がアクトが思っていることを質問した

そして彼は

「無いに決まっているだろう？ 今日で漕ぐのも初めてだ？ ただゴンドラの漕ぎ方の本を読んだだけであって、漕ぐ事自体は初めてさ?」

「嘘!？」

「なのに、こんなにうまいじゃないですか!!」

「……………」

やはり彼は初心者だった

アクトはますます彼のことが気になった

普通、漕ぎ方の本を読んだだけで覚えるはずが無い

でも、彼はうまかった

彼の言葉は信用できない

でも、うまいのは事実だった。乗っても居ない自分から見てもうまいと見えたからだ

彼は性格も飛び抜けているが、その腕前や学習能力も飛び抜けていた

そして彼がゴンドラを漕いで着いた先はA R I Aカンパニー
そこで彼はゴンドラを陸上へ上げ
治していた

「……………」

アクトは無言になりながらも彼の作業を見ていた
無論そこでも、彼は飛び抜けていた

ゴンドラを治すには、ゴンドラの構造を把握しすぎているから
だ

正直言っておりえなかった

なぜならその傷ついたゴンドラの傷を完璧に跡が残っていない、ましてやとてもぶつかったような後には見えないほど、治っていたからだ

彼はこれも本を読んだだけで把握して治したのか
だとしたら

もはや彼は天才だ。

人間の学習能力としてもイカれているが、それ以上に彼の技術力も
器用さも、誰よりも仕事がうまくやれる人間だった

「す、すごい!!」

「あ、ありがとうございます!!ゴンドラの傷を治してくれて」

「別にいいさう?あんた?もの凄く大事にしてそうだしな?ぶつかったのはオレが悪いし、これはお詫びだ」

「ありがとうございます。治って本当に良かったです!!」

愛人はどうやら、灯里の泣きそうな顔が見ていられず、つつい助けてしまった

「ただいまー」

そこへ誰かがARRIAカンパニーに帰って来た

「あ、アリシアさん!!」

帰ってきたのは、このウンディーネでプリマとして有名なアリシア・フロレンス

「ただいま、あらあら? エンジェル騎士団の方達がなぜARRIAカンパニーに?」

「いきなり入ってしまい申し訳ありません。アリシアさんですね?」

アクトは騎士らしく、アリシアに事情を話す

「僕たちの不注意でゴンドラに傷をつけてしまったのです。そのお詫びとして今その傷を治しています」

「あらあら? それはそれは、治す事ができるなんてエンジェル騎士団はゴンドラの手入れもできるのですね?」

「僕たちではなく、彼がですよ?」

「彼?」

「新しい新入社員で、新しい僕たちの騎士の一員です」

アリシアも彼を見た

彼女も彼の行動に驚いていた

「アリシアさんが驚いた!」

「珍しいです!!」

彼女は驚くことなどそうそうに無い

でも驚かすにはいられなかったからだ

彼の治し方は道具を使ってその部分を治している

普通は傷を治すのは簡単ではない。そういうのは普通ゴンドラ職人にしか治せない

でも、彼は治せた。

彼は何者なのだろうか、そういうことができるのはゴンドラの構造を把握している者だけ

治せるのなら、彼はその構造を理解しているとしたか思えなかった

「終わったぞ? ついでに掃除もしたからな?」

ゴンドラに底に付いていたアサ貝だけでなくよごれもたわしを使い綺麗にした

まるで新品のように

「はひー！本当になにからなにまでありがとうございます!!」

「はひってなんだ？まあいい、とにかくこれでこの事は大事にしないでくれ？」

「大丈夫ですよ!! 私たちも悪かったですから」

「そうか・・・で？その人誰？アクト？」

「どうやらパトロールの時に見たはずなのに、何も覚えてなかった

「パトロールした時見て説明したろ？この人が有名のアリシア・フロレンスだよ？」

「ああ、あの腹黒そうな女か？」

「腹黒そう!？」

「あらあら、うふふふ」

「だから思うけど、どこをどう見て腹黒いと思うのか聞いてみたい

「どうも、新しく新人のエンジェル騎士団の一員、七海・愛人です、よろしやす」

無論だらしな顔で挨拶した

「あらあら、ここの従業員でアリシア・フロレンスと申します」

二人は互いに挨拶するも、アリシアは聞いて来る

「ところで？私をどう見たら腹黒そうに見えるの？」

「ひい!!」

「げ!!」

「.....」

灯里と藍華はアリシアの顔を見て怯え付いた

顔は笑っているけど、目は笑ってない。

アクトは愛人の『腹黒そう』という言葉に少し信じてしまった

あの有名なアリシア・フロレンスが怒った顔しているからだ

彼女が怒る姿など、絶対に誰も見ないというか、彼女が怒ることなんて絶対に無いからだ

でも、今日の前にいるアリシア・フロレンスは完璧に怒っていた

顔は笑顔になるも目は笑ってないし、手は拳を作っていた

これは.....相手を殴る拳だった

愛人は……ビビる様子も無く、ジーとアリシアを見る

「あ、ごめん、腹黒そうには見えないや……」

「「ほう……」」

どうやら、怒らせてはいけないと謝る愛人

たぶんこの一線を越えたら、ネオ・ヴェネツィアの海が彼の血で染まるかもしれない

かと思いきや

「テラフォーマーだった」

「「?!」」

「・!?!……」

愛人はアリシアなにを見てそう思ったのだろうか、彼の言葉によりアリシアはかなり怒ったような顔がもはや顔に出ていた

ちなみにテラフォーマーズとは

マンホームの気漫画に出て来る

火星に住む。人の形をしたゴギブリ人間である

ネオ・ヴェネツィアにでもその漫画は売られているため、灯里たちも知っていた

「誰が説明しろって言ったよ文作?! ツツコムところはそこじゃなくて、お前はあのアリシア・フローレンスを見てどう見たらそう見えるんだよ!？」

「え? だってテラフォーマーみたいに筋力ヤバそうじゃん? 今握りこぶし作っているけど、あれのパンチとかアイアンクロー受けたら半端ないぜ?」

「お前の観察力どうなっているんだ!? バカにするのもいい加減にしろよ!!」

「うふふふ」

「!!?!」

「ん?」

遂にアリシアが彼の前に出た

そして

「ん?」

ガシと彼の頭を掴み、力を入れ握り潰す

「うふふふ、うふふふ」

「アリシアさん!! 落ち着いてください!! それとあらあらがありません!?!」

藍華は止めようとアリシアの手を掴む

彼女のいつもの口癖の『あらあら、うふふふ』という言葉を必ず言うのだが『うふふふ』までしか言っていなかった。

どうやらマジで怒ってる様子だ

さすがに愛人の言葉に我慢できなかつたようだ

「さすがに失礼と思いませんか? 愛人くん?」

「まあ、自覚はあるけど、思った事はすぐに言っちゃうからなオレ、それにしてもすごいな・・・あんたの筋力、オレの頭から血が出て来たよ?」

「なに呑気な事言っているんだ!!? ていうか普通に喋り倒しているけど痛くないのか!? マジで普通に抵抗せずに感想言っているけど痛くないのか!? 頭から血がもの凄く出ているけど痛くないのか!?!」

愛人はアリシアにアイアンクローされるも抵抗せずに受けていた

頭から血が出ているほど致命傷を食らっているのに苦しい顔もせずに受けていた

「ダメですよ!! アリシアさん!! 死んじやいます!! 愛人さんが死んじやいます!!」

「いや〜、お前はベースなんだらうね? 火星に住んでいるだけのこ

とはあるよ」

「お前はネオ・ヴェネツィア人をテラフォーマーと一緒にするんじやねえ!? 火星に住んでいるからと言って全員テラフォーマーなはず無いだろ!? ていうかテラフォーマーはフィクションだから!! ことなにも関係ないから!!」

なにを根拠に彼はアリシアをテラフォーマーと判断したのだろうか

ていうかアクアに住んでいる人は人間であって火星に住んでいるからテラフォーマーってどういう解釈だよ

「え? だってこの人? 火星が生まれ故郷でしょ? なら筋力もヤバくない? 知識もヤバくない?」

「アクアとテラフォーマーの住んでいる火星と一緒にするな!! お前は本当に失礼な奴だな!?! いちいち人をバカにしなきゃ気が済まんのか!?!」

なんだかんだでいろいろ愛人の言葉にツツコミ続けて

10分後

「とにかくもう相手をバカにするのはやめてくださいね?」

アリシアの説教がいつの間にかはじまり、10分が経過した

灯里と藍華はアリシアを止めるのに必死で、イスで休んでいた

アクトは………ツツコミ疲れた

愛人は社内で正座させられ、頭に包帯巻きながらも説教を受けていた

少しは学習したのかと、アリシアに謝るのかと思いきや

「わかりました。じゃあ今度からあなたを『テラフォーマー女』と呼びます」

「私の話聞いてた?」

また愛人はアリシアをバカにした

「あんた……よくアリシアさんをバカにするわよね? あんたアリシア

さんに恨みでもあるの?」

「いや、恨みは無いけど、オレの目からしてなんかこいつ危険人物ぽいような感じがしたんだよね?」

「あなたの解釈おかしくない!? あなたの目腐っているわ!! 私たちのアリシアさんをバカにしてあなたそれでも騎士団なわけ!」

「ああもう!! こいつの説教は僕に任せてくださいアリシアさん。帰るぞ愛人!!」

「へへへい、じゃあな?」

「あ、ゴンドラありがとうございました!!」

「ああ、別に構わないよ〜」

アクトは愛人を引っ張って帰って行った

残った3人は

「なんなんですかね? あれ?」

「さあ〜。でもなかなか面白い子だと思っただわよ?」

「マジで言っているんですかアリシアさん!」

藍華はアリシアの言葉に驚いた

あれだけ散々バカにされたのに、それでも面白い子だと言い張るアリシアがすごかった

「でもアリシアさん!! 愛人さんゴンドラの操縦がうまかったですよ!!」

「え?」

「そうなんですよアリシアさん!! あいつとてつもないほど運転がうまいんですよ!! 私たちあいつの操縦でここまで来たんです」

「彼はゴンドラに乗った事あるのかしら?」

「それが漕ぐこと自体初めてだったらしく、今日初めて漕いだそうです」

「確かゴンドラの漕ぎ方の本を読んだだけだとか、それなのにうまかったですのよ」

「はい! 私たち彼の操縦で乗ったのですけど、すごくうまかったです!」

「まるでプリマのようだもんね、悔しいけど私たちもあいつを越える

くらい頑張らないとね？」

「……………」

二人の言葉を聞き

アリシアは彼に興味を持った

普通、本を読んでやり方を読んだだけではゴンドラの操縦はうまくならない

彼が嘘をついているとも思えない

なぜなら彼はゴンドラの傷も治したからだ

ゴンドラの一部を修理など不可能だった

普通なら新しいの用意しないとならない、なのに彼はそれを実現させた

ありえない

ゴンドラの操縦も修理も人間の器用さとは思えない技術だった

だから彼女は

「彼……………」

「ん？」

「面白いと同時に興味を出たわ」

余計彼に興味を持つ様になった

そんなありえない常識の無い彼の器用さな珍しさ

いや珍しいとは言えない。絶対にありえない存在

そんな存在が目の前にいるなら、きつとこれから先も彼がいることで何か変わった風景が見えるかもしれないと

アリシアは今度彼に会って、彼の事いろいろ聞いてみようと思うのだった

エンジェル騎士団本部

愛人は騎士団長室でアクトに扱かれていた

「まったく、お前はトラブルメーカーだな？」

「それはありがとう。マジでうれしいね？あのテラフォーマー女がこの町征服するのも時間の問題だよ？」

「だからやめろ!!お前あのアリシアにはファンもいるんだからそういうこと言うな!!」

「へえ、やっぱりそれほど有名なんだ？」

「まあな、頼むから騒ぎだけは出すなよ？今日はもう帰っていいから？」

「へい、失礼しやす」

と騎士団長室を出て行く

その前に

「あ、そうだ。明日の朝礼さ？」

「なに？」

「君の紹介があるから明日遅れずに来る様に？」

「へいへい、朝礼って8時30分だろ？余裕余裕だよ」

愛人はアクトに笑いながら言って部屋から出て行った

「はあ、まったくとんでもない奴がウチの会社に来たな？」

まだ初日ではあるが、仕事が面倒、ニートになりたい、パトロールのサボり、あのアリシアをバカにした事、これほど騒ぎを自分で起こす騎士など聞いた事が無い

こんな奴を部下にしてやっていけるのだろうかと心配したアクトだった

コンコン

「はいー」

そこへ部下がアクトのところへやってきた

「アクト団長！少しよろしいでしょうか？」

「ああ、いいよ。入って来なさい」

「失礼します」

アクトの部下の騎士1名が入って来た

だが、その部下は大きな白い箱を持っていた

「どうかしたのか？それにその箱はなんだい？」

「実はこれ住民の人からいただいた物です」

「住民から？」

「ええ、アクト団長、今日確か新入騎士で入った七海・愛人って人を知っていますか？」

「ああ、今帰ったとこだけど、たぶんいまフロアで報告書を書いて帰るはずだよ？」

「そうですか、実はこの箱その住民の人の差し入れで、これを彼に渡してくれとわざわざ本部まで来てくれたんですよ？」

「差し入れ？」

「なんでもその住民の人、その七海・愛人って男に洗濯機を治してくれたお礼だとか？」

「!?」

アクトは驚いた

自分が居ない間に愛人は洗濯機を治した

きつと今日のお昼過ぎに洗濯物を落しかけたあのお姉さんの差し入れ

つまり洗濯物を拾ったついでに洗濯機も治したのだ愛人は

あの時は少し帰るのが遅かった。たぶんその時について洗濯機も治していたのだろう

「まさか・・・あいつは僕が居ない間にそこまで働いていたのか・・・」

「ともかく教えていただきありがとうございます。失礼します」

「ああ」

部下が部屋に出た後、

アクトは彼をやめさせるような考えがあったのだが

その考えは今の言葉でやめた

彼は我々以上に働く。自分の目の届かないところで、あいつは我々

が不可能なところまで、分野でも無い。ましてや我々の仕事ではないところまでも働いていた

そんな人一倍仕事ができる彼をやめさせるわけにはいかない

むしろいい人員としてもおかしくない

彼は性格は最悪だが

困っている人間は必ず助けるといふ長所がある

それは私たち騎士団においてもかなりの戦力だ

性格や言葉遣いはこちらでフォローすればいいだけであってそれ以外は彼は完璧にやってくれるはず

予想以上だった

彼がここまで有能な物を多才に持っているとは

正直自分の階級である騎士団長もすぐに取りられてもおかしくないだろう

それほどアクトは彼の有能な力を手放すわけにはいかないと、この仕事を続けさせるよう説得する必要がある

本人自体やる気が無いのは確かだ。いつやめてもおかしくない

自分がいつでも付き添うようにしてないといつなにをやらかすかわからないと思った

愛人のアパート

ネオ・ヴェネツィアで出勤するのだから、無論アパートも必要だった

こちらは1週間前から手配済みで、家賃がなるべく安いところのホテルアパートに住む事にした

ネオ・ヴェネツィアには近いが少し離れたアパート

今日ここが彼の家になる

「さてと、荷物は無事届いてあったし、少し整理するか？」

荷物は引越しに頼んであり、部屋に荷物は置かれ箱から荷物を出し、部屋に置く
だが

「荷物って言っても、あんま無いけどな？」

そう、彼の引越し荷物は

服だけだった。

多少の道具とかは自分で身に付けているのだが、服以外にマンホームから持って行くものなどなかった

普通なら本やゲームなど少しは家庭に必要意外な物も持ってくるはずなのだが

彼はそういう趣味も無いため、必要以外の物は持っていなかった。普段どうしているかは謎だが

彼はそこまで普通とは少し違う過ごし方をしているため、今日に至っては初めてな暮らしだった

「さてと、整理はこれぐらいにするか……」

荷物の整理が終わると、突然窓を開け、窓から見える町を眺めていた

ちなみにここは町から少し離れた山の近くだった。だから窓からネオ・ヴェネツィアから眺められた

「……………」

そして彼はこの町を見て、こう思った

「蒼いな……………この町は」

蒼かった

この町を色で例えると青だった

なぜ青かと言うと

空のようにどこまでも広く。美しく素晴らしかったからだ

彼が蒼いのが好きというものもあるが、

この星が、この町が、きつとオレを楽しませくれるのでは無いかと彼はワクワクした

だから町を見て笑った

第二話 蒼い男

次の日

愛人の朝は早かった

まだ朝5時だった。たまたま起きたのか、とりあえずズボンはGパ
ンと上はシロYシャツに着替え

6時になるまで、つまりは1時間

ランニングした

彼はスポーツマンでは無いが、その時の気分でたまにランニングし
に町を歩いていたので

走る事は好きでもない

でも、たまに走りたくなる気分になる

そういう時は外に出てランニングした

できれば近所迷惑しない程度で

1時間後ランニングから自分のアパートへ帰ってき

6時から朝飯を作り、7時にはアパートを出て本部に出勤

今日のはじめでの出勤

果たしてこの騎士団の仕事でどんな面白いことが彼を待っている
のだろう

そうワクワクしながらも

彼は本部に7時30分に着いた

そして8時30分

朝礼

「とういわけで、これと言って今日も忙しいところやトラブルも無い
が、みんなパトロールはしっかりやるように、今日も観光客の人が多

く来る。そのトラブル対応も的確にこなすように!!」

「!!!はい!!!」

朝礼室で全部隊を集め、アクトが代表として、今日の予定と内容を説明し終えた

そして

「そして、今日から我々にも新しい新入社員がやってきた」

「何人です?」

「一人だ。とりあえず紹介しよう。愛人!!」

「へい」

アクトの命によりみんなの前に立たされ、自己紹介を開始する

「彼が新しい新入社員七海・愛人だ。マンホーム出身で、昨日転勤してきた」

「七海・愛人だ。よろしく頼む」

彼が自己紹介した瞬間

全部隊がざわめき出す

それは彼の言葉遣いだ。

敬語がまるでなくてない上に、昨日と同じダルそうな顔をしていた

「見ての通り、この男はダルそうにやる気は無い男だ」

「団長!お言葉ですが、このような者を入れるのですか?」

団員の中から、愛人に不満を持つものが居た

「まあ、そういう事を言う僕も思ったよ」

「申し訳ありません。私は彼が気に入らないのではなく、やる気が無いのになぜここへ?」

「もちろんやる気が無いのは社会人として、みつともないとは思う。

だが、彼は私たち以上に仕事ができると僕が独断で採用した」

「私たち以上に?」

「彼は昨日、僕と一緒にパトロールをした。その際ウンディーネのゴ

ンドラを治すというのと洗濯機を治すという技術と知識が強い男だ」

「!!!?」

「!!!?」

皆、その言葉に驚かされた。自分たちの仕事は治安を守るのと、ルールに基づいたパトロールなのに、彼はまったくもって警察とは無

縁の仕事をしたのだ

「彼はこのエンジェル騎士団で大きな戦力になる。性格はあれだが、そこら編は我々がフォローすればいい、とにかく彼は今日から私と一緒に仕事に入る。ま、みんなも彼に驚かされると思うが、サボっているようなら注意してやってくれ」

「「「「はいー」」」」」

「それとこいつ、相手をいちいちバカにしなきゃ気が済まないから、言われても無視してやってくれ?」

「「「「それ警察官としてまずいよね!」」」」

なんだかんだで彼の紹介もぐだぐだで終わった

団員は愛人の常識の無い騒ぎに巻き込まれるであろう

とにかく朝礼は終わり、それぞれ部隊は仕事に入っていた

「じゃあ行くぞ? 愛人?」

「ああ、コンビニ行こうぜ?」

「なんでコンビニ? ネオ・ヴェネツィアには無えよ?」

「は? マジかよ。じゃあどこかの店行って、デザートを食おうぜ?」

「お前! サボる気満々かよ!?! やる気無いの問題じゃないぞ!?!」

相変わらず、やる気が無いのはいつちよまえだった

まあ、とにかくアクトが新入社員の愛人と一緒に仕事をするのは、愛人の生活指導の面倒を見るからだ

こうもサボる気満々な奴を他の人に任せるとその人が苦勞するからだそうだ

制服に着替え、パトロールへ向かう

ちなみに『エンジェル騎士団』の制服は、マンホームのイタリア警察の服装と同じだが

色は黒でなく青だった

「そーいや、気になったけどなんでこの警察服、色が青なわけ?」

「僕たちは警察とは違った特殊部隊だからね、このアクアの警察とも呼ぶ人間は少ない。僕たちは警察ではなく、騎士と呼ばれ、この『水の都の騎士』って呼ぶ人も多い。このネオ・ヴェネツィアに合わせて、僕たちの制服をイメージに合わせる事にしたんだ」

「それ『水の都の騎士』って言うより、『水の騎士』って読んだほうがいいんじゃないの?」

「まあ、そういう人もいるさ?それじゃあまた君の運転で頼むな?」

「またオレか、まあいいぜ漕ぐのは嫌いじゃないさ?」

また愛人に操縦を任せて、町のパトロールへ向かった

しばらく漕いで町をパトロールしていると

「あゝゝゝ、眠い。アクト交われよ?オレ昼寝がしたいからよ?」

「だから、サボるなよ!!お前はサボる事しか頭に無えのか!?騎士の一員なつたんだから働け!!」

「面倒じゃん、たいして事件とかないじゃん。パトロールする必要あるわけ?」

「困っている人がいたら駆けつける!!それも立派な仕事なんだよウチは!!」

「それだけ?さすが税金をむさぼる無能集団だけはあるぜ」

「お前はゝゝ!!」

さすがのやる気のなさに怒るアクトだが

「あ!愛人さーん!!」

「ん?おう!灯里!」

パトロールの途中、ARIAカンパニーである灯里と偶然出会う

「こんにちは、パトロールですか?愛人さん?」

「いや、今アクトに操縦頼んで、昼寝するところ」

「おい!!」

「はひ!!だめですよ!サボっては、騎士なんですからしつかりしてくださいよ!」

「しつかりね?、こんな平和な町に事件も無いし、パトロールなんていらないと思うけどね?」

「あんた、それでも『エンジェル騎士』なわけ?」

灯里ともう一人藍華も居た

「ああ？なんだ？お前も居たのか？えーと……誰だっけ？」

「藍華よ！昨日会った人間も忘れたわけ!？」

「灯里のことはよく覚えているが、お前は綺麗さっぱり忘れたよ」
「本当にムカつく!!」

愛人は昨日会ったばかりの藍華の顔を覚えていなかった。

灯里は覚えているなら、なんで藍華は覚えて無いのだろう

もしかしたら覚える気なかったのかも（彼女だけ）

「それはそれで失礼わよ文作!？」

「まああながち間違っちゃいないけどな？こいつめんどくさそうだも
ん」

「は!?!あんたって奴は!!本当にどこまでも!!」

「おくおく、姫屋の藍華が怒った。コワイコワイ」(棒読み)

「く!あんたマジで海の底まで落してやろうか!!」

「やれるもんならやってみろバーカ」

「なにを!!」

「おい!二人ともやめろ!!愛人もいちいち人を小馬鹿にするな!」

さすがに喧嘩になるんじゃないかとアクトが止めに入る

「先に吹っかけて来たのはこいつだぜ?オレは正当防衛として悪口を
言ったただけだ」

「正当防衛の使い方間違っているし!?どう見てもお前が悪いだろうが
!!悪口言った時点で同罪だ!!」

「うるせえな?だからいつまで経っても独身なんだよ。あんたは?」

「オレはまだ24歳だから!!まったく関係ないからな!？」

愛人のおふぎげは更にエスカレートする

この男、上司を相手にバカにするとは、大した度胸だった

「ところでお前らこんなところでなにしているんだ?練習か?」

「はい!藍華ちゃんと合同練習です!!」

「へえ、それは頑張れ」

「ぶいにゆ」

「にゃくくん」

「ん？なんだこの猫？」

愛人は灯里の乗っていた二匹の猫に気づいた

「なんだ？ウンディーネは猫を飼うのか？」

「愛人は火星猫を見るのは初めてなんだな？」

「火星猫？なに？普通の猫と違うの？」

火星猫とは

アクアのみ生息する猫である

地球の猫と違うのは

喋れはしないが、人間と同じ知能を持つ猫で

人間の喋る言葉を理解することができる

それだけではなくできる範囲があるが、人間の普段やっている書類仕事も多少できる

つまり彼らは人間の言葉、言語、文字を理解することができる

「ふくくん、でも片方の黒い猫はともかく、こつちの方は本当にネコか？」

「え？なんで？」

「だつてさ？こんなに腹がデカイ猫がいるか？これ猫じゃなくて？熊じゃねえの？」

「ぷい!?ぷいにゆ!!」

「そういう体型もいるんだよ。そういうぽっちゃり系の猫さ。確かに君たちマンホームに住んでいる人にはそうしか見えないけど、僕たちアクアはこれで猫なのさ？」

「ふくくん、とても猫に見えないぜ？」

「ぷいにゆ!!ぷいにゆ!!」

「アリア社長怒らないでください。彼はまだ初めてなんですから？」

「は？アリア社長？おい？灯里？こいつお前らの社長なのか？」

「はい。私たちARIAカンパニーの社長ですよ？」

「こつちはヒメ社長で、私たち姫屋の社長よ？」

「なんで猫が社長なんだ？」

「愛人は知らないかもしれないが、そのアリアという猫は青い瞳をし

「ているだろう?」

「ん? ああ、確かに? だからなんで社長なんだ?」

青い瞳をしている猫のこと。昔からアクアマリンは海の女神として航海のお守りとされている。そのためネオ・ヴェネツィアで水先案内店を営む者は、青い瞳をしている猫を水先案内店の象徴として仕事の安全を祈願して社長としている。

ちなみに火星猫でなくともよい。

「へえ、そうなんだ。こいつが社長ね? これはびつくりだ」

「アリア社長は書類仕事もできるんですよ?」

「へえ、すげえな。こんな熊かぬいぐるみ同然の猫が書類仕事もできるのか、すげえ」

「ぷいにゅ!!」

アリアは『もつと褒めて』と背筋を伸ばしたが

「じゃあ、『火の輪くぐり』もできるよな?」

「へ?」

愛人はどこかの陸に上がり、『少しあるもん持ってくる』と言いつつか者を取りに行った

2分後、彼が持ってきたのは、火の輪くぐりだった

そして火をつけ

「ほら? 飛べ? できるんだろ? 火星猫なら?」

「ぷいにゅ!!? ぷいにゅ!!? ぷいにゅ!!? ぷいにゅ!!?」

愛人はどこからか鞭も持って来て。アリア社長を無理矢理飛ばそうとする

「やめろ愛人!!? 殺す気か!? 知能があるだけであって、運動能力は無えよ!?!」

「早く飛べよ? 早く飛んで丸焼きになれ」

「食べる気!? 火星猫を食べる気!? おいしくないから!! 火星猫を食べてもおいしくないから!!」

「え? そう? だってこんなデカイ腹をしているんだぜ? 美味しいそうじゃん、じゅるり」

「よだれ垂らしているよこいつ!? ヤベエよ!! こいつマジでアリア社長を食べる気だ!？」

「ダメですよ愛人さん!! 食べてもおいしくないですから!!」

「仕方ないな」

さすがに灯里が止めに入ると、すぐにやめた

だが

「仕方ないからお手本見せるから、ちゃんと見ろよ?」

自分が飛ぼうとしていた

「やめろ!! それ飛んでいいのは動物だけ!! 人間が飛ぶなんて聞いた事無えよ!!」

アクトと藍華がツツコミした

まさかお手本として自分が飛ぼうとクライチングスタートしようとするとは

「自分が飛ぶなんて、どんだけアリア社長食いたいのよ!？」

「じゃあ、行きまーんーんーんーす☒」

「待てええええええええええええええええ!!?」

アクトと藍華が止めに入るが
間に合わず、彼は飛んだ

これで愛人の丸焼きの完成ーんーんーんーんー
かと思いきや

「はーはーはー!」

真顔で火の輪をくぐりまくっていた

まるで海に飛び込むように頭からくぐっていた

火は当たらず

「どうなってるのあいつ!? あの火の輪のサイズ猫しかくぐれない小さな穴なのに!?! なんて火も当たらずくぐることができるんだよ!?!」

ちなみに火の輪のサイズはちょうどアリア社長が入れるサイズだった

「更になんぞ真顔!?! あいつ余裕なの!?! こんな小さな穴でもくぐるのは

余裕だつて言うの!?!」

「すごいです!! 愛人さん!! 愛人さんはマジシャンですか?」

「灯里!? あんたはこの小さな火の輪でくぐれるこいつに驚きなさいよ!?! なにサーカス見る気分で見ているの!?!」

また二人は彼の行動に驚かされていた

灯里に関しては、サーカスを見ている気分で見っていた

「よし! 見たか? それじゃあ・・・」

「だから!!」

アクトが止めに入る

お前ができるからといって、アリア社長ができるわけないだろうが

彼が指命したのは

「すんじゃ? 次はアクトな?」

次飛ぶのはアクトだった

「なんでだあああああああ!? なんで僕!? アリア社長じゃないの!?!」

「いや、よく考えたんだけど、あいつ汗欠いているじゃん、油濃そうだし、やめてお前を食うわ」

「なんで僕!?! 僕人間だよ!?! 人間が人間を食べてどうするんだよ!?!」

「知っているかアクト? 人間だつて、生き物なんだ? だから人食いサメは人間を食べることが可能なんだよ? つまり人間は食えるんだよ?」

「共食いじゃねえか!?! 腹が空いているなら!! どこかの喫茶店で食え!!」

「ともかく次はお前飛べ? 部下が飛んだんだ? 上司も飛ぶのが常識だろ?」

「勝手に飛んだんだろうが!?! なに勝手に僕まで連帯責任みたいなことを言うんだ!?!」

「大丈夫だ? お前飛んだら、次は藍華だから?」

「なんで私!?!」

「おもしろそうだから?」

「殺す!!今すぐあいつを殺す!!」

「藍華ちゃん落ち着いて!!」

藍華はどこからか、剣を持って来て愛人を殺そうとする

灯里はそれを必死に止める

そこへ

「なんだ?なんだ?」

「なんだ?サーカスか?」

ネオ・ヴェネツィアの住民の人が愛人の騒動の音を聞こえ集まって来た

「おや?皆さん。よく集まっていたいただきました。これからアクト団長の『火の輪くぐり』が始まるよ?」

「なに宣伝しているんだよ!」

「ちなみに姫屋の社長であるヒメ社長はこの通り・・・」

「にゃん、にゃん」

「いい笑顔で飛んできます!」

「ヒメ社長!」

藍華は驚いた

さつきからヒメ社長がやけに静かと思えば

火の輪くぐりを楽しんでた

それを見たアリア社長は

「ぶ、ぶ、ぶいにゅー!?!?!?」

ヒメに釣られ、飛ぼうとしたが、火に直撃し、尻尾から火がついた火を消そうと海に飛ぶ込んだ

ちなみにヒメ社長はまだ楽しんでる

「はーい!ヒメ社長は飛びました。次はアクト団長でーす!!」

「だからなんで僕!?!」

「次は藍華な?」

「だからなんで私も!?!」

「ヒメ社長が飛んだんだ?社長が飛んだら次は部下だろ?お前も姫屋のウンディーネなら飛べよ?」

「火の和ぐくりはウンディーネには関係ないでしょ!!」

「これ?なんてサーカス?」

「見たところ姫屋とARIAカンパニーと……エンジェル騎士団だね?なに?合同イベント?」

住民が愛人たちの騒動にイベントだと勘違いしていた

「はい!アクト逝けよ?オレも逝ったんだから?逝けよ?」

「字が違くね!?行けよだろ!?それは死亡の逝けじゃねえか!!それに今お前自分で逝ったって言ったよね?なに?死んでいるのお前?なんでお前が死んでいることになってるんだ!?普通に成功してじゃねえか!」

「いいから行けよ?いつか火事に巻き込まれた人を助けると思っ
て、訓練だと思っ
て行けよ?」

「ぐ……仕方ない」

「え!?行くの!」

「部下が飛んだんだ。逝くしかないだろ?」

「いや、あいつが勝手に飛んだだけだからね?てか団長さんもなにげに逝くって言っているし!」

「うおおおおおおお!!」

「あ!?ちよつと待って!!」

藍華も必死に止めるが

遅かった

アクトは見事に火の輪をくぐることはできたが、そのくぐた後着地が失敗し、頭が地面に激突

火の輪自体サイズが小さいため、頭から飛び込むしかなかった

愛人みたいに飛ぶしかなかったのだ

くぐり終えた後、受け身が間に合わず、そのまま頭から地面に激突したのだ

頭からとてつもない程血が流れていた。そのまま地面に頭付けて
気絶した

「はい！皆さん！アクト団長が火の輪くぐりを成功させましたので、はい拍手!!」

パチパチと住民や観光客が拍手し、おー！と歓声が上がった
でも若干の数名は

「ねえ？あれ？成功したの？くぐりは完璧だったけど、着地は失敗しているけど？」

「さあ？くぐれば成功なんじゃない？」

「でも、くぐった人白目向いて気絶しているけど？大丈夫なの？」

「マズいよね？あれ？死んでない？脳震盪で死んだとか？」

若干アクトが無事ではないことに気づき、拍手しようか迷っていた
「さあ藍華!!アクトは逝った!!次はお前だ!!」

「明らかにこれイベントじゃなくて、処刑よね!?あんたアクト団長を殺す気で行かせたんでしよう!?だってあんたまだ逝ったって言うてるもん!!」

「大丈夫だ！アクトは死んでない！ただ白目向いただけだ!!」

「それを死んでいるって言うているでしょ!!」

「アクトさん大丈夫ですか!」

灯里は血を流しているアクトを起き上がらせる。アクトは

「ああ……灯里ちゃん?……大丈夫だよ?……今川が見えているから」

「大丈夫じゃないよね!?その川が見えているってことは、三途の川だよね!」

藍華がツツコミをするも

アクトはまだ白目のままだった。灯里の顔を見ているはずなのに三途の川が見えていた

「大丈夫……ここを渡れば……いいんだろ?」

「ダメ!?死んじやうよ!!アクトさんそれ渡ったら死んじやうからダメ!!」

もうダメだった

アクトは死ぬ寸前だった

「愛人!!あんたのせいでアクトさんが死んじやったじゃない!!」

「お前それ？もうアクト殺してない？まだ死ぬ寸前だよ？死んでないよ？」

藍華はなにを勘違いしているのだろうか

アクトを勝手に殺した

「大丈夫だった？今生き返らせるから？」

「は？どうやって!!」

愛人はアクトに近づき、こう言った

「アクト？あそこの住民に紛れている嬢ちゃんたちいるだろ？あの子たち？サンマルコ広場がわからないだって？」

「え？なんであの人？私たちが今迷っているってわかったの？」

愛人はアクトに近づき、困っている人がいることを伝えた

言われた本人たちもなんで迷っていることに気づいたのか、驚きだった

それを聞いたアクトは

「よし！愛人！出番だ!!我々がしつかり案内させるぞ!!」

「ほらな？生き返ったろ？」

「どうなっているの!?なんで生き返った!?さっきまで三途の川が見えて白目向いてた人がどうやって生き返ったの!?」

「決まっているだろ？騎士魂でだ？困っている人が目の前にいたら、すぐ駆けつける。それが自分が死になってもだ！アクトはそれで生きているんだ！」

「それ人間としてありえないよね!?なんで目の前にいる人助けてまで無茶するかな!?ていうか頭から血が流れていたのに、何も無かった様に頭に流れていた血が消えているし!?どうなっているのあの人!？」

さっきまで血が流れて倒れていたのに、手のひら返すように立ち上がり

頭についていた血もいつの間にか消えていた

アクトは人間なんだろうか

むしろ困っている人がいたら無敵じゃね？

とりあえず愛人は火の輪くぐりの道具を片付け、イベントは終了し、見ていた住民たちも持ち場に戻る

その間アクトは迷っていた観光客の事情聴取始めている

「えくと、それでここに着くんだ。よかつたらちようどウンディーネさんたちもいるし、お金は僕たちが払うから、ウンディーネさんにそこまで乗せてもらおうか?」

「え!?!いいですよ!そんな悪いですから!」

「いいからいいから。灯里ちゃん!藍華ちゃん!ちよつといいかな?」

「はい!」

「どうしたんですか?」

アクトが道に迷っていた観光客の事情を聞いた後。突然灯里と藍華を呼んだ

「確か君たちゴンドラの練習の途中だったよね?お金は僕が払うからさ?二人で彼女たちをサンマルコ広場まで案内してくれないか?練習のつもりで?」

「え!?!それはちよつと・・・」

「ん?どうかしたのかい?」

「私たちはまだ半人前なんです。一人前のウンディーネか指導員が同乗しないと、お客様を乗せられないんです」

彼女たち半人前は

黒いゴンドラしか乗れない

料金も一人前の白いゴンドラに比べて安い

半人前のゴンドラに乗りたがるお客はほとんどいない

一人前のゴンドラの方が安全で確実という理由もある

とにかく彼女たちは指導員がいけない以上お客様を漕げないのだ

「ふん、なるほどね?じゃあ!」

「愛人?」

愛人は突然灯里たちの乗っていたゴンドラに乗った

そして

「指導員がいればいいんだろ?だからオレが指導員になる。これで文句無いだろ?」

「な!?!」

「え!!」

「は!?なに言っているのあんた!!」

なんと、愛人自信がウンディーネの指導員となる言い張った

「なに言っているのあんた!!あんたにできるわけないでしょ?」

「愛人?さすがにそれは・・・」

「じゃあここで困っています人を置いて?自分で歩かせるつもりか?」

「・・・」

「ここは広い、また迷う可能性だってある。そういう時のためにもウンディーネが必要なんだ!」

「でも・・・」

「わかりました!!やります!」

「?!」

「灯里・・・」

灯里が決心し、オールを持った

「灯里!でも!」

「確かにルールには反するけど、放っておけないよ!」

「灯里・・・」

「アクト?ウンディーネの上の連中には特別許可で運転させたって言え!困っている人を助けるのは『エンジェル騎士団』の務めだろ?」

「愛人・・・」

さつきまでふざけていた愛人の目は真剣だった

彼もさすがに見捨てるわけにもいかならない

「確かにウンディーネさんたちのルールには反するが、わかった!!团长として許可する!!灯里ちゃん。藍華ちゃん!頼む!上の人たちは僕が説得するから!!」

「はい!!」

「わ、わかりました!」

「愛人!」

「ああ!」

「愛人はウンディーネ見習い二人の指導員を任せる!!観光客をサンマ

ルコ広場まで無事案内せよ!!」

「了解!!」

アクトは愛人に指示を言い渡し

二人の運転許可の手続きしに観光業界の方へ行つた

そして残つた愛人たちは

「よし、ちょうど二人いる。交代でサンマルコ広場まで行くぞ?」

「はい!」

「ええ!」

「ちなみに二人はお客を乗せるのは初めてか?」

「私は1回です!」

「あたしは3回くらい」

「よし、まずは藍華だ。お客様を安全にゴンドラに乗せろ?」

「え、ええ」

とりあえず愛人の指示によりお客様をゴンドラに乗せる

「藍華?ちゃんとゴンドラを抑えろ?乗せたとき揺れてゴンドラがひっくり返る事もあるからな?足でしっかり抑えとけ?」

「あ、うん。さ?お客様?」

愛人は細かく藍華に指示する

そこで藍華は考えている

(なんでこんなに詳しいの?)

そうお客様を安全にゴンドラに乗せることも大事だという事に彼は気づいていた

ただ本を読んで覚えるレベルとはとても藍華は思えなかった

「よし、ゆっくり陸から離れて行け?ゆっくりな?周りを良く見て?」

「うん」

お客様を乗せ、お客の後ろで愛人と灯里は座っている

藍華はゆっくり陸から離れ移動する

するとゴンドラ少し揺れ出した

「藍華?揺れているぞ?少しスピードが早い。揺れているのはそれが原因だ。少し落せ」

「わかった・・・」

愛人の言われた通りに動く藍華

すると、彼の言ったとおり揺れが無くなる

彼の指示は間違いの確か、でもそれと同時に藍華は悔しい気持ちが多少あった

それはウンディーネでもない一般人に教えられたことだ

自分たちは結構多く練習しているのにいも関わらず

彼は練習もしてないのに、この詳しさ

彼が自ら漕げば、自分は負けると想像もついた

漕ぎ方の本を読んだだけで、この実力

昨日だってそうだ。彼がゴンドラの操縦で乗ってみて感じた事がある

自分の憧れでもあるアリシアの実力に近いほどうまくいったこと

実力はきつと彼の方が上だろう

藍華は彼の実力に驚いたの同時に自分の実力も悔やんだ

「よし藍華そのままな？そのままゆっくりな？」

「うん、大丈夫」

彼の指導のまま、藍華はゴンドラでサンマルコ広場まで漕いだ

30分後

「よし、交代しよう。灯里？いいいな？」

「はいー任せてくださいー！」

大分経って、途中灯里と交代した

「ふう」

「よし、お疲れ。感想を言うぞ？」

「うん」

愛人から藍華の操縦に関して感想を言う

結果は

「案内はもう少しお客様を楽しんでやれ？少し観光の説明ばかりでお客様が楽しめないぞ？操縦に関しては少しスピードが速い」

「そう……」

藍華は悔しかった

まだまだというのは自覚しているつもりはあった
でも

彼が一般人

それだけで悔しかった

ウンディーネの人ならまだしも一般人に教えられるのでは
プライド的にも悔しかった

一般人ってことはウンディーネの厳しさを知らない証拠

なのに、ウンディーネでもないのにこのうまさとこの詳しさ
半人前である私たちでさえ知らない知識があった。

これほど悔しいことはなかった

まるで何もわからない人に教えられたような

ウンディーネの何の理解もしてないのに、実力も詳しさもあった
これほど圧迫な実力差があったことに悔しかった

ウンディーネでも無い相手に

それと同時に

「ほら見ろ？お前のスピード早いぞ？今調べたんだが140キロも出

「ているぞ?」

七海・愛人というバカに小馬鹿にされたことだ

携帯で速度メーターを藍華に見せた

「おかしいわよ!?!ゴンドラで140キロ!?!もうとっくにサンマルコ広場に着いているわよ!!それに私の速度そこまで無いし!!それだけ出たらお客様吹っ飛んでいるし!?!」

「大丈夫だ!この嬢ちゃんたち昔マンホームで夜バイクで速度全開で暴れてたから、その程度の速度でも問題ない」

「なんで知っているんですか!?!」

「マジなんですか!?!」

愛人の言った言葉が当たった

というかなんてお客様の過去知っているのだろうか

ていうか夜暴れた?暴走族?彼女たちは昔暴走族なのだろうか?

「ん?灯里?もう少しオール漕ぐのまつすくな?それじゃあ体制がすぐに崩れるぞ?」

「はい!」

「.....」

また彼は指導した

藍華はなんで彼がこれほどの知識があるのか、気になって聞いてみた

「ね?なんであんたはそこまでゴンドラの操縦やウンディーネの仕事に詳しいの?元はウンディーネ関係の仕事してたの?」

「まさか、だから昨日言ったろ?本を読んだだけ?そんなにオレの操縦と指導とかうまくいったか?」

「ええ、うまいわ」

「へへ」

「私はさっきまであんたの指示に従ってた。そしたらあんたの言う通りうまく漕ぐ事ができた。体勢も速度も揺れもほとんどがあんたの指示でうまくいった。あんたは本当に漕いだこともないの?」

「.....ないよ」

「そう.....」

「確かに漕いだことの無い奴にゴンドラがうまく扱えない。でもそれでもオレは漕いだ事無い。うまくなりたいたらゴンドラ自体買って独断でやっているからな？あいにくオレにはそんな金は無いけどな？ともかくオレは5年前にそういう本を読んだだけであって、経験者でもなんでもない」

「もしかしたら才能なのかもね？」

「は？」

「あんたさ？たぶん漕ぎ方の本を読んだだけであんなにうまくなれたならあんたは天才なのよ。学習能力が強いのもよきつと。いいなあ才能に恵まれて」

「.....」

藍華は才能なんてなかった

ここまでうまく操縦してシングルになれたのは努力して練習してきたからだ

中には才能に恵まれうまくなってきた者もいる

その者だけは藍華よりも早くシングルなった者やプリマになった者もいる

藍華はその焦りに出てしまったのだ

才能の実力に負けて悔しかった

これほどの無い屈辱に負けたことが悔しかったのだ

だからと言ってその者たちも決して練習してないわけじゃない

でも、自分よりも先に同期の仲間がウンディーネになるのが悔しかった

そしてここでもその実力差に負けた

しかも今自分の隣にはウンディーネでもない、ゴンドラを扱ってた経験も無い一般人に負けた

漕ぎ方の本を読んだだけでうまくプリマのように操縦ができる

天才としか思えない

自分の回りには才能を持つ者が多くて、悔しかった

でも

「お前さ？ウンディーネって競うものなの？」

「！」

彼の言葉からウンディーネの存在を知らしめられた

「違うよな？ウンディーネって案内先だろ？競うものじゃないじゃん」

「……………」

「見せてやれよ？」

「え？」

「お前が才能ではなく努力した案内を見せてやれ？お前はお前なりの美しい操縦技術があるんだから？」

「……………」

彼が笑った

それはとても輝いていた

太陽に近いぐらい暖かい。でも違う

その笑顔は海の色のように輝いている

そんな笑顔を見た彼女のセリフは

「恥ずかしいセリフ禁止!!!」

「は？恥ずかしくなくね？」

「禁止たら禁止!!」

「なに照れてんだ？」

「照れてない!!とにかく禁止!!」

「なんなんだこいつ？」

「愛人さーん!どうですか？」

「ああ、いいぞ、そのままな？ただ速度もう少し上げろ？」

「はい！」

藍華は彼の言葉に少しスッキリした

確かに才能ばつかりに恨んでも意味が無いことにやっと気づいた
負けたとか勝ったとかどうでもよくなった

ただ私は私なりでいいのだろうと彼女は自分を見つめ直す

10分後

無事サンマルコ広場に到着した

「よし！無事に着いたな？」

「あ、ありがとうございます!!」

「いいよ。お金もいいからな？」

「でも・・・」

「いいから！アクトが全部支払うって言うからいいんだよ！さっさと行け！」

「あ・・・本当にありがとうございます!!」

お客様はお礼を言って、去っていた

ともかく二人は初めてウンディーネではない指導員付きとは言え、一人で操縦したに近かった

それだけでも二人にはいい経験になっただろう

「さて？オレは行くな？」

「え？もう行くんですか？」

「ああ、これについての報告書を書かないとなんないんだよ。マジでダルい。今日も8時で上がりかな？」

「そうですね、今日はありがとうございます!!」

「・・・ありがとうございます？」

「おう、じゃあな！」

愛人はそのままサンマルコ広場で降りて、そのまま歩いて本部まで帰った

「灯里？どうだった？」

「うん、すごく教えるの上手だった」

「あいつみたいにうまくなりたいね？」

「うん！」

二人は彼の指導をしつかりと覚えて、また明日からうまく活用するよう明日も努力して練習しようとする二人は思った

一方愛人は

「というわけなんだ？テラフォーマー女？なかなかいい部下持っているじゃないか？」

「うん。とりあえず指導員ありがとう愛人くん。でもその『テラフォーマー女』はやめてくれるかな？」

アリシアに今日出来事を報告していたが、またもや名前で呼ばす頭をアイアンクローされていた

無論血を出ていてなおかつ真顔である

「いやだって、やっぱりお前の筋力見た瞬間すごくて、とても名前では言えないわ」

「あら？私の筋力はマッチョ並みなのかしら？」

「いや、モンハナシヤコ並みだよ？手の筋力がヤバいもん」

「じゃああなたにパンチ食らわしてもいいわよね？」

「やべえ、オレの顔もめり込んじゃうわ、はははー」

やられそうになっているのにも関わらず真顔

彼は血が出ているのに痛くないのだろうか？

そんなこんなで愛人も馬鹿にするのやめて、頭に包帯を巻いている「どうだった？灯里ちゃんの操縦は？」

「まだまだ甘いところはありますが、あれはおつかないほどにうまくなるぞ？・お前よりもな？」

「あらあら、それは楽しみだわ」

愛人は彼女の操縦を見て、かなりまだ浅い部分はあるが、それでも成長が強く。ヘタするとアリシアの実力も越えると言いきるほど、彼女の成長がすごいと彼は言った

「それよりも愛人君？」

「ん？」

「ゴンドラの操縦できるんですよね？」

「ああ、多少な？」

「じゃあ今度あなたの運転で私も乗せてくれないかしら？」

「えー!?冗談だろ!?怖いからヤダよ!!テラフオーマーを乗せて運転なんて冗談じゃねえ!?その内仲間呼んじやうわ！」

「だから私はテラフオーマーじゃないって言っているでしょ？何度言えばわかるのかしら？」

「ああ無理かも、お前がさつきオレの頭を潰すから、オレの頭がおかしくなったんだよ。だからお前を人間として見えないや」

「その前から私を人間扱いしてないわよね？」

「あれ？そうだっけ？ごめんね？とても人間の体をしているようには見えないからさ？」

「えい☒」

「ぐほおー」

アリシアはもう我慢の限界で彼の頬にモンハナシヤコパンチを与えた

愛人は避けたりもしなかった。無論真顔だった。口から血を吐き出してたのに

そのまま海に落ちた

「痛てええ、さすがテラフオーマーのことはあるな、なかなかいいパンチだったぜ？」

「だから私は人間って言っているでしょ？」

「へいへい」

愛人はまだアリシアを人間扱いしてないらしく。殴られて頭が冷えたはずなのにまったく学習しなかった。というかアリシアに恨みでもあるのだろうか

いや、単に面白いからバカにしているだけか

海から出て来た愛人の首を掴み、海から出して首を掴んだまま上に上げた

「それで？答えは？」

「ヤダ」

「じゃあこのまま？逝ってみる？」

「おいおい？有名なウンディーネさんがそんな言葉使うなよ？理由はお前がテラフオーマーだからじゃない」

「！」

アリシアをそれを聞き、首から手を放す

「なら？なんなの？」

「仕事で忙しい、オレがサボるってアクトに言った瞬間、オレの担当はあいつになりやがった。だからこれから忙しい身になつちまつたからな。あいつが目を光らせている間はオレは身動きできない、オレがゴンドラと操縦に入る事はもう二度と無いってことさ？」

「そう、わかったわ」

彼が忙しいのであれば仕方ないとアリシアは諦める

正直強制にやらせてでも乗ってみたい気持ちは彼女にはあつた興味がある。

彼のうまさというのも味わってみたいからだ

男がゴンドリエールをやるのは、今の時代ではおかしいが、それでも味わって見たかった

男がオールを操る。彼が操縦するゴンドラを乗って、自分が乗って操縦したゴンドラの景色を普段見ていた、でも、彼の乗ったゴンドラの景色を見てみたかったからだ

それだけゴンドラが好きだからだ

でも、彼が忙しいのなら仕方ない

忙しい気持ちは自分にもわかるからだ

だから本当に暇があつた時に彼と乗れる時間を探すことにしよう
とした

だが

「それはもう一つの理由で。二つ目はお前がモンハナシヤコだから」
その言葉を聞いた瞬間、全力を持って彼の頬を殴った
ちなみに殴られた愛人は海に沈み
海から出て来ることはなかった

第三話 バカにする理由

「ああ〜〜、カジノ行きたいなく」

七海・愛人は書類仕事をしていたが、1時間後サボっていたのではなく

終わったから遊んでいた

ちなみに頭は包帯に頬にはバンソウコウも貼ってあった

ちなみにこれは昨日アリシアにやられた跡だった

「大分やられたな？またアリシアをバカにしたんだろ？」

アクトはやれやれと言わんばかりに呆れる

「は？バカにしてないし？ただオレは事実を言っただけだから」

「それをバカにしているんだろ？」

「本当に強いパンチだよなく、あいつ元はボクサーだったりして」

「ウンディーネやっている人間が元ボクサーなわけないだろ？ていうかあんだだけテラフォーマーって言って居たのにやっとな人間扱いするようになったのか」

相変わらずキチガイというか、アホというか、こいつは殺してもバカにする事はやめなさなそうだとアクトは思った

「そんなことより、おい？パトロール行こうぜ？アクト？」

「ああ!ちよつと待て!!」

「ああ?なにが『ぼちゃ』・・・ぼちゃ?」

愛人が一階に降りると一階の床全体浸水していた

「は?なにこれ？」

「愛人は初めてだよな?アクア・アルタ」

「アクア・アルタ?なんだそれ？」

アクア・アルタ

毎年ある時期に起こる。高潮現象

南風と潮の干満に気圧の変化が重なって起こる現象である

「だからアクア・アルタの間は街の機能がほぼ麻痺だからほとんどのお店も開店休業なんだ。こういう時こそ『エンジェル騎士団』は本部で書類仕事せず、今日1日ずっとパトロールするんだ」

「へえ、そうなんだ。もしかしてこのアクア・アルタさ？まさか：くお!？」

「愛人!？」

突然本部の開いていた窓からボールが飛んで来た

そのボールは愛人の顔面に直撃した

そのボールは野球ボールだ

なんでボールが飛んで来た？アクア・アルタ状態なのにネオ・ヴェネツィアで野球でもしている人たちがいるのだろうか

「一体どこから?!襲撃か!？」

アクトは襲撃かと思いい警戒体勢を取るが

「いや・・・違うぞアクト?！」

「愛人!?大丈夫か!？」

愛人は顔がめり込んでいるのにも関わらず真顔だった

顔がめりこんでいるのに真顔自体できるだろうか、アクトの目では真顔に見えた

そんなことより愛人はボールを投げて来た犯人を知っているようだ

「誰が投げたのか?わかるのか!？」

「ああ・・・・・・オウギワシだ!!」

「・・・・・・は?！」

「だから!!オウギワシの『スロージング』だ!!」

「・・・・・・え?！」

オウギワシ

鳥類系の中でオウギワシがいる

上半身の筋力と“猛禽類”の持つ人間八倍の視力で170kgの握力を持っている生物

そんな動物がスロージングという投げ方をしてくるというかそんな動物がそんな物を投げるはずがない
愛人がそれを言うということは

もしや

「くそ!!!あの女!!今度はオウギワシをベースにしやがったな!!!」
「.....やっぱり」

これは襲撃でもなんでもない

これは説教だ

そう

このボールは

アリシアのだ

それを聞いただけでアクトは警戒を解いた

むしろ更に呆れた

ていうかアリシアはなぜ?彼をボールで殺そうとする?

彼はまだ君に対してバカにしてないはず

ていうかなんで愛人の居る場所と居る位置がわかるわけ?

一応ここ4回だけど

とアクトはそう思っている

「ていうか、アリシアさんどこから投げている訳?」

「ああん?決まっているだろ?ARIAカンパニーの本社からだよ?」

「おかしくない!?ここから30キロメートルは離れているんだよ!」

「だったら見てみるよ?ほら?」

「双眼鏡!」

愛人から双眼鏡を貰い、隠れながら窓から覗く

隠れるのは流れ弾が当たらないように

そしてARIAカンパニーの本社のある方角を見る

ここ『エンジェル騎士団本部』ビルみたいに高い建物でちようどこ
こから街全体が見える

そういう風に作ったのは監視のためでもある

そして覗いてみると

ARRIAカンパニー本社の屋根の上でアリシアが片手にボールを持ちながらニコニコ笑っていた

「なんでだああああ!?なんでここに愛人がいるってわかる!?あの人はアレックスよりも超人だぞ!!?ていうかテラフォーマーじゃない!!?原作テラフォーマーがオウギワシをベースにしてないし!?あの人!生物ならなんでもありか!?!」

ちなみに双眼鏡でもう一度覗くと灯里が止めようとしていた

「あれ?でもなんでアリシアさんは愛人を殺そうとしているんだ?まだバカにしてないはず」

「くそ!!やはりこのアクア・アルタもあいつの仕業か!!」

「それだああああああああ!!」

これが投げられる原因だった

さつき彼は『へえ、そうなんだ。もしかしてこのアクア・アルタさ?まさか・ぐお!?!』って言ったこの言葉

これが原因らしい

アクア・アルタは自然現象であって、人の原因じゃないってのていうか

「なんであの人愛人の言葉が聞こえるの!?ここ本部だよ!!あそこからめっちゃ離れているのになんで聞こえるの!?地獄耳のレベルじゃないよ!!?ていうか遠くの音を拾うベースなんて原作でもないよ!!?」

「そんなことはどうだっていい!!とにかくヤバいぞ!!このままじゃあ原作みたいな本物の火星になっちゃうぞ!!このアクアもおしまいになるぞ!!」

「お前がバカにするのやめればいいんだよ!!」

またバカにするからボールが飛んで来た

「うお!!」

「くそ!!双眼鏡も無いのにやるな!!くそ!!オレも薬さえあれば!!バツトで打ち返せるのに!!」

「お前はクモか!!?とにかく謝れ!!お前のせいで本部が壊れる!!」

「たく仕様がいないな！」

「仕様がいない!?!」

どう見てもこいつが悪いのに、こいつは謝るのがいやいやだった。本当に無責任にも程がある人、というかさすがの団長である自分でも、アリシアのやることが犯罪に見えなくなつた。というより制裁してほしかった。このクソ野郎を粉々にしてほしかった

ホワイトボードで愛人は書いて、窓に見せた

『ごめんなさい』

「.....」

アクトはまた双眼鏡でARIAカンパニー本社を見てみると、アリシアがボールをしまうのが見えた

なんとか本部が壊れずに済んだ

「はあく、お前はどれだけ騒動を起こすんだ?」

「オレのせい?人のいない悪口を言っただけじゃん、あいつがここまでの声を拾って攻撃してきたじゃん。悪いには俺じゃなくね?」

「確かに悪口は人のいないところでしろってよく聞くけど、だから言っちゃまずいだろ?いつまたボールが飛んで来るかわからないぞ?あの人はお前がどこに居ようとお前の悪口を拾えるみたいだからな?」

「嘘だろ?ていうかあんた学習した?あいつの常識の無さに学習したか!?!」

アクトはもうこれ以上はうんざりになった

こいつのおふざけ一つで本部が壊れるのではうんざりにも程があるからだ

「とにかくパトロールいきやーす」

「あーおい!?!後始末は!?!飛んで来たボールを片付けろ!!」

愛人はアクトに後始末を任せ

一人でパトロールをした

「それにしても、すごいなく、本当に一面床が海水で沈んでいるよ」
彼はアクア・アルタなど初めてだから、とても新鮮だった
マンホームではこれを満潮とも呼ぶ

ゴンドラも動かすことはできないため、すべて歩きで移動しなくてはならない

もしゴンドラで移動なんてマネすれば次の日に街の床の上に乗りに
上げることになる

先ほど街の機能がほぼ麻痺で店はほぼ開店休業になると聞いたが
やっているところもある

そこへ寄ろうとするが

無論喫茶店とはではなく、食べ物の買い物系しか無く、あまりいい
店はやっていなかった

「はあ〜、こうもあれだと眠たくなるなく〜」

店も休業状態ということはほとんどが皆家の中でのんびりしてい
る

それは先ほどアクトに聞いた。

だからそれほど事件になるようなものはないだろう

「あれ？愛人じゃない？」

そう、あるはずがないと愛人は思っている

今自分の目の前に力士型テラフォーマーがいるはずなどない

「私はテラフォーマーじゃなくて藍華よ!?!なに私もテラフォーマー扱
いしてんの!?!」

「ちい」

「ち!?!」

舌打ちした。こんな平和でやることないなら、サボって昼寝ができ
たのに、こんなじゃじゃ馬娘がいたら昼寝もできやしなかった

「どういう意味よ!?!」

「とにかくどうした？何もないのにオレを呼んだのか？」

「用がなきやだめなわけ？」

「まさか!?オレの体でモザイクオペレーションを!!」

「しないわよ!!?なに?私もテラフォーマーなわけ!!?」

「ああ、ベースは・・・なにもないや」

「ないの!?アリシアさんは多才にあったのに、私は普通のテラフォーマーなわけ!!?」

「うるせえな、まあお前の用にしてもオレ怪我人だから、力になること少ねえぞ?」

「怪我人!?そういえば頭に包帯を巻いてる。なにかあったの!」

「ああ、今朝テラフォーマー女にボールぶつけられた」

「・・・は?」

「だからオレが本部あの女の悪口言ってたら、本社からオレが居た本部までボールをスローイングしてきたんだよ?」

「は?・・・どうということ?」

「だから・・・つまり」

公園で説明中

かくがく、じかじか

「アリシアさんすごくくない!!?なんでボールをそこまで投げてあんたの顔面に当たるの!?アリシアさんゴンドラの操縦はうまいけどボールを投げるのもうまいの!」

「うまいに決まっているだろ!!あいつ今度はオウギワシをベースにしてんだから投げるのがうまいのは当然だろ?」

「あれ?あんたアリシアさんテラフォーマーって呼んでたんだよね?」

「こんどはアレックス?」

「とにかく、やばかったんだよね?マジで死ぬかと思ったぜ?」

「今でも真顔で言っているあんたに死にそうな感じには見えないけど?」

もう彼に常識もアリシアにもなかった

「ていうか、それについて言いたかったんだけどさ?」

「ん?」

「もうアリシアさんのことをバカにするのやめてくれない?」

「・・・」

彼女の本気の目をみて、彼女が真剣なのがバカな愛人でもわかった
それだけ憧れているのだろうか、面白いからと言ってその人の悪口
を言っているわけがない。彼もそれなりのことは理解している
わかっているのなら、なぜやめないのだろうか

理由は一つ

「なんでだろうと思う?」

「え?」

「なんでオレがこうもひっこく、なんでオレがアリシアにバカにして
いるか?わかるか?」

「そんなの……わかんないわよ」

「だろうな……」

「だろうな……って?」

「実はな……オレ

アリシアのことが好きになっちゃった」

「気づかなかったのか？意外と人気者になると大変だし、自分のやりたいようにできないじゃん」

「それはまあ……」

「オレがあんなマネをするのはあいつを少しでも楽しくしてやりたかっただけだ。だからあんなマネしたんだ」

「楽しませるって、アリシアさんはつまらない顔しいてわけ？」

「いや、仕事で疲れているんだ」

「え？」

「あいつの労働って確か朝から夜までやるよな？」

「ええ、それはまあ……」

「あいつ少しでも休んでいるか？」

「それは休んでいるでしょ？アリシアさんだし」

「オレの目じゃあとてもそうには見えないけどね？」

「なんでよ？」

「だって……」

従業員が灯里と二人な時点で休める時間などあまり無いからだ」

「!？」

彼の言葉に藍華も驚いた。それと同時に納得した

灯里はまだ見習い。つまりはまだお客を乗せるようなウンディーネではない

つまり本格的に漕げるのはアリシアだけしかいないわけだ

ウンディーネの仕事はネオ・ヴェネツィアにとって大事なイベントの一つでもある。観光客の案内をする。この観光都市にとって案内は重要。そんな仕事ができなくなったら、観光業界も困るだろう

理由はそれだけじゃない

アリシアという人間がARRIAカンパニーで彼女しかゴンドラを漕げない。つまりARRIAカンパニーを動かせるのは彼女だけ、灯里はまだ見習いで動かせるような力はまだ持っていない。もし彼女が病気で倒れたら、ARRIAカンパニーは確実に休業になってしまう

彼女が病気で倒れるようなほどやわじやないとは思うが

彼女も人間、風邪をひくことだってあるはず

それは会社にとつてもまずいことだ

それだけじゃない。アリシアの人気は半端ない。彼女のゴンドラに乗りたい客もいる。客に失望させるわけにもいかない

だから休める時間もきつとほとんどない。

それに彼女のことだから客を最優先に考えているに違いない。そう考えると彼女は自分のことを後回しに客のために働いているというのが、今の現状だ

だとしたら、彼女もやりたいこともできないだろうし、これがやりたいとはいえ、少しは彼女にも楽しい思いをさせてもいいのではないかと思

愛人はできるだけ彼女を楽しませるように、彼女の心を曝け出させる為にも

愛人はバカにするようなマネをした

休みの少ない彼女を少しでも楽しくさせたかったために

「だからオレはあんなマネをした。それに見た事無いだろ？あいつが暴力でオレを殺そうとする姿、まるであいつじゃないみたいだろ？」

「まあね……」

「ストレス解消にもなるしな、納得してくれたか？」

「うん……でもさ？」

「ん？」

「それはアリシアさんをバカにする理由であって、アリシアさんが好

きだからと言う理由じゃないよね？」

「……………」

確かに力になりたいと言うのはよくわかった。でも好きと言う理由じゃない

「一目惚れって言ったろ？本当にそれだけだ」

「それだけ？」

「ああ……………それだけだ」

「……………」

藍華はその言葉だけじゃあ納得できなかった

一目惚れだけであんなマネをしたのか、だなんて納得できなかった
なぜなら

一目惚れ程度でこんなマネをするはずがなかったからだ

彼女の為にバカにして、そして殴りとばされる、キチガイにも程がある

どうして？

なぜ自分を殴られても彼女のためにバカにするのか

一目惚れ程度で納得いかなかった

それどころか

どうしてバカにする？相手を喜ばすには他の方法だってあったのに

どうしてそんなマネを

「とにかく言うなよ？あいつが聞いたらバカにできないからさ？」

「うん……………わかった」

藍華は今の彼の言葉が嘘だとわかった

バカに出来ないじゃない。楽しくさせてやれないの間違いだからだ

彼にはどこまで謎が多すぎると藍華は思う

でも

自分の憧れのアリシアさんのためにやっていることだけは理解できた

彼は彼なりのやさしさがあつたのだと理解できた

「と言いたいけど、お前のせいでオレのバカにする理由聞かれりまつたよ? あいつに?」

「え!? どこ!? どこ!? どこ!? アリシアさん!」

「ここには居ねえよ?」

アリシアは二人がいる公園にはいない

「え? じゃあどうやって聞かれたの?」

「ほれ?」

「え?」

彼に双眼鏡を渡された

「あつちに見えるゴンドラ業界本部見えるだろ?」

「え? ええ?」

この公園はゴンドラ業界本部と少し近かった。だから双眼鏡でも見える範囲だった

「その3階の窓をのぞいてみ?」

「うん? え!? アリシアさん!」

そう

窓を開けて、彼女はボールを片手に持って私たちを見ていた

彼女が窓で愛人たちの会話を聞いていたのが藍華には見えて理解した。10キロメートルも離れているのに

なぜなら

ボールを投げようとしたアリシアが頬を赤くしながら、愛人を見ていたのに顔を逸らしていたからだ

ボールを投げようにも、自分のためにやってくれた彼にそんなマネがでできなくなつたからだ

私のために自分の体を傷つけてでも楽しませてくれた

正直藍華は、あれだけ生き生きしたアリシアも見たの初めてだった
「たく、お前が変な事を言うから聞かれちまつたぞ? あいつどこでもオレの悪口拾えるからな? オレがどこにしようとな?」

「こんな離れているのに話してた内容が全部聞こえることにツッコミを入れたかつたけど、ねえ? 本当に一目惚れ?」

「は?」

「私はそれだけじゃあ納得いかないの。教えて一目惚れだけじゃないでしょ?」

「たく……わかったよ! 教えてやるよ! ちょうどあいつもいるし、オレの気持ちあいつに言っつてやるよ」

「え!? それってプロポーズ!?」
「!」

アリシアもこれだけ離れているのに愛人のプロポーズという言葉に聞いて、目を見開いて、頬を赤らめながらこつちを見ていた。

藍華も憧れのアリシアにこんな男に取られるのが嫌で止めようとした

そして彼が彼女に伝える。本当の気持ちは

「あいつがテラフォーマーだから!!」

「……………」
「……………」

藍華とアリシアは失望した

あれだけいいことを言つといて、結局はおもしろ半分でバカにしていたのだ

それを聞いたアリシアは

「はー！」

ゴンドラ業界本部の窓から、野球ボールを公園にいる愛人の顔面目がけて投げる

「ふんー！」

だが、避けられる

「はんー！もう学んだぜ!!お前のオウギワシの投げ方も狙うところもオレにはお見通しなんだよ!!」

だが、甘かった

なぜなら

愛人の後ろに

「へ?」

藍華が木の棒を持って、避けたボールを愛人の顔面に打ち返す

「ほあ!!」

「ぐへ!!」

藍華はバットを振るように、愛人の顔面に直撃した

「イテテテ、お前・・・アシダカグモか!!すげえコンビネーションじゃねえか!!油断したぜ!」

「なにが油断したぜよ!!?あんた結局アリシアさんバカにしたいだけじゃない!」

「バカにしたいんじゃない、あいつがテラフォーマーなのがいけないんだ!!」

「だから!!!アリシアさんは人間だって、言っているでしょうがああああああ!!!」

「ぐへ!!」

藍華のアッパーが炸裂した

愛人は地面に倒れた

「やっぱりあんた最低!!..ふん!」

藍華は外方向いて帰っていた

ちなみにアリシアはもうとっくに仕事に戻っていた

結局この男はアリシアをバカにしたかっただけだった

「たく.....でもアリシアの為に楽しくしようとしたのは嘘じゃあないんだけどな」

でも、アリシアのためにしようとしたのは嘘じゃなかった

それと同時にアリシアをただ単にバカにしたいのは嘘じゃなかった

第四話 彼は意外と便利屋

カタカタカタカタカタカタ

報告書

今日のパトロールは問題なし

被害や損害もなし、街の治安は問題ありませんでした。そろそろ春が終わり、夏が近づいてきました。近々夏休みもやってくるでしょう。観光客はもつと増えると考えています

ですから、事故が無いよう。しつかりと明日からパトロールしていきます

ただA R I Aカンパニーにテラフォーマーが生息しています

それはオレの手で駆除しておきます

「これでよし」

「よくねえよ!!なにさりげなくアリシアさんのことを入れているんだよ!?!」

「大変だぞアクト? A R I Aカンパニー本社にテラフォーマーを確認した。すみやかに駆除せよ」

「殺すな!!なにアリシアさんを殺そうとしているんだ!?!お前自らが犯罪者になる気か!?!」

「は?何言ってるの?テラフォーマーだぞ?住民の人たちがやられるかもしれないんだぞ?『エンジェル騎士団』の団長であるお前が住民の人を見捨てるのか?」

「ついにお前は殺す側になったのか!?!」

「というわけでアクト?オレに薬をくれ?住民の人を守らなきゃ」

「だからアリシアさんは人間だから!!!テラフォーマーでもなんでもねえ!!人間なんだよ!!!」

愛人はアリシアを殺る気満々だった。

さすがにもうやられて飽きたのか、そろそろやり返しても面白いと考えている。彼はアリシアに恨みでもあるのだろうか

いや、ただ彼がバカなだけ

「まあ、そんなことよりもさ……アクト？」

「なんだ？」

「これなに？」

「まあー」

「………火星猫だね？」

いつの間にか愛人の靴の上のズボンを噛んで来る火星猫がいた

その火星猫はあのアリアよりもましてやヒメよりも小さい体をして
いた

更に顔は猫の顔と言うより、パンダに近い顔の火星猫だった

そんな猫が『エンジェル騎士団本部』の中にいた

「おい？うち猫なんて飼っていたのか？」

「いや、そんなはずないけど……」

「ていうかどこから入って来たんだ？しかもなんでオレのズボン噛んで
いるんだよ？」

「見た感じ、愛人のこと気に入ったんじゃないのか？」

「まさか……おい！いい加減オレのズボン噛むな！」

愛人はズボン噛んでた猫を無理矢理捕まえて上に上げた瞬間

「まあー！まあー！」

「ぐへー！」

今度は愛人の鼻を噛んで来た

「おい？噛むな？オレの鼻は肉まんじゃねえんだぞ？」

「なんで肉まん？」

「放せよ！！放・せ！たくー！」

「まあー」

「なにがまあーだ。お前はどこから来たんだ？」

「まあー」

「それじゃあ、わかんねえよ。もつと具体的に」

「まあー、まあー」

「だから、わかんねえよ」

「まあー、まあー、まあー」

「だから!! わかんないって言っているだろうがああ!!」

「わからないに決まっているだろうがああ!!!! なんて猫に聞くんだよ!? 火星猫でも喋れないって前に説明したろ!!」

愛人は火星猫本人に場所を聞いていた

だから喋れないって、何度聞けばわかるのだろうか

「ああ? そうだっけ? . . . じゃあこいつ . . . どうするか?」

「飼い主を探すしかない。その火星猫が冠っている帽子、間違いない『オレンジ・プラネット』の帽子で間違いない」

帽子は小さいが火星の猫の頭に冠ってあった

「オレンジプラネット? なにそれ?」

「そこもアリシアさんたちと同じウンディーネ業界の会社さ」

「へえー、じゃあこいつも社長か、こいつの目青い瞳しているし」

「ん? そうなのか? よく気づいたな? 僕には青い瞳には見えないぞ?」

「確かに遠くから見るとパンダみたいな黒い目をしているが、近くで見れば、こいつが青い瞳をしているのが見えるさ」

そういつて愛人はまた自分の顔の近くまで火星猫を近づけると

「まあ、まあー」

がぶりとまた鼻を噛まれる

「だから肉まんじゃねえよ」

「なんで肉まん?」

とにかく愛人はこの火星猫を連れて、飼い主探しにパトロールしに行った

ちなみに報告書はあのまま提出した

とりあえず、飼い主探しでゴンドラに乗って探していた

「このパンダみたいな火星猫は知らねえか!!!」

まずは街の住人に聞いてみた

「このオレンジプラネットの？会社の帽子冠っているけど、知らね？」
住民の人に聞いてみると

「おや？まあくんじゃないか？オレンジプラネットの会社から出来たのか？」

郵便屋のおじさんが愛人に言って来た

どうやら知っているようだ

「お？郵便屋のおっさん、知っているのか？」

「ああ、その子はオレンジプラネットの従業員の『アリス』って子のペットでその会社の社長なのさ、名前はまあくんって言うんだ」

「へえー、でも、なんで名前がまあくん？」

「なんでも『まあー』としか言わないからまあくんって名付けたそうだよ」

「ふくん、そうなのかまあ？」

「まあー」

「ああ・・・普通に返事したってことはそうなんだろうな、けど弱ったな」

実は愛人はオレンジプラネットという会社を知ったのも今日であり、無論場所も知らなかった

「たく・・・とんでもないことに巻き込まれたな・・・」

「もしかして・・・その蒼い髪に蒼い瞳にエンジェル騎士団の制服、君は七海・愛人くんかい？」

「ああ？そうだけど？」

「おお！君が『エンジェル騎士団』の新人騎士の愛人君か!!!・・・」

「なに？オレ？そんな有名なの？」

「ああ！有名だよ！なんでもこの前道に迷っている人を助けたとか、洗濯機でもなんでも治せる便利屋とかで今ネオ・ヴェネツィアじゃあ噂になっているのさ！」

「オレ？どんな噂されてんの？なんでも屋じゃねえんだぞ？」

「どうやらこの前の洗濯機を治したことや、道に迷っていた観光客を案内したことが噂になっていた。」

ちなみに彼のうわさはそれだけでなく、ここ2ヶ月で入ったばかりだと言うのに、パトロールの途中で美品を治したり、迷子になった観光客を無事案内することなど、普通の『エンジェル騎士団』の仕事じゃないところまで、仕事する

何でも屋な騎士と、噂になっている

「なにそれ？随分変な噂が経っているなオレ？」

「だから頼みがあるんだよ。悪いんだけどあの郵便箱を治してくれないか？」

「マジで？たく、わかったよ。その代わりにオレンジプラネットの本社の場所まであんたの船で連れてけよ？」

「お安い御用だよ。じゃあこれなんだけどさ？」

「ああ、これはネジが外れかけているな、まあネジ変えたりすれば問題ないさ」

とにかく郵便屋のおじさんの依頼を受け、

各郵便箱のネジを次々と変えて行く

そのついでに少し箱に入っていた手紙を回収するなど、少し郵便屋のおっさんの仕事も手伝った

郵便屋のおじさんの依頼は終了し、ゴンドラでオレンジプラネットの本社まで連れてつてくれた

「ふくん、ここがが」

「すまん、今日は本当に」

「ああ、じゃあな？おっさん？」

「今日はありがとな、できればまた修理など頼みたいんだが」

「ああ、『エンジェル騎士団』本部で言え。またなんか治してやるから郵便屋のおじさんと別れる

」さて行くか。いくぞ? まあ?」

「まあ」

まあくんを連れて、オレンジプラネットの本社に入った

「でさ? このまあはお前らのところだよな?」

受付のところに行き、まあくんを受付の人に見せる

「あ! はい! 私たちの社長です!! 探してくれましたか!? ありがとうございます!」

「いや、ウチの本社にいたんだけど、とにかく悪いんだけど、こいつの飼い主の『アリス』って奴呼んでくんない?」

「それがですね・・・」

「あ?」

「実はその子を探しに外へ・・・」

「ああマジかよ!? くそ! じゃあいいや、お前さこいつ預かってくんない? そんなのでそのアリスって奴が帰って来たら渡してやってくんねえ?」

「はい! わかりました! アリスさんにしっかり渡します!!」

「おう! じゃあな? まあ?」

愛人は受付の人にまあくんを渡し、本部へ帰ろうとするが

「まあー！」

「あ！まあ社長！」

「あ？」

だが、まあくんはそんな帰ろうとする愛人をズボン噛んで引っ張って止める

「なんだよまあ？家に帰って来れたんだから黙って飼い主待ってろ？」

「まあー!!まあ、まあ、まあ!!」

突然まあくんはズボンを引っ張るのやめ、突然どこかに走り出した

「あ!?!おい!!どこ行く気だ!!」

「え!?!ちよ!?!どこに行くんですか!?!」

愛人と受付の人は、まあくんを追った

一体まあくんはどうしたのだろうか

しばらく社内を走り続けると

「おい!!一体どこまで……」

「まあーまあー！」

まあくんがたどり着いたのはゴンドラ倉庫だった

その倉庫の中に

壊れたゴンドラの上にまあくんが立っていた

「おい?どうした?こんなところに来て?」

「まあーまあーまあー！」

まあくんは壊れたゴンドラに向いて吠えた

「なあ?この壊れたゴンドラがどうかしたのか?」

愛人は受付の人に壊れたゴンドラについて聞いてみた

「実はこれ、この会社の先代社長のゴンドラなんです」

「先代社長のゴンドラ?なんで壊れているんだ?」

「実は先代が引退してから、誰も使わないもので、もうゴンドラのボディが腐っているんです。もうかれこれ30年も経っているんです」

「なるほどね、つまりなに?まあ?お前これをオレが治せてか?」

「まあ!!」

どうやら、マジらしく。まあも返事するかのように縦に頭を振った

訳にはいかないほど、彼女はゴンドラを生で治すところを見て驚ろかずにはいられないほど、彼が治していくゴンドラの姿が美しかったからだ

当時先代社長が扱っていたゴンドラの姿そのものだった

彼はその当時のゴンドラの姿を再現したかのように、彼はゴンドラを治した

3時間後

時間は大分経ってしまったが

なんとかゴンドラを治す事には成功した

「本当にありがとうございます!!」

「ああ、これでいいだろ? まあ?」

「まあー!」

どうやら喜んでくれたらしい、

まあくんがこのゴンドラと何の関係があるかはともかく、愛人の昼の郵便屋の仕事を見て、まあくんは彼なら治せるのではないかと、試したのではないかと愛人は考えている

まさか火星猫にそんな判断があるとは思えないが、とにかくまあくんは愛人の器用さを理解した様子

「まあー!」

「ん?」

「まあ!!」

廊下の方から、まあくんの名前を呼ぶ女の子がこちらに走って来た
まあくんもその人を迎える様にその人のところに行き

お互い抱きしめる

名前を呼んだと言う事はもしや・・・

「アリスさん!」

「あいつがアリスか・・・」

「もうどこに行っていたんですか!!心配したいんですよ!!」

「まあ」

どうやら、見た感じ1日中まあくんを探していたらしい

それだけでなく

「アリスちゃん!!見つかったって………愛人さん!」

「うわ!?!なんであんたがここに居るのよ!?!」

「灯里に………藍華テラフォーマー!?!」

「なんで私だけテラフォーマーが付けられるのよ!?!」

アリスが走って来た後ろから、なんと灯里と藍華が出て来た

二人はこの会社の人間じゃないはず、なのになぜここに?!

「なんでお前らもここに?ていうかあのアリスって女の知り合いか?」

「はい!アリスちゃんとは友達なんです」

「だからお前らはここに居るのか?」

「あたしたちはまあ社長を探していたのよ。朝からいなくなっちゃって連絡あつて、街中探していないと思つたらあんたのここにいたなんて」

「オレだつてびっくりだよ。朝書類仕事していたら、こいつがいつの間にかオレたちの本部に入つて来たんだ。どこから入つたかは知らないが、今日ずつとこいつの飼主探してたんだぜ?おかげでそのついでにいろんな人から手伝いを申し込まれるしよ。今日はめんどい1日だつたぜ」

「本当にありがとうございます!!でっかいありがとうございます!!」

「なんだ?そのでっかいって?」

「ところであんたこそ、ここでなにをしているのよ?」

「オレ?オレはこいつの飼主がここに居るって分かつて来たらしいつはないし、こいつをここに置いて帰ろうとしたら、今度はまあがオレに手伝いの依頼言い出しやがつて、ここにある壊れたゴンドラを治したんだよ」

「え!?!ゴンドラを治したの!?!あんた本当に何者!?!」

「あ?ただの『エンジェル騎士団』の騎士だけど?これも本を読んで見れば分かるさ?」

「あんたって本当に天才の領域を越えているわ」

「こんなのゴンドラ専門の本を読めば誰でも治せるわ」

「いや、それはあんただけだから」

「すごいです!!愛人さん!!ゴンドラを治すなんて!!まるでゴンドラのことを分かっている人みたいです!!愛人さんは『ゴンドラマスター』です!!」

「恥ずかしいセリフ禁止!!」

「ええー!!」

「なんだ?ゴンドラマスターって?それと藍華?恥ずかしいセリフでもないだろ?むしろ『変なセリフ』だろ?」

藍華も、愛人の器用さに驚かずにはいられなかった

まさかゴンドラの傷を治すだけでなく

ゴンドラのボディすべてを治すなど、ゴンドラ職人として呼んでもいいぐらいな技術

もはや天才だった

「そんじゃオレは帰るな?」

「え?もう帰るんですか?」

「ああ、まだ仕事あるんだよ。もう5時半だって言うのに、めんどくせえーこれじゃあ定時に帰れねえよ」

「ごめんなさい!私のせいで・・・」

「お前のせいじゃねえよ。とにかくもうまあを放すなよ?確か・・・アリスだっけ?」

「はい!オレンジ・プラネットのまだ半人前ですけど、アリス・キャロルです」

「そうか、アリス・キャロルね?」

「あなたはその制服からして、『エンジェル騎士団』の方ですか?それに確か愛人って?」

「ああ、オレは・・・ARIAカンパニーにいるアリシア・フローレンスを理由も無いのにバカにする男で、住民の人には『何でも屋な騎士』って呼ばれる。七海・愛人だ」

「あんた最初の自己紹介からおかしいわよ!?やっぱりただアリシアさ

んをバカにしてただけじゃない!？」

「でも? なんすか愛人さん? その『何でも屋な騎士』って?」

「ああ、今日オレも知ったんだけどさ、なんか街でさなんでも雑用でき
て更にはなんでも修理できる便利なエンジン騎士がいるって噂に
流れているんだけどさ、それを『何でも屋な騎士』という噂、そ
れがオレだつてさ?」

「なんで愛人さんなんですか?」

「いや、その噂が流れたきっかけが、オレ初日の騎士の仕事でさ、洗濯
機治したわけ、それを治された人が流したらしいんだよ。まったく余
計な事してくれたぜあの姉ちゃん」

「は!?! あんた洗濯機も治せるの!?!」

「ああ、あれも昔その専門の本読んで、治しただけ」

「あんた。そんなもん治せるなら、本当になんでも治せるんじゃない
? ここにあるゴンドラのボディまでも治せるんだから」

「オレにとつては冗談じゃないぜ? おかけで今日街の人に会う度にこ
れ治してくれだとか、いろいろ言ってくるんだぜ? もう疲れたぜ?」
「エンジン騎士なんだから人のために役立つの当たり前でしょ? そ
れぐらいしつかりしなさいよ?」

「なんでお前に説教されるんだか、とにかくじゃあな?」

「はい!」

「本当にありがとうございます!!」

「バイバイ」

愛人は本部の方までまっすぐ帰った。

サボる事もできたが、今日はそんな気分では無いため、まっすぐ
残った仕事を終わらせにまっすぐ帰った

残された灯里たちは

「これ? 本当にあいつがですか?」

藍華はまだ愛人がゴンドラを治したことが信じられなかったため、
受付の人に聞いた

「はい! 彼が治しました。まるで構造もわかっているかのよう」

「普通治すだけでも3日かかるのに、なんであいつは今日だけで治せ

るのよ」

ただのめんどくさがりやなのに、この器用さで1日でゴンドラを治す。これはありえないの一言だった。確かに前々から知識が強い奴だと思っていた。だが

これは知識云々とかではなく、

もはや天才とも呼ぶしかない程、驚いていた

まあ、そんなことはともかく

「心配したんですよー。まあくん」

「まあー」

とりあえずまあ社長が無事に帰って来ただけでもよしにするかと
藍華は思った

でも気になる

どうしてまあ社長は彼の本社にいたのか

それだけは彼女は気になった

そのことはまあ社長に聞いてもわからないだろう

ただ藍華はこう考えている

あのバカと一緒にいたということとは、あいつの周りで面白いことでもあったのだろうと、だから一緒にいたのではないかと

なぜあんなバカといるだけで面白いことになるのか

それは

彼が私たちには今までに無い見たことのないようなものを見せてくれるからだ

彼の周りにみんな集まって来る。最近毎日あいつと会うのは偶然ではないと

藍華はそう考えていた

第五話 晃との出会い

猫ネットワークで今彼はあることを調べていた
それは街に流された自分の噂である

ネットを見ると、自分の評価が多く観光客に高く見てくれていた
彼は頼りになるなど

彼はなんでも直せる騎士様

彼は私たち住民を助けてくれる
など

かなり高く評価している

それを見た愛人

「おいおい、マジかよ〜」

うんざりしたような言い方だった

普通なら喜ぶところだが、愛人の場合は違った

これだけ評価が高いなら、これからもあれこれ治されると思う。めんどくさくてサボれないからだ。おそらく今日からまた住民の人からいろんな修理を頼むのだろう。これでは仕事の合間にサボれないと愛人はガツカリした

「今日もダルイなく、ばつくれようかな〜」

「そうはいかないぞ？愛人？」

「うわ〜、出たよ。うるさいアクト団長が」

「君の評価は今、絶好調なんだ。これからもしつかりと働いてもらおうぞ〜」

「そういうお前らも仕事しろよ？俺だけに任せるなよ？」

「こういうのは君の専門だろ？」

「お前らも少しは覚えろよ？」

「どうやって覚えろと？」

「そうだな・・・まずはモザイクオーガンオペレーションを受けておかないと」

「おい？そういう専門じゃないぞ？」

いろんな物を修理できるのは彼だけだ

洗濯機も本を読んだだけで直せるなどありえない

それを他の連中に覚えさせろとは、不可能としか言いようが無い
ていうかモザイクオーガンオペレーションを受けて覚えるとか、専
門が間違っているし

アクトも慣れているせいか、彼のツツコミを自然にしていた

彼のツツコミ担当は彼にしか居ないだろう

「まあいいや、俺行くな？ 今日もたくさん仕事あるしな？ モタモタし
ていると帰れなくなっちまう」

「ああ、僕も一緒に行こう」

今日も1日パトロール&修理や雑用の仕事

便利屋の騎士様と団長様が街の見回りに本部を出た

「愛人くん！これお願い！」

「はいはい」

「愛人さん！これも！」

「はいはい・・・」

「愛人！アレ治せる？」

「はいはい！」

次から次へと愛人に仕事が続いて来る

街に一步でも出るとすぐに住民の人に声をかけられすぎて手伝わ
される

彼は騎士と言う公務員よりも

何でも屋の方が向いている気がする

と、彼の仕事を見て思った

あれこれ手伝わされ1時間後

「たく、俺が騎士だつて事を忘れているだろ？あいつら？」

「いいじゃないか、君は街の人たちにとってなくてはならない大事な人なんだから」

「仕事ができるからだろ？それ以外で見ているわけじゃないじゃん」
「そうだね、君はいつでもサボる事を考え、すぐにアリシアをバカにする。そんな不真面目な性格の君を好きになるのは、本当に物好きな人だけだからね」

ただでさえ、騒ぎを自ら起こす騎士などクビや切腹もいいところだ。よくこれで騎士なんてやっていけたものだ。初めの頃からやめたいやめたいと本人は言っているし、そうしたければそうすればいいとアクトは言いたいが、彼がここに来てからの彼の評判は上がるだけでなく、自分たち以上に働いてる。彼がいるおかげで多少の問題も彼が解決してくれているのも事実。仕事はできるのは確かのため、こういう人材を手元に捨てるのは、なかなか出来なかった。彼がいるおかげで上司でも解決が難しいいろんな問題の事件を解決できる。こんなすごい人材は捨てたくなかった。普通の会社なら仕事はできても性格ややる気がないの人は即クビだが

住民の人は彼を頼りきっている。住民の人の信用を失くすようなマネは団長としてもできない。別に愛人の仕事自体が手伝いという訳ではないが、愛人自身は嫌々でも手伝ってくれるのは確か、きっと彼は頼まれたら断れないタイプなのだろうか、とにかく彼は性格はアレでも、住民の為に働いてくれるのは確か

それに

「あの姉ちゃんも住民も、お礼をわざわざこんなに『くるみパン』やいろんなもんよこしやがって、別に礼なんていらねえのに」

彼が手伝ってくれるお詫びにいろんなお礼を貰ってはいる。それに今彼は『別に礼なんていらねえのに』とも言った

別に彼は感謝される為にやっているのではなく、めんどくさくても、嫌々やっても誰かの為に何かをしようとしているのは確かだった

「食べるか? 『くるみパン』? 10個ぐらいあるぜ?」

「ああ、もちろんだよ。ありがとう。それにしてもアレ以来ずっとこんな感じなのかい?」

「まあなく、アパートに帰っても隣の人から手伝いとかも頼まれるしさ、もう最近大変だぜ? ま、その分いろんなお礼はされるけどな、別にいらぬのにさ」

「いいじゃないか、君はそれだけ人一倍働いているんだ。少し礼を貰っても悪い気はしないぞ?」

「だけどな、貰うのはいいけど、これみたいにパンを10個とか多く貰うのは、俺一人でも食べられないぞ?」

「確かに貰うのはいいけど、量だけは考えて欲しいよね」

「まったくだ……あれ?」

「どうした?」

愛人は喋っている途中何かを見つけた様に喋るのが止まった

「あれ………藍華じゃね?」

「本当だ………」

歩いていると藍華を見つけた。ゴンドラの掃除をしているのが見えた

「どうやら掃除しているみたいだな………」

「手伝ったらどうだい? 愛人?」

「ウンディーネなんだから自分のゴンドラくらい自分でしたいと思うぞ。ってよく見たら灯里やアリスもいるな………」

よく見たら藍華だけがゴンドラの掃除しているだけでなく、隣で灯里やアリスも一緒に自分のゴンドラを掃除していた

「一緒にやっているのか……まあ頑張れ」

愛人は声をかける事なく、去ろうとする

「いいのか? 手伝わなくて?」

「ウンディーネのプライドもあるだろ? 自分のゴンドラをわざわざ見ず知らずの他人に掃除させるのか?」

「まあ、確かにそうだが、でも見た感じ時間がかかりそうだぞ?」

「時間がかかるにしても、その分だけ自分で磨いた達成感っていうの

もあるだろ？そういうのも考えて上げろよ？」

「確かにそうだが……」

「あ！愛人だ！！愛人……！！手伝って！！」

遠くから藍華に気づかれ、

「君を……指名だぞ？」

「あいつは自分でゴンドラを綺麗しようという気は無いのか？」

なんだかんだで今日も彼女たちと出会い、また騒ぎになるようなこととに巻き込まれそうだと

愛人は思った

だが

アクトは騒ぎを自ら起こしたお前の思う事ではないと、心からツツコミされた

「あ！愛人さん！こんにちは！昨日ぶりです！そっちの方は？」

「アクトだ。エンジェル騎士団の団長をやっている。君の噂も聞いているよ？アリスちゃん」

「どうもよろしくです」

「愛人さん！アクトさん！こんにちは！よく会いますね？」

「ああ、そういやよく俺とお前ら会うな？なんでか知らないけど、で？なんで俺が手伝だわなきやいけなわけ？藍華テラフォーマー？」

「お願いよ！！これ全部ゴンドラを掃除しなきやいけなのよ！それと私は人間よ！」

「ベースはなんでしようね？愛人さん？」

「後輩ちゃん!？」

「いや、まだベースのない普通のテラフォーマーだ」

「愛人!!真面目に聞いて!!」

「なんだかんだでアリスちゃんもテラフォーマーズ読んでいるんだ……」

「はいはい、で？自分のゴンドラくらい自分で掃除しろよ？わざわざ俺に頼む必要ないだろ？」

「私たちのじゃないのよ!!会社のなのよ！」

「は？」

「実はあまり使ってなかったゴンドラで、今度使うから掃除して欲しいって言われたのよ」

「私たちも含めてです」

「へえ、このゴンドラが並んでいる奴全部か」

「うん！」

藍華たちが掃除しているゴンドラの隣に4つ程並んでいた。全部で5つ、これを今日までに掃除を頼んでいた

「お願いよ愛人!! あんた街でも人の為に手伝っているんしょ? 後で礼はするからさー!」

「お願いします!」

「お願いします・・・」

「はあ・・・わかったよ! やるよ! やりやあいんだろ!!」

「やった!!」

「はひ! ありがとうございます!!」

「でつかいありがとうございます!!」

「はあ〜」

藍華たちの頼みが断れず、彼もゴンドラの掃除を手伝うことにした
「じゃあ俺こっちやるから、終わったら手伝うから、それまでそっちやっていろ? アクト? やり方教えるからあんたも手伝え?」

「わかった。頼むよ」

とりあえず愛人は反対側の方を始めた。アクトも見ているだけでなく彼も一緒に手伝った

なんだかんだで3時間かけてなんとか

「よし、これでいいだろ?」

「はい! これで終わりました!!」

「ふう、やっと終わった!」

「終わりました」

「午前中でよく終わったな」

「終わらせることができた

「もう12時か・・・お前ら昼飯は?」

「いや・・・これから買おうかと・・・」

「なら・・・午前中俺いろいろ差し入れ貰ったから、これで食おうぜ?」

「え?どうしたんですかそれ?」

「住民の連中に手伝わされてな・・・これはそのお礼だよ」

「え!?いいんですか!?だってそれは・・・愛人さんの!」

「いいんだよ!どうせ俺一人で食えないし、お前らも食ってくれないか?じゃないと持ち帰れないし、その間に食べ物が腐っちゃう」

「ああ・・・じゃあお言葉に甘えます」

「こうして無事にゴンドラ掃除が終わったので、昼飯に入る

「それにしても・・・あむ・・・あんたいろんな物を貰ったわね?」

「ぱく・・・おにぎりになるみパンに紅茶・・・更にはタオルまで、

いろいろ貰ってますね?」

「仕事に行っているのに、なんでこんなにお土産があるんだか・・・」

「まるで旅行帰りですね?」

「それにしても、なんで灯里ちゃんたちまで?ゴンドラ掃除を?」

「はい!実は姫屋の晃さんという方に頼まれたんです」

「あ!?!晃!?!」

「アクトはその言葉を聞き、食っているパンをやめた

「なんだ?知っているのか?その晃って奴と?」

「ああ、ちよつとした知り合いでな?」

「知り合い?」

「ああ、実はあいつとは家がお隣さんなんだよ」

「へえ、そうなんだ」

「だからその・・・腐れ縁みたいなもんなんだ」

「へえ、そうなんだ」

そんなことを言っているよ

「おい！藍華！終わったのか!!」

「あ！晃さん!!」

「げ！」

「ん？」

後ろから仁王立ちで立っている女がいた

それともう一人

「灯里ちゃん？終わったかしら？って愛人君に？アクトさん？」

「あ、アリシアテラフォーマー」

仁王立ちした女性の隣にアリシアがいた

「げ！アクト！なんでお前がここにいる!？」

「アクト？もしかしてあいつがか？」

「ああ、そのままかだ・・・僕がここに居てマズいのか晃？君は部下を手荒く扱いすぎだ!!1日でゴンドラの掃除を終わらせろだ!?!君は相変わらず部下のことをわかっていないな!!」

「なに説教してんだ？」

「うるっさい!!あんたはウチらの会社とは関係ねえだろうが!!お前は甘いんだよ!!部下を厳しく育てる事で成長するんだだろうが!!」

「なんだ？この男っぽい女は？」

「厳しいだけじゃあ部下は育たないんだよ!!そういうおおざっぱなところをなんとかしたらどうなんだ!!」

「うっせえ!!黙れ!!お前に言われたくないんだよ!!」

「なんだと!!」

「なにを!!」

「ああ!!もうやめろ!!」

愛人がもううんざりしたようで二人の中に入った

「昼飯の時に争うんじゃねえ!!あんたもいちいち大声出すな!!うるせえ!!」

「ん？なんだアクト？もしかしてこいつ？お前の部下か？」

「ああ、新入騎士で、名前は七海・愛人だ」

「へえーそうか、悪かったな大声出して？私は晃・E・フェラーリだ」

「あんたアクトとは腐れ縁だつて聞いたぞ？仲はいいんだな？」

「確かに腐れ縁だが、仲は良くない！」

「痴話喧嘩する時点でお前らは仲いいのさ？」

「ん？アクト？お前の部下どうなっているんだ？まったく敬語になってないじゃないか？団長として部下をこんな風に育てているのか？」

「言っておくが、君より歳は上だぞ？」

「え？何歳だ？」

「21だ。君より1つ上だ」

「「「「え!!」「」」」」

「おい？えってなんだ？えって？俺はそんなに歳は下に見えるか？」

「嘘!!私たちよりも年上!!」

「私たちタメ口叩いちやっただよ!!」

「私はそんな気はしてました」

「愛人君私もってきり私と同じ19かと思っていたよ？」

「たく、なんだつていいからタメ口だろうが、年上だろうが、オレらは単にコイツらを仕事を手伝っただけだからな晃？、あんたらガキは黙つて大人の言う事を聞いてろ？」

「ぐ!!君は新入騎士なのですか？」

「ああ、そうだよ。ていうか別に敬語じゃなくていい、とにかくもう騒ぐな？今昼飯の時間なんだ邪魔するな！」

「ああ・・・わかった」

「たく、お前の上司かこれか!!まだアリシアテラフォーマーのまだマシ・・・いやこつちのほうがいいか？殺されずに済むし」

「あらあら？それはどういう意味かしら？」

「よう！アリシアテラフォーマー。晃つていうガキと知り合いなんだな？」

「うん、幼馴染だから、ところで・・・」

「あん？」

アリシアが即座に愛人の頭を掴んだ

「どういう意味かしら？晃ちゃんが部下を持って、私は部下を持ってはいけないのかしら？」

愛人の頭からギシギシと鳴り、血が出て来た

「だって、お前自分の部下もモザイクオペレーションして、自分と同じテラフォーマーにするんだろ？灯里が可愛いそうだけ」

「灯里ちゃんにそんなマネはしないし、私も人間なだけけど？」

「あれ？そうだっけ？どう見ても”ヒョウモンタコ”にしか見えないけど？」

「あらあらじょうじ、じゃああなたを私の毒で痛めつけないとね？」

「はん!!所詮44位が!!俺を殺せるとでも思うのか!!」

「アリシアさんだめです!!愛人さんが死んじやいます!!ていうか『あらあらうふふふ』はどうしたんですか!?今『あらあらじょうじ』って言いましたのよね!?テラフォーマーの鳴き声になってますよ!」

灯里が必死にアリシアと止めようとする。ていうかあれだけテラフォーマーを嫌がっていたのに叫び声も言ってしまったている

「そうか、助けてくれるのか膝丸・灯里。お前の対テラフォーマー振動式忍者刀で倒してくれ」

「いや違いますよ!?!私は水無・灯里です!!膝丸・燈じやありません!!確かに名前は似てますけど。それに『膝丸』も持っていません!!」

「大丈夫だ!!お前のオオミノガならやれる!!」

「いや、私は糸を使った膝丸神眼流は覚えてないですよ!」

テラフォーマーズの登場キャラと名前が同じだからと言って、それはないだろ

「おい?なんなんだアクト?あいつは?なんかアリシアを小馬鹿にしているぞ?あんな奴見た事ないぞ?」

晃は気になったせい、愛人のことについてアクトに聞く

「あいつが今噂になっっている『何でも屋の騎士』だよ」

「え!?!あれが!?!」

「ああ、仕事はできるが、どこかでサボろうとするし、タメ口ばかりだし、しかもアレの通りアリシアを理由なしにバカにすることが出来る男なんだ」

「私より年上なのに、ガキみたいだな・・・しかもあのアリシアをバカにするとは・・・しかもあんなアリシア見た事ない」

何年間もアリシアを見て来たが、ここまで本音が出るアリシアを見た事がない

ていうかなんでテラフォーマーでバカにする愛人がよくわからなかった

「なあ？アリシア？その辺でな？愛人もなんでアリシアをバカにするんだ？」

「え？だってテラフォーマーじゃん！俺の頭を掴んだだけで俺の頭から血が流れて来たんだぜ？腕力が強いし、絶対にテラフォーマーだつて!!」

「なんでその状態で真顔で抵抗しないお前にツツコミを入れたいが、確かに君の言う言葉もあるなく、たまに思うんだよな？アリシアが一人でなんでもこなしているのは、実は人間じゃないのかって・・・」

「あら？晃ちゃんも私がテラフォーマーだと？」

「いやーそうじゃなくてだな！お前一人で全部の仕事こなしているのは人間じゃないんじゃないかって言っているだけであって・・・誰もテラフォーマーとは・・・」

A R I Aカンパニーの従業員として一人でやっているに近い、ただでさえ灯里という部下の指導だってあるのに、自分の仕事をほぼやっているアリシアが人間じゃないのかと思えるようになった

誰もテラフォーマーとは言っていない

ただ人間とは思えないと言っているだけ

でも、それって

「つまりは私が人間じゃないってことには変わらないよね？」

「・・・」

確かにテラフォーマーではないけど、今のセリフはアリシアを人間とは思っていないセリフだった

だからアリシアは

「うふふふじょうじ、じゃあ愛人くんと一緒に晃ちゃんもモザイクオペレーションしましょうかしら」

「えっ？」

その瞬間、アリシアはもう片方の手で晃の頭を掴む

「いででででで!!アリシアまで!!私は!私はだな!!」

「晃ちゃんも私をそんな風に言うなんてひどいわ。だから私二人をモザイクオーガンオペレーションするね」

顔は笑顔だが、眼は笑っていないかった

「私人間になりたいの、だから二人をモザイクオーガンオペレーションするね?」

「待て!?私は違う!!褒めようとしたんだ!!」

「藍華ちゃん?よかったわね?サンプルが二人もあるわよ?これで藍華ちゃんも私も人間になれるわ」

「アリシアさん!?その言い方だと私もテラフォーマーってことですか!?アリシアさんも私がテラフォーマーだと!!」

まさかの憧れの人にテラフォーマー扱いされた。ずっと尊敬していたのに

「は?お前がテラフォーマーなのは当たり前じゃん。何言っているの?」

「.....」

愛人のこの言葉により

カチンというような音が聞こえ

藍華は

「アリシアさん?」

「ん?」

「私の分もお願いしますね?」

「藍華!」

藍華の眼がもうヤンデレな眼になっていた

「うん」一緒に人間になりましたよ?」

「はい」私のは愛人でお願いしますね?」

「ええー、私も愛人くんがいいんだけどなー、この器用さが欲しいのよねー」

「私もですアリシアさん」それさえあればもうプリマになれますもん

「はははははははははは」

「はん!お前らが俺のこの器用を扱えるわけねえだろうが!!ゴミクス

如きが!!俺の器用さと言う“神の技術”をお前らゴギブリが扱えるわけねえだえだろうが!!あはははははは!!」

「おい!?挑発するな!!私は無実だ!!アクト助けてくれ!!」

「おほん!・・・もうその変にでいいじゃないか?晁は反省しているし?愛人は僕から説教しておくからさ?」

アクトが二人の行動がさすがに冗談に見えなかったため、止めに入るが

「藍華ちゃん?ここにもサンプルがあるわ」

「ハイ☒」ガチャ

「え?」

「ハイ☒捕まえました☒」

藍華はどこからか持つて来た『対テラフォーマー発射式蟲獲り網』でアクトを捕まえた

「じゃあARIAカンパニーでしましょう☒」

「ハイ☒!」

アリシアは二人の頭を掴んだまま連れて行く。藍華は網を掴んだままアクトを連れて行く

「ちよつとー!ー!?!僕もか?!僕もモザイクオーガンオペレーションする気か!?!」

二人に逆らう人は一人残らずモザイクオーガンオペレーションらしい

「ああー、アクトなんてベースにしても無いのに!」

「呑気な事を言うな愛人!?!待て藍華!!先輩である私にそんなこととしていいと思ってるのか!?!」

「アリシアさん!やっぱり私晁さんがいいです☒」

「悪かった藍華!!私が悪かったからやめてくれー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

「はははー!!テメエらゴギブリ如きが俺らを駆除できる思うなよ!!」

「いい加減挑発するのやめろ!!」

「ダメですよ!!アリシアさん!!藍華ちゃん!!待ってください!!二人も人間ですから惑わされなくてください!!」

灯里はアリシアと藍華を止めようと追いかけた
死にそうになろうと言うのに愛人はまだ挑発する
しかも真顔で

で

一人残されたアリスは

「でっかいなんですかね？…これ？」

わけのわからないまま愛人の貰った飯をその場で残って食べてい
た

連れてかれた3人をモザイクオーガンオペレーションしようとし
たアリシアと藍華を

灯里がどこから持って来た『アラクネバスターMKⅡ』で糸で野球
ボールに繋ぎ、膝丸神眼流で止めた

だが

止めるはずが、もろにボールが直撃し、二人は気絶してしまった

そのついでにこの騒動を起こした犯人愛人をお仕置きした

無論愛人もさすがの灯里の運動神経に驚き気絶した

すぐさま『やりすぎました！』と言って3人を起こしに行く灯里

止めるはずが3人を倒してしまった

残ったアクトと晃はなんとか灯里が助けに入んなかったら死んで
いた

そしてその光景を見て、二人が思ったことは

灯里ちゃんがこのメンバーの中で最強で、彼女が騒動を止めるス
トッパードとわかった

少しやりすぎだが

第六話 グランドマザー

「はいはい、これで終わったぞ?」

「愛人くんありがとう!これはお礼ね?」

「別にいらぬのに、まあちようど喉を乾いていたからもらうけど」

愛人は相変わらずパトロールで街の住民の人の手伝いをしていた

これが彼の仕事だから、アクト自身も口出しはしてない。むしろ住民の人の手伝いをしてもらうよう言われている

今日はたまたま一人でパトロールしている

本当ならアクトが付いて彼がサボらない様に見張っているのだが、彼がサボる事は無いだろうと思ひ。今日は自分の仕事をしている。その理由は彼が街でパトロールすると、街の人が彼を見つけ手伝いをさせるため、サボる事など不可能に等しい。彼も頼まれたら断れないタイプのようだし、心配して監視する必要ないとアクトは今日くらいは彼だけにパトロールさせることにした

「さてと、今日も異常なし。まあ手伝いの依頼は多いが」

彼も普通に真面目にパトロールしている

サボりたいってあれほど言っている割には彼もちゃんと働いていた

すると、そんな彼にある人が尋ねて来た

「あのー?」

「ん?」

それはおばあさんだった。

「君が七海・愛人くん?」

「そうだけど?手伝いの依頼か?ばあ?」

「いやそうじゃないけどね、一度会ってみたくてね?」

「ああ、あんたもネットや噂を見たのか?そうだよ勝手に噂に流されてるけど、俺が『何でも屋の騎士』の七海愛人だよ?あんたはばあ?」

「ごめんなさい。申し遅れたわね?私は天地秋乃。みんなには『グラ

ンドマザー』と言う。グランマって呼ばれているわ」

「グラントマザー？それってまさか……灯里たちの会社のARRI Aカンパニーの創業者……」

天地秋乃

グラントマザー

ウンディーネ業界のトップに君臨した「伝説の大妖精」。「グラントマザー」とは、その業績から現代ウンディーネの母と称えられた彼女に対する敬意と共に付けられた呼び名である（それ以前の通り名は不明である）。アリシアの師匠でもある人、その人は雑誌にも載っておりかなりの有名人で知らない人いない

「で？そんな有名人が俺になんか用か？」

「ええ、アリシアから聞いたのだけど、ゴンドラの操縦や掃除や修理も出来るって聞いてね」

「あいつ、余計なことばっか言いやがって、これまでの腹癒せか？で？なんだ？それに関係することで手伝って欲しいものもあるのか？」

「ううん、そういうことじゃあないんだけどね」

「なに？」

「ちよつと君のゴンドラの操縦を味わってみたいと思ってるね」

「それかよ。手伝いではなく技術を見たいか？」

「ええ、すぐそこに私のお古用意してあるのだけど、引き受けてくれるかしら？」

「……………」

正直、これに関しては仕事とは関係なかった

引き受けても構わないのだが、なんか乗り気になれない
なぜなら

失望させてしまうからだ。ゴンドラの操縦は確かにできる。でもうまくできるとは限らない、藍華と灯里を乗せた時だけが1回目、それ以外で彼が操縦したのは、自分が一人のパトロールの時ぐらい

それだけ初心者なのだ

なのにいきなり操縦してほしいとは言っても、こんな有名人もといお年寄りも乗せてもし接触事故でも起こしたら大変になる

ただでさえこの前灯里のゴンドラに接触したんだ。また出たら困る

そんな責任は彼には持てなかった

めずらしく怖じ気付いた。それだけ慎重にならなくてならないからだ

この人が一体なにを狙っているのかは知らないが

引き受けて見て確認しようと愛人は思った

事故を起こさない安全運転で

「まあ……あんたがなぜ俺にゴンドラの操縦をさせたいのかは知らないが、わかった！やるよ？初めに言っておくけど？俺は初心者だぞ？」

「引き受けてありがとう！大丈夫うまさは求めてないから……」

「どうだがね……」

この人がなにを目的に彼に操縦してもらうのかは知らないが

わざわざお古のゴンドラを用意してまで自分の操縦するゴンドラに乗るということは、うまさを見たいとしか思えなかった

とにかく言われた通りのことをするのだった

「じゃあ気をつけてな？揺れるから？」

「おや？人をゴンドラまで運ぶ作法をも知っているのね？」

「これは一般常識だ。ウンディーネの作法でもなんでもねえ」

なんだかまるでウンディーネになった気分だった

男性でウンディーネは気は引けるが

ウンディーネみたいに客をゴンドラに安全に乗せ、そして安全にゆっくり陸から離れて行く

「で？行き先は？」

「ウンディーネ業界本社までいいかしら？」

「そんなとこまで？わかったよ！今行くさ！」

「ええ、お願いね」

言われたとおりウンディーネ業界本社まで漕いだ

しばらく漕いでいると

「……やっぱりうまいわね？」

「あんたもそう言う？ 灯里や藍華にも言われたぞ？ そんなにうまいか？ 初心者だぞ？」

「灯里ちゃんたちからも聞いたわよ？」

「あいつら……なんでも俺のことを喋りやがって……それなんだって？ あいつらなんか言ったのか？」

「初心者なのに、ゴンドラのこととは知っていることやゴンドラの操縦がうまいと聞いたわよ？」

「あいつら口軽すぎだろ。おかげでこの始末だ」

「あら？ そんなに嫌？ 私を乗せてゴンドラの操縦をするのが？」

「あんたを乗せて操縦するのが嫌じゃなくて、俺のことを他の奴らに言うのがだよ。おかげで街の連中にこき使われるからだよ……」

「それだけ愛されているのでは？」

「勘弁してくれ？ 愛なんて重いし、俺には合わねえよ」

愛というものでは無いと愛人は言い張る。それほど彼にとってめんどういことだからだ

人間関係という存在自体が彼にとってめんどういものだった

「でも、あなたがいるおかげで街もすっかり変わったわ」

「は？」

けど、グランマはそれでも彼がいるだけで街は変わっていると言い張る

「なんで？」

「昔と違うのよ。私がウンディーネをしていた時よりも街の人が笑顔だったわ」

「そうなのか？」

「ええ、私が居た頃もよりも変わっているわ……みんな生き生きしているわ。見て驚いたわ。信頼されていたわあなたを……」

「……信頼ね……ま、そのせいでこき使われているけどな」
だが、彼にそんな褒め言葉しても無駄だった。

正直心の中ではサボりたいと本音のことばかりだからだ

「それと、灯里ちゃんたちもね……」

「え？あいつらが？」

「灯里ちゃんたちもね・・・あなたのことを話していると仕事の話より元気に話していたわ・・・藍華ちゃんもやアリスちゃんも」

「マジか？アリスならともかくあの藍華がねえ」

「晁ちゃんやアクト君もあなたのことで私との会話を前に楽しんだわ」

「アクトにも会ってんだな？ていうか晁はまだ会ったばかりだぞ？ん？ってことはあんた俺の上司がアクトだってことを知っているのか？」

「ええ、聞いているわ。あなたがいつもバカ騒動を起こすから止めるのに必死だって？」

「ああ、気づいたらやつちまうんだよな」

「でも、おかげで本部の団員たちも笑顔になっていくんだってさ？」

「は？他の騎士団員が？」

「ええ、そう言ってたわ。あなたがみんなを笑わせてくれるって？仕事もできるし、みんなに笑顔をくれる最高の団員って言ってたわ」

「あいつがね」

「でも、ダルい性格は直してほしいだってさ？」

「それは無理だね？俺のこの性格は一生直る事はねえ」

「でしようね。アクト君が言っていたけど、あのバカ騒ぎが生まれるのはその性格のおかげかもね？」

「まあな・・・」

「でも、一番変わったのわ。アリスアかしら」

「あいつが？」

彼は意外に思った

いつも仕事熱心で母親みたいな性格なのに、それで変わった？

どのような変わったのか、愛人にはわからなかった

余計気になってしまった

普通にいつもバカにしていただけなのに

「どのように変わった？」

「あら？アリスアから聞いたのだけど、いつもアリスアにバカにして

いるのに、気になるのね?」

「ああ、さすがに今の言葉は気になった。あいつはいつも変わってないと思ってたから。そんなに昔と変わったのか?」

「あんまり変わっていないけど……あなたを話している時のあの子はね。本音を言えるように生き生きしているのよ」

「あいつが?意外だな……てっきりいつも生き生きしていると思った」
「それにね……この前会いに行ったのだけど、あなたのことしか話をしなかったわ。仕事の話は一切しなかったわ」

「あいつが?てつきり灯里のことでも話していると思ったのに、本当に俺のことしか話してないのか?」

「ええ、いつもあなたが話してきて楽しかったわって言うていたわ」
「へえ〜」

「それにあなたも楽しませるつもりでバカにしてたんでしょ?」
「なんのことだか?」

「とぼけなくてもわかるわ。あなた忙しかったあの子に少しでも楽しませようとしてたんでしょ?」

「あらら?わかってたんだ?今日会ったばかりの俺に?あいつにどんなマネをしたのかも?」

「ええ、アリシアから話を聞いてわかるわ。いつもあの子をバカにしてはあなたは殴られ、体に傷を負いながらもあなたはやめなかった。あなたはウンディーネという役職の忙しさを瞬時に理解し、更にあなたはARIAカンパニーの従業員はアリシアと灯里しかいないとわかった瞬間、今はアリシアしかARIAカンパニーを動かせないとわかった。そうなればアリシアは……」

「もういい。言わなくていい。それももう何回も俺が言った」
「あらそうなの?」

「今あいつが俺のことについて聞いたが、あいつってここまでガキなんだな?」

「あら?あの子が母親に見えたわけ?」

「みんなにはそう振る舞っているだろ?あいつさ本音一切みんなに出さないだろ?」

「まあ、確かに嫌な顔もしないわね？あの子？」

「あいつ他の奴らみたいに本音出さないから、出してみようとバカにしたらこうなったんだけどな？」

「なんで本音出させようとしたの？」

「え？だってさ……」

まるで自分の心を殺しているみたいじゃん？」

「!?」

「仕事ってさ？いつか自分の心を殺してまで仕事する時ってあるじゃん？あいつは普段それじゃん？あんまわがままとか言ったことなそうじゃん？だからさ？本音を出せるようにして自分の心を出せるよ
うな奴になつてもらいたかっただけなんだよ？」

「確かにそうね……あの子自分からわがままを言った事なんて一回しか無いしね？」

「それってさ？やりづらい上に疲れないか？仕事ならともかくさ？仕事以外でもこの調子だと帰って疲れると思うんだよな〜」

「ふふふふふ」

「ん？」

突然グランマあは笑い出した。そんなに彼の言っている事がおかしかったのだろうか

「それだけアリシアを見ているのね？あなた？」

「そうか？」

「ええ、見ているわ？アリシアのこと好き？」

「ああ、それは好きだな。面白いしあいつと居て楽しいし、悪くはないって思っているよ〜」

「あら、意外とあっさりなのね？」

グランマは意外だった。そんなストレートに告白するとは思って
もいなかった。今まで会って来た男性で、この大胆な男性は初めて
だった

でも、なんか鈍い感じがこの男性からした

「俺はあいつに望むような関係になりたいからそうしたいわけじゃな
い。ああいうタイプを見てバカにして少しでも楽しませたいだけだ。
好きだから、そんな深い関係になりたいわけじゃない。俺にとってあ
いつとは友人とは言えない。ただの腐れ縁だ」

「そうなの……でも」

「あ？」

「あの子はあなたのことを腐れ縁というものでは見てないと思うわ」

「は？なんで？」

「それは……」

「恥ずかしいセリフ禁止です!!!グランマ!!!」

「あら？アリシアに？灯里ちゃん？」

「はひ！アリシアさん！落ち着いてください！それとこんにはグラ
ンマに愛人さん！」

「いつから居たんだお前ら？ていうかそれ藍華のセリフだし」

いつの間にかアリシアと灯里が隣にいた。今は海の上にいるのに、
灯里が使っている黒いゴンドラでここまで漕いで来たのだろうか？
見たところ灯里の練習らしい

「で？なにが恥ずかしいセリフなんだ？」

「なんでもないのよ!!なんでもない!!」

「は？」

「愛人さんはどうしてグランマと？」

「秋乃が俺の操縦するゴンドラに乗ってみたいのだと？今ウンディー
ネ業界本部に向かっていてるところだ」

みんなに事情を話しているとそこへ

「あれ？愛人……ってグランマ!？」

「なんで愛人とグランマを連れてゴンドラに乗っているんだ？」

「あれ愛人？なにをしているんだ？」

「愛人さん？・・・どうしてグランマがいるのですか？でっかい不思議です」

藍華と晁とアクトとアリスが、藍華の操縦でやってきた

「なんでお前らまで俺の周りに集まって来るんだ？くそ、どうなつてやがる」

「それだけあなたが愛されてるんじゃないかしら？」

「おい秋乃？あんま変な事言うなよ？藍華から『恥ずかしいセリフ禁止』って言つて来るぞ？」

「あんた!?あのグランマにまでタメ口!?あんただんだけ自分買勝手なのよ!？」

「いいのよ藍華ちゃん。私はこの方が話しやすいから」

「グランマ公認!?でっかいすごいです愛人さん!!」

「ぷいにゅ!!」

「あらあらアリア社長お久しぶりね？」

「アクト？お前こそなにしているんだよ？」

「僕は晁に頼まれてな、藍華の練習としてお客役を頼まれたんだ」

「へえ、で？アリスは？」

「私は藍華さんと合同練習です」

「ほう」

「やっぱり愛人はゴンドラを動かせるんだな？」

「多少な？」

「へえ、今度私を乗せてくれないか？」

「お前も？それアリシアにも言われたぞ？手伝いの依頼がなかったらな？」

「あ！私も乗つてみたい!!」

「私も乗つてみたいです!!参考になります!!」

「愛人さん！私もお願いします!!」

「あ!?藍華やアリスに灯里も!?もう俺暇じゃないんだぞ!？」

「じゃあなんでグランマを乗せて操縦しているのよ？」

「秋乃から、そういう依頼をして欲しいと言つたんだよ」

「どんな依頼だ？それ？」

「俺だつてわからないさ？どうせ俺をARIAカンパニーの従業員として勧誘しようとしたんだろ？」

「「「「え!?!」」」」

「気づいていたの？」

「ああ、薄々な？」

ウンディーネ業界本部まで送る理由にしても、ボートで移動すればいいのに、わざわざ自分のお古のゴンドラまで用意して運転して欲しいなど、勧誘としか思えなかった

しかも、グランマは愛人が操縦できること知っておきながらの頼みただ実力をみただけとは思えなかった

「無論言わなくてもわかるよな？俺の答え？」

「ええ、あなたは『お断り』つて言うと思つたわ」

「ああ、俺には合わねえよそれは」

「残念だわと言いたいけど、わかるわ。断る気持ちか……だつてあなたが騎士団じゃないと、みんなには会えないし、みんなのために働けなくなるものね？『皆に愛された騎士様』？」

『何でも屋の騎士』の次は『皆に愛された騎士か』……いろいろな称号を貰っているな・俺？」

「それだけ愛人さんはみんなを幸せにする素晴らしい力があるんだよ」

「恥ずかしいセリフ禁止!!」

「ええー!?!」

「だからなにが恥ずかしいんだ？変だろ？普通に？」

「できたらARIAカンパニーに入ってアリスアの仕事を手伝って貰いたかつたわ。そうすればアリスアだつて……」

「グランマ!!恥ずかしいセリフ禁止です!!」

「アリスアさん!?!それ私のセリフ!?!」

「アリスアはああいうのが好みなのか……アリスアが恥ずかしがるところを見たの初めてだ」

「別に依頼出せばやるぞ？どうせそれが俺の仕事だし？なんかあるの

か?」

「え!?! やってくれるの!?!」

「俺の仕事はもはやそういう専門になっちまった。パトロールのついでに俺が勝手にやっている仕事だ」

「マジか!?! 愛人! 今度姫屋の手伝いを頼む。今度飯奢るから!」

「じゃあそんな時の時間とそのやる日を言え、スケジュール開けとくら」

「それってなんでもやってくれるの!?!」

「なんでもは無理だろ。まあ内容によるさ。だろアクト?」

「まあね、これは愛人にしかできないことだから、できる範囲での依頼でね?」

「団長公認!?!」

アクトもそれはそれでエンジェル騎士団の評判も上がるし、別に止める理由はない

それにそれはそれで少し問題が消えるし助かることだった

「で? なんかあんのかアリシア?」

「あれ? 今日はテラフォーマー言わないんだ?」

「気分による藍華テラフォーマー」

「あたしは相変わらずテラフォーマーかい!?!」

「で? なんかあるの?」

「そうね... じゃあ今度の金曜日うちの会社の掃除しに来てくれる?」

「了解。騎士の名にかけてその約束引き受けるよ?」

「!?!?!」

「あらあら、本当に騎士に似合いそうな笑顔、てもかっこいいわ」

輝かしいほどいい笑顔だった

彼がこんな笑顔は今まで見たことないだろ

ウンディーネの人たちはそれを見て顔を赤らめている。アクトは驚いているが

それほど今の彼の姿がかっこよかった

「なんだ? どうかしたか?」

「あ! ううん! なんでもない!」

「ふうん、おつといけねえ。秋乃？そろそろ行くか？」

「ええ、そうね、そろそろお願い」

「ああ、悪いが俺は行くな？アクト？」

「あ、ああ、気をつけてな？」

「おう！」

ウンディーネ業界本部に急いで向かう

その途中

「じゃあなアリシア！金曜日！行くな？」

「う、うん！」

それだけ言つて彼はウンディーネ業界本部に向かった

残つた者たちは

「なんですかね？あれ？」

「あいつ・・・あんな笑顔できたんだ」

「でつかいかつこよかったです」

灯里も藍華もアリスは彼の笑顔見て、少し恥ずかしい程美しかった

「いい部下持っているな？アクト？」

「ああ、あいつはもう立派な騎士になっていたな、ただ性格の悪い奴と

思ったが、僕よりもすごい奴がいたな」

「ああ、ん？アリシア？」

「え？なに？」

「あいつに惚れた？」

「・・・そうかもしれないわね？」

まさかのアリシアが彼を気に入ったご様子

それを聞いた灯里たちは

「え!?アリシアさん！あんな奴が好みなんですか!？」

「アリシアさんが愛人が好きになつたんでか!？」

「え？そ、そうね」

「無理もないよ。あの愛人くんはかつこよかつたもん、惚れる気持ち

もわかるよ?。」

「え?。」

「灯里ちゃんも？愛人くんを？」

「へ？」

どうやら灯里も愛人に惚れてしまったようだ

「はひー別にそういうわけじゃあ！」

「あらあら、じゃあ私も負けられないかも」

「アリシアさん!？」

「やれやれです。愛人さんはでっかい罪な男です」

彼女たちには愛人がアリシアのことが好きって言った事を言えば
さぞかし騒動になるだろう

だが、その言葉を聞いているのはグランマだけ、これは誰もいわない
ほうがいいのかもしれない

一方愛人は

「着いたぞ？」

「ええ、ありがとう」

無事にウンディーネ業界本部に到着し、グランマを降ろした

「じゃあ、俺は行くな？」

「もう、仕事に入るの？」

「ああ、まだいっぱい手伝いがあるからな？じゃあな？」

そうやって愛人はゴンドラに降りて、歩いて仕事に戻った

残されたグランマは

「ふふふ、あの子、灯里ちゃんやアリシアにとって大事な人になるわね・・・」

それだけ言った

彼が彼女たちの想いに気づくかどうか

それはこれからによるだろうと

グランマは悟った

第七話 三人目の水の三大妖精

「は？水の三大妖精？なんだそれ？」

愛人は今、アリシアの依頼通り、ARIAカンパニーの会社で掃除している

本社では晁も来ていた。

今回依頼を頼んだ理由は……ここにアリシアと晁の友人がやってくるからだ

「知らないのか愛人？」

「いや、知らねえけど？」

水の三大妖精

とはプリマからペアも含め、300人以上のウンディーネでいるその業界の中ではプリマが最上位グループになる

そのプリマの中でもずば抜けても力量がある。

その3人の存在が一目置かれている

一人目はオレンジプラネット所属

二人目は姫屋所属、晁・E・フェラーリ

そしてツ最後の三人目はARIAカンパニー所属、アリシア・フ

ローレンス

その卓越した能力と実績からアクアの人々は畏敬の念を込めて

『水の三大妖精』と讃えている

「つまりここにその『水の三大妖精』の最後の一人でお前の友人がやってくるから、今回依頼を頼んだのか？」

「うん、そうなんだけど……理由はそれだけじゃないの？」

「は？」

「実はその友人があなたに会ってみたいと言って来たの」

「は？なんで俺？」

「アリスちゃんから聞いて、会ってみたくなくなったんだったって？」

「あいつら……本当になんでもかんでも……」

「少しドジな奴だから、気をつけたほうがいいぞ?」

「そうなのか?ま、とにかく終わったぞ掃除?」

「ありがとう!やっぱり愛人君は掃除もうまいわね!頼んでよかったわ」

アリシアが言うには、自分が掃除するよりも綺麗だと言い張った

掃除は誰がやっても変わらず綺麗になると思うけど?

と愛人は心からツツコミした

そんなことをしていると外から

「アリシアちゃーん!」

「はーん!」

外から女の声が出た。どうやらその友人が来たようだ

「どうやら来たみたいだな?」

「ああ、あいつ愛人に会いたいわってどういうことだ?」

「さ?こちらよ?アテナちゃん?」

「うん、ありがとう。久しぶり!晃ちゃん!」

そこに現れたのは褐色肌の銀髪ショートヘアの女性

「ああ、久しぶりだな?」

「うん、元気そうで嬉しい」

「アリシア?こいつが?」

「うん。アテナちゃん?」

「ん?」

「この人がアテナちゃんが会いたいわって言っていた七海・愛人くんだよ?」

「あなたが・・・初めまして、アテナ・グローリイです。この前まあ社長を見つけてくれてありがとうございます」

「ああ、会いたいわって言うのはお礼を言う為か?」

「うん、ありがとうね私たちの大事な社長だから」

「ああ、もう放すなよ?」

「うん」

「そんじゃあ俺行くな?アリシア?」

帰ろうと会社を出ようとするが

「待て、愛人くん。お礼がしたいからこのままお茶にしない？」
「いらないうって？別に お礼を貰うために働いているわけじゃないから……」

「いいじゃない。じゃあお茶に付き合うという依頼も引き受けて？」

「は？なんだその依頼は？……まあいいか、今日の依頼はこれで終わりだしな、わかった。付き合うよ？」

「うん、さ？こつちよ？」

「へいへい」

なんだかんだで、このままARIAカンパニーでお茶することになった

せつかくだから、ここにあの『水の三大妖精』がここに揃っているのだから、いろいろ話をしているのもいいかもしれない話をする

「つてことはお前は？アリスの師匠ってことか？」

「うん、アリスちゃんに指導をしているよ？」

「指導はしているけど、こいつあのアリスちゃんに世話をされているんだぜ？」

「は？なんで？」

「ドジだからだよ？こいつ、何もないとこでつまづいたり、飲み物をこぼす、長年暮らしてる寮内で迷ったりとかなりのドジなんだ」

「いやそれ!?ドジのレベルじゃないよな!？」

「そう思うだろ？でも見ろよあれ？」

「は？」

晃がそう言ってみると

「アテナちゃん!？」

「あれ？…あれ？……」

紅茶をただ持っているだけなのに、めっちゃこぼしていた

「マジか？あれでドジ子なんだな？」

「ああ、あれを毎日に行っているんだ。でも歌はうまいんだぜアテナ？」

「嘘だろ!?!ドジのレベルが半端無いのに歌はうまいってどんなドジ子だよ!?!」

愛人はアテナのドジに驚き、ツツコミをしてしまった

「たく、おい!貸せ!」

「あ!」

愛人はアテナが持っていたカップを取った

「ほら?飲ませてやるから!口開けろ!」

「へ!?!」

「うん、ありがとう愛人君」

愛人にされるがまま、紅茶の入ったカップをアテナの口のところで飲ませてくれた

「たく、普通に飲めよ?どこまではドジなんだ?お前?」

「だって・・・あ」

今度はケーキを食べようとしたが、フォークを落した

「ああもう!!俺が食べさせてやるから!落したフォークで食べるな!」

「うん・・・」

もう愛人は見ていられなくなり、食べさせたり、飲ませたりしていた

まるで兄と妹の光景だった

「おいおい、あいつの世話はアリスちゃんだけかと思ったけど、あいつも世話するんだな?」

「・・・」

「アリシア?今?羨ましいって思った?」

「ううん、思っていないよ?大丈夫?」

「本当に?」

「あとで晃ちゃんをモザイクオーガンオペレーションするね?」
「なんで!?!?」

晃はなにかアリシアに触れてはいけないところ触れたせいで、この後モザイクオーガンオペレーションの予定が入った

「たく、まるで俺がこいつの兄になった気分だ」

「お兄ちゃんか・・・私はこんなかつこいいお兄ちゃんができて嬉し
いな・・・」

「ふぎけんな、こんなドジの限度を知らない妹など、いるか!」

「お兄ちゃん。これお願い」

「お兄ちゃんって言うな!!何勝手に呼んでんだ!!」

「じゃあお兄さん?」

「だから呼ぶな!!」

「じゃあお兄様?」

「だから呼ぶな!!名前でも呼べ!!」

「じゃあ、さすがお兄様?」

「なんでだ!?!なんで劣等生の兄貴なんだ!?!冗談じゃねえぞ!?!あんなシ
スコン兄貴だけは嫌だ!?!わかった!!お兄ちゃんって呼んでもいいか
ら、それだけは呼ぶな!?!」

バカにする側だった愛人がツツコミをするほど、常識なさすぎるア
テナに振り回されていた

「はあ・・・はあ・・・なんなんだこいつは!?!まるでジョセフのスペック
の逆バージョンみたいだ」

「あいつからしたら、私たちは人間じゃないか?」

「もしくはニュートンの親戚か?」

「愛人君と晁ちゃんはアテナちゃんをなんだと思っているの?」

「二神に最も近い生物、人間で、人類の到達点だ!!」

「ドジ子が1位なんだ」

「あいつさ?確かオレンジジュプラネットのウンディーネだよな?あいつ
普段オール漕いでいるんじゃないやなくて、『ジョージ・スマイルズ』で漕い
でいるんじゃないのか?」

「ありえるかもな、人間のアテナにはもはやオールでもなんでもゴン
ドラを漕いでいけるような気がする」

「いろいろと失礼よ?二人とも?」

二人がそう言うと、アテナが

「『ジョージ・スマイルズ』?あ!前に買ったよ?あれものすごく漕ぎ
やすいの」

「買ったの?!?!?」

まさかの衝撃だった

彼女はもはや人間を越えた人間だった

「アテナ? それ? オールだよな? 『ジョージ・スマイルズ』という名前のオールだよな?」

「うん、でも側面に摩擦を軽減するコーティングが付いているんだよ?」

「明らかにコーティング式西洋刀『ジョージ・スマイルズ』じゃねえか?! アテナ!! 間違つてそれで人を切ってしまったとか無いよな!?!」

「ううん、大丈夫だよ」

「よかった」

「でも、それでアリスちゃんと一緒の同室の部屋の壁を傷つけちゃったんだよ」

「なんで部屋の中で持ち込んでいるんだ!?!」

「ゴギブリがたまに出てくるの、怖くていつも部屋に持ち込んでいるの、だからこれで切るの」

「テラフォーマーじゃねえんだぞ!?! ここは火星でもテラフォーマーはいない!! フィクションだから!!」

「アリス生きているよな!?! アリスを殺してないよな!?!」

「大丈夫、アリスちゃんのベースは『スズメバチ』だから」

「なんで!?!」

「私がゴギブリを切ろうとする時、『針便鬼毒酒』飲んで止めるの」

「あいつ、ひよつとしてめちやくちや強いんじゃないの!?!」

「ていうか、ゴギブリ殺すだけなのに、なんでここまで殺し合いになっているの!?!」

「アテナちゃん、普段どんな生活しているの?」

もうアテナの事情で振り回されていた

「そーいや、アリスはどうした? 見てみれば灯里もいないぞ?」

「実は合同練習で今外に出ているの」

「なんでこんな時に、アリス艦長がいらないんだよ!!? 3人掛かりでフオーするのがここまで骨が折れるとは!?!」

「くそ、さすがは1位だけはあるな」

「アテナちゃんはただのドジ子だけど?」

「そのドジがこれだぞ?いつか人を殺さなくてもおかしくないぞ?」

「いつか『テへ☒殺っちゃった☒』ってなったら最悪だな・・・」

「よくこいつにお客が来るな?逆に殺してないよな?お客をテラフォーマーだと勘違いして?」

「そこは心配ない、アテナには自慢の歌があるからな、殺したりとかはしてない」

「なんだ自慢の歌て?そーいや歌がうまいってさつき言ったな?」

「実はカンツォーネの腕前があつてな」

「な!?!こいつカンツォーネを歌えるのか!?!」

「その歌声はシングル時代から噂になっていたほどでな、本人は自身の評価に無頓着なフシがあつて、噂を聞いてもそれが自分のことだとは言われるまで全く気がついていなかった。」

「どんだけドジなんだよ!?!」

「とにかくその歌を聴きたくて、アテナちゃんに観光を頼もうとする人が多いの」

「なるほどね、でもそれならオペラ歌手にスカウトされないか?」

「うん、されるよ?でも今はアリスちゃんもいるからお断りしているの」

「そうだよな、あいつの指導しているんだから当たり前だよな、せっかくだから聞いてみたいなお前のカンツォーネを」

「うん、わかつたお兄ちゃん」

「あれ?意外とあつさり?しかもここで?しかも俺の事お兄ちゃんって呼んでいるし」

なんだかんだで愛人の頼みを受け入れてくれた

アテナの歌声がARIAカンパニーの本社に響く

確か彼女の歌声が美しかった

実はアテナのカンツォーネのCDもある。それは高く売れている

それほど美しくいい歌声だった

聞いてから1分後

「確かにいい歌声だったぞ?」

「本当に?うれしいな」

「ああよかったぞ?」

「へへへへ」

愛人はアテナの頭を撫でた。また兄と妹のような振る舞いをしていた

こんな時の愛人は本当に彼女を褒めていた

だが、晃は気づいていた

愛人は確かに褒めているが、

(これでドジが無かったらな)

若干ガツカリしていることに

更にアリシアがそれを見て嫉妬していることも

これは愛人は気づいてない

しかもこのタイミングで

「アリシアさん!ただいま戻りました!!」

「あれ?愛人?なんでここに?」

「あれ?アテナ先輩!?なんで愛人さんに撫でられているんですか!?!」

灯里たちが練習から帰って来た

「私ね?愛人くんの妹になったの」

「変な事言うなアテナ!!」

「え!?愛人!?まさか隠し妹が!?!」

「お前も惑わされるな藍華!!」

「愛人さん、お願いします!!アテナ先輩のお兄さんになってでっかい

お世話お願いします!!」

「ふざけんなアリス!!お前疲れたんだな!?世話するのが嫌になったんだな!?ていうかお前もなんで後輩に世話されているんだ!?!」

「アテナさんとどんな関係ですか!?!愛人さん!?!」

「普通の友人でありたい、もうこいつに兄と呼ばれる始末だよ灯里」

もう説明するのがめんどくさくなった

ふざける役は愛人なのに、今日の彼はツツコミ役でふざける役はアテナだった

「頼む助けてくれアリシア！もう俺！あんな人類の到達点に勝てねえ！！」

もうさすがにうんざりしたのか、アリシアに助けを求める

だが

「任せて、私の呼ぶ軍勢がアテナちゃんを止めるわ」

「おい？軍勢ってなに？お前の呼ぶ軍勢ってテラフォーマーじゃないよね？」

「大丈夫、中にはいろんなベースを持った人もいるから？」

「テラフォーマーじゃねえか!?なに？俺がテラフォーマーって言われるうちに慣れたの!?慣れちやつたの!?ごめん!!俺が悪かった!!バカにして悪かった!!頼むから戻って来てくれ!!元のお前に戻ってくれ!!お前はテラフォーマーじゃないから!!ていうかお前に部下が居たのか!?俺が知っている中じゃあ灯里しか知らないぞ!?お前のその部下って何人!?軍勢だよな!?まさか1000人くらい居るのか!?しかもそいつらもベースを持つ程ヤバいのか!？」

アリシアは嫉妬のあまり、自分をテラフォーマーと認め、更にはアテナを止めようと軍勢まで用意しようとしていた

「俺が悪かったから、俺の知っているアリシアに戻って来てくれ!!」

「あら？私は愛人くんの知っている私よ?だって……」

私の名前はアリシア・フローレンステラフォーマーだから？」

「ごめんなさい!!俺が悪かった!!それは俺の知らないアリシアだ!!」

もはや、愛人が今までバカにしていたテラフォーマーズネタを自分から使った。もはやアテナを倒すまでは、彼女が人間に戻ることはなかった

愛人は今までバカにしたことを後悔した

「だから止めるわ。私の『カルナバル・ド・パリス』で？」

「なんでだ!!? どうしてお前がそんな物を持っているんだ!? もしかして作ったのか!？」

「藍華ちゃん? 準備できた？」

「え? 私も!? 私もテラフォーマー!？」

「ダメ?」

「滅相ありません!!」

「藍華あああああ!!? 戻ってこい!! お前はテラフォーマーじゃない!!」

「私は藍華テラフォーマーだ!!」

「どんだけアリシアLOVEなんだよ!!?」

藍華までアリシアに便乗した

「アリスちゃん? 私たちもやろう?」

「え!? 私も!!?」

「薬を準備して!! 行くよ!!」

「私が『でっかいスズメバチ（大雀蜂）』が使える前提で言ってます!!?」

アリスはなんだかんだでアテナの味方になった。わけもわからず

「藍華!! やめろ!! この会社を血の色に染める気か!？」

「うるさい!!! 人間が指図しないで!!」

「お前も人間だろうが藍華!! 晃はお前の上司だぞ!? 言う事ぐらい聞けよ!!」

「愛人?」

「なんだ晃?」

「アテナの援護に入る。ARIAカンパニーを私の『タスマニアアンキングクラブ』で殲滅する!!」

「やめろおとお!! お前がこの会社を血で染めるなあああ!!」

藍華の反抗期にキレた

晃も薬使ってアテナに応戦する

「くそ!! 灯里! お願いだ!! 止めてくれ!!」

「え!?無理ですよ!!こんなに強い人たちに勝てません!!」

「頼む!!この戦いを終わらせるのはお前だけだ!!」

「無理です!!1位とテラフォーマーを止められません!!」

「お前もなにげに自分の上司をテラフォーマー呼びかよ!?」

灯里もそれだけ怖じ気付いたのだ

こうなったら最終手段として、愛人が言った

「わかった!!今度なんでも言う事聞いてやる!!だから止めてくれ!!」

「……………なんでもですか?」

「ああ!!」

「……………」

灯里はその『何でも言う事聞くと』言った瞬間

眼が変わった。そしてどこからか『膝丸』を出した

「『膝丸』!?なんで持っているの!?!」

「膝丸じゃありません!!これは『水無』です!!」

「『水無』!?なにそれ!?!」

「行きます!!この戦いを終わらせます!!『水無神眼流』!!!」

「そこは『膝丸神眼流』だろ!!」

灯里は抜刀術を構え、放つ

「ARIAスラッシュ!!!」

「なにそれ!?!」

わけのわからない技を放ったおかげで、みんな気絶した

まあ、おかげでこの会社が血で染まらずに済んだ

その後、気絶した5人を寝かせて、その日を終えた

愛人は灯里にあんな約束をしてしまったが

一体なにをするのだろうか、怖くて想像もつかなかった

なんだかんだで灯里もその約束が欲しかったらしい。じゃなかつ

たら上司のアリシアにまで気絶させたりはしないだろう

でも気になった。一体彼女は愛人になにをするのだろう

それはまだ先のお話

第八話 サラマANDAー

水の三大妖精とのある意味楽しいお茶会から2週間が過ぎた
愛人は相変わらずのパトロールで、街の住民の手伝いもしていた
あれから彼に変わったようなことは無い

いつも通りの仕事をしているのだ
しかもあれだけ毎日会っていた灯里たちにも会っていない

今の彼はそこまで忙しくない、だからと言って自分からも会いに行っても居ない。会っても用は無い。

ただ

アクトはそんな彼を見て、たまには休ませようと考えていた
彼はまだ新入騎士、休みをいっぱいあげても構わないはず

それになんだかかんだで彼にあまり休みも与えていなかったのだ
日曜日しか休みが無いのだ

それに彼が街の住民の手伝いをするようになってから、ほぼ毎日出勤している

まだ新入騎士なのだから息抜きをさせようと
アクトはあることを考えていた

それは

「なあ愛人？明日？僕と一緒に“浮島”に行ってみないか？」

そう、彼にまだ連れて行っていない浮島で休日を過ごそうと考えていた
た

「浮島？あの上に浮いている島か？」

「そう、どうかな？最近ろくに休んでないだろ？」

「まあな、いろいろ忙しいし、休んで大丈夫なのか？夏休みが近くなるって言うのに？」

「まあね、でも息抜きも大切だよ？」

「ふくん、あんたが休んでいいなら、行くさ？」

こうして今週の日曜日、二人は休んで浮島で遊ぶ事にした

日曜日当日

「愛人!!」

「ああ、来たか?」

二人とも私服で待ち合わせをしていた

「で?あのロープウエーで行くのか?」

「ああ、そうじゃないと行けないからね?一般の人は」

「へえ」

「乗るぞ?チケットは買ったから」

「ああ」

とにかく駅でロープウエーに乗り、浮島に向かった

10分経ち、浮島に到着した

「すげえ!空を飛んでいるみたいじゃん!」

街を見上げることができる浮島から見る景色に、愛人は感動して
いた

「綺麗だなく、ここは」

「来てよかっただろ?」

「ああ、すげえいい」

彼はあまりにも感動で、動く事はできず、そのまま街を見下ろし
ていた

そこに

「あれ?愛人さん?」

「ぷい!ぷいにゆい!」

「ん?灯里?」

「どうして君が？」

「アクトさんもなんで!？」

「あらあら？愛人くん、アクトさん？2週間ぶりですね？」

「アリシアも居たのか？」

「あれ!?なんであんたが居るの!？」

「藍華？お前も浮島に？」

なんとここで灯里たちと久しぶりに出会った

「俺たちは息抜きで浮島に遊びにきていたんだ。そっちは？」

「私たちは久しぶりに浮島に行きたくて、来たんです」

「本当なら後輩ちゃんやアテナさんや晃さんも呼ぼうと思ったんだけど、忙しくて私たち3人しか行けなかったわけなのよ」

「なるほどね・・・」

「愛人くんは初めて？浮島に来るのは？」

「ああ、今日が初めてだ。いい所だな？ここは？」

「気に入った？」

「ああ、ここに住みたいぐらいだよ」

それほど彼は好きになった。まるで空に住んでいるような気分だった。

これを見ていると仕事も忘れてしまう気分だった

とそこに

暑苦しい男がやってくる

「よう！アクト！よく来たな！」

「暁！久しぶりだ！」

「知り合いか？」

「僕の友人だ。名前は暁。サラマンダー所属しているんだ。と言ってもまだ半人前だがな？」

「サラマンダー？それって釜の番人の？」

そこにアクトの友人のサラマンダー所属、ポニーテールをした暁が出て来た

アクトとは友人らしい

「お久しぶりです！暁さん！」

「おう！もみ子よ！久しぶりだな！」

「はひ!? だからもみ子じゃありません!!」

「なんでもみ子？」

「久しぶりね。暁くん？」

「ア、アリシアさん！お久しぶりです！」

「相変わらず、アリシアに弱いんだなお前？」

「う、うるさいアクト!!別に弱いかじゃない！」

「そうかい・・・」

「弱いつて言うのか？」

「まさかあんたと会うとはね・・・ポニ男」

「ほう、久しぶりに会ったな？ガチャペン？」

「ポニ男？ガチャペン？」

「どうやら、愛人以外は暁とは知り合いらしい。」

「そんなことよりも、愛人は暁の呼ぶ相手のあだ名に若干驚く」

「ん？あんたは？」

「暁は愛人の存在に気づいた」

「七海・愛人だ。アクトの部下で、エンジェル騎士団の新入騎士だ」

「ほう！あの地上の噂に流れている『何でも屋の騎士』か！」

「まあ、勝手に流れたことだがな・・・」

「そうか、アクトの部下か・・・今度俺様の所にも手伝いに来て

もらいたいな・・・」

「ここまで来いつてか？さすがに無茶だぞ？」

「ただでさえロープウエーの料金は只では無い。」

「愛人もさすがに浮島まで手伝いに行くのは無理があつた」

「まあ確かにそうだな・・・アクト？お前？いい部下持っているな？」

「まあな・・・性格はアレだけど、それ以外の技術面じゃあ、僕た

ち以上だし、それに・・・」

「そこでアクトは更にとんでもない発言をする」

「灯里ちゃんとアリシアのお気に入りだしね〜」

「アクトさん!!?」

「なに!？」

「そうなのよ!!なんでこいつに!!灯里ならともかく、なんでアリシアさんまで!!」

「なんで俺があのだ二人のお気に入りに入らなわけ?」

さすがの衝撃の言葉に、アクトの口を口封じするアリシアと灯里
藍華はそれを知っているかのように、ガツカリしたように言う

暁はびつくりして、愛人を睨んだ

「変な事言わないで下さいアクトさん!!」

「間違っではないないだろ?みんな知っているぞ?晁も?アリスちゃんも?」

「でも!言わないでください!!聞いて恥ずかしいです!!」

「あのアリシアさんが慌てるなんて、やっぱりあいつは危険よ!!」

「人を勝手に危険人物すんなよ」

灯里が恥ずかしがるのはわかるが、まさかの普段落ち着いて、母親のような性格で美貌の彼女が恥ずかしがる。彼女もプリマであろうと、一人の女に変わりはないというわけだ

「おい!愛人!!」

「なんだ?人の肩を掴んで?」

暁はアリシアのファンでもあり、そんな彼女に男など気に入らないらしく、愛人の肩を掴んだ

「お前!!ああああ、アリシアさんとはどんな関係だ?」

「ただの腐れ縁だ」

「腐れ縁?本当か?」

「ああ、他に何の関係がある?」

「.....まあ、お前が言うのならそうのだろう」

「ああ、俺はあいつとはそんな深い関係じゃない」

愛人は意外にも鈍感だった。こんなに誰が好きなのかも明白にもわかるような会話をして聞いているのにも関わらず、二人の気持ちに気づいていなかった

とりあえず掴まれた手をどけて

「で?ここをなにするんだアクト?」

「暁に案内を頼んであるんだ」

「愛人君初めてなの？浮島に来るの？」

「ああ、今日が初めてだ」

「なら！私たちと回りませんか？」

「お前らも初めてなのか？」

「そうじゃないですけど、今日は久しぶりに遊びに来たんです。愛人さんたちも今日お休みなら一緒に回って遊びませんか？」

「そうだな・・・多い方が楽しいしな、そうだな楽しそうなところ知っているなら案内してくれ？」

愛人たちは灯里たちと一緒に浮島に回ることにした

「はい！まずはこっちです！」

「おい！もみ子！案内役は俺様だぞ!!」

「誰だつていいって、楽しい所へ案内してくれるならな？」

「あ！ちよつと待ちなさいよ！」

「あ!?!おい!?!」

「あらあらうふふふ」

「ぷいにゆ!!」

「にゃーん!!」

灯里と暁が愛人のために先に案内を勝手に始まり、愛人もそれについて行く。藍華たちは急いで3人の後を必死に追いかける

まずは電車に乗り、景色を眺めている

「こんな高い所に列車なんてあるんだな・・・」

「浮島でも地域としては広いから、列車を使って帰る人も多いのさ」

「へえ〜」

「ところで愛人よ？お前さんはアリシアさんとどんな関係なんだ？」

「それ何回聞いて来るんだ？もう10回くらい聞いてるよな？」

さつきからいろんなところを案内終わる度に必ず聞いてくるのだ

「お気に入りと聞いて、腐れ縁という関係と思えんぞ！」

「んなこと言ったてなく、まあ、変な事言うなら、今まで俺はあいつに散々バカにしていたことかな？」

「バカにしていた!? アリシアさんに!」

「そう、面白い奴だから少しからかったんだ。ま、結構面白かったよ?」

「貴様!! アリシアさんをバカにするとは許さんぞ!!」

暁はアリシアのファンでもある。その憧れのアリシアを小馬鹿にするなど、ファンとして許せなかった。

だから愛人の胸倉を掴んだ

「ま、その分殺されかけたけどな」

「殺されかけたって・・・あんたほぼ瀕死に近つたじゃない」

藍華はやれやれと言わんばかりだった

いつも、バカにしては頭を掴まれ血が流れているのにも関わらず

彼は真顔で、なおかつ挑発もするような

イカレタ男なのだからな

「そういえば、あんたグランマに会ってからバカにしないよね? アリシアさんのこと?」

彼はグランマに会って以来、アリシアのことをバカにしないのだ。

あれだけ彼のお得意のテラフォーマーネタを使うのに、それ以来全然使わない上にバカにもしない

前なら、アリシアのことを『テラフォーマー女』と呼んでいたのに、今では普通に名前と呼んでいる

「あんた、グランマに何か言われたの?」

「別に。もうその必要がなくなっただけだ」

「それだけ?」

「ああ。それだけ」

なにがあつたのだろうか和藍華は気になる

確か前に、少しでも楽しませるために少しはストレス解消させるためになにしていたと前に聞いた

それと何か関係あるのだろうか、

急にバカにすることやめるなど、変にしか思えなかった

それに雰囲気も変わった。前はダルそうな顔していたのに、今日は落ち着いたようなクールな感じ

まるでいつもの彼じゃないような

「ねえ？愛人くん？私もそれ気になったんだけど？どうして急にバカにしなくなったの？」

本人も気になったせいかな、聞いて来る

「なんでお前が聞いて来るんだ？そんなにバカにして欲しいのか？」

「そういうわけじゃないけど・・・」

「別にもうする理由がなくなっただけだ。それにこの前俺が使ってた『テラフォーマーネタ』はお前自ら使ってるじゃねえか、もうバカにする側じゃなくて、俺はツツコミ側だよ」

ただでさえ、この前『あらああら、じょうじ』なんて言っている人に、どうバカにすればいい、そんな相手にバカにする要素など一つもない

「でも愛人さん、それ以外でもそうですけど、今日は落ち着いてると言いますか？なにか元気が無いように見えます」

「そうか？」

灯里が突然、愛人の方に近づいて言った。彼女の眼には彼の姿はクールでは無く。元気が無いように見えたようだ

「そういうえば、今日ここに来た時も楽しみじゃないような顔だったな？」

アクトにもそういう風に見えたらしい。どうやら元気が無いと、顔に出ているようだ

「アクトもそう言うか？」

「なんか悩みでもあるんじゃないのか？俺様に相談してみないか？少しはスッキリするかもしれないぞ？」

「暁？俺は悩みは無い。ただ・・・少し疲れているだけだ？」
「疲れている？そんなに仕事が忙しいのか？おいアクト？いくら『何でも屋の騎士』でも働かせすぎじゃないのか？まだ新入騎士だろ？少しは休みを入れているのか？」

「そんなはず無い!!僕は土曜日も休みにしているぞ!!」

「ああ、アクトの言う通りだ。実は仕事意外で疲れていることがある」
「それはなんですか？」

「それは……あんな言いたくない」

灯里が聞いて来ると、彼は答えたくなかった

更にそれを聞いた途端、彼の顔が青ざめたのだ。彼がそんな顔もできるのだと、皆驚く。彼はどんな仕事もダルそうな顔でやっていく彼が、初めて青ざめたという困った顔したのだ

そんな彼の顔も新鮮だなとみんなは思うが、

そんなことよりも

いろんなことを解決した彼にでも、解決できない問題でもあるのだろうか

彼に頼んだ仕事は断ったことも無ければ、失敗したことも、みんなが彼を見ていた時はそんなものは一切なかった

そんな彼が困った顔をしたのだ。

しかも話したくない

それほどみんなに迷惑をかけたくないのか、もしくは自分だけでその問題を抱えているのだろうか、そうなればいつか体が倒れてもおかしくないほど、ストレスは溜まる方だろう

灯里と暁は

放っておけないと、彼を励ます

「愛人さん？何か悩みがあるのなら言ってください」

「え？別に悩みなんて……」

「そういう風には見えないぞ？言えって？俺様たちが力になるからよ？」

「いやでもな、暁。これは……」

それでも言えない愛人に、アリシアと藍華は

「愛人くん？私たちで力になれることは無いの？」

「アリシア？お前まで？」

「いいじゃない、あんなだっけ人なんだから、疲れたりするんだから？」

「でもな！これは……」

「もういいだろ愛人？」

「アクト？」

最後にアクトが言い出す。上司の言葉に愛人は真剣に聞く

「お前は最近頑張っているさ？たまには人を頼ってもいいんじゃないのか？」

「けど……」

「お前は一人で頑張りすぎなんだ。だから頼ってくれないか？お前だけに仕事を押し付けてしまった。僕としては力になりたいんだ」

「アクト……でもあれは俺が好きでやっているだけであつて……」

「！」

「僕は君の団長なんだ。団長である僕が部下の悩みを解決できないなど、団長として失格だ。だから言ってくれないか？力になるから？」

「……」

アクトは、仮にも『エンジェル騎士団団長』そんな彼が部下の為人肌脱ぐのは当たり前だと、愛人に言った

「そうか……なら力になってくれるか？」

「ああ、もちろんだ!!」

「私たちも力になりますよ!!ね？藍華ちゃん！」

「まあね、あたしも今まであなたに助けられたし、力になるわよ？」

灯里や藍華も愛人に力を貸してくれる

「まあ、俺様たちができることは限られるが、少しはなれるかもしれない。言ってみろ!!」

会って間もない暁にも、友人のように励ましてくれる

「私も愛人くんの力になりたいわ。困っていることがあるなら相談して？」

アリシアも力を貸してくれた。彼女にはいろいろ愛人に助けられている。その恩返しだと思つてのことかもしれない

「本当にいいのか？後悔するぞ？」

「大丈夫です！」

「あなたに心配されずとも大丈夫わよ」

「おう！任せろ!!」

「うん、大丈夫」

「それでなんだ？愛人？」

果たして彼が悩んでいる事とは

「実は……」

俺、毎日アテナの世話をしているんだ」

「「「え？」」」」

彼の言葉を聞いて、思わず呆然してしまった灯里たち

アテナの世話？それが彼の悩み？

疲れているのだから、もしかしたら心の悩みがあるのかと思いきやまさかのそれ関係のない話だった

ていうか、アテナの世話が疲れるってどういうこと？ってみんな思った

「アテナって？あのオレンジプラネットの『水の三大妖精』の一人だよな？なんでお前さんが世話をしているんだ？」

と、暁が聞くと愛人は

「俺があいつの兄になつたまっただからだよ!!!」

「は？兄？どういうことだ？」

「はははは、そういえば晁が言ってたな？愛人がアテナの兄になつたって？」

「暁さん。それは私が説明します」

どうやらアクトは愛人がアテナの兄になつてしまったことは晁から聞いて知っているようだ

暁は会った事はあるが、愛人が兄になつたことは知らない

灯里が説明中

「ということなんです」

「なるほどなく、で？兄になつたのはわかるが、なんでお前が世話しているんだ？」

「だって!!あいつのドジは見ていられないし!!あいつになにかあったら心配なんだよ!!」

「完璧お兄ちゃんになっているじゃん!!」

あれだけ兄になりたくないって言っているわりには、もう兄としての行動に出ている

「あいつさ？アリスの言う通り、何もないところでつまずいたり、自分の務めている会社の場所も迷うし、食べ物や飲み物はこぼすわけで、もう世話のやける”妹”だよ」

「なんだかんだでアテナのことを妹って呼んでいるし」

「まるでシスコンね？さすがお兄様だわ」

「だから!!あの劣等生兄貴と一緒にするな藍華!!!それで俺の家で面倒

「見ているわけ？」

「それ同居じゃん!!?男と女が一つ屋根の下で居るのはまずいだろう!!?」

「俺だってダメだって言おうとしたさアクト・・・でもな・・・泣きそうな顔してて、負けた」

「結局お前が入れてんじゃねえか!!?」

「仕方ないだろう!!だってあいつ!まさかの俺の住んでいるアパートホテルの玄関の前に居たんだぞ!!しかも住所教えてないのに!!」

「なんでだ?!?なんで愛人の住所知っているんだアテナ!?まさか晁の言うとおり、本当に『ジョセフ・G・ニユートン』みたいなヤバい存在なのか!?!」

「あんときは本当に驚いたね。俺の帰り待って玄関の前に居たからね?」

「そのアテナ・・・恐ろしい子だな・・・」

「アテナさん、なにをしているんですか!?!」

「そういえば最近、後輩ちゃんがアテナさんと一緒にいないと思ったら、愛人のところにいたのね」

「本当に世話やけるよ。飯も俺がちゃんと食べさせないと食べないしさ、マジで世話がやけるんだよ」

「アテナさんだもん、そこは仕方ないわよ」

「しかも?あいつな!先にお風呂入らせて、10分経って出てみれば、あいつの髪型が『スーパースァイヤ人』みたいな髪型になっていたぞ!?!」
「どういう髪型よ!?!」

「だから俺がちゃんと髪を乾かして、ちゃんと梳かしているんだよ」

「あんた?お兄さんって言うよりも、アテナさんの執事な感じがするけど?」

もしくはアテナのお世話係だった

「まあ、あいつに甘やかされたって言うのもそうだが、どうしても俺の家にも泊まらせているんだよな」

「もうアテナと君が本当の兄妹になってしまおうぞ?」

「もうアテナさんには実家としか思っていないんじゃない?明日から『アテナ・グローリィ』じゃなくて、『七海・アテナ』に名前が変わる

んじゃない?」

「まるで俺がアテナを養子にしたみたいない言い方やめてくれる藍華?」

「事情はわかったが、そんなに疲れるのか?アテナの世話が?」

「いや、その疲れる理由の原因であって、それが疲れる理由じゃない」
疲れる理由ではなく、その原因の話らしい

では、疲れる理由はなんだろうか

「は?じゃあなんだよ?」

「実はその光景を見たファンとアテナの会社の従業員が俺を変な目で見られるんだ」

実は彼が疲れているのは、体ではなく、精神が疲れているのだ

最近、街の住民はともかく、オレンジプラネットの従業員やアテナのファンに睨まれるような習慣をこの2週間毎日味わったのだ

始まりは、この前オレンジプラネットの会社で、愛人は仕事があったのだが、その時に事情も知らないオレンジプラネットの従業員の前で。アテナにお兄ちゃんって言われているところを見られている

事情も知らない従業員の人から

『嘘!?あの愛人くんは隠し妹!?!』

『許さない!よくもウチらのお姉様を!!』

『許さない!!許さない!!七海・愛人は私たちの手で葬る以外無し!!』

『ウチの女神様に手を出した愚か者は……血に這いつくばって死んでもらう!!』

などと、言われており

さすがの愛人もうんざりして、相手するのが面倒だったのだ

彼が疲れているのは、精神的ダメージの疲労だった

「いやいや!!明らかに変な目じゃなくて、殺意のある目で見られているよね!?!」

「とにかく、毎日が地獄な状態なんだよ」

「それは大変だな?それで今日から大人しくしているのか?」

「まあ、少し疲れてはいる。オレンジプラネットのテラフォーマーが

何匹も居るからな?」

「遂にそつちの会社の人たちにも『テラフオーマーネタ』使いやがったよこいつ!?!」

もう苛ついたのだろうか、ムカつく相手はすべてテラフオーマー扱にする愛人であった

前々から思っていたのだが、ムカつくような相手でもないアリシアや藍華をテラフオーマー扱いするのはなぜだろう

というか、そもそもなんでテラフオーマーネタを彼が使うのかわからない

彼はテラフオーマーズが好きなのだろうか

「あゝ、あいついい加減自分の会社に帰らないのかな・・・」

「アテナちゃんも、もういい歳なんだから、いつまでも面倒見てもらうつもりは無いと思うわよ?ただお兄さんのような頼れる人ができたから、嬉しくて遊びに来たんだと思うわよ?」

一番付き合ひの長いアリシアだからこそ、言える言葉だった

「そうなのか?お前も兄ができたら甘えるのか?」

「そうね・・・・・・愛人くんが私のお兄さんになったら、私は甘えん坊になっちゃうわね?」

「二人も妹はいらないぞ?それに俺から見ても、お前に妹は似合わないし、ぶっちゃけると母親って感じがするけど?」

母親みたいな性格しているアリシアに、妹というレッテルは似合わなかった

ていうか、想像ができない

あんな美貌な彼女が甘える姿など、ファンからしてはレアな姿かもしれないが、愛人からすれば調子狂う話だった

「よく見ているんだな愛人?アリシアさんのこと?」

暁が、まるで愛人はアリシアのことをわかっているみたい言い方をした

まだどうやら、愛人とアリシアが腐れ縁という関係とは思えないよ
うだ

少し遠回しな言い方ではあるが、結局は確かにそういうことにしか聞こえないであろう

得に『彼女しか見ていなかった』って、明らかに彼女に好意がある言い方としか思えない

「おい愛人!!」

「なんだ？」

暁は愛人の肩を再び掴む

アリシアのファンとして聞き捨てならなかった。

「おおおおお、お前!!アリシアさんのこと好きなのか？」

「暁くん!」

暁の質問にアリシアが恥ずかしくなった。アリシアも最近になって彼の事を異性として見始めたのだから、あまりそういうことを本人の前で言ってもらいたくなかった。

彼女が恥ずかしがるところは珍しい、それだけ彼女も乙女ということであろう

想いを寄せている相手に本人の前で聞くなど、恥ずかしくはないはず無い

彼の言った言葉もうれしいというのもあるが、まさか本人の前で言われるとは想像できなかったのか、恥ずかしくてあまり口に出せなかった

でも彼も自分の事をそんな風に見てくれるのは嬉しいのは事実だった

そして暁の質問に愛人は言う

「好きだけど?それがどうかしたのか?」

「!?!?!?!?!」

当たり前のように言った愛人

その言葉にその場にいた者も驚いたし、一番驚いているのはアリシアだった

まさかの自分の望みが的中してしまったのだ。驚かないはずがない

「貴様!!まさか!、つつつつ、付き合いたいとか、考えているのか?!」
「暁!落ち着け!」

「これが落ち着いていられるか!!俺様たちのアリシアさんに好意を持つ者もいるのだぞ!!なのにかいつは、アリシアさんのことを知り尽くしている上に、お気に入りと言われて、更には今!好きとアリシアさんに告白したのだぞ!!これが落ち着いていられるか!!」

「そうよ!!アクトさん!アリシアさんがこんなダサイ男と付き合うなんて!!私は認めません!!」

暁と藍華は、涙目で愛人を睨んだ。

アリシアをバカにしていたこの男に、ファンでもなければ、みんなの憧れな存在

みんなの『水の三大妖精』を

こんなわけのわからない男に奪われるのは嫌だった

しかも、藍華は知っていた。アリシア自身も愛人を異性として見ていたことも、そうなればもう付き合うしか無いという流れになってしまう。

無論愛人はそのことは知らない

藍華はアリシアの愛人に伝える想いをほぼ分かっているのセリフだった

だが、彼はこの質問に対して

「いや、お前らも好きだろうアリシアのこと?」

「「え?」」

再び彼の言葉に驚かされる灯里たち

もしかして彼は

「愛人?もしかして?お前?友人として『好き』と言ったのか?」

アクトはもしやと思い、彼に質問してみた

結果

「いや、それ以外無いだろう?他になにがある?」

アクトの思っていることが的中した

彼が言った『好き』と言う言葉の意味が恋愛ではなく

あくまで友人としての『好き』だった

その言葉を聞いたアリシアが若干ガツカリした顔し
灯里がほっとしたような安心したような顔していた
無論、藍華と暁もそれを聞いて安心した

どうやら、彼は彼女と付き合いたいか、そういう恋愛関係は何一
つ考えていない様子だった

「さつきからお前ら変だぞ？なにが言いたいんだ？」

「いや・・・なんでもないんだ？」

「は？そんなふうには見えないけど？」

「本当になんでもないぞ!!愛人！俺様は聞いてみたかっただけだ？」

「聞いてみたい割には、お前？深い意味を感じるけど？」

暁はこれ以上の質問をするのはやめることにした

こいつにアリシアに気がない、それだけわかればもう十分だった。

これ以上の質問すれば今度こそとんでもないことになるだろう

こいつがアリシアのお気に入りなら、こいつがアリシアに対して気
があるようなセリフを言えば、アリシアだってその気になってしまっ
たアリシアはそこまで振り回される存在じゃないはずだが

彼がアリシアに対しての言葉は、すべてその気になってしまっよう
なセリフになってしまっ

それだけは避けるために、これ以上の質問は暁はしないようにした
「なんなんだあいつ？アリシア？あいつはいつもあんなのか？」

「え？あ、ああうん、そうね。暁くんはあんな感じだよ？」

「そうか・・・ところでなんかお前？俺と話し方おかしくない？なんか
距離感じるけど？」

「そ、そんなことないわよ？」

「？」

彼がアリシアの今の気持ちは理解はできないだろう

彼は鈍感だ

ここまでストレートに言っついて、最後はまさかの空回り

ここまでシヨックなことないだろう。まるで振られたような感じ

だ

彼をその気にさきたいなら、遠回しな言い方はしない方がいいだろ

男は鈍いとよく言われるが、ここまでわかるような言葉を言っても彼は理解できない

とんだ鈍感野郎である

まあ、アクトはこれでよかったのかもしれないと思っている

アリシアのファンは多い、そんなアリシアに恋人なんてできたら、ファンも大抵泣くだろう

今はまだアリシアに恋愛は早いんじゃないかとアクトは思っている

今はまだアリシアは19歳なのだから、そういう話はまだ先でもいいのではとアクトは思っている

ただ愛人にその気がな無さ過ぎるのは別として、もう少し彼女の気持ちを知ってほしいと思う

愛人もそこまでバカじゃないと思うが

こいつのことだ。もしかしたらそれを考慮して言ったのかもしれない

こいつがアリシアをしつかり見ているのだからそれぐらいは考えているはずだと

でも、アクトはそれでも知りたかった

彼の考えていることやアリシアに対してどんな想いを寄せているのか

実は気になったところもある。初めて彼がこのネオ・ヴェネツィアに来たときから、彼はなぜかアリシアだけをバカにした。

これは灯里や藍華も知っていることだが、このバカにしている理由もこの前藍華からも聞いた

アリシアの大変さを瞬時に理解した。そのうえで彼はアリシアにバカにするようなマネをした

それは、藍華から聞いた話だと、少しはストレス発散のためにバカにしたのだと、少しは吹っ切れてバカにしたあのバカを殴ったり、蹴ったりするなど、アリシアとは思えないような暴力ぶり、誰もそん

な姿を見たいとは思わないが、仕事で疲れて息抜きのために殴られたのは知っている

藍華もそれについては思っている。もつと他の方法があるのでは無いかと。バカにして、アリシアを楽しませる方法以外でもあったはず。例えば、どこかのケーキを奢ったりとか、いろいろ女性を楽しませるやり方はあったはず、彼がそれくらいしかできないのだろうか、藍華もこれを考えていた。

でもアクトが考えているのは、別のこと

なんで彼はアリシアだけしか見てないのかだ

さつきも彼はこう言った『気づいたらアリシア』を見ていた

好意があるだけとは思えないような言い方のようにアクトは聞こえた

もつとなにか、別の何か・・・アリシアに対しての何か別の想いを寄せているかのようにアクトは感じた

今後それがわかる時が来るかどうかはわからないが

それでもアクトは知りたかった

愛人という誰もが驚かされるような、誰も想像のつかないことをしてくれる人

彼のすべてを知りたかった

「もうお前は!!これ以上アリシアさんに近づくな!!」

「近づきたくて、近づいたわけじゃねえよ暁。気づいたらアリシアが俺のところに来たんだって」

「ポニ男!!こうなったら変能よ!!」

「おう!!こうなったらやるしかねえ!!得体の知れない奴だが!!行くぞガチャペン!!!」

「あ、お前も『テラフォーマーズ』読んでんだ?ていうか得体の知れない奴って俺?しかもいつから藍華は薬を使うようになったんだ?」

「落ち着いて下さい暁さん!!藍華ちゃんも!!」

「お前ら電車の中で暴れんなよ?俺たちしかないから良かったけど

さ？他の人がいたら迷惑だぞ？」

「あらあら、うふふふ」

「ぶいにゆ」

「にや〜」

「やれやれ・・・」

アクトは彼のすべてを知る時はまだ先だろうと考えている

今はまだ彼のやっていく姿を見届けるのです

第九話 ノームのアル

浮島で息抜きに遊んだ次の日は普通に愛人は仕事をしていた

そして今日も彼はいろいろな仕事をしている

相変わらず手伝いの毎日だ

でも今日もまた彼に関わるこの事件が待ち受けているのかもしれない

そういう時こそ『エンジェル騎士団』で問題をパパと解決する

そう

「全く見た事のないものと出会うと時！人間は人間ではいられない！！」

「なに言っているの晃？これそういう作品じゃないんだけど？」

「愛人が居るだけで、テラフォーマーが集まるからね」

「おい変なこと言うなよ藍華？なに？俺？ザ・セカンドなの？」

「ていうか、なんでこのメンバー？」

今ここにいるメンバーは愛人、藍華、アクト、晃である

仕事の休憩中の愛人とアクトに突然二人がやってきて、今は一緒に休息をしている

「で？なんでお前らが俺らのところに来るわけ？」

「別にいいじゃない？居て困ることないでしょ？」

「まあ、無えけどさ？こんなメンバーでいるのは初めてだなんて思ってた？」

「そういえばそうだな・・・姫屋のウンディーネ二人とエンジェル騎士団の騎士二人だけが揃うのは珍しいな？」

「ていうか、初めてだろ晃？僕たちが揃って何か話すことなんて何も無いからな？」

このメンバーで話すような内容はあまりなかった

というか、初めてこんなメンバーになったから話題をどう出したらいいかわからなかった

「なんだ？あるじゃないか？話すことならいっばい？」

「なんだよ晃？」

愛人がそう聞いて来ると

「え？とりあえずそっちの班はゴギブリのサンプルは何匹いるんだ？」

「お前一体何の話をしようとしているんだ？」

晃がとんでもない話題を持ち出して来た

それをアクトが

「とりあえずエンジェル騎士団は対テラフォーマー戦のプロフェツシヨナルじゃないんだけど？」

「なに？それなのにデンキウナギのベースを持っているのにか？」

「いや!?おかしいからね!?なんで僕アドルフ!?僕自爆するわけ!?君の目はどうなっているんだよ!?」

一番真剣にやっているはずだった晃がボケをかます。知り合いの友人がここまでアホだとは、アクトは思わなかった

更に

「私たちは38体、これじゃあ足りないわ」

「おい藍華？お前どうした？お前までボケ役になってどうした!?ていうかそのゴギブリのサンプル、オレンジプラネットのウンディーネじゃないよな!?ライバル会社だからと言って従業員殺してないよな!?」

ライバル会社を落すためなら、そこにいる従業員を殺そうとする

このわけのわからないタスマニアアンキングクラブ率いるロシア班？いや

この姫屋班はわけのわからず、オレンジプラネットのウンディーネを捕獲していた。

ていうか殺してないよな？

「それは冗談で・・・」

「冗談であって欲しいよ。お前ら普段一体何の仕事しているわけ？」

「普通に仕事しているに決まっているだろ？私たちからボケたのは最近あんたが『テラフォーマーネタ』を使わないから私たちが使えば面白くなるかな〜って思ってたよ〜」

「毎日ボケかましていられないし、『テラフォーマーネタ』もそろそろ

飽きてくると思うぞ？それに俺はアテナの世話していると段々それを使わなくなるんだよな」

「あんたもうお兄ちゃんじゃない？」

「認めるよ。さすがの俺もこればかりはちよつと否定できなくな？」

「お前お兄ちゃんって言うより、シスコンじゃね？」

「それだけは否定したい」

愛人は兄は認めるが、シスコンは否定したかった。

こんな話題、ファンかオレンジプラネットのウンディーネが聞けば大パニックだ。と言つても、もう街にこのこと広まっているから手遅れだった

そんな話をしていると

ある人がやってきた

「おや？アクトくん？に藍華さんに晃さん？」

「ん？おう！アル！」

「あ、アルくん！」

「ん？誰だ？」

眼鏡をかけた小さい男の人がいた

どうやらアクトたちの知り合いのようだ

「愛人は会うの初めてだな？アル？うちの新入騎士の七海・愛人だ」

「よろしく？」

「初めまして、僕はノームのアルと申します！」

「ノーム？あの地重管理人の？」

「ここアクアの地下にノームと言われる地重管理人という人たちが居る

サラマンダーとウンディーネと同じ大切な職業である

アクアの重力を保つ仕事である

愛人はその1ヶ月前に調べているから多少のことは知っていた

「あなたが『何でも屋の騎士』七海・愛人さんですか？」

「地下の連中も俺のことを知っているわけ？まったくなんでそこまで流れたんだが」

どうやら、街だけでなく地下の方も噂は流れているらしい
彼らは地下に住んでいるため、あまち地上には出ないのだ

「アクトとは知り合いみたいだな？」

「実は僕たちエンジェル騎士団はノームは作業状況を確認しないとならないんだ」

「なんで警察である俺らが？」

「あれ？知らないけ？エンジェル騎士団は治安を守るだけでなく、アクアの職業の状況確認するって？」

「いや、言っていないけど？」

エンジェル騎士団

別名ネオ・ヴェネツィア騎士団という警察官は治安を守るだけでなく

アクアの職業の状況確認と敬語もやっているのだ

サラマンダーという気候制御装置

ノームというアクアの重力制御

シルフというエアバイクで各種物資を運送している配達人

そしてウンディーネという水先案内人

この4つのアクアの職業をエンジェル騎士団は1ヶ月に1回確認するようにならなければならない

この4つの職業はアクアでも大切な職業のため、どれからしたら機能が停止すると、アクア的环境が変わってしまう

エンジェル騎士団はその治安と環境を守るいわばネオ・ヴェネツィアの最高責任者として、必ずこの4つの仕事の状況確認をしなくてはならない

もしこの4つの仕事のうち、どれかが機能が停止すれば、それで事故に発展しネオ・ヴェネツィア的环境が変わってしまう

その事故が起こらないようにとしてエンジェル騎士団は、必ずかけつけ、その問題を解決するようにならなければならない

ネオ・ヴェネツィアの安全を守るためにも

この4つの仕事はこのアクアにとって大事な環境制御のため、

彼ら騎士団が状況確認をしなければならなかった

「確かにサラマンダーは気候の制御にノームは重力の制御、シルフという各種物資の配送、そしてウンディーネという観光客の案内、このアクアにとつては欠かせないといけない仕事だな？」

「エンジェル騎士団はアクアの最高責任者として、責任が得にデカイ、アクアの環境管理や治安管理は僕たちがしなければならぬ、そのほとんどの責任が僕たち騎士団が負わなければならないんだ」

「まるでエンジェル騎士団がアクアを支配しているみたいだな？」

「それだけ、僕たちの仕事は星全体を管理守ること自体が、この星において重要な役割の仕事なんだ？これら4つのうち一つの事故が起こつたらすぐに駆けつけなければならぬんだ。今の自然環境を変えるようなマネはしていけない。このアクアを守る騎士として、このアクアの環境を管理するこの4つの職業の事故は未然に防がないとならないんだ。もし起こつたらすぐにかっつけようにならないとならない。そうしなければこのアクアが変わってしまうからね？」

「ああ、その状況確認の仕事の時、アルと知り合つたんだ？それでいつも仕事状況報告してくれるのはアルなんだ。と言ってもアルはまだ半人前だけだな？」

「は、それで知り合つたのか？」

「はい、アクトさんは仕事熱心ですし、優しいですから、みんなに団長として讃えているですよ？」

「へえ、あいつが」

「ほぼアクアの環境管理や治安管理もすべてアクトさんがやっていますから、さすが『マスター・ミカエル』です」

「マスター・ミカエル？なんだそれ？」

「あんた知らないの？騎士団に入っているの？エンジェル騎士団のトップに『四大大使騎士』っているでしょ？」

「ああ、あの『熾天使幹部』か」

実は全部隊のエンジェル騎士団をまとめる

4人の熾天使騎士がいる

それを愛人たち騎士団は熾天使幹部と呼んでいる

熾天使とはいわば階級みtainなもので、最上級である。

これが部隊の団長として階級である

そして四大天使騎士とは

エンジェル騎士団のすべての部隊のリーダーたちである

部隊は4つ存在する

ミカエル隊

ガブリエル隊

ラファエル隊

ウリエル隊

という4つの部隊である

部隊の制服はみんな同じ青色だが、背中や胸に翼のような絵柄がある

水色の翼はガブリエル隊

緑色の翼はラファエル隊

赤色の翼はウリエル隊

そして愛人のいる部隊はミカエル隊で白の翼の絵柄である

エンジェル騎士団においてのトップであり、彼らがエンジェル騎士

団の最高責任者である

彼らには称号がある

四大天使騎士のメンバーは

まず四大天使騎士団長

アクト・ハーヴィ。称号は『マスター・ミカエル』

ミカエル隊の隊長

エンジェル騎士団最高責任者にして全部隊の団長にして、熾騎士幹

部リーダー

二人目

四大天使騎士副団長

アレクシア・W・スピーナ。称号は『オーダー・ガブリエル』

ガブリエル隊の隊長

エンジェル騎士団副団長にして、『エンジェル騎士団の母』として皆に讃えられている

三人目

四代騎士生活安全長

アイナ・シルバ。称号は『ピース・ラファエル』

ラファエル隊の隊長

アクアの生活安全長

エンジェル騎士団のみんなには『お姉様』と言われている

元はウンディーネのプリマだったとか

最後の四人目

四大騎士治安管理庁

桜坂・彩音。称号は『ネイチャー・ウリエル』

アクアの治安管理庁、愛人と同じマンホーム出身、エンジェル騎士

団の中で一人だけのマンホームの出身

この人も元はウンディーネのプリマだったとか、

と言った4人がエンジェル騎士団のトップ

『四大天使騎士』なのだ

「へえ〜アクト？お前そんなに偉かったんだ？」

「まあな、君が来るまでは忙しかったさ？今は君がいるおかげで助

かっているよ？」

「お前がそんなに偉いなんて初めて知ったぜ？」

「いろいろ失礼ですよ？愛人さん？」

「いいんだよアル？こいつはいつもこうだ？でも仕事は僕たち以上な

んだ。いつか君にも彩音達にも会わせてみようか、少しは楽しくなり

そうだよ」

「すごいですね〜。何でも直せると噂は聞いてますよ？」

「なんでもは言い過ぎだアル？俺でも直せない奴がはあるさ？」

「え？直せないのあんた？あんたこの前、バグズ2号直してたじゃない？」

「い？」

「んなもん直せるか!?なんで俺がそんなとんでもない物を直せるんだ

!?どんだけ俺は人外に見れているだよ藍華!?!」

「違うだろ藍華？あいつが直せるのは『九頭竜』だった？」

「なんで俺が大量破壊兵器ばっか直せるんだ!?そんなもんは入らねえ

よ!!?ていうか犯罪じゃねえか!?俺それでも騎士だから!!アテナの兄になっちまったけど騎士なんだよ!?なんでお前ら俺を犯罪者みたいに言うんだ!?!」

「いや、むしろ『軍神』じゃないですか?」

「それじゃあアシモフじゃねえか!!?ていうか藍華もなにげにバケモノ扱いしてんじゃねえ!!?」

「あ、皆さんも読んでますか?『テラフォーマーズ』?」

「ああ、面白いでしょアル?」

「うん、そうですね。」

アルも読んでいるらしい

どうやら、それほどネオ・ヴェネツィアに人気をもたらしたらしい
ってこと……

「愛人さんはどっちかと言えば、『ジョセフ・G・ニュートン』ですよ?」

「なんでテメエまで俺をテラフォーマーズのキャラと一緒にするアル!?どういう解釈しているんだお前も!!?」

藍華や晃やアルまでも、愛人をジョセフ扱いしていた

「ふざけんな俺はあんな大嘘付き野郎でたまるか!!」

「そう言えばあんたはテラフォーマーズのキャラならなにが似合うかしら?」

「お前ら俺をテラフォーマーにしなきゃ気が済まねえのか!!?」

もはや、ジョセフでなくても、愛人をテラフォーマー扱いにする。

コレまでの腹いせなのだろうか

「くそが!!なんなんだこいつら!!」

「私たち?」

「私たちは姫屋班だ!!」

「なに?ロシア班なの?そこにリーダーのタスマニアキングクラブもいるから?お前らウンディーネだってこと忘れてない?バカなの?アホなの?死ぬの?」

「お前らのせいで、アクアは全くおかすなことになっている」

「いやなにアシモフみたいに言つての晃?」

「ていうか、僕たちも入っているの!？」

「その責任者を出す気がないのなら…….お前から死ね」

「だから俺らがなにしたんだよ!? なにもしてないだろ!!？」

晃・E・フェラーリ

20歳 女

マーズランキング3位

甲殻型

タスマニアン・キング・クラブ

「誰が自己紹介しろって言ったよ文作!!? お前もなにアシモフになりきっているんだ!？」

「敵は3匹!! 薬は使ったな!? こっからはサインAだ!!!」

「敵って僕たちか!? 晃僕たちに恨みでもあるのか!？」

「藍華さん落ち着いてください!!」

「アルくんを取り戻すのよ!!」

「それ取り戻すところか殺そうとしてません!？」

「人間の敵!! 会社の敵!! そしてエ!! 人の街に群がる菌をバラまく豚の骨どもだ」

「俺らがいつ菌なんてバラまいた!? いつ人類の敵になった!? いつテラフォーマーになった!？」

そして晃が腕を上げた瞬間

「行くぞ!!! てめーら!!!」

「待て待て待て!!!」

「落ち着け!!」

「藍華さん待って下さい!!」

晃たちが襲いかかってきた

もう絶対絶命だろうと思ひ。目を塞いだ

だが

「ん?」

突然晃と藍華が止まった。

よく見あたら汗がものすごい勢いで出ている
そして

「総員撤退!!!細菌型だツツ!!!」

と言いつその場を逃げ出した

「……………あいつらどうしたんだ?」

「さあ?……………見てはいけないような物を見て逃げ出したように見えるけど?」

「晃さんたち、僕たちの後ろ見て逃げましたよね?」

「後ろ?後ろになにが……………」

3人が振り向いた瞬間

逃げ出した理由が納得した

「「あ」」

確かに後ろにももの凄いヤバい奴がいた

それは

「お兄ちゃん……………」

アテナという細菌たつぷりのドジ子娘がいた

人類の到達点+細菌型に勝てる訳がないと晃は判断したんだろ
こんなわけのわからない終わり方で今日の仕事は終えた

ちなみにこの後、愛人はアテナのお世話とい名の仕事が入った

第十話 綾小路宇土51世

なんだかんだで友人が増えた愛人

まずはエンジェル騎士団のアクト

ウンディーネには、ARIAカンパニーの灯里とアリシア、

姫屋の藍華と晃、

オレンジプラネットのアリスとアテナ

サラマンダーには、暁

ノームにはアル

愛人がただ仕事をしているだけで、偶然出会い友人となって行く

ここまで彼らが馴れ合いの強い者とは思えないが、

彼のところにみんなが集まるかのように友人が次から次へと増えて行く

彼がフレンドリーなわけでは無い

でも、気づいたら、多く友人がいた。彼が頼りになるというのもあるが、彼が面白いというのもある。彼はみんなに愛されているのは証
拠だろう

なにが言いたいのかと言うと

彼に出会う人は、全員か彼の友人になってしまうということだ

それだけ彼は多く友人ができるということだ

そしてここにも愛人の友人ができた

「それで宇土？これ全部届けるのか？」

「そうなのだ!!愛人くん!お願いなのだ!!」

この男はシルフのロマン飛行者の綾小路宇土51世、あだ名は『ウツディー』

シルフとは

エアバイクで各種物資を運送している配達人である

綾小路宇土が勤務する浪漫飛行社や海猫運送などの仕事の職業

「ネオ・ヴェネツィアと浮き島は車を全面的に禁止されているからな、基本的には物資の運送が主な仕事だが、個人宛のお届け物やゴンドラ

の陸揚げの仕事も扱っているしな、で？宇土？暁に依頼されたがなんで俺を呼んだ？」

愛人は暁に依頼され、友人であるウツディーの仕事を手伝ってほしいと朝依頼が来た。まあ依頼だから仕方なく来たが

なんで自分が出なければならぬのか、わからなかった

わざわざエンジェル騎士団の自分を呼ぶ必要があるのだろうか

とりあえず理由を聞いてみると

「実はお仕事用の大事な街の地図を失くしてしまったのだ」

「なるほどね、その案内を頼むってわけだな？」

「実を言うと私には意外な特殊体質が備わっていて、街の地図がないと一切のお届け物ができなくなってしまふのだ」

「事情はわかった。それでそのお前の特殊体質ってまさか？方向音痴なのか？」

「そうなのだ!!」

「やっぱりな・・・」

でなければ地図で街の場所を確認するわけがない

愛人はだいたい想像はついていた

「確かシルフはお届け物は時間厳守が第一だったな？配達先リストは？」

「それは無事なのだ！」

「よし、それを見せろ？」

ウツディーにリストを見せて貰い

愛人は突然右腕に機械のような時計を服の袖から出す

「まさか。お前の出番が来るとはなアラエル？」

『そういう言い方はやめてもらえますかマスター？私をなんだと思ってます？』

「さあな？レッドウイング？」

『どこのアベンジャーズですか？』

「なんなのだ愛人くん？その腕についている時計は？」

『『アラエル』俺が自作で作ったAIシステムという人工知能を搭載した機械のコントローラーという時計。いつかAIシステムを作って

みたいと思って、俺が趣味で作った。ドローン型AIシステム『アラエル』。こいつなら衛星を通じて、配達先のの場所も把握している。アラエルを使って案内してもらおう。リストは？」

「はいなのだ」

ウツデューからリストを見せてもらい。

その書いてあった住所を時計から、赤外線レーザーでスキャンし場所を登録する

『登録しました』

「よし、アラエル？俺の部屋の窓開けてあるだろ？自分で出て来い？」
『わかりました』

アラエルはそう返事すると

空から、鳥より早く、素早く愛人のところに飛んで来た。小さな鳥型の飛行船のラジコンサイズのドローンだ

「こいつが『アラエル』だ」

「これがなのだな？すみませんがよろしくお願いしますのだ」

『マスターから話は聞いてます。ウツデューさん。案内は私にお任せを？』

「頼もしいのだ！」

「よし、俺はエアバイクの後ろに乗って、指示するから、宇土乗れ？」

「はいなのだ!!」

愛人はアラエルの案内の指示を言うため、

愛人はエアバイクの後ろに乗る

ウツデューはエアバイクのエンジンをかける

「どうかな？愛人くん？」

「大丈夫だ？いいぞ？飛べ！」

「荷物の固定よし、配達先のリスト準備よし、心の準備よーーし!!」

「なんで心の準備？」

「それでは愛人くん！お願いしますのだ!!」

「よし!!『アラエル』!!」

『案内開始です!!』

エアバイクが飛ぶと、アラエルも飛んでウツデューたちに少し先に

飛んで案内する。その後をエアバイクで追う

街の上を飛んで行く

「ふうーエアバイク最高だな宇土!!乗るのは初めてだ!!」

「そうなのか、できれば私のことはフレンドリーにウツデーと呼んでほしいのだけ？」

「悪いな?俺は人をあだ名で呼ぶのは嫌なんだ。だから断る」

初めアリシアを『テラフォーマー』呼びしてた男が、よくそんなことが言えた物だ。

『マスター?右折してください。1キロ目的地です』

「わかった。宇土!!ここを右折!!1キロ先で一つ目の目的地だ!!アラエルを追え!!」

「了解なのだ!!」

アラエルの案内で、配達物を次から次へと運び込む

どうやら無事に全部運び終えそうだ

16:00

無事にすべて終わり、今はエンジェル騎士団の本部まで送ってもらっている途中

「これで終わったな?」

「本当にありがとうなのだ!!アラエルちゃんも?」

『いえ、構いません。久しぶりに空を飛んで楽しかったです。面白かったですねマスター?』

「ああ、宇土?なかなか楽しかったぜ?空を飛んでよかったぜ?」

「愛人くんは空を飛ぶのが好きなのか?」

「ああ、気持ちいいしな？風を駆け抜ける感じで好きだ？」

「私は空を飛ぶというよりも、泳ぐという感じなのだ？」

「泳ぐか……それは空を海として思っているんだな？そこにいるお前達シルフは魚みたいなものか？」

「そうなのだ。私はマグロみたいなものなのだ」

「マグロか……本で読んだが、確かいつでもご飯を食べる時も眠っている時もずーと泳ぎ続けないと死んでしまうとか？もしかしてお前？」

「そうなのだ。そうしてないと死んでしまうほど空を泳いでいたのだ」

「ふん、いいじゃねえか、それほどこの仕事が好きなんだな宇土？……」
「そうなのだ!!」

ウツデイーの仕事がなんだか羨ましがる愛人

空を泳ぐにしても飛ぶにしても、こんな仕事は気持ちのいいものだ。ずっと自由に飛んでいられるなら、愛人もここで転職してしまいたい。そんなほど、ウツデイーの仕事を手伝って楽しかった

「ん？なんだか焦げ臭いな？」

「そういえば確かに臭いであるな？」

「一体どこから……ん？」

突然愛人の乗っていたエアバイクの下から煙が出て来た

その煙が出て来ているのは、船からだ

「火事なのだ!!?あの輸送船からの煙なのだ!!!」

海の上で火の煙が舞った輸送船があった

「ち!!宇土!!あの輸送船に行ってくれ!!」

「わかったなのだ!!」

ウツデイーに頼んで、火事にあった輸送船に行く

火事が舞う輸送船の周りには、エンジェル騎士団のゴンドラが輸送船を囲んでいた

消防隊もいるが、なかなか火は止まらない

救助隊も中にいる人を助けているのが見えた

そこにアクトがいた

「アクト!!!」

アクトのところまでエアバイクで近づく

「愛人!?それにウツデー!!!」

「久しぶりなのだ!!」

「状況は!」

「輸送船に漏れた燃料ガスが炎上した!!輸送船に乗った従業員は救助中だ!!まだ人がいるはずだが!!く!!」

突然輸送船の中で爆発が起きた。

「中には大量のガスが出ていて。このままだと船は爆発する!!だがまだ中には数名の人が!!」

「大変です!!ガスの炎上が強くなっています!!あと1分で爆発します!!」

「そんな!!」

「くそ!!アラエル!!」

『はい!!中にいる人をスキャンします!!』

「なんだそれは!!!」

「説明は後だ!!」

アラエルは輸送船のボディ全体に赤外線レーザーを当て、中にいる人を確認する

『コントローラー室に4人発見!!それで最後です!!』

「よし!!場所は?」

『上に窓ガラスがあります!そこから入ってください!!』

「宇土？エアバイクで行けるか？」

「行けるのだが、定員は二人までしか助けられないのだ!!」

「それでいい!!後の二人は後で俺に任せろ!!時間がない行ってくれ!!」

「わかったのだ!!」

愛人はエアバイクから降りて、アクトが乗っているゴンドラに移る
「アクト!!みんなを輸送船から離れさせろ!!爆発に巻き込まれるぞ!!」

「でも!!まだ中に人が!!」

「任せろ!!そこは俺がなんとかする!!」

「まさか!!危険だ!!一人で行くなんて!!」

愛人は一人で爆発寸前の輸送船に入ろうとする

「なあに!いっちょ飛ぶだけだ!!」

「飛ぶ!？」

「愛人君!!二人は救助できたのだ!!」

空からウツディーが従業員二人を救助したの確認した

「よし!アラエル!!『ウイング・モード』!!」

『はい!『ウイングモード』開始!!』

アラエルというドローンは愛人の背中にくっつく。まるでリュックサックのようにそしてそこから

透明の白い翼

白く輝く光る翼が出て来た

愛人の背中から翼が生えるように

まるで天使の白い翼みたいな

愛人がまるで天使になったように

「愛人……」

「いくぞ!!アラエル!!」

『はい!!』

愛人は翼が羽ばたくように飛んだ

そしてコントロール室の窓に入って

従業員二人を救助し、そのままウツデイーのところまで空を飛んだ
「輸送船が爆発する!!伏せろ!!」

輸送船は爆発した。死人は誰もいない全員救助完了した
爆発した輸送船は海の深海まで沈む

そしてウツデイーと愛人は

「なんなのだ？愛人くんそれは？」

『アラエル・ウイングモード』アラエルが俺の背中にくっついてナノ
マシンの翼を出して、俺を空に飛ばしてくれるシステムだ」

「すごいのだ!!それさえあれば自由に泳げるのだ!!」

「ああ、悪いが宇土……」

「ん？」

「俺はやっぱり泳ぐよりも、飛ぶ方がいい、俺にとっての空はこうでな
いと」

「そうなのだな」

「え？」

「愛人くんはマグロなんか似合わないのだ。その翼で自由に飛び回る

“天使”の方が似合うのだ」

「ふん！俺が天使か……アクトのところに戻るぞ？」

「はいなのだ！」

輸送船火事事件は無事解決した

死者は無し、街の被害も無し、

愛人とウツデイーの活躍がアクア全体に流れた

従業員の救助を手伝ったウツデイーには賞状が渡された

そして愛人の評価は更に高く見られた

もうこの街で彼を知らない者はいない

『エンジェル騎士団』も彼を高く評価された

愛人の相棒『アラエル』が正式に『エンジェル騎士団』に加入した

そして次の日

この事件の彼の活躍を見た四大天使騎士たちは

彼を会議室に呼んだ

第十一話 四大天使騎士

ネオ・ヴェネツィアニュース

昨日の夜

ネオ・アドリア海で

輸送船の火災事故が発生しました

エンジェル騎士団の調査によると、ガスの漏れが原因で船内が炎上
エンジェル騎士団の救助により死人はいませんでした

その時に救助に手伝いをしてくれた人がいました。シルフの綾小路宇土51世さんです。配達りの帰りに偶然出くわしたとして、救助に手を貸してくれました

それとカメラで捕らえた映像にですが、その事件にあの街で噂になっっている『何でも屋騎士』の七海・愛人さんがいることが判明しました

彼は私たちの見たことないテクノロジーのような物を使い、機械で翼が生えるというテクノロジーで、輸送船の従業員を救助しました。

『まるで、天使のようですね?』

『はい、これは七海・愛人さんが趣味で作った機械だそうです。空を翼で自由に飛びたいという夢を実現したいがために、作ったそうです』
『そうですか、エンジェル騎士団も本物の天使になったということでしょうか?』

『これは、七海・愛人さんの趣味だそうですので、エンジェル騎士団とは何も関係ないとエンジェル騎士団・団長のアクト団長が言っていました』

『そうですか、ですがこれがあれば、すぐに駆けつけると思っていますか?』

『ネオ・ヴェネツィアはゴンドラかエアバイクでの移動でしか無理ですからね……』

『では、次のニュースに入ります!次は……』

プツンと愛人はエンジェル騎士団本部の自分の仕事場の部屋のテレビを消す

もうこの事件のニュースはネオ・ヴェネツィアだけでなく、マンホームやルナワンやルナツィやルナスリーにもこのニュースが流れている

もう愛人のことが世界中どころか、宇宙全体にまで知れ渡ったのだ

「なるほどね・・・確かにあれがあればすぐに事件が起きたとき、駆けつけることができる。でもな・・・」

『私のようにAIシステムは二度と作れませんよ?』

「ああ、お前は本当にたまたまできただけだからな?」

アラエルは特別にできてしまった存在。たまたま作ろう気合い入られてやったもの、失敗は多くあった。そんなあるときたまたまプログラムコードをいじくっていたら、たまたまできるといふ現象をしてしま

偶然に『アラエル』という人工知能が生まれた

だからそのスカイバードを作ることにはできるが

アラエルという人工知能自身は作れない

それだけ彼女は特別ということだ。

無論、本人に頼んで作っても不可能

それだけむちゃくちゃなプログラムで作られている。愛人にしか理解できず、これをもう一つ作るのは無理だった

コンコン

誰かが尋ねて来た

「愛人くん?ちよつといいかな?」

「ん?上位の『ケルビム(智天使)』がなんで俺のところにな?」

「アクト団長に会議室に来て欲しいと言っていているんだ?来てもらってもいいかな?」

「会議室?嫌な予感するな?わかった今行くぞ?」

「それとアラエルも一緒をお願いと?」

『とんでもないことが起こりそうですね?』

「たぶん、今俺の嫌な予感が的中するはずさ?アラエル?スカイバードを連れて来て?」

『了解』

アラエルを連れて、エンジェル騎士団本部、最上階に会議室があるこの会議室はあの四大天使騎士しか入れない。もしくはその4人の騎士に呼び出された者のみが入る事ができる

愛人はそんな重大な場所に呼ばれたのだ

呼ばれた者はほぼ全員緊張で入ることを恐れていたが

愛人は緊張などできる余裕もなかった。それほどこの会議室で話す内容がとても嫌だったから

そしてその会議室前について

「アクト団長？連れてきました！」

ノックの声をかけると、中からアクトの声が聞こえる

『ありがとう。二人をいらせて？』

「はい！ではここからはお二人で？」

「あんたは？」

「私はここで門番をやっていないといけませんので」

「わかった。アクト入るぞ？」

「本当に礼儀を言わないんだ・・・」

愛人は言われたとおり中に入る

案内してくれたケルビムの人は、愛人の礼儀の無さにびっくりした扉を開けると、アクトと3人の女性がデカイ円卓の周りに座っていた

愛人のすぐ目の前に空いてる席があった

「来たぞ？アクト？」

「ああ、そこに座って？」

「アラエルは俺の前の円卓に座れ？」

『了解』

愛人は言われたとおり座り、アラエルはゆっくりと円卓の上に着地する

そして肝心の話が始まる

「まずは自己紹介をしよう僕の周りにいる人たちが・・・」

「その必要はねえよ？お前の右にるのがエメラルドのような髪をし

たのがアレクシア・W・スピーナ。その隣のシルバーの髪をしたのが
アイナ・シルバ。アクトの左にいる左にいるピンクがかったブロンド
のような髪をしたのが桜坂・彩音だろ?」

「一・二」

「よくわかったな?」

「まあな、一応この情報網を見た。写真付きでな?」

「なるほど、みんなも見ての通りだ?これが七海・愛人だ。敬語も使わ
ない礼儀知らずだが、悪い奴じゃない。これで街の人に好かれた『何
でも屋の騎士』だ」

「初めして、七海・愛人さん。桜坂・彩音です。私と同じマンホームの
人がここにいるなんて嬉しいです」

「ああ、そういやあんたもマンホーム出身だったな?名前にあんた
も日本人か?」

「はい、私も日本出身なんです。愛人さんも日本人ですか?」

「ああ、日本で警察やってたんだが、こつちの方に転勤したんだ」

「話は聞いてるよ。私はアイナ。どう?ここには慣れた?」

「まあここには慣れたさ?あんたと会う時がこようとはな、エンジエ
ル騎士団のお姉様?」

「やめてよ。それを言うの隊舎にいる女の子たちだよ?私は普通に接
して欲しいのに」

「それは無理があるわ。アイナちゃんは綺麗なもの。みんなの憧れだ
もの無理があるわ。初めまして愛人君?私はアレクシア。よろしく
ね?」

「ああ、あんたみんなの母さんって言われているけど?あんた20代
だろ?なんでお母さん呼ばわりなんだ?」

「私は寮の管理人でもあるの。そこでみんなのご飯作ったり、洗濯も
しているの。その家庭的なところからお母さんって言われているの
?」

「ああ、それで・・・」

「そろそろ本題に入りたいのだけど?いい3人とも?」

「その本題って?どうせアラエルのことだろう?」

「さすがだな鋭い。そう、アラエルのことについて話をしたかったのだ」

「あれはなんなの？愛人くん？」

アラエル

人工知能を持つAIシステム

今はドローンに搭載している

ネットを通じて地図の場所を把握するだけでなく

赤外線レーザーで、中にあるものを確認したりすることも可能

コントローラーは時計、普段はこっちに入っている

アラエルは時計かドローンに入っている

連絡も可能

ドローン自体の名前はスカイバード

ウイングモード

愛人の背中にリュックサックのようにくっ付き、スカイバードの背中からナノマシンの翼が出て来る。この翼が本物のように羽ばたき飛行することが可能

その翼は触れしない。

だから触っても害はない

つまりアラエルは、所有者を飛行させることもできる装備にもなる

人工知能を搭載したドローンだ

「ということだ。」

「なるほど。確か趣味で作ったんだよね？」

「大学の時にな、スカイボードの材料はあるゴミ山からいらぬ器材を使って、作った。人工知能については違うけど」

「ゴミ山から!?君は相変わらずすごいというか、ありえないに等しいんだけど?」

『マスターはあるもんあれば、なんでも使って、変な物も作っちゃう人ですから』

「本当にすごいんですね？確かアクト団長から聞きましたけど？ゴンドラもうまいとか？」

「まあな、おかげでウンディーネどもがうるさいんだよな」

「それで実は頼みがあるんだ？」

「どうせアラエルをお前らの分と他の騎士団にもアラエルを作っけ欲しいってか？」

「やっぱり気づいていたか。空を飛んでいけば、事件に一瞬で駆けつけることができる。これだけすごい戦力は我々としてもぜひ使いたい。忙しい身であることは承知だ。どうか僕たちにも分も作ってくれないか？」

「もちろん。材料は我々で用意するわ。どうか受けてくれないかしら？」

「人の趣味を他人に渡すのは、嫌に思うかもしれないけど受けてくれない？」

「どうですか？愛人さん？」

『マスター？これは・・・』

「ああ、別に作っても構わない。ただ作れるのはスカイバードのウィングモード状態のしか作れない」

「それはどういうことなの？」

「スカイバードというドローンのコントロールは時計でしているんじゃないくて、アラエルという人工知能だけで動いているんだ。」

「では、その時計は？さつきコントローラーと？」

「こいつはアラエルというコントローラーだ。俺の言葉を聞いてこいつが動いているんだ」

「では、その人工知能というAIシステムを作ればいいのでは？」

「こいつはたまたま出来上がった存在だ。もう一つは作れない。それほどこいつのプログラムもむちゃくちゃでうまく作れない。こいつはなぜかオレの言葉を聞いて動いてくれているけど。人工知能ってものすごく危険でもあるんだぜ？趣味で作っけってあれだけ」

人工知能って言うのは、人間の言葉を聞いてくれるようなペットの

ような存在じゃない。もしかしたら人工知能自体が人間に反発する可能性がある。プログラムを間違えれば人間に襲うようになったら、愛人でも止められない

「だから悪いが、時計で動かせる。スカイバードのウイングモードだけにしてくれ?」

「そうか。わかったそれで頼みたい!」

「街の人には手伝いは今はできないって? エンジェル騎士団のネットのお知らせに書いておけよ? しばらく俺は本部でスカイバードの量産型『エンジェルウイング』を作るからさ?」

「わかった。ところで材料は?」

『全部私がオークションで今ネットで買いました。その領収書はこちらです』

スカイバードの背中から、アームのような物が出て来てアームに領収書が握っていた。どうやらネットを使う事も可能らしい。さすがはAIシステム仕事が速い

「どれどれ?・・・やっぱり高いな・・・仕方ないこちらで全部出そう」

「それにしてもすごいわ? アラエルはネットを通じることも可能なのね?」

『ちなみにこんなことも可能です』

突然、アラエルは愛人の頭を赤外線レーザーでスキャンした

「お前なにしているの!」

『マスターの今考えていることを探る事が可能なんです』

「俺そんなエスパーなもん作った覚えはないんだけど!」

『今考えていることは『今日夕飯アテナの好物にしようか』と『アテナ何時に仕事終わるんだろう? いつ迎えに行けばいいんだろう?』や『アテナの明日の弁当の献立なにしようか』です』

「ちよつと!!? 愛人!! 君マジでアテナのお兄ちゃんになつていよ!!? なに? お前が普段アテナのお昼弁当作ってあげてんの!? 主婦お兄ちゃんか君は!!? ていうか迎えに行くってなんだ!? もう同居しているのか!!? アリスちゃんと同じ部屋の寮に住んでいるじゃないの!? ていうか

僕たちが頼んでいることすっぽかしているし!!?今はアテナの方が大事なのか!?!」

「そういえば、アクト団長言っていましたね?愛人くん。オレンジプラネットの水の三大妖精のアテナ・グローリイの兄になったって?本人は認めていないけど」

「うるせえアクト!!俺は今ほそれどころじゃねえんだよ!!!アテナに栄養が偏ったらどうするんだ!!!」

「もう兄になってるわよ?自分で認めているわよ?」

「お前にはわかんねえだろう!!あんなかわいい小動物な妹!!!この前あいつに『お兄ちゃん大好きって言って?』言ったら『お兄ちゃん♡大好き♡!!』って笑顔で言ったんだぞ!!かわいいんだよ畜生!!」

「なにアテナに変な事言わせてんだ君は!!?君は妹が好みなんだな!!!妹フエチだな!!」

「うるせえ!!俺はただアテナのことが好きなだけだ!!」

「なにげにアテナに好意があるのね?愛人くん?」

「しかもこの前、おはようのキスとかもしてくるんだぞ!!!」

「あの子限度っていうの考えてないのか!!?まるで夫婦じゃん!?兄妹じゃないじゃん!!?こんなことアリシアと灯里に言えないぞ!!!」

「は?なんで灯里とアリシア?」

「あ・・・それはなんでもない!」

『実はですねマスター?二人はあなたのこと・・・』

「やめろアラエル!!それはダメ!!!あの子たちがかわいそうだから!!?ていうか知ってたんだ!?!」

『いつも時計にいますので、いつもマスターのやること見えます』

「君はアテナと結婚する気か!!?アテナに好きな人がいるかもしれないだろう!?!」

「は!?!アテナに好きな人!?!認めねえぞ!!!俺は認めない!!!アテナはいつまでも俺の妹だ!!!」

「シスコンになってますよ?愛人君?」

「ふふふ、面白いわね愛人くん!!あはははは!!!」

「愛人くんってボケ役なのね?」

とりあえず、愛人の友人はここにも増えた。それは四大騎士のアクト以外の3人だ

こんな面白い人を初めて見たらしく。彼に興味が出た

とにかく愛人はアクトたちとその騎士団たちの分の『スカイウイング』を作ることとアテナのお世話でこの1ヶ月の仕事のスケジュールが入った

エンジェル騎士団からのお知らせ

七海・愛人はこの1ヶ月は大事な仕事がありますので外には出られないので

住民の手伝いは出られません

申し訳ありませんが手伝いの依頼は1ヶ月後に復帰させてもらいます

申し訳ありませんが、ご了承ください

第十二話 愛人はかけがえのない人

8：15分

エンジェル騎士団本部の朝礼がはじまっていた

アクトはみんなを集め、今日のスケジュールの説明をしている

「もう暑い季節に近づいている。水分補給をしっかりと取る様にしてくれ？」

あと1ヶ月を過ぎれば、暑い夏がやってくる

エンジェル騎士団にとっては仕事をおろそかにしていけない時

理由は観光客が多く来る季節、トラブルが起きやすい季節

海の交通でも多くあるため、夏の彼ら騎士団は忙しい時期なのである

「ということだ。では今日もがんばるように？」

「あのすいません！質問してもよろしいでしょうか？」

「なんだい？」

部下が突然アクトに質問する

「ここに愛人くんがいないのですか？」

「そういえば!？」

「まさかマジでサボったか愛人!？」

そう、彼がここにいないのだ。初めはめんどいとかでサボりたいって言ってたから、本当にサボっていないのかと、騎士団員は騒いだ
だが

「ああ、彼はいいんだ」

「え?どういうことですか?」

なんとアクトは愛人が朝礼には出なくていいと、許しが出ていた

その理由は

「実はみんなも知っていると思うが、愛人が使っている『スカイバード』を我々の分も作ってもらっている」

「え!?!私たちの分の!？」

「我々もあの事件で愛人くんが使ったあの『スカイバード』を提供してくれるのですか?」

「ああ、我々が頼んだんだ。残念ながらドローンの方は無理だが、『スカイウイング』の方を我々の分を提供してくれるそうだな」

「すごく嬉しい話ですけど？我々が扱えるのですか？」

「愛人の言うことだと、訓練もいると言っている。彼の仕事が終わったら、一度我々四大天使騎士がテストする」

「私たちも飛べるのですか？」

「そうだ。我々にとっては最高の戦力になる。だから今日から彼は自分の事務所から、この1ヶ月は出てこない。彼に仕事は回さないでくれ？これを優先してもらっているんだ。かなりの数を彼一人に作ってもらっているからな、彼にしか作れない、苦労をかけてしまうが、彼だけに任せるようにした。みんなもわかってくれ？この1ヶ月間彼の仕事に邪魔をしないでくれ？それでは今日も頑張るように!!」

愛人は『スカイウイング』を騎士団員の全員分を作っていた

なんとか1ヶ月で終わらせるようにしているため

彼のいつもの仕事はやらす、『スカイウイング』の制作を優先にやっている

一応出勤はしている。この1ヶ月間は彼は自分の事務所に出る事は無い

だから住民の手伝いの依頼もすべて断っている

外に出ることはできないという事は、この1ヶ月はアテナ以外のウンディーネには会うことは無いということだ

ガチャガチャガチャガチャ

カタカタカタカタカタカタ

事務所からトンカチの叩く音とネジの回す音とパソコンのキーボードが打つ音が聞こえる

愛人がもうさっそく制作に入っていた。アラエルも手伝ってもらっていて、プログラムを作ってもらっている。スカイボードのアームでキーボードを打っている

しかも驚くことに今日の朝初めているのにも関わらず、もう3機も早くできていた

頼まれた数は100機ほど、それを1ヶ月で終わらすことだった
一体なにをして制作すれば、こんなに早く3機が作れるのかは知ら
ないが、愛人は機械制作も天才並みということだろう

この部屋には彼とアラエルしかいないから、音楽流しながら制作し
ている

材料の方はもう朝に届いていて、今日の6時から制作している。彼
にとって珍しいほどの時間だった。いつもならギリギリで出勤して
いるのに、今日は6時に出勤していたのだ。

それだけ忙しいということだ

「愛人？街の住民には言っておいたぞ？」

「ああ、さっそくもう3機できたぞ？」

「相変わらず君には驚かされるな？早すぎるぞ？」

アクトは机に置いてあった。『スカイウイング』と『スカイウイング
のコントローラー時計』を見ていた。

「へえ？すごいな？軽いし、これなら動きやすそうだ」

リュックサックの少し小さいサイズだった。もうそれを操る時計
も完成していた

だが

「なんでこいつだけ色が白なんだ？」

「それはあんた専用」

「僕専用!？」

なんと、スカイウイングにアクト専用のカラーも作ってあった。

「性能は変わらないが、四大天使騎士専用があったほうが、目印になる
だろ？」

「ありがとう！頼んでもいないのに？」

「いいよ。それにみんな同じ色つても分かりづらい。四大天使騎士
だけ、オリジナルのカラーをかけておく。そうすれば隊長としての目
印になるだろ？」

「そうだな、ありがとうここまでしてくれて？礼は必ずするよ」

「だったら今それ使って、ここで飛べ？できてるか確かめたい」

「え？ここで!？」

「大丈夫だ。飛ぶ衝撃とか無いから」

「わかった。やるよ」

愛人の言われたとおり、背中に装着して、時計を動かして見る。

ボタンを押すと、ホログラムでできたメニュー欄が出て来た

「そこにカタカナで『ウイングモード』ってのがあるだろ？それ押せ？」

「これか？」

押すと、背中からナノマシンの白い翼が生えた

「おお!!」

「あとはメニューで『飛行』って書いてあるから？それで飛ぶぞ？」

「どれどれ？」

ボタンを押すと、その名の通り、地面から浮いた。翼はバサバサと羽ばたく。羽ばたく風の衝撃はなかったから。周りの物は風で飛ばされる事はなかった

「おお!!飛んだ!!」

「ちゃんと上昇しているな？もういいぞ？降りる時は『着陸』ってボタンな？」

言われたとおり、アクトはそのボタンを押すと、ゆっくり降りて行く。地面に足が付くと翼は消える。どうやら着地すると消えるようにできているらしい

「すごいな!!愛人!!これならどこでも飛べそうだ!」

「いちいちコントローラーで操作するのは面倒だな、まあ飛行速度はアラエルと変わらないから大丈夫だからいいんだけど」

「ああ、ありがとう。テストはやらなくても大丈夫そうだな？」

「ああ、ただ他の連中にはちゃんと訓練させておけ？たぶんいきなりは慣れないから？」

「わかった!じゃあこの調子でお願い」

「ああ」

アクトは事務所から出た

引き続き愛人はスカイウイング量産の制作に入る

アクトは白

アレクシアには水色

アイナには緑

彩音にはピンクか赤と考えている

隊長であるあの4人には、隊長だとわかりやすくカラーをつけないと見分けがつかなかった

色をつけるぐらい問題ないが、

正直1ヶ月で100機作れるかわからない。できて50機だ

仮にも一人でやっているからでもある。さすがに他の奴らに教えても

難しく失敗する可能性がある。材料は無駄にしたくなかった

彼は頼まれたとしても、数がそれまでにできるかは心配しながら制作に続いた

もうさすがに灯里たちに会う事は無い

さすがの灯里たちも本部まで用も無いのに来ないだろう

と、思っていたが

「愛人さん居ますか？」

「せっかくだから遊びに来たんだけど？」

「忙しかったですか？」

「ぶいにゆ？」

「にゃあ？」

「まあ？」

「.....」

忙しかった？遊びに来た？

愛人はこの3人に呆れた

あれほどネットにも忙しいというのに、まさかの遊びに来たのだ灯

里と藍華とアリスとアリアとヒメとまあは

邪魔しないで貰いたかったのに

「ここに来ても用は無いはずなのに、なぜここに来たのだろうか

「なにしに来た？忙しいってネットに書いてあったろ？」

「なによ？久しぶりに会いに来たんだからいいじゃない？」

「よくねえよ!!なに軽々しく言っただい!」

「ごめんなさい愛人さん。どうしても藍華ちゃんが愛人さんとどこ行こうって言うから？」

「は!!?灯里あんたも会いに行きたいって言ったじゃない!!?なに私だけのせいになっているのよ!!」

「ていうか、私も含め、愛人さんのところにでっかい久しぶりに会いに行きたいとお二人も進んでここに行きたいとここに来ました」

「お前らよくここに入れたな？」

「アクトさんが入っていいって言いました。『今日ぐらい会いに行っても大丈夫なはず』って言っていました」

「あいつ、団長のくせに俺の今の状況わかってるわけ？」

「ただでさえ、一ヶ月で100機作って欲しいって言うから、邪魔をしないでって言っているのにも関わらず、もうさっそく言った言葉を無視して、灯里たちを連れてきているとは

さすがの愛人も、あのアホ団長に言葉をかける余裕もなかった

さすがにイライラしそうになった

「やっぱり迷惑でしたか？」

「悪かったわね？あんたの都合を考えずに来て？」

「でっかいごめんなさい。わがまま言ってしまった？」

「.....」

イライラしたことが顔に出ているのだろうか

怒っているのがよくわかったのか、空気よんで謝りだした

まあ、さすがに状況をわかってくれたらしい

このまま帰らせるのもかわいそうだと

愛人は

「わかった。喋るだけなら相手にしてやるから、ここで遊んで来な？」

何も無いけどな？」

「ありがとうございます!!」

「さすが愛人!!分かってる!!」

「でっかいありがとうございます!!」

仕方なく、せっかくここに来たのだから、おしゃべりしながら『スカイウイング』を制作していた

「アラエル?少し頼む?こいつらに紅茶を出すから?」

『了解』

せっかく来たのだから、茶ぐらい出そうと厨房の方へ行く

その間の仕事は少しアラエルに頼む

少し机の上を茶が置けるだけのスペースをつくり置いた

「ありがとうございます」

「それにしても?こんななにくさんの機械?なにをするの?」

「ニユース見たろ?輸送船の火災事故?その時俺が使った『アラエル』って言う飛行装備を他の団員にも作っているんだよ?」

「あのさつきからパソコンのキーボードを打っている。ドローンみたいな物をですか?」

『はじめまして?灯里様?藍華様?アリス様?』

「喋った!」

「すごいです!!どうなっているんですか!」

「でっかい不思議です!!」

「そいつはAIシステムという人工知能のアラエルだ。簡単に言うのだな・・・」

灯里たちに説明中

「ということだ?」

「へえ、すごいです!!まるで愛人さんのパートナーです!!」

「恥ずかしいセリフ禁止!!」

「ええー!」

「パートナーって言うよりも『相棒』だよ?アラエルとは?」

『はい、私はマスターの相棒です』

「相棒なのに、あんたに対してマスターって?相棒とは思えないんだけど?」

「こいつが勝手に呼んでいるだよ?こいつ意外に俺の言う事聞かない

「からな？」

「え？・そうなの？」

「ああ、しかも意外とこいついたずら好きなんだよ？」

『はい、例えばこんなふうには？』

またアラエルはキーボードを打ちながら、勝手に愛人の頭を赤外線レーザーをスキャンする

『マスターの頭をスキャンし、今なにを考えているのか探る事ができます』

「ほらな？」

「あんた？なに？・とんでもない物を作っているのよ？あんたエスパーみたいな機能を使って何する気？」

「俺はこんな機能は作った覚えはねえ」

これは勝手にアラエルが入れた機能だから、愛人は知らない。ていうか機械の性能でそんなエスパーみたいな機能は、普通不可能なのだが

アラエルはそれが可能なのだ

『で、今マスターが考えていることは『アテナに触れる虫は一人残らず、根絶やしにしてやる』や『アテナに好きな人など、俺は絶対に認めない』のと『藍華はあとで殺す』だそうですね？』

「ちよつとおかしくない!?なんでアテナさんのことしか考えてないのよ!?あんた？今の仕事は!?今そこ考えるとこそここでしよう!?あんた結局アテナさんのお兄さんになってるじゃない!?ていうか最後!?今私を殺すってどういうことよ!?なんで私だけ扱いが違うわけ!？」

「アテナ先輩・・・しつかりして欲しいです」

「愛人さんが・・・お兄さんか・・・」

愛人の今考えていることはほとんどアテナだった

そして若干、藍華を排除することを密かに計画していた

藍華はツツコミするが

アリスは恥ずかしかった。身内の恥とでも言っただけいいほど聞いて辛かった。

妹になって甘えている上司など、見たくなければ、想像もしたくな

かった

灯里に関しては………愛人に甘えるアテナが羨ましかった

『せっかいですから？灯里様たちの頭の中を探りますか？マスター？』

「おうやれ？せっかくここに来たんだから楽しんでけ？」

「楽しんでるのあんただけだから!?プライベートの侵害にも程があるわよ!?この機械!？」

「や、やめてください愛人さん!!」

「人の頭の中見るだふなんて、でっかいプライベートの侵害です!？」

「やれ!!」

「二「やめてええええええええええ!!」二」
!!」

『了解!』

マスター愛人の容赦なしの命令にアラエルはノリノリに従う

赤外線レーザーで、この部屋から逃げようとする灯里達の頭をスキャンした

『スキャン完了です。まずは藍華様を見ましょう!』

「やめて!!!私が悪かったから言わないで!!」

『藍華様は………』
『アル君大好き♡』
や『アル君と結婚したら何人でも子供を生める♡』
や『私はアルくんの花嫁だもん♡』
と今頭の中で考えています』

「聞くの禁止!!!違うのよ!!私はアルくんに好意があるわけじゃなくて!!!私はその………」

「ツツコミする寸前で恥ずかしくなるなよ?お前が誤摩化そうが、みんな知っているって?お前がアルのことを好きだということくらい、な?。」

「はい、当たり前と言いますか、でっかいわかりやすいです」

「藍華ちゃん。そこまで考えているんだ?やっぱり二人は愛しあっている証拠だよ!」

「はわわわわ!!禁止!!!恥ずかしいセリフ禁止!!!絶対に禁止!!!このこと

をみんなに言うのも禁止!!!」

藍華は恥ずかしさのあまり、顔を手で塞いでしまった

恥ずかしいセリフ禁止なんて言われても。みんな知っていることだから、対して驚きはしなかった。晁もアリシアもアテナもグランマも暁もウツデイーも郵便屋のおじさんも姫屋の従業員全員もはたまに藍華の父であるアーサーにも、そしてアル以外のノームの人間も、知っていることだった

「ちよつと!?!なんでお父さんまで知っているの!?!」

『では、そろそろ次は、アリス様の頭の中を言いましょう』

「やめてください!!でっかいプライバシーの侵害です!!」

アリスは止めようと立ち上がるが、藍華に止められた

「こうなったら後輩ちゃんも道連れよ!!いいわよアラエル言つて」

「藍華先輩!?!腹癒せのつもりですか!?!」

『アリス様が今考えていることは……『アテナ先輩が愛人さんの妹で、でっかい羨ましいです』や『私も愛人さんにでっかい甘えたいです』や『私も愛人さんの妹になりたいです』だそうですね』

「……………」

「……………」

「……………」

「……………は?..」

意味不明だった

どういうこと? 愛人の妹にうなりたいてどういうこと?

なんのメリットがあつてのことだろうか、一体アリスは普段どんなこと考えているのだろうか、もしかしていつもアテナと愛人のやりとりを見て嫉妬したのだろうか

もしくは愛人に好意があるのだろうか

意味が分からないので、アリス以外は沈黙した

「ごめん? どういうこと?..」

「後輩ちゃん? 説明お願い?..」

「えつとですね……………」

「これなんて言えばいいの? なに? お前も妹になりたいの? 二人も妹

「ができるのはいいけど?」

「へ!」

「いいの!? やつぱりあんた変態!!」

「別に妹が一人二人増えたところで問題ねえよ?」

「いいんですか?」

「別にいいよ?」

「お兄さんって呼んでもですか?」

「毎日アテナからお兄ちゃんって言われてんだぞ? 実の兄貴でもないのに? 別にもう言われて慣れたから好きに呼べよ?」

「じゃあ兄さん・・・」

「なんだよアリス?」

「／／／／／／／／」

「たく、恥ずかしくなりやがって? かわいい妹だ」

一度手を止めて、なでなでとアリスの頭を撫でる愛人

「でっかい兄さんのせいです」

「はいはい、兄さんが悪かったよ?」

「おかしくない!? なんで後輩ちゃんまで妹になるの!? なんでこうなるの!? 意味がわからないから!」

「いいなあ・・・アリスちゃん」

なんでこうなったかは知らないが、アリスも愛人の妹になった

灯里が羨ましそうな顔しているが、愛人は気づかず

藍華は呆れたように、顔を片手で押さえ、やれやれと言わんばかり

『それでは最後に灯里様です』

「あわわわ!? やめてください!! 恥ずかしいです!!」

「なにが恥ずかしいよ!? 私たちの方がもの凄く恥ずかしいからね!」

「結構でっかい恥ずかしかったですんよ? 私たちも吐いたんです! 灯里先輩も言ってもらいます!!」

「吐いたって言うか、アラエルが勝手に言ったんだけどね?」

『灯里様の今考えていることは!!!』

「やめてください!!」

『『愛人さんはぜひARIAカンパニーに入ってもらいたい』だそうで

す?。」

「あれ?。」

「え?嘘?。」

「でっかいまともな考えです」

「俺が?。」

なぜか、藍華とアリスの考えていることははプライバシーに関わることなのに

灯里に関してはプライバシーではなく、仕事の考えだった

まともていうか、常識すぎて、アリスの考えを聞くよりも驚いた

「え〜〜!それは困るな〜、そっちに転職してもいいけど。そんなことしたらアクトが泣いちゃうぜ?。」

「い、いえ!!無理しないでいいですよ!!私はその………愛人さんと一緒に仕事ができたらな〜〜〜って思ってた」

愛人は気づいてはいないが

藍華とアリスには、その言葉の意味深さに気づいた

たぶん、遠回しに愛人の事好きと言っているものだろう。

好きな人と仕事ができたらな〜とか、二人だけで一緒に仕事ができるといふ”二人だけの時間を作りたかったのだろう。恋人では一度は思ふことだ

仕事するウチに段々と一緒にやっていけば、パートナーがいつか自分に恋してくれるのではないかと、狙ったのだろう

二人の時間に得になりやすい、ARIAカンパニーならそれも実現できるだろう

だが、そんな深い意味も遠回しというか、意味が深すぎて、たぶん気づかないだろう

というより分かりづらい

そんなこんなで話していると

愛人にまたお客がやってきた

「愛人くん居るかしら?。」

「愛人?久しぶりに遊びに来たぞ?。」

アリシアと晁がやってきた

忙しいって知らせて言っているのにも関わらず
もうあの知らせ、絶対意味がなかっただろう。

なんでこんな忙しい時にこの二人がやってきたのだろう

その理由は

「ごめん、お兄ちゃん、アリシアちゃんと晁ちゃんがどうしても会いた
いって言うから」

どうやらアテナが二人の願いを叶えたくて連れて来てしまった
らしい

「ごめんね？ダメだったよね？忙しいって朝から言っていたのに」

アテナが悪気がある訳じゃないことぐらい愛人はわかっている
だから

「別にいいよ？偉いなアテナは？お前は友達想いで？お兄ちゃん嬉し
いぞ？」

「そう？えへへへへ」

愛人はアテナに怒る事は無い。なぜなら愛人は妹であるアテナを
愛してるのだから

「おいおい、仕事場でも熱いぞ？この兄妹？」

「アテナちゃん、もう違和感無しに妹になっているのね？」

二人はこの愛人とアテナのやりとりあんま見てないのか、二人のや
りとり見て驚く

こんなやりとりは本物の兄妹のやりとりだ

「いつもこんな感じで話しているの？あんた？」

「まあな、アテナは俺と同じ年だけだな、どうしてもこいつが年下に見
えるんだよな？」

「それはアテナ先輩がドジ子だからです」

「ていうか、なんでお前らも俺に会いに来てどうしたんだよ？」

愛人は忙しい身である。その忙しさはこの3人が一番わかっ
てい
るはず

ウンディーネだって、今愛人がやっていることと同じ忙しさ。

それがわかっているはずなのに、なぜ来たのだろうか

ただでさえプリマである3人。それだけでなく、水の三大妖精であ

る3人が仕事もしてないでここに何か用でもあるのだろうか

「久しぶりに会いに来ちゃ・・・ダメ？」

アリシアが可愛げにおねだりするが

「お前あろう者が？エンジェル騎士団のお知らせ見てないわけじゃないだろ？」

愛人はアリシアがそんな単純なことがわかってないはずと、アリシアのおねだりは通用しなかった

「うん見てたけど・・・つまり1ヶ月は外に出られないってことじゃない？」

「そうだけど？」

「もうあの事件以来君は忙しいじゃないか？もうあれから2週間も会ってないから、久々に会いたくなつたんだ」

「お前ら？俺と会わなきゃ気が済まないわけ？」

「私は別に1ヶ月後でも構わないが、アリシアはな・・・」

「こいつがなに？」

「晁ちゃん？それ以上なにか言ったら？わかるわよね？」

「あ、ああ、わかっているとも・・・」

「脅した!?今アリシアさん!?晁さんを脅しましたよね!？」

「お前いつからそんな不吉な事を言うようになったわけ？最近秋乃と会ってから変なんだけど？お前？」

アリシアとは思えないほど、みんなは驚く。あの優しいアリシアが晁を脅したのだ

以前の彼女ならそんなことはしないはず

だが

あのグランマに会って以来、愛人のことに関して、アリシアに言う
と

まるで別人のような性格に変わって行く

もしくは、これが彼女の皆に知る事の無かった。本性なのだろうか
どのみち、彼女は性格や本性もすべてが謎すぎる女性だ

「で？忙しい割には、藍華たちとなにか楽しいことしているじゃない

か？仕事をもうさっそくサボっているじゃないか？」

「こいつらが遊びに来なかつたら、仕事を続けていたさ？なのにこいつら、俺が忙しいというのわかっていているのにも関わらず、遊びに来たんだぞ？ついでにお前らもだ？」

「それについては謝るわ。でも、どうしても久しぶりに会いたくなつたの」

「別に俺と会っても面白いことなんて無いだろ？」

「愛人は理解できなかった。いつもサボりたいって言っているこんなアホと、会ってなんのメリットがあるのだろうか」と

「自分はそこまで魅力になるようなものや、楽しませるようなものも無いというのに」

彼女たちの会いたいというのが理解できない

「そんなことはありませんよ？愛人さんは私たちには見せてくれないような、想像もしていないようなものを見せてくれるんですから？」

「それは・・・なんだ？」

灯里が愛人に突然言ってきた

彼女が言いたいののは、彼がそれだけの雄大な存在だと、なくてならない存在だと言った

どうしてそんなことを言うのだろうか

「愛人さんは奇跡をいつでも起こしてくれるような、私たちに楽しいこといっぱいくれるような、まるで神様のような人なんです！」

「神様って？・・・俺？お前らになにかしたっけ？」

「はい！私たちにいろんな笑顔や楽しい事をくれました！愛人さんは私たちにとつてかけがえのない人です」

「恥ずかしいセリフ禁止!!!」

「ええー!?!」

「.....」

かけがえのない人

そんなことまで言ってくれるのは予想外だと

愛人は思った

只居るだけでも価値があるとでも言いたいのか
それだけ自分が大事な存在なのだろうか、彼は不思議な気持ちに
なった

仕事をするのが嫌だっただけのただのクソ野郎なのに
だだをこねるほどガキみたいな男の

なにがかけがえのないのか理解できなかった

「たく、なんて女だ」

「愛人？」

「かけがえのないとかは関係なしに、俺はお前には勝てないとわかっ
たよ？灯里？」

「へ？」

「俺さ？お前のことが好きだわ？」

「へ!？」

「なに!？」

「え!？兄さん!？」

「愛人くん!？」

「おいおい!？ここでなんてタイミングでプロポーズしているんだ!？愛
人!？」

「お兄ちゃん?」

愛人はなんとみんなが居る前で灯里に告白した

まさかの衝撃に発言に

みんなが驚く。アリシアも含め

なぜこんなタイミングで言ったのだろうか

「あ、愛人さん?好きってどういうことですか?」

「ん?お前みたいな能天気な女は好きだって言ったんだが?」

「どういうことですか?」

「わかりづらいよな?。わかりやすく言うと、お前は優しすぎて、どんな
宝石よりも輝いて美しいほど、俺はお前が好きだよ?」

「へ!？」

「変なことは言ったつもりはないんだけどな?」

「なに!？なんだ灯里に告白しているのよ!？」

「告白？俺は恋愛のつもりで言った覚えは無いぞ？」

「でも!!そうしか聞こえないわよ!!」

「そうか?.....なるほどな、そういうことか」
「は?」

愛人は納得したような顔をした

なぜ納得したようなことを言うと

「俺の言い方は、友人のつもりで言ったはずだが、どうやら違うみたいだ」

「は?何言っているの?」

藍華は理解できなかった

無論他のみんなもだ。彼はなにが言いたくて告白したのか、それすら言った本人でも理解してなかったようだ。灯里に『好きだ』と言っておきながら、なんで言ったのかも理解してなかったようだ

「俺は初恋したのかも?灯里に?」

「「「「え!?!」」」」

みんなが言葉がハモるほど、驚いた

今まで初恋してなかったから、無自覚に言ってしまったのかもしれないが

心の奥では、本気で相手に恋してみたかったのかもしれない

今でもかすかだけであって、本音ではないはず

でも、本気で好きになったとは言えない

まだ自分の心を理解してないからだ。自分の心なのに、自分でも理解してなかった

それだけ初めての想いだっただろうか

彼女の優しさが好きになったのだろうか、

彼にもわからない

「でも、気にするなよ灯里?俺が勝手に口走ったことだから、本気に思わなくていいから?」

「え.....」

これだけ変な期待させといて、自分から言つといて、断るようなマネをしたのだ

なんと自分勝手なのだろうか、だと思いが

こうする以外なかったのだ

まだはつきりしてもない状態で、灯里を欲しがることはできなかった

理由は

彼女はプリマになる夢をぶち壊さないためだ

男なんてできたら、ウンディーネをやめなくてはならない

それだけは避けるために、自分の想いを壊してでも、彼女を欲しがるようなマネはしなかった

「……いんです」

「ん？」

「ずるいんです。愛人さんって？」

「そうか……ずるいか、それはごめんな？」

灯里にとっては嬉しい事なのに

少し怒ってしまった

自分だって愛人のことを思っていたのだ。その相手が自分を好きになってくれたのにも関わらず、冗談で終わらされたのでは、納得いかなかった

ずるいというのは

愛人だけが、自分のことすべてわかっていたこと

自分はまだ愛人のことなにも知らないのに、わかりきったような言い方されて、ほんの少しだけ怒ってしまった

でも、彼は謝った

彼はどこまでわかかって、どこまでがわかかってないのか自分にはわからない

灯里の想いはたぶん、愛人でいっばいなはず、でも、ウンディーネのこともある

自分の想いを愛人が理解できてはいないが

愛人はその自分の想いも潰してでも、自分のためにしていることが灯里にはわかった

だからこそ、余計ずるい

わかっているからこそその発言が、愛人の想いだけでなく、自分の想いも潰しているからだ

これではまるで愛人にふられたような言い方だった

「この詫びは、お前のお願いを聞いて詫びるよ?」

「!」

そういえば、なんでもお願いを聞いてくれるという約束があることを、灯里は忘れていた

この何でも言う事を聞くという約束があれば

少しは彼が、自分の想いに気づいてくれるのではないかと思った

まだ、この想いは終わってない

まだ逆転するチャンスはあるのだ

「じゃあ、私のお願いちやんと聞いてくださいね?」

「ああ、約束する」

彼はその約束はちゃんと果たしてくれる

そこまで根は腐ってはいない

ただ、彼が灯里の気持ちに気づくか、それ次第で、愛人と灯里の関係が変わる

すべてはこれから次第というわけだ

まだふられたわけでは無いのだ

「って私たち、だんまりと聞いていたけど!? あんたどうかしているわよ!?!」

「そうかい? そういうお前はアルに告白すらもされないじゃん? アルの想いはお前に届いてないんじゃない?」

「どういう意味よコラ!!」

「兄さん?」

「なに? アリス?」

「え!?!いつからアリスちゃんは愛人のお兄さんになったんだ!?!」

事情の知らない水の三大妖精はおいといて

アリスが見た事の無い表情で愛人を見た

というより睨んだ

「ねえ？本当にどうしたの？それ言語なの？もしかしてそれでみんなが通じるって思っている？」

もうアリシアはなんか………怒ってるのだろうか
部下を取られそうになって怒ってるのだろうか

なんかそんな感じがした愛人だった

「心配するなアリシア？まさ先はあるから？」

「え？わかるの晁？今アリシアが言った言葉がわかるの？あんなでわかるの!？」

「じよいうじじよいうじじよーじアリシア」

「ねえ？何語？それ何語なの藍華？なにお前もアリシアみたいなわけのわからない言語で話しているの？俺だけなの？俺だけがこの言語が理解できないの？」

アリシアがなにを言っているのかさっぱりだが

晁と藍華はなにを言っているかわかっている

ていうか藍華に関してはもうそのアリシアの言語で話している

結局アリシアがなんで怒ってるかも、なにを言っているのかも分かんない
まあいだった

まあ、なんだかんだで楽しい時間は取れたが

愛人の仕事が進まなかったのは言うまでもない

「これ一ヶ月で終わらない気がしてきた」

第十三話 階級墮天使 ジャステイス・ルシファー

スカイウイングの制作1ヶ月間が過ぎた

もう季節は夏となった

なんとか1ヶ月間でスカイウイング100機を完成することに成功した

あの1ヶ月間でたまに灯里たちがやってきたのだ

それで遊んでいた時間があつたのにも関わらずなんとか完成できたのは奇跡だった。もしかしたら愛人の器用さの早さもあつたのかもしれない

まあなんにしても完成してよかった

これで少しはエンジェル騎士団も更に成果を得ることができただ

愛人の作った『スカイウイング』で

それから1週間が過ぎた

四大天使騎士は、完成した次の日に愛人の指示でやり方を説明してもらった後、訓練を3日ですてスカイウイングの扱いに慣れた

さすがは四大天使

機械の操作もお手の物だということだろう

さすが優れた存在だった

まだ他の部隊はまだ1週間では慣れなかった
だが

徐々にやり方がわかってきたらしく、もう少しで扱えるだけの技術を物にしていた

スカイウイング計画について

ネオ・ヴェネツィアの住民の人にどう説明するのかをアクトは考えていた

こんな兵器を作った以上は他の人やマンホームのお偉いの方にも

ちゃんと報告しなければならぬのだ

破壊兵器ではないと信じてもらうために、エンジェル騎士団専用の補助機としてアクトは全星に報告した。

『我々はエンジェルです。翼を生やすことで、我々は天使のように治安を守るのです』

というイメージを持ってもらうためだったと報告している

ちようどこの公務の名前が『エンジェル騎士団』ちようど天使に翼があるというイメージにぴったり

簡単にはエンジェル騎士団は本物の天使となったということだ

「それでどんな感じだ？アレクシア？」

愛人はガブリエル隊長であるアレクシアに敬語を使わず話していた

内容はガブリエル隊の騎士たちがうまくスカイウイングを扱っているか聞きに来たのだ

訓練室の部屋でビュンビュンと騎士団が飛んでいた

アレクシアは地面で部下達がちゃんと扱いきれているか見ている

「大分慣れてきているわ。後は実践でうまく事故が起きない様にしてもらうだけね？」

「そうか、それはよかった。あんまり難しく作ったつもりは無いから、ちゃんと扱っているか確認したかったんだ」

愛人がこのスカイウイング計画の制作顧問になったことで、彼に責任というのがあるのだ

愛人にしか作れない以上は彼が責任をかけ負うことになってしま

い
彼はもつと仕事が増えてしまったということだ

もう彼を新人とは呼べないし、半人前とも言えない

むしろ四大天使騎士と並べるくらい、遙かに仕事の成果が優れてい
た

「愛人君。あなたもこれから忙しくなるわよ?」

「は?なんで?」

「あなたが私たちの技術でもできない未知のテクノロジーであるスカ
イウイングを作ったことで、マスコミがあなたを探しているわ。マン
ホームの機械科学者たちはあなたをぜひ勧誘したいとも、呼び出しが
前にあつたわ?あなたはもう全星でネットでも評判だわ。もうあな
たを知らない人なんていないわね?」

あの輸送船火災事件を救った愛人の活躍と彼の扱うテクノロジー
が、全星のに知れ渡つたのだ

おかげで彼の作る機械技術を欲しいとも言っている人もいる

もう彼を知らない者はいない。もう有名人になつたようなものだ
「たく、冗談じゃねえ。その勧誘も断るし、マスコミにも変なこと言っ
て、いつものように戻してやる。有名人になんてなりたくないって
の」

「でも、アクト団長はこの機会にエンジェル騎士団の団員募集として
宣伝して欲しいって言っているわよ?」

「ええ〜」

「君の言いたい事はわかるよ?愛人?」

「愛人くんがそういうの嫌なことぐらい」

「私たちは知ってますから?」

後ろから、アクトとアイナと彩音が訓練室にやってきた。

どうやら話は聞いていたらしい

「でも、これもいい機会だと思うんだ。今や君に憧れてエンジェル騎
士団に入りたいと言う。人たちが今たくさんいる。まるで水の三大
妖精に憧れてウンディーネに入りたい女の子たちのようにな?」

「今ネットを見たんだけどさ？ネオ・ヴェネツィアやマンホームやルナワンでも、君のファンクラブができたんだよ？」

「は？ファンクラブ!?冗談だろう?」

「結成させた時期は、愛人さんが制作している6月中旬のころで、結成させた人はオレンジプラネットの水の三大妖精のアテナ・グローリイさんとその弟子のアリス・キャロルちゃんだそうです?」

「え!?あいつらなの!?!」

まさかの結成させたのはあの愛人の妹のブラコン二人だった

自分たちの兄は世界一かつこいいとしても宣伝したいのだろうか

あの二人の考えていることがわからない

「アテナとアリスなに考えているだけか?あいつらネットを作れるだけの頭あるのか?」

『ちなみにそのファンクラブのネットは私が作りました。マスターの妹様も私の使える存在として、協力するのは当たり前かと?』

「ネットはお前かよ?」

『ご安心下さい。会員ナンバーは1はアテナ様、2はアリス様です』

「誰も会員ナンバーは聞いてないから?」

余計話をややこしい方向にさせている

あの二人もなんのメリットがあつてやったのだろうか、謎だ

しかも、入りたければ、愛人の妹であるアテナとアリスで面接して合格しないと入れないらしい

ていうか、なんで面接官がお前ら二人?

なに?面接しないと入れないの?会員ナンバーで入るだけでなんで面接!?!

「まったく、有名人になりたくないっての」

「そう言うと思ったよ?それと愛人?今日の夜?何か予定でもあるか?」

「は?無いけど?なんかやるのか?」

「ああ、実は前々から言いたかったのだが、君はもうそろそろもう新人とは呼ばない。というより、君は我々以上に成果は大きく、仕事もこなしてくれた?」

「だからあなたの『騎士叙任式』を今日の夜やろうと思うの?」

「騎士叙任式?なんだそれ?」

騎士叙任式とは

騎士の一生のうちできわめて重要なできごとで、若者が軍事階級になう新たな仲間の資格を持ち、同時にその責務を負う一人前の戦士となることを意味をした

本当の騎士となるための儀式である

「そろそろ愛人くんには、私たちのような階級や称号を授けようと思うの?」

「愛人さんは私たちにとって、いわばなくてはならない存在。私たちのエースのような存在です。そろそろあなたにも騎士として本格的に入ってもらいたいのです?」

「まだ僕の弟子として変わらないが、君はもう僕たちに近い階級にふさわしいんだ。今日の夜、『エンジェル騎士団聖堂』でまずは騎士叙任式は行い。その後楽しくパーティをするんだ?」

「へえ?俺のね?」

「もういろんな人に招待状を送ったわ。ウンディーネやサラマンダーやノームやシルフまでも、いろんな偉い人たちがやってくるわ?その中で君の友人である水の三大妖精やその弟子たちも呼んでいいの?」

「あいつらも?」

「きつと祝ってくれるわ?街の人たちも?」

「あなたはもう私たちの仲間なのよ?」

「.....」

まだ確かに新人だったから、あんまり意識せずにやっていたため、騎士になったような感覚にはなれなかった

今までやったことが騎士としての仕事だと思っていたからだ

彼は改めて騎士になる儀式をすることで、

やっと本当の騎士になれるのだ

今でもあんまり実感はしてなかったが

夜19:00

エンジェル騎士団聖堂で多くの人々が集っていた
その中には

「うわ！愛人さんの騎士叙任式でこんなに集るなんてすごいです!!」

「あいつにこんなにも多くの友達がいたなんてね？」

灯里と藍華も来ていた

それだけでなく

「あれ？藍華ちゃん？あれ？杏ちゃんたちじゃない？」

「ん？本当だ!!なんであゆみやアトラまで？なんでここに？愛人の知り合いなのかな？」

杏とあゆみとアトラとは

トラゲット・ウンディーネと言う

少しデカイゴンドラで二人で操縦する水先案内人である

アトラと杏はオレンジプラネットの社員

あゆみは姫屋である

灯里たちとは友人である。

灯里たちが知っている範囲ではあの3人と愛人が知り合いとは聞いてない

ここにいるということは、愛人に関わるような関係なのだろうか
それについて聞きたいため、3人に近づいてみる

「アトラちゃん？杏ちゃん？あゆみちゃん？」

「あれ？灯里さん？」

「どうしてここに？」

「藍華お嬢もなんで!？」

「私も愛人と知り合いだから」

「どうやら愛人とは知っているようだ」

「あんたちは？」

「ウチたちも愛人さんの知り合いなんです」

「前にゴンドラを直してくれたんです！」

「あなたたちも愛人さんの知り合いだったなんて奇遇だね？」

「愛人さんはなんだかんだで友人が多いですから」

彼はトラゲットの三人だけでなく、いろんな友人がいる。彼がめ

ちやくちやフレンドリーだからだろう

「ちなみに灯里は今、愛人に恋しているんだけどね？」

「藍華ちゃん!!」

藍華がとてつもないことを爆発発言した

だが

「え!?!それ本当なの!？」

「うん、え?なに?あんたちも愛人を狙っているの?」

「藍華お嬢!!それ以上は禁止です!!」

「え?どうしたの?」

突然あゆみが愛人の恋愛に関して言わないように口を止めようとした

「藍華お嬢?あんまり愛人さんの恋愛には言わないでくださいね?得に街で?」

「え?なんで?」

「理由はあれです!」

「あれ?」

あつみが指であるところを刺した。

それはある集団だった

そこにはアリスとアテナがいた

「あれ？後輩ちゃんにアテナさん？なんか変な服着てない？そこにいる集団の人も」

「あれ？背中になんか書いてない？」

アリスたちが何か羽織のような物を着て、背中に『愛人LOVE』と書いてあった

「知らないんですか？『愛人ファンクラブ』ですよ？」

「ああ……聞いたわそれ？確かあいつにファンクラブができたって？」

「あの人達の前では愛人さんの恋愛は言わないでくださいね？それを言ったら誰であろうとアテナさんに一刀両断されるか、もしくはアリスちゃんの毒針で刺されますから？」

「え？なに？アテナさん？まさかの『ジョージ・スマイルズ』持っているの!?!てか後輩ちゃん!?!完璧にスズメバチになっているわよ!?!」

「とにかく、あのファンたちに愛人さんの恋愛は言っちゃだめよ？みんな消されちゃうから？」

「アトラさん？不吉なことを言わないでください？」

「得に灯里さん？あなたは得に気をつけてくださいね？ファンクラブに目付けられますから？」

「はひ!?!どうしてですか杏ちゃん!?!私にかしましたか!?!」

杏が言葉に驚いた。なぜかファンクラブたちには灯里を敵視しているようだ

果たして理由は

「アリスちゃんから聞いたんだけどさ？愛人さんのこと好きって本当？」

「ふえ!?!ああ……それは……」

「もし本当だとしても、ファンクラブには近づかないほうがいいですよ。」

「ど、どうしてですか？」

「ファンクラブの掟つてのがあるんですけど？もし灯里ちゃんかもしれないのはアリスさんがもしその二人のどちらかが、愛人さんと二人だけで一緒にいた場合は速やかに二人を排除しろって言う掟があるのよ

？」

「なにそれ!?完璧殺すつてことじゃない!?後輩ちゃんの後輩ちゃんじゃないんだけど!?完璧ブラコン化しているんだけど!?ていうかオレンジプラネットのセイレーンと天才少女がそんな悪いことしていいと思ってるの!?!」

「実はそれを認めているうえに、その結成を許可した会社があるんですよ?。」

「え!?それどこ?まさか……」

「うん、私と杏が居る『オレンジ・プラネット』なのよ」

「なんで!?あの私たちのライバル会社がなに愛人のファンクラブに協力してんの!?!」

「うちの会社のアレサ・カニンガムって言う人がいるんだけど、その人ウンディーネの管理部長なんだけど、実は『愛人のファンクラブ』メンバーだからなのよ?。」

「なんでそんなお偉い人までファンクラブまで入ってるわけ!?もうオレンジプラネットのイメージがガタ落ちなんだけど!?!」

『『愛人のファンクラブ』にチーム名があるのよ?それが『愛人親衛隊』とかじゃなくて、ブラットオレンジプラネットって言う名前らしいのよ?。」

「なんで血!?!まるで武神ガイムじゃない!?怖いんだけど!?!まるでほぼオレンジプラネットの従業員全員が愛人のファンクラブメンバーみたいじゃない!?!」

「実はそうなのよ……」

「……………」

もう言葉も出ない

それほど呆れてしまった

まさかオレンジプラネットの会社の従業員+ウンディーネのみんなが愛人のファンクラブメンバーとは、驚く暇もないくらい言葉がでなかった

藍華たちは知らないが、こう見えて愛人はオレンジ・プラネットの人たちには大人気で、従業員やウンディーネの人には『オレンジプラ

ネットのお兄ちゃん』と呼んでいる。その始まりはオレンジプラネットのゴンドラを直す依頼が前にあったのだ。それ以来、あの会社のみんなはまるで自分たちの従業員みたいに、仲間だと思って接していたのだ。ちなみに男には『兄貴』と呼ばれ、女には『お兄さんかお兄ちゃんか兄にいーと呼ばれて居る

ゴンドラの練習は教えてくれるし、ゴンドラも直してくれるなど、世話好きにもいいほど、彼は優しかった。

だからこの会社の人たちはもう愛人は兄みみたいな存在でできたら、この会社の従業員になってもらいたいほどの、彼と言う人材が欲しかったのだ

「あ？灯里先輩！」

「あ、アリスちゃん」

「あれ？杏ちゃんもアトラちゃんも？」

「こんばんはアテナさん？」

どうやら二人は灯里たちに気づいた

「皆さんも兄さんの騎士叙任式に？」

「うんそうだよ。愛人さんが遂に天使の階級を貰える儀式で本物の騎士になる姿が見れるんだよ？それは見に来るよ？」

「まあ、そうですね、私たちも必ず兄さんの晴れ姿必ず見に来ます！」

「あれ？アリスさんと晁さんは？」

「二人はもう少しで来ると思うんですけど？」

「お待ちせ！」

「まだやってないよな？」

制服姿でアリスアと晁もやってきた

「あ、アリスアさん！」

「ごめんね？ちよつと仕事で忙しくてね？」

「早めに切り上げて来てな？まだやってないよな？」

「ええ、まだやってません」

「それはよかった。ていうかアテナ？なにその服？」

「お兄ちゃんのファンクラブだもん。これは私たち会社の制服だよ？」

「それが! 『愛人LOVE』って書いてある制服がお前ら会社の!? そんなはずじゃないはずだけど!」

「なに言っているんですか? 私たち会社の制服ですよ? ほら? アトラさんも杏さんも着ているじゃないですか?」

「あれ!? いつの間に!」

「なんで私たちいつの間に羽織着ているんですか!」

アトラも杏もウンディーネの制服着ていたはずが、いつの間にか制服の上に背中に『愛人LOVE』という羽織を着ていた

「なんで!」

「何言っているんですか二人とも? 二人だって団員ナンバーの上位の人じゃないですか?」

「ぎく!!」

「アトラちゃん? 杏ちゃん?」

「私たちに教えといて、あんたら二人も『愛人のファンクラブ』メンバーだったのね?」

「違うのよあゆみ!! これはね? 兄さま……じゃなくて、私たちはメンバーじゃなくてね? あのね?」

「今兄さまって言った? 今兄さまって言おうとしたよね? あんたもなんだかんだでそのメンバーじゃん!」

「違うんですあゆみさん! 私たちは……兄にいに近づく女を駆除するという大事な仕事がありましたね? そんな不吉なメンバーでは……」

「いや!? どう聞いても不吉なメンバーとかの前に、不吉なことをしようとしているからね!? 本音出ているし!? あんたらもやつぱりそのメンバーじゃない!? あんたら『オレンジプラネット』のウンディーネたちおかしくない!」

もう私たちの知っているオレンジプラネットは遠くのかなたに消えていた

今私たちが目の前にいる会社のウンディーネたちは、ただの暗殺者かモヒカンか世紀末覇者たちだった

「おう? もみ子? お前らも居たのか?」

「久しぶりなのだ!!」

「すごい賑やかですネ?」

「暁さん!」

「ウツデイーさん!」

「アルくん!」

サラマンダーの暁やシルフのウツデイーやノームのアルもやってきた

「皆さんもやってきたんですネ?」

「おうよ! 愛人が本格的に騎士になるのだから」

「見ないわけにはいかないのだ!」

「愛人さんにこんな多くの友人が居てすごいです!」

暁もアルもウツデイーも友人である愛人の騎士になる晴れ舞台を見ずにはいられなかった

「おや? 嬢ちゃんじゃないかい?」

「郵便屋のおじさん!!」

なんと郵便屋のおじさんも愛人の騎士叙任式に来てくれたのだ

「おじさんも?」

「ああ、愛人の晴れ舞台を見ないとね?」

「おや? みんな集まっているね?」

「!!」「グランマ!!」「!!」

なんとグランマも来てくれた

「グランマも愛人くんの?」

「ええ、アクトくんから招待状が送られたわ、みんな彼のことが好きなのね? こんなに早く? まだ始まってもないのに?」

「え?! まあ・・・それは・・・」

グランマの言葉にみんな外方向く

別に友人を昇格祝いするのはいいことなのだから、恥ずかしがるよ
うなものでも無いような気がするが、みんな恥ずかしくて外方向く

『大変長らく、お待たせしました! これより騎士叙任式を始めたいと
思います!』

「おっ・そろそろ始まるわよ?」

そろそろ騎士叙任式が開始されようとしていた。

聖堂の周りには騎士団が居た

腰に剣が付いている

エンジェル騎士団はその名の通り、騎士な為、腰に剣を装着する

この剣の刀身は刃でなく、刃の色をした木刀でできているため、人を切るような害はない

普段は持ち歩いてはいないが、基本は腰に剣をつけている

なにか事件があったときのためだ

『皆さん、我々の騎士叙任式に集まりありがとうございます！』

アクトが司会で始める

アクトはいつもの青い制服ではなく、白い騎士制服で参加していた

アクトの右隣で水色の騎士制服を着ているのがアレクシア

その隣の緑色の騎士制服を着ているのがアイナ

そしてアクトの左にいる赤色の騎士制服は彩音

四大天使騎士が勢ぞろいで参加していたのだ

「あれが四大天使騎士か、見るのは始めてだな？」

「暁さん。見たことないのでですか？」

「四大天使騎士が4人揃うのは、この式以外絶対外には無いのさ？」

「でも、なんでアクトさん？騎士制服が白なの？普段の青い騎士制服は？」

「あれが『マスターミカエル』というアクトの本当の制服なのさ？」

「晃さん？知っているのですか？」

「あたしとあいつは長い付き合いでな、もうあの姿を何回か見ている」

「そういえば、晃さんとアクトさんってどんな関係なんですか？」

「え？まあ………ちよつとした知り合いみたいなものさ？」

「へえ〜？」

「な、なんだよ藍華？」

「晃さんとアクトさんって？なんか？深い関係な感じがしますね？」

「べ、別に深い関係でも無えよ？」

『そして我々の新しい新入騎士である七海・愛人は我々を越える程の成果を得ました！』

アクトはそのまま愛人のことをみんなに話す

「……………」

この聖堂に居る人たちを見て、灯里はあることに気づいた
愛人がネオ・ヴェネツィアというこの街をもっと素敵なものになっ
たということに

彼が今までの常識を覆すかのように彼が一層にして変えた

彼は私たちができないようなものをもっと素晴らしい綺麗なもの
した

そしてそんないろんな可能性を持つ彼の周りは多くの友人がいた
みんな、彼のが好きだと、グランマに言われたが
まったくその通りだと灯里は思った

彼はネオ・ヴェネツィアにとって大切な騎士なんだと

改めて灯里は彼を評価した

『それでは!!七海・愛人!!前へ!!』

『了解!!』

アクトの掛け声には彼は返事した

聖堂の大きな入り口から、扉を開けて出て来た

「「「おお!!」」」

聖堂に居る人たちが一斉に驚いた顔をした

灯里たちも見て驚いた

なぜなら

本当に騎士のような、かっこいい姿をしていた

あれだけバカやって、ダルそうな顔していたあいつが

こんな綺麗な顔して、誰よりも華やかな顔をしていた

男としての魅力を全開引き出している

わかりやすく言うなら、ホストのナンバーでも軽々と越えるぐら

い

イケメンだった

しかも彼の騎士制服は黒だった

「あれ？なんで黒の制服？」

「もしかして？あいつ上位クラスか!？」

「なんですか晃さん？上位クラスって？」

「私たちみたいにプリマという階級があるように、エンジェル騎士団にも階級があるんだ？下級天使、中級天使、上級天使のクラスがあるんだ？上級クラスという四大天使騎士の階級。セラフイムという階級だけは普通の青い制服は着ない。自分専用のカラーの制服を着るんだ。理由は隊長クラスだからだ？」

「二「隊長クラス!？」」

「え!?愛人が部隊の隊長!?!新人になったばかりなのにもう上級クラス!?!」

まだ騎士団に入ってから3ヶ月しか経っていないのに、もう隊長クラス

しかもセラフイムという最高上級クラス

つまりアクトたちみたいに部隊を動かす隊長として昇格されたということだ

愛人は四大天使騎士目の前に跪く

「七海・愛人!!これより貴殿の騎士叙任式を始める!!貴殿は新人騎士課程を修了し、正式に騎士として認められたこと!!我ら四大天使騎士が継げる!!アレクシア?」

「はいー」

アレクシアはアクトが手に持っていた剣を取り、その剣を抜いて、愛人の肩の上に刃を置く

アレクシアは愛人に騎士の近いの言葉を交わす

「七海・愛人!!」

汝は剣を所持し、民の天使騎士として守ることを誓うか!!」

「誓います!!」

「汝が天使として、この水の都を最悪から守らんが為に振るうことを、ここに誓うか!!」

「誓います!!」

「さすれば、我らが四大天使騎士の名の下に汝を騎士として認める!!」

アレクシアは愛人の肩から剣を離れ、剣を鞘にしまい
両手で愛人の前に剣を差し出す

「七海・愛人！」

この剣を、あなたに授けます。どうかあなたが立派な天使騎士として勤めることを望みます！」

剣は黒だった。この剣も愛人専用の剣だ

「心配しなくても？俺七海・愛人は、これからもこの街を守りますよ？
ガブリエル様？」

「ふん、まったくもう」

お互い微笑み、愛人は剣を受け取る

「四大天使騎士のご期待のままに？」

愛人は剣を受け取ったあと、立ち上がり

アレクシアは下がり、アクトが愛人に前が出る

まだ愛人の授けるものがある

「七海・愛人!!君の階級は……………」

果たして彼の階級は

「階級は墮天使（エンジェルズ・ダスト）!!我々四大天使騎士というセラフィムの階級に並ぶ、我々に従うことのない。墮天使騎士よ!!!騎士団のルールではなく、己のルールで貫く天使!!

汝の称号を『ジャステイス・ルシファー（正義の墮天使）』と名付け

る!!!

己の正義で民を守ってくれ!!」

「……………」

なんと階級は、階級の中には存在しないセラフィムと同等の階級
墮天使という、新たな階級が誕生した

しかも、騎士団のルールに縛られる事の無い。自由に活動している
という

特別階級だった

つまり場合によつては墮天使になって、民を守れということだ

「ふん、了解だ!!アクト団長!!」

愛人は受け取った剣を抜き、刃を天に掲げる

そして継げる

「このジャステイス・ルシファー!!己の正義でこの水の都を守る事を
誓う!!」

それだけ告げた

「ふん、さすが愛人だ!これにて貴殿の騎士叙任式を終了する!!」

騎士叙任式が終えると

愛人は住民の人に剣を掲げるところを見せると

「「うおおおおおおおおお!!!」」

住民の人たちから歓声が上がリ、みんな彼の昇格祝いを祝ってくれ
た

儀式が終わったあと、おいしそうなごちそうも出て来て、楽しい音楽が流れて、踊ってるひともある。もうパーティーになった

愛人は四大天使騎士たちと楽しくごちそうにありつけていた

「悪い、ちよつと灯里たちのところに行くわ?」

「ああ、なんだ? 灯里とおどりに行くのか?」

「まあな、じゃあ行くな? お前も晁と踊って来いよ?」

「ふん、そのつもりだよ?」

二人は灯里たちのところに行く。もう灯里たちみんなで賑やかに楽しんでいた

「よう!」

「愛人さん!」

「来てくれてサンキューな?」

「はい! とてもかつこよかったです!!」

「まあ、あんたにしては様になってたわね?」

「兄さん、でつかいかつこよかったです!!」

灯里や藍華やアリスもすぐ祝ってくれた

というか祝わないはずがない。大切な友人なのだから

「いやあく、すごかったよ? 愛人さん?」

「ん? 杏! あゆみ! アトラ!! お前らも来てくれたのか?」

「はい、兄さまの晴れ姿を見ないわけにはいきませんよ!」

「とてもかつこよかったです。兄にいい!」

「ああ、ありがとうな? でも相変わらず俺のことは『兄さま』か『兄にいい』かよ?」

杏とアトラが妹になったことは本人も知っているが、あんま人前で言ってもらいたくなかった

でも、そんなこと言っても、もうみんなにオレンジプラネットのウンディーネ全員が愛人の妹になったことぐらい、みんな知っている
「愛人~~~~~」

「ん？おわ！」

突然、誰か愛人の足に子供が引っついて来た

その子供は

「久しぶり愛人？」

「アヒト!?なんでお前がここに!?!」

「やあ？愛人くん？あれアリシアに灯里ちゃんにグランマ!？」

「アンナ先輩!？」

「愛人？灯里ちゃんまで？」

「アルベルト!？」

アヒトという子供と、その両親であるアルベルトとアンナが出て来た

アンナはARRIAカンパニーのアリシアの先輩で、グランマの元弟子だった

アルベルトとは、ネオ・ブラーノ島の漁師である。

実は愛人の知り合いというのはそれが理由、実は以前ネオ・ブラーノ島でアルベルトの船を直した。その際にお礼をして、愛人を家に招いたことがある

それ以来知り合いになったのだ

「わざわざ遠くから来たのか？」

「ええ、愛人くんの正式に騎士になるって聞いて、久しぶりにここに来たのさ？」

「まったく、アヒト？久しぶりだな？元気にしていたか？」

「うん!!また愛人と遊びたい!!」

「はは!!たく仕様がなない奴だ!!」

アヒトと遊ぼうとしたが、アルベルトが

「アヒト？今から愛人は灯里ちゃんと踊るからだめだぞ？」

「ふえ!？」

「悪いなアヒト？これ終わったらな？」

「ちえー!あとでね？」

「ああ」

愛人はアヒトを降ろして、灯里の前に立ち、跪く

「こうなったら、晃さん………あれ?」

晃もいつの間にかいなくなった。聖堂の中央を見ていると

「そう、その調子、そのまま手を離さないで?」

「ああ、お前も私を離さないでくれよ?」

アクトと楽しく踊っていた

「なに!? 私だけ!? 私だけであの人たちを止めろと!」

「ほう、愛人はもみ子がいいのか、これでアリシアさんを選んだら、火の海に沈めてやろうかと思った」

「暁? そんなこと言っているなら、アリシアさんと踊ってくればいいのか?」

「べ、別にそんなこと、俺はその踊り方も知らないし………」

「いやあ、愛人くんの周りにはぎやかだね?」

暁とウツデイーと郵便屋のおじさんはワインを飲みながら、愛人たちの踊りを見ていた

「そう、いいよ? その調子な?」

「はい、こうですか?」

「そう、いいぞ? なかなかうまくなってきたじゃない?」

「愛人さんがうまく教えてくれるからですよ?」

「たく、褒めるのが本当うまいぜ?」

「そうですか? ふふふ、楽しいです愛人さん!! いつまでも愛人さんと踊っていたいです!」

「ああ、俺もだ!」

愛人と灯里は楽しく踊っていた

明日から彼は階級墮天使として働くことになる

この彼女の笑顔を守るためにも

彼は明日から騎士として働く

第十四話 ブラットオレンジ・プラネット

愛人が正式に騎士になったことで、彼の仕事の忙しきは倍増していた

- 1・市民の手伝いの依頼
- 2・スカイウイングの調整&修理
- 3・パトロール
- 4・書類等の関係

この4つの仕事を愛人一人でやっている。もう隊長クラスなので、自分の部隊を作る事もできるのだが、本人は『一人の方が気軽にやれるから、いらねえよ?』と、アクトに部隊は作らないと報告している。墮天使という階級は確かに四大天使騎士の言う事聞かなくてもいい、都合のいい階級。仕事をやってくれるのであれば、問題を起こさないでくれれば、ルール関係なしに、活動できる自由すぎる階級なのである

公務員としては、そんな階級は許されないが

愛人は己の正しきで、いろんな事件を解決した男。仕事をサボるようなことも一度や二度はあるが、それでも誰かのためになにかしうとする強い想いがあるのは確かだと

アクトは、特別階級。まだ誰もなっていない

初階級・墮天使（エンジェルダスト）という階級を彼に授けたのだ

愛人が正式に騎士になったあとの彼の活動はアクトたち以上に働いている

彼にこんななんでもやりたい放題な階級を渡しても、大丈夫だと言う信用をしているからだ

彼はあれ以来、真面目に働いている

初めここに来た時は、めちゃくちゃだったのに、最近になって、朝礼にも出ないで、誰よりも早く仕事をしているのだ

彼は、変わったような感覚だった

「で？そんなあんたは？今日はなんの仕事をしているの？」

今はため息橋にて藍華と一緒だった。今日の朝偶然出会い。せつかくだからと最近の仕事について話していた

「今日か？実は三日前からオレンジプラネットのウンディーネ管理部長代理だ？」

「管理部長代理!?あんたがどうして!?アレサさんはどうしたの!」

「いや、それがさ？アレサの奴。大事な会議で今日仕事に出れないから、代わりに俺がウンディーネたちをまとめて欲しいだって？だから今日だけ俺がオレンジプラネットの管理部長代理として今日は働くんだ」

アレサ・カニンガム

現オレンジプラネットのウンディーネ管理部長

オレンジプラネット創業時に活躍した元トッププリマの一人

引退後はウンディーネの管理部長になった

愛人と出会ったのはオレンジプラネットのゴンドラ修理の手伝いをした時、よく楽しくおしゃべりをした仲である

アレサは愛人のことを弟のように思っている

「それで？あんたがアテナさんや後輩ちゃんたちまで、あんたが指示しているの？」

「オレンジプラネットの仕事内容は対して、他の会社のウンディーネと変わらないが、なるべく固いルールで案内するよりも、お客を楽しめるような、自由な案内をさせてやれと指示した」

「なにそれ？それどういうこと？」

「あの会社、ルールが厳しすぎんだよ？あんな固いルールでやっていたら、案内もろくにできねえし、ルールに縛られて、やるなんてしんどいと思わねえ？」

「それなりのルールがあつて当たり前よ？まさか…….オレンジプラネットのウンディーネたちに変な指示してないわよね？」

愛人は一歩間違えなくても、少しへたなことするだけで大惨事になるくらいのトラブルを起こすこともできる

藍華は心配だった。アリスたちあの会社のウンディーネたちが変

な指示で動いてないかと

それだけでなく、あの会社のウンディーネたちはほぼ『愛人のファン』憧れの愛人に変な指示されたなんてでもしたら、オレンジプラネットのウンディーネたちはそれを実行するしかありえないからだ
「後輩ちゃんたち、オレンジプラネットのウンディーネたちに変な指示したら、みんなあんたの言う事聞いちゃうから、気をつけてるわよね？」

「ああ……それなんだが……」

ブン！ブン！ブーン!!

と、まるでバイクのエンジン音のような、騒音だった音が鳴った方向は橋の下だった。

一体なにがあったらそんな音が鳴るんだろうと藍華は覗く
そこにいたのは

「ヒヤッハー!!!!お兄ちゃんにしているのさ!!!!早くお客様を案内しに行こうぜ!!」

まるで暴走族のような格好して、更に肌には入れ墨が描かれていて、

なおかつ顔は、まるでどこかの世紀末覇者の部下の野盗集団の顔のような下ベラ出して狂ったような怖い笑みでいた

ウンディーネの背中に傍が掲げられて、そこに『プラットオレンジ・プラネット』と書いてあった……

オレンジプラネットのウンディーネたちがいた
中にはアトラと杏が居た

ちなみにバイク音は、みんなの携帯の音楽で鳴らしていた

「こんな……感じになっちゃったんだ」

「へえ……、そうなんだ……」

って

「なんでこうなるのよ!!!」

藍華のツツコミがその場にいたハトたちが藍華のツツコミにびつくりし、一斉に逃げた

それだけびつくりしたのだ

「なにあれ!?どこの野盗集団よ!?どう見ても水先案内人じゃないわよ!?地獄先案内人よ!!!あんなのウンディーネじゃない!!もはや冥界の死神よ!!!ていうかいつから『オレンジプラネット』の会社が『ブラットオレンジプラネット』に変わってるのよ!?あんななんてマネしたのよ!!!」

「確かに自由にお客様を楽しく案内させてやれとは言ったけど、まさかあんな感じになるだなんて俺も思わなくてさ?」

「自由のレベルがおかしくない!?自由すぎるにも程があるわよ!!!あんな

「なのお客様が喜ぶわけないでしょ!!」

「だと思っただろう?ならコレ見てみろよ?」

愛人から手紙のようなものが7枚渡された

「なによこれ?」

「お客様の感想と礼状が書かれた手紙だ。昨日オレンジプラネットの会社に届いたんだ」

「嘘!?礼状の手紙!?あんな怖い格好しているのにお客来たの!?なんて書いてあるの!?!」

藍華は手紙を開けてその場で読んでみる

書いてあった内容は

『ヒヤッハー!!ブラットオレンジプラネット!!最高だぜ!!』(子供からの感想)

『ネオ・ヴェネツィアも世紀末を迎えたぜ!!』(とあるおばあさんの感想)

『この世は戦国時代だぜ!!ヒヤッハー!!』(夫婦の感想)

『武神アリスに勝てる奴なんているわけねえだろ!!』(とある親子の感想)

『もうネオ・ヴェネツィアの神は『冥界の神』アテナ様で決まりだ!!』

『我がブラットオレンジ・プラネットに栄光あれ!!』

『ジーク!!ブラットオレンジ・プラネット!!』

感想が明らかにおかしい。礼状が届いていた

「ちよつと!!?なんでお客さままでこんなに狂っているの!?!お客様楽しみ方おかしいでしょう!?!?ていうか武神アリスってなに!?!後輩ちゃんいつから天下人になったのよ!?!冥界の神アテナってなに!?!ギリシャ神話じゃあ、アテナは知恵の女神であって、冥界の神じゃないんだけど!?!それハーデスじゃない!?!もう私の知っている『オレンジプラネット』と後輩ちゃんとはアテナさんはいないって言うの!?!」

もうあの大企業『オレンジプラネット』はとつくの昔に消えていた
今は、愛人に天下を捧げる野盗集団『ブラット・オレンジプラネット』として

他のウンディーネを潰していた

「つて!?元はと言えば!!あんたのせいよ!!!」

「俺!?!」

愛人がオレンジプラネットの従業員たちの兄になんかならなければ、もしくは愛人に近づく女がこの世にいなければ。オレンジプラネットが血に染まる事なんてなかっただろうに

愛人の今までの世話好きが、不幸をもたらしてしまったわけだ

「俺なんかした!?!なにもしてないだろ!?!俺がこんな風にしたみたいなの言い方するな!?!」

「あんたさつき!!『自由にお客様を案内しろ』つて言ったんでしょ!?!そしたらこの人たちだつて好き勝手にやるに決まっているじゃない!?!それがこのざまなのよ!?!」

藍華は愛人のクビを掴む。

だが

それは彼女たちの前では絶対やつてはいけない行動だった

なぜなら

『ブラッドオレンジアームズ! 邪ノ道・オンステージ!』

「え!?!なにこの音楽?」

どこからか機械音声になった。未だにその音声がどこにきたのか、わからない

「そこまです! 藍華先輩!」

「え?」

だが、その機械音声を鳴らした犯人は、藍華の頭の後ろに、赤いオレンジの断面図のような柄をした刀が藍華の頭に向けられていた
後ろにいたのは

「それ以上、兄さんに手を出せば、『でっかいブラットオレンジチャー』を食らう事になります!!」

「まあ!?!」

「なにしてんのよあんた!?!?」

赤いミカンの絵柄をしらサムライの鎧を着たアリスとまあがいた

更に

「そこまでよ藍華ちゃん！」

「え？」

更にアリスの隣に、でっかい釜を持ち、くり追いコートを着た

「お兄ちゃんのクビに力を入れたら、藍華ちゃんを冥界に連れて行くよ？」

アテナが居た

「あなたもなにしているんですか!!？」

忘れてはいないが、まさかのこのブラコン軍団の首謀者二人がここにいたのだ

おっかない格好で

「なにをしているのよ!!後輩ちゃん!!」

「藍華先輩！私たちは兄さんのためにでっかい天下を取るのです!!」
「取ってどうするのよ!!」

「兄さんに群がる女を消すのです!!得に『ARIAカンパニー』を!!!」

「なんでアリシアさんの会社!!？」

「藍華先輩は知らないことかもしれませんが、アリシアさんはここ最近兄さんとでっかいデートしているんですよ？」

「なに!!？」

藍華もそこだけは聞き捨てならずで、愛人をガン見する

「ああ、ただ『夕食を食べに行かないか?』って誘われたただけだぞ?デートじゃないぞ?」

「でも、兄さん?そのお夕食の人数はアリシアさんと兄さんと二人きりですよ?」

「まあな、その誘いは夜ですごく遅いから、俺とアリシアじゃなきや行けない時間帯だからな、灯里たちも連れて行ける時間帯じゃない、だから俺とアリシアだけってのはそうだぞ?」

「あんた!!?よくも私たちのアリシアさんを!!!」

「だから俺が誘ってるんじゃないかって、あいつが俺に誘っているだけだつて?」

「私たちの憧れのアリシアさんとデートしてもらえるなんて、あんた

「どんだけアリシアさんに好かれているのよ!!!」

「知るかよ?俺がなにをしたって言うんだよ?」

愛人に罪はなかった。

だって本当にアリシアから、夕食に誘いに来るのだ。愛人はこれがデートだと言う事は気づいてはいないし、アリシアから好意があるってことも気づいてない

アリシアがほぼ毎日、愛人に夕食を誘っているのは事実だった

一体どこでそんな情報が回っているかは知らないが

すごく厄介な話になったことは間違えない

「お兄ちゃんそれ本当なの?」

アテナがどす黒いオーラで、愛人を見る

部下たちはそのどす黒いオーラに気づき、少し距離を置く

「ああ、本当だけど?」

それを聞いた瞬間、アテナは

「バカバカバカバカバカ!!!」

アテナは涙目で、釜を捨て、両腕で愛人の胸にポカポカと殴る。まるで子供が大人に向かって駄々をこねているようなほのぼのとしたような。

「お兄ちゃんには私たちがいるでしょ!?なんでアリシアちゃんとデートしているの!?!」

「だからデートじゃねえよ?ていうか痛いからやめろ?お前の殴る威力ポカポカじゃなくて、もうドスンドスンってゴリラが殴る見たいに痛いんだだけど?」

「あんた大丈夫なの!?!真顔って言っているけど大丈夫!?!アテナさんの殴る威力の衝撃がこっちまで飛んでいるんだだけど!?!」

アテナのパンチはありえないくらい。威力が強い

もう我々の知っているポカポカではなくなっていた

アテナのパンチを放つ事に、橋がギシギシと碎けそうな音がした

それだけ威力をまして殴っていた

愛人も口から血を若干吐いているのにも関わらず、真顔で避けもしなかった

「コラ？あんま変な事言わない？」

「イター！」

さすがにもう我慢できなくなったのか、

愛人は落ち着かせようと、アテナの頭に軽いチョップを入れる

アテナは涙目で頭を抑える

「たくーこのままだと拉致があかねえ」

愛人はさすがのオレンジプラネットのお客の対応がまずい状況に行っていると感じ

全員を落ち着かせる命令を下す

「おいお前ら!!もうその辺にしておけ!もう普通のオレンジ・プラネットに戻れ!!自由すぎるのも程がある!!普段通りでいいんだって?お客の対応は普通にいつも通りにしろ!!これはウンディーネ管理部長の代理の命令だ!!」

愛人は下にいるウンディーネにそう言い放った

「ですが!!私たちは兄さんのためにやっているのですよ!!今更止められませんか!!」

そう言うだろうとわかっていたのか

愛人は最終手段としてある言葉を言い放つ

「お兄ちゃんの言う事が聞けないのか？」

「!!!」滅相もありません!!兄さん!!!」

アテナやアリスも含めた全員が膝をゴンドラに付けてひれ伏した

「黙らせた!?なんで全員オレンジ・プラネットのみんな服従しているのよ!?なに!?もうオレンジ・プラネットのウンディーネは愛人の手の内だとも言いたいわけ!?!」

その光景にツツコミせずにはいられなかった藍華

だっけ見た事がないのだ。まるで將軍が家来に命令を放つみたい
に、愛人がオレンジ・プラネットの従業員でもないのに、たったお兄さんっという存在だけなのに、全員が服従しているのだ

たぶん、愛人の命令一つで、オレンジ・プラネットも滅ぼすような命令もウンディーネのみんなはやるだろう

ていうか、もう愛人がオレンジ・プラネットを手に入れたようなも

んだ

「とういうわけで『ブラット・オレンジ・プラネット』は解散!!普通の『オレンジ・プラネット』に戻れ!!これはウンディーネ管理部長ではなく!!俺!お兄ちゃんの頼みだ!!妹たちよ!!お兄ちゃんの言う言葉が聞けるな?」

「「「「イエス!!!兄さま!!」」」」

「なにこれ?」

変な光景を見たが

これでなんだかんだでみんなの知っている『オレンジ・プラネット』に戻るの確か

平和に戻るわけだ

ところが

「愛人くん!!」

突然空からスカイウイングで飛んでいたエンジェル騎士団の人が降りて来た

「あれ?なんだ?ケルビムの人が俺になんか用か?」

「大変だ愛人くん!!!事件だ!!」

「「「「!?」」」」

なんと事件の通達がやってきた

「内容と状況は!」

「サンタ・マリア聖堂近くの海で、観光船が壊れたんだ!!観光船は沈みそう!!このままだと観光客が海の底に落ちてしまうんだ!!」

それを聞いた愛人は、ケルビムの騎士団員に背中を向けて、橋の下にいるオレンジプラネットのウンディーネたちの方へ向く

「聞いたか?お前ら?」

「「「はい!!兄様!!」」」

愛人はオレンジ・プラネットのウンディーネたちを使つてとんでもないことしようとしていた

「いいか!!これは練習じゃない!!案内でもない!!今から我々オレンジ・プラネットは!!観光客の救出に向かう!!危険だと思うが!!お前らは観光客を無事に港まで運ぶのが仕事だ!!俺と一緒にについて来る覚悟のある奴はいるか!!」

「「「ここに全員居ます!!兄様!!」」」

「嘘!!あんたオレンジ・プラネットを使う気!!」

なんとオレンジ・プラネットのウンディーネを使い、観光客を無事にゴンドラで港まで救出させようとしていた

「お兄ちゃん!!」

「乗ってください兄さん!!」

「ああ!!」

いつの間にかアテナとアリスが橋の下で、すでに自分のゴンドラを用意していた

愛人は橋から、アテナのゴンドラに乗り

イスに座り叫ぶ

「いいか!!これはチャンスだ!!オレンジ・プラネットが観光客を救出すれば!!我々の評価はもつと高くなる!!あのライバル会社『姫屋』よりも評判が高くなるぞ!!」

「「「イエス!!兄様!!」」」

「HOTでCOOLなpartyの始まりだ!!」

「なにそれ!?!どこの筆頭!?!なに『オレンジプラネット筆頭』!?!それとも『お兄ちゃん筆頭』!?!」

「Here we r GO!!Let's party!!!!」

「「「OK!!兄様!!」」」

アテナのゴンドラに続いて、あとからオレンジ・プラネットのウンディーネたちがぞろぞろと続いている

「アラエル!!全オレンジ・プラネットのウンディーネに伝えろ!!全員でサンタ・マリア聖堂の近くの海で沈みそうな観光船に乗っている観

光客を救出しろと!!」

『わかりました!!』

アラエルは愛人の指示で『スカイバード』でネオ・ヴェネツアにいる全オレンジ・プラネットのウンディーネたちを出勤させるように指示した

「派手に救出させるぞ!!お前ら!!」

「」「兄様や我々会社のために!!」「」「」

「ショータイムだ!!アテナ!!派手に歌え!!」

「うん!!」

アテナの歌を聞きながら救出に向かった

ちなみにアテナが歌っていたのは、カンツオーネではなく

『UTOAE』だった

なんでアテナがそんなロックな歌を歌えるかは知らないが、歌詞も知っているようでフルで歌い出した

橋に一人残された藍華は

「なにこれ?」

と、訳のわからないと言わんばかりだった

その後、愛人の言う通り、本当に全オレンジ・プラネットのウンディーネを連れて救出に向かった

観光客は全員無事に救出完了した

怪我するかもしれないというのに、恐れなしに救出した

彼女達がいなければ、今頃観光客は限られた人しか助けられなかっただろう

観光客もオレンジ・プラネットのウンディーネたちに感謝し

更に彼女達会社の評価は上がり、今は絶好調なくらい売り上げが上がっていた

その事件はマンホームでも流れた

協力してくれたのは嬉しいが

勝手にウンディーネを動かしたましてやその従業員ではない愛人は、犯罪人だと言う人も居た

だが、オレンジ・プラネットは『私たちの兄なんです』とオレンジ・プラネットの偉い人がゴリ押しで、その愛人の悪口を言っていた人たちを黙らせた。強引な技でねじ伏せた

つまり、愛人はオレンジ・プラネットのウンディーネたちを自由に使っていいわけだ

愛人に悪い口を言えば、オレンジ・プラネットの妹たちが許さないということだろう

もし、そんなことすれば、オレンジ・プラネットがネオ・ヴェネツアを戦国時代に変えてしまうかもしれない

今回の事件で

愛人に悪い事を言うなり、逆らえば、ブラットオレンジ・プラネットが叩き潰しに来るということが

ネオ・ヴェネツアで、マスコミたちがわかったことだ

要するに愛人に悪口を言えば、命は無いということだ

「恐いんだけど!!?なんで後輩ちゃんたちが一国の軍みたいになっっているの!?!」

第十五話 ケット・シー

「はあ〜、眠い。昨日夜までアリスたちと宴会で暴れていたから眠い〜」

「愛人くん。もうオレンジ・プラネットに転職できるんじゃない?」

昨日の事件で救出協力したことで、

オレンジ・プラネットの評判高くなった祝いとして、会社でバーベキューをして、夜遅くまで遊んでいたらしい

今日はラファエル隊長のアイナと一緒に初のパトロールをしていた

「なあ? アイナ? 今日はどこでパトロールする?」

「そうね・・・あら?」

「ん? どうした?」

「あれ・・・ARIAカンパニーのARIA社長じゃない?」

パトロールしている道の先にARIA社長が居た。しかも一匹だけで、灯さとたちとは一緒には居なかった

「なにしてんだ? あいつ?」

「見て! あれ!」

「ん? まあに!? ヒメ!」

なんとARIAだけでなく、オレンジ・プラネットのまあ社長や姫屋のヒメ社長も居た。

「なんでまあやヒメまで居るんだ?」

『もしかしたら。『猫の集会』かもしれないね?』

「猫の集会? アラエル知っているのか?」

『マンホームのハイランド地方に伝わる昔話で、猫は自分たちの王国を作っているのです。その昔話によると、自分の家から猫がなくなつた時は猫の王様が国中の猫を集めて集会を開いているんですよ?』

「猫の王様? それってまさか?」

『はい、マスターも神話や童話のような本を読んでいますから知っているはずですが、猫の王様『ケット・シー』です。』

「おいおいアラエル。まさかとは思いますが、そ童話で伝説の獣のケット・

シーが今でも実在しているなんて言わないよな?」

『ケット・シーが居るかはわかりませんが、少なくとも猫だけでなにかしているのではないかと思えますよ?』

「猫だけね〜」

愛人は確かに薄々は気になっていたことがある

アリアたち猫が、たまに一匹でどこか行く習慣がある

愛人はそれが気になってしまい

「おいアイナ?」

「なに?」

「アリアたちを追いかけるぞ?」

「へ?」

愛人はアリアたちが、猫だけでなにをしているのか気になり

アリアたちを追いかけることにした

アリアたちは小さなゴンドラに乗っているのを見かけ

エンジェル騎士団専用のゴンドラで愛人が操縦して追いかける

アラエルの『スカイバード』で見失わないように、上空で追いかけていた

「本当に猫の王国なんてあるのか?」

「そんなかわいい王国があったら私も見てみたいけど、残念ながら人間は入れないって私も聞いた事があるわよ?」

「そのところは俺も知っている。確かケット・シーが妖術をかけているのかな、んなもん関係無しに俺は見つけてこの目で見てやる」

「愛人くん。どんな神経しているのよ?」

「もしケット・シーを見つけたら、今日はごちそうだな」

「食べるの!?愛人くん!?ケット・シーを食べる気!」

今日の愛人も相変わらずキチガイな考えをしていた

この世には知っていけないこともあるという言葉があるが

それが例え命が賭けられたとしても。愛人はそれを知り尽くすまで

地の果てまで追いかけるだろう。ていうかもしそんなことになっても、愛人が殺されるようなたまじやないし、猫を食べようとするこ

のおバカに逆に食われるだけ、心配しても無駄だった

実はこれはアラエルしか知らないことだが、昔愛人はいろんな生物を使って料理し、それをマジで食べたことがある

その使った生物は………

人間が絶対に食べようとは思わない生物

詳しいことは食欲がなくなるので説明しません

なにを食べたかは読者の皆様のご想像に任せます

「あれ？愛人さん？愛人さん!!」

「ん？灯里？それに藍華とアリス？」

「あれ？何しているのあんた？ってその隣の人ってまさか!？」

「兄さん!?!どうしてラファエル隊長のアイナ・シルバさんと居るんですか!?!」

愛人の乗っているゴンドラの後ろから

灯里と藍華とアリスがゴンドラに乗ってやってきた

まだアイナは3人とは初対面だ

「たまたま一緒にパトロールしていたとこだ。そんで今からアリアたちを追いかける」

「そうですか!?!はじめかして!ARIAカンパニーの水無・灯里です!」

「私は姫屋の藍華・S・グランチエスタです」

「あら？愛人くん？あなたARIAカンパニーと姫屋のお嬢様とお友達なのね?」

「藍華に関しては腐れ縁だよ?」

「私はオレンジ・プラネットのアリス・キャロルです。ところでアイナさんは兄さんとどんな関係ですか?」

「私?私はね………深い関係かな♪」

「兄さん?」

アリスはそれだけを聞き、どこからか注射器のような薬が出て来た今にも人為変態しそうな勢いで

「おいアイナ?変なこと言うなよ?ふざけたことを言うと、今日のごちそうは無しだぞ?」

「え？なに？私の分も用意するつもりだったの？私の分までケット・シーの料理を用意するつもりで居たの？やめてよ？私猫は食べないから？」

愛人はいつの間にケット・シーの料理をアイナの分も用意するつもりだった

「ところで愛人さんもアリア社長を探しているのですか？」

「なんだ？お前らもか？」

「はい、さつきケット・シーって言ってましたけど、もしかして愛人さんたちも『猫の王国』を探しに来たんですか!!」

「猫の王国があるかはどうかはともかく、アリアたちのやっていることが気になるだけだ」

「じゃあ一緒に追いかけてませんか？」

「お前ら今日練習じやないのか？いいのか？」

「灯里のわがままで、その『猫の王国』を見てみたいがために、それを目的地として練習しているのよ」

「練習じやねえよ。明らかにサボりじやねえか」

「まあ私も気になります。まあくんがなにをしているのか気になります」

「まあいつか、わかった一緒に追いかけるか」

「なんだかんだで灯里たちと一緒にアリアたちを追いかけることになった」

しばらく追いかけると

突然アリアたちは狭い水路を曲がった

「ん？アリアの奴？なんでこんな廃墟に入ったんだ？」

「愛人さん？ここ知っていますか？」

「ここはもう廃墟になって、建物がボロボロで危ないから立ち入り禁止にしていたのよ、でもなんで入り口が空いているのかしら？前私たち騎士団が閉めていたのに」

ここは私有地でもあって、建物がほとんどボロボロで、天井が崩れやすいため、エンジェル騎士団が扉をすべて閉めて、立ち入り禁止にしていたのだが

入り口が開いていたのだ

「あいつら、こんな何もないところでなにをするつもりだ？」

「追いかけるの？」

「ここまで来たんだぞ？追いかけるに決まっているだろ？」

水路は狭いので、先頭は愛人のゴンドラで進み、そのあとから灯里たちのゴンドラが追いかける

しばらく10分くらい漕いでいるのだが

狭い水路からでる様子が見えない

「この水路どこまで続くのかしら？」

「まるで迷宮に迷い込んだみたいだね？」

「恥ずかしいセリフ禁止!!!」

「ええー!!？」

「あ、言い忘れてたけど、ここ灯里の言う通り迷いやすいほど迷宮に近いか？」

「へ!？」

「ここは建物が落ちてくるだけじゃなくて、とても広くて迷いやすいというのも立ち入り禁止にした理由なのよ。」

「そんな!?!じゃあ私たちこのまま迷子で出れないの!?!」

「それは心配ないわ。ここは何回も私たちが捜査したから、道は大体私と愛人くんがわかっているから、出れないってことは無いわ」

「そろそろ出口だぞ？」

愛人の言われた通り、出口が見えた

出口を出ると、廃墟になった建物があった

「これって……まだアクアが火星って呼ばれていた頃の入植地跡ね」

「こんなところにつばがっていたのですね？」

「確かここは……昔はマンシヨンだったんだよな……広すぎて迷いやすい為、もう誰も住めなくて廃墟になったって聞いたぞ？」

「久しぶりに戻って来たわね？」

「ところでアリア社長はどこに？」

「アラエル?どこだ？」

愛人が腕時計でアラエルに連絡するが

ブーブーブー

「なんだ!？」

「どうしたの? 愛人?」

「アラエルと……連絡ができない」

「「え!？」」

なんとアラエルの連絡ができず、腕時計の音声から噪音で、何も聞こえなかった

「まずいな……あいつが連絡できないなんてこと、今までなかったんだがな」

「アラエルさんに何かあったんでしようか?」

「まさかケット・シーにやられたのか? あいつがそんなやられるようになったまじやないはずだが」

「あ」

「どうした? 灯里?」

灯里は建物の中になにか居るのに気づいた

「あの建物に誰か居ます!？」

「嘘!?! こんな廃墟に人がいるわけないでしょ!?! 脅かさないでよ!!」

「でも、どこにも居ませんよ?」

アリスもみんなも建物の方を見るが、誰もいなかった

「仕方ない。アリアがどこにいるかもアラエルがなにがあったのかは知らないが、このまま進むしかない」

「え!?! 行くの!?!」

「アラエルやアリアを置いて行くわけにもいかないだろう?」

「ううう、仕方ないわね! 灯里!! 漕いで!!」

「う、うん!」

引き返しても仕様がなかったため、このまま進んだ

水路は一本道しか無いため迷うことはなかった

だが

「……………アイナ? 気づいたか?」

「ええ、静すぎるわ」

「どうしたの？」

愛人とアイナがここの水路を通ってみて、気づいた

「ここ変だわ。音がなにも無いし静すぎる。前捜査した時はこんな静かじゃなかったわ」

アイナは以前、この場所を何回か捜査しているから、この場所のこととはだいたいのは把握している
だが

以前来たよりも雰囲気が変わっていた

「それだけじゃない。灯里？お前も気づいているだろ？」

「もしかして愛人さんやアイナさんも？」

「ああ、誰か俺らを見ている！」

「えい！」

「数は・・・一匹だけじゃないわね？」

「ああ、周囲に多数いる。しかも人じゃないな？」

エンジェル騎士団の訓練を受けているアイナと、普段感知の鋭い愛人二人はこの気配に瞬時に反応した

エンジェル騎士団は反応や気配でも感知しやすい訓練を受けている。これは犯人や事件にいち早く気づくための手法である

二人は見られている視線に気づいた

「どうする？もしもの場合は戦闘体勢とっていいんだろ？」

「状況によるわね？今は剣を収めといて？」

「仕方ない灯里？俺の代わりに漕いでくれるか？さすがにまずい状況だ。俺がいつでも動けるように、俺の代わりに頼む」

「は、はい！藍華ちゃんお願い！」

「え、ああうん！」

灯里は愛人のゴンドラに乗り移って、灯里が操縦する。灯里のゴンドラは代わりに藍華が操縦する

そして一本道で進む

「どうしよう。怖くなって来た」

「大丈夫だから、俺がついてるから心配するな？灯里？」

「あ、愛人さん・・・」

「コラ！二人の世界禁止!!」

「ええー!!?」

「灯里先輩！兄さんに近づくの禁止!!」

「ええー!!?」

「あなたたち愉快ね?・・・あら?」

アイナは進んでいてあることに気づいた

それは

「おかしいわ。ここを進めば出口に出るはずなのに、さっきから同じ道だわ」

「どうなってやがるんだろうな・・・」

「どうします?」

「このまま進もう。止まっても仕様がなない」

愛人の指示で進むが、さっきから同じ道を通っていた

「まずいな・・・一本道だと言うのに、なんで同じ道が続く」

「変ね?どうなっているのかしら?」

「あれ?藍華ちゃん?」

「ん?アリス?どこだ!?!どこに行った!?!」

なんと後ろに続いていた藍華とアリスが消えた

「藍華ちゃん!!アリスちゃん!!」

「どうなっているのかしら!?!」

「・・・」

灯里はさすがに衝撃の事態に落ち着かずでいられなかった

アイナも藍華とアリスが消えたという事態にさすが冷静で居られなくなっただけだ

だが一人

二人が消えてもなお、冷静で状況を分析していた愛人がいた
この迷宮脱出する方法を探していたのだ

そもそも一本道だと言うのに迷うのもおかしい

アイナはこの水路の道を知っているのにも関わらず迷っただとすれば

本当にケット・シーかなにかが、自分たちを迷わせたに違いない
いい加減見られるのも愛人は飽きたため

「愛人さん?」

愛人は剣を抜き

そして

「うらあ!!!」

剣を後ろの方へ投げた

剣を投げた先にバリリン!!とガラスが割れたような音がし

見えない壁のようなものが後ろにあり、それを壊した

「見つけたぜ」

そしてその先から

「にゅ」

「にゃ」

「まあ」

『マスター』

猫の大軍が建物の上に座っていた。

中にはアリアやまあやヒメやアラエルも居た

更にその真ん中に

「嘘……」

「伝説は本当だって言うの?」

灯里とアイナはその見た光景に驚いた。いや、その真ん中に座って
いた

デカイ猫に得に驚いた

「……」

牛みたいに大きく

洋服を着ていた黒猫が座っていたのだ

「お前は……」

伝説は本当だったのだ

今でも猫の王様、そして王国も実在したのだ
彼女たちの目の前にいたのは間違いなく

「ドラえもん!!?」

「え!!?」

ケット・シー……………あれ?

「愛人くん?これさ?」

「ああ、間違いねえ、ドラえもんだ!!」

「んなわけないでしょうが!!なんで猫型ロボットなのよ!?機械じゃないし!!?なに?あの体型が悪いの!?あの体型がドラえもんに似ているから!」

愛人はなにを見たら、ケット・シーをドラえもんに見えるだろう

「な…………」

「「え?」」

「なんでにやああああああああ!」

「ええええええええええ!」

なんとケット・シー自身が喋り出したのだ

愛人のアホの発言に突っ込まずには居られなかったらしい

「なんでにや!?!私はそんなに太ってるのかにや!?!」

「だって、お前明らかに『どら焼き』食ってそうな顔しているし」

「顔判断!?まさか顔判断?!?どういう頭しているにや!?!」

愛人は驚く事もなく、ケット・シーと会話をしていた

「そんなことはともかく……おい!アラエル!」

『え?あ、はい』

「アレを?」

『はい』

アラエルがアームから手錠を持っていた。それを愛人は受け取り

そして、愛人はケット・シーの両手を手錠で拘束し

「ええ、不法侵入なので、ドラえもんくんはウチの本部まで来てもらおうね?」

「なんでにやあああああああああ!?!」

なんとケット・シーを捕まえて、本部まで連れて行こうと、手で手錠を拘束するだけでなく、どこからか長い鎖を出して、更にグルグル巻きに拘束し

自分の乗っていたゴンドラに乗せる

「愛人くんなにをするつもり!?!」

「なについて?食べるんだよ?うまそうじゃんこいつ?」

「マジで食べるの!?!言っておくけど私は食べないからね!?!ていうか猫に呪い貰いそうだからケット・シーを解放しなさいよ!!」

「ああん?ケット・シー?こんなアリアよりデカイ腹がケット・シーなわけないだろ?」

「ぶいにゅ!!?!」

アリアもその言葉にショックを受ける

『にゃーん!!』

ケット・シーの部下の猫たちが『私たちの王様を返せ!!』と言わんばかりの鳴き声を発したが

「おい?食うぞ?」

愛人が今まで見せたことのない。怒った顔で猫たちを睨んだ

その顔はまさにライオンの吠える顔、猫達はそれに怯えなにも言えなかった

「なんで助けにや!?この男がそんなに怖いのかにや!」

「さあて、本部に戻って焼肉だ!!」

「ちよつと愛人さん!?本当に持ち帰るのですか!」

「よし!!そんじやあ戻るぞ!!」

「助けてくれにやああああああああ!!」

そのあと愛人たちは無事にアリスと藍華と無事に合流し。脱出した

藍華たちは愛人たちが見失ったあと、無事に外に脱出していたのだ
アリアたちも無事に連れて来た

そしてケット・シーなのだが、廃墟の迷路に脱出している途中

いつの間にか脱走していた

灯里とアイナは藍華とアリスにケット・シーが実在したことを話すが信じてはくれなかった

愛人はそんなことよりも

次ケット・シーに会ったら

『しゃぶしゃぶ』にしてやると心に誓った

ちなみに愛人はあのデカイ黒猫がケット・シーだとは気づいてない
ケット・シー自身も、もう二度とあのような男には会いたくないと
警戒心全開でこの町をうろつくことにした

この世界でも、猫の王様なんかよりも

百獣の王、もしくは魔王ルシファーという名の危険な存在もいると
いうことだ

「それ愛人くんじゃない!」

第十六話 夜光鈴とアリシアとの関係

遂に暑い季節

夏がやってきました

このアクアはマンホームより太陽が遠いとはいえ、ここ火星のアクアでもやはり暑い

無論本部に居る

愛人は

「ついに来ちまったな・・・暑い夏休みの季節が・・・」

自分の仕事部屋でぐったりしていた

「愛人？水分は取ってくれよ？脱水症状でもしたら大変だからな？」

「わかっているって、でもよ!!暑くね？アクアにいるのにマンホームより暑い気がするぞ?」

「そうですね・・・今年は何んでも気温は高いみたいですわね?」

「お?彩音じゃん?なんか涼しくなる方法知らね?この暑い中仕事なんてやってられねえんだよ?」

書類仕事が終わったウリエル隊長の彩音に涼しくなる方法を聞く

「涼しくなるような物ならありますよ?」

「マジ?それはなに?」

「これです!」

彩音が出したのは、綺麗なガラスで花柄が描かれた

夏の暑さを静かな音で和らげてくれる

風鈴だった

「お!風鈴じゃん!見るのは久しぶりだ!マンホームの田舎でもまだあるからな・・・アクアにもあるんだな?」

マンホームはもはや機械の都市で、風鈴を飾るような習慣は無い
あるとしたら、あまり機械を使ってない田舎くらいだろ

「ええ、でもこれは特別性で『夜光鈴』って言うんです」

「夜光鈴?」

「はい。これ夜光るんですよ。アクアだけの特産品なんです」

ガラスの中に小さな玉がついていた。これが夜になると光るのだらう

「へえ、すげえな明かりまでついているのか？」

「ですが、これ寿命が一ヶ月しか無いんです」

「なんで？」

「夜光鈴の中の玉が夜光石がありまして、その石に光の消失と共にどんどん小さくなり、最後には器から落ちてしまうんです」

「そうなのか・・・俺も欲しいな？それ？」

「じゃあ僕と一緒にサンマルコ広場で夜光鈴市をやっているから買に行かないか？」

「ああ、俺も行く」

夜光鈴を買いに、サンマルコ広場でやっている夜光鈴市へアクトと一緒に買いに行く

サンマルコ広場では、屋台が多く。夜光鈴が多く売られていた

「ほお、すげえあるな？」

「これの中から好きなもの選ぶんだ？」

「そうだな、俺はどれにしようかな」

愛人は屋台に吊るされてある夜光鈴を見て。どれにしようか見て悩んでいた

夜光鈴は色は一つだけでなく、デザインも違う

愛人はできれば自分の好きな青色の夜光鈴を選ぼうとしていた

すると

「あれ？愛人さん！」

「あ、愛人じゃない？」

「兄さん!？」

「ぬあ？」

「ここで灯里と藍華とアリスたちと出会う

本当に彼女たちと出会うのが多い。まるで轢かれ合うかのように

「お前らも夜光鈴を？」

「はい！」

「あんたも？」

「ああ」

「意外、あんたこういうのは興味ないと思った」

「まあ風習には興味ないが、こいつの音を聞いてみたいがために買
に来たんだ」

「兄さんはどんなのにしますか？」

「できたら、青色の奴がいいな」

「あんたって、青が好きなの？」

「まあなく」

「こう見えて愛人は青が好きなのだ。」

夜光鈴はたくさんあるのはいいとして売り切れも心配ない

だが、彼が気に入るデザインの夜光鈴がなかった

好きな青色もたくさんある

問題はデザインだ

客観的で欲しい物があるのなら、それを選んだりはする。だが彼に
は、どうせなら変わったデザインを手に入れたい

夜光鈴なんて、どれ選んでも同じじゃないのか？と一般人に言われ
てもおかしくない

だが

たまにはこういう物にこだわりを持って選ぶのもいいのでは無い
かと彼は思っている

別に自分はデザイナーでもないし、そういうのは今まであまりに興
味がなかった

でも、こだわって選んでみたかった

自分に合いそうな趣味のあうデザインの夜光鈴を探すのは、初めて
物に興味を持ったからだ。興味を持ったのなら、それなりのデザイン

にこだわりたい。例えそれが無価値だったとしても、自分の興味が出た物くらい、自分の手でこだわって探したかったのだ

それだけの価値があるのではないかと思っていたからだ

「あら？愛人くんに灯里ちゃん！」

「あ！アリシアさん♡」

「アリシアさん！」

「アリシアか……」

こんなところに偶然に友人のアリシアに会う

久しぶりではない。ほとんど最近夜によく外食を誘われるためよく会うせいも、偶然会うことなど、驚きはしなかった

「夕食誘って以来だな？アリシア？」

「ええ、愛人くんも夜光鈴を？」

「ああ、久しぶり見たからな、ま俺が知っているのは風鈴だけだな？」

「なにかいいの見つかった？」

「それがさ？俺の好きな色の青をベースにした奴を探しているんだけどな……なかなか見つからなくて？」

「なら、私がオススメなの紹介するわよ？」

「お？いいのあるの？」

「ええ、私が愛人くんが気に入るようなの探すわ？」

「ああ、じゃあ頼むわ？」

アリシアが愛人に似合いそうな気に入るような夜光鈴を探してくれた

探してくれるのはいいが、なんか前よりもアリシアが愛人に積極的になったというか、なんか愛人との関係が変わった気がする

愛人自身ももうアリシアのことをバカにしなくなったし、大分彼女との対応が変わっていた。

そんなやりとりを見て灯里たちは

「アリシアさん……愛人さんにくっつきすぎです」

「くーやはりあいつは私たちアリシアファンの敵よ!!」

「灯里先輩もアリシアさんも……やはり私たちにとって危険な存在です」

「アリスちゃん？犯罪は起こさないでね？」

灯里は愛人にくっつく付くアリシアに少し羨ましく思っていた

藍華はいつも通り、アリシアファンの敵である愛人をどうにかしないかと何か計画をたてようとする

アリスは……本当に灯里やアリシアを殺そうとしそうで怖かった

と、見ていたアクトは思った

「それで？お前がオススメするのはどれだ？」

「愛人くんはただの青のカラーをした夜光鈴は嫌でしょ？」

「まあ……それは普通過ぎて嫌だしな？」

こだわりなら、ガラスの柄が綺麗なのがよかった

柄なんてどれもみんな一緒だが、できれば見たことの無い柄が欲しかった

「やっぱりね……じゃあこれなんてどうかな？」

「っ!?それは……」

アリシアと一緒に歩いて案内したお店は屋台が続いた奥に遠くから一つだけ残された屋台があった

「おや？アリシアさんこんばんは？また来てくれたんだね？」

「こんばんは？おじいさん？」

屋台の店員のおじいさんとアリシアは知り合いらしい。

去年もこの店の夜光鈴を買ったのだろうか

アリシアこの屋台の常連さんらしい

「おや？アリシアさん？今日は男を連れて来ているのかい？もしかして彼氏さんか？」

「ふえ!?いえそんなんじゃないよあ／＼／＼／＼」

「俺はただの友人だぞじいさん？」

「おや、誰かと思えば何でも屋騎士様の愛人くんだったのか？」

どうやら屋台のおじいさんもニュースくらいは見ているらしく。愛人のことは知っていたようだ

おじいさんから彼氏扱いに関しては無視していた

「お前さんがうちの夜光鈴を買ってくれるのかい？」

「まあ、ここになんかいいのあるか？」

「いいのか……それはワシがオススメするよりも、この屋台の常連さんであるアリシアさんを選んでもらうほうがいいぞ？」

「そうか……それでアリシアは俺ならどんなのが似合うと思う？」

「あ、うん……」

アリシアは一度落ち着いて、愛人に気に入りそうな夜光鈴を探す

しばらく、夜光鈴の品を見てみると、一つだけ奥にちゃんと目によく見ないと見えない夜光鈴が並びに外れて置いてあった

アリシアはその夜光鈴の柄が綺麗だったので、彼にオススメしてみた

「これなんてどうかしら？」

「それは……」

「おや？アリシアさん？相変わらず選びもうまいんだね？それはいいものだよ？」

アリシアがオススメした夜光鈴は

「綺麗です！」

「なによこれ!？」

「柄が……」

「まるで小宇宙みたいじゃないか？」

「……」

そう、その夜光鈴のガラスの柄がまるで宇宙を見ているかのような、小宇宙のデザインの柄をした夜光鈴だった

ガラスの一つ一つに小さな星のような輝きもあり、宇宙は普通色は黒なんだが、小さな星が青かったため、蒼く輝いていた

「ありがとう。アリシア？」

「え？」

「俺これにするわ？選んでくれてありがとうかな？」

「ええ」

愛人はアリシアがオススメしてくれた夜光鈴を迷う事なく買ったアリシアが自分のために選んでくれたからこれにしたのか・・・それとも本当にこの柄に見とれたのか

どちらにしても愛人はこれを見つけてくれたアリシアに感謝した「ありがとうな？選んでくれて？」

「ううん、全然構わないわ」

「そうか・・・礼はしっかりしとくな？」

「別にいいのに？」

「させてくれ？それだけいい物が手に入ったんだ？お前のおかげだ？」

「愛人くん・・・」

もう二人は、灯里たちがいるのにも関わらず、完全に二人だけの世界に入っていた。この二人なにを話しても他のみんなが居ようと二人の世界に入りやすいだろう

そんな二人の世界を

「アリシアさん!!二人の世界禁止です!!」

「え？」

「は？」

灯里が止める

「そうよ!!愛人もアリシアさんを誘惑するの禁止!!」

「何言っているんだ藍華？」

「アリシアさん!!それ以上兄さんに近づくのでっかい禁止です!!」

「おい？お前らどうした？なんでもかんでも禁止って言えば解決すると思うなよ？」

「愛人も愛人でアリシアの乙女心理解してないのかよ？」

「え？」

愛人は完全の無自覚なんだが・・・

アリシアはその気にさせようと思ったが、やはり度がありすぎたよ
うで、部下達に止められてしまった

もういつそのこと付き合ってしまったえばいいのにとアクトは思っているが、愛人が無自覚以上は無駄だった

ま、アリシアに付き合ってる彼氏がいるなんてアリシアファンが聞いたら、愛人は毎日命を狙われるかもしれないだろう

なんだかんだで気に入りそうな夜光鈴が見つかって嬉しい愛人だった

気に入りそうな夜光鈴を見つけてくれたアリシアや灯里たちに愛人は昼飯を奢った。その途中でアラエルにネットで夜光鈴の中に光る玉・『夜光石』について調べていた

『夜光石』アクアだけでしか採れない石。石の中にルシフェリオンがルシフェリーゼという酵素作用で酸素と結びついて、分解する時に効率よく光るのです。夜光石が放つ光は『冷光』といって温度がとても低く、光の減少とともに石も小さくなっていったって大体、一ヶ月で消えてしまうらしいです』

「へえ、これ一ヶ月しかも持たないのか……」

『ですが、ごく稀に綺麗な結晶となって残ることがあります。滅多には無いみたいですが』

「へえ、つまり夜光石の結晶か……」

愛人はさっそくチリーンと鳴らしてみる。懐かしくて夏の暑さを吹っ飛ばしてくれる音色だった

この音を聞いていると、なんだか穏やかな気持ちにもなった

風鈴の音色は昔の地球いわばマンホームでは魔除けの役割もある風鈴を吊るす事で綺麗な音色を嫌う鬼を遠ざけていたとか

そんな不思議な話を愛人はたまたま覚えていた

「そういうえば、愛人の買った夜光鈴だけ、微妙に音が違うのか？」

「そういうえば、なんか兄さんの夜光鈴だけでっかい違うんです？」

「そうか？」

「あ、あたしも思った！なんか愛人のだけ少し音色が違うことに！」

「なにが違うんだ？」

「愛人さんのはなんか……私たちが買った夜光鈴よりも鳴らす音色が長いような？」

「音色が長い？」

「もしかしたら、愛人くんが買った夜光鈴は他の夜光鈴とは違う特別な物なのかもね？」

「そうか……もしそうなら見つけてくれたお前に感謝しなきゃな？」

「そ、そう？別に私は愛人くんのためにしたかったことだから気にしないでね？」

「でもな……昼飯奢るだけじゃあ礼としては小さいんだよな……今度なにか礼をする」

こんな綺麗で宇宙のように輝きが無限に続くような柄の夜光鈴を見つけてくれたアリシアに、昼飯を奢るだけじゃあ、礼としては及ばなかった

本人は礼はいらないと言うが、いつか大きな礼をしたいと愛人は考えている

だが

その大きな礼がとも考えつかなかった

女性にプレゼントしたことも無い愛人はなにをプレゼントしているか、わからないまま、礼は昼飯を奢るだけでその大きな借りは返す事ができないままその日を終えた

一ヶ月間、彼はその夜光鈴の輝き見とれたのせいか
手放すことはなかった

自分の仕事場の机の上に飾っていた。ほこりが付くとすぐさま彼は拭いて綺麗にしていた。それほど大事にしていたのだ

アリシアが選んでくれたから大事にしているのか

それともこんな綺麗な柄の夜光鈴を見て見とれているのか

果たして彼はどんな想いでこの夜光鈴を大事にしているのだろうか

でも、この夜光鈴も寿命というのは存在する

もう3週間に経つと、光がどんどん小さくなってきた

愛人はこれが寿命があると聞いた時は覚悟していたらから、悲しいとは思わなかった

どんな命や物にだって寿命は存在する。だから知っていたからこそ、それを受け入れて最後までくらは夜光鈴と一緒に居てからお別れしようと考えていた

「そういえば今日だったな？夜光鈴のお別れ？」

そう、等々その日がやってきたのだ。あの綺麗な音色も今日でおしまいのだと少し寂しい気もしてしまった愛人

「お別れって？」

アクトの夜光鈴のお別れの言葉に気になった

「石は光の消失と共にどんどん小さくなって行って、最後には器からポトリと落ちてしまうんだ？」

「そうなのか・・・」

「ネオ・ヴェネツィアではな？夜光鈴の最後のお別れを惜しんで水辺に繰り出す風習があるんだ」

「それってまさか？」

「そう。夜光鈴を買ったみんなは海で集って石を海に帰すんだ？」

夜光鈴は夜光鈴市の3日間でしか売られない

だから今日あたりから夜光鈴を買った街中の人たちが海に集ってくるのだ

そして夜

ついにお別れの夜がやってきたのだ

アクトや愛人もエンジェル騎士団のゴンドラに乗り、夜光鈴持って海に出た

「すげえな、こんなにたくさん、夜光鈴の光がたくさん見える」

もう既に海で集っていた。そこには

「あ！愛人さん!!」

「灯里・・・アリシアも・・・」

「お！来た来た！愛人よ！」

「お！アクトも来たか！」

「兄さん！でっかい遅いですよ！」

「お兄ちゃん・遅かったかたね？」

「団長！みんなもう来てますよ？」

「愛人くんも到着！」

「愛人さん。今日でお別れですね？」

「ああ」

もうすでにARIAカンパニーのアリシアと灯里

姫屋の晃と藍華

オレンジぷらねつとのアテナとアリス

そしてエンジェル騎士団、四大天使のアレクシアやアイナや彩音も居た

「すげえ勢揃いだな？」

「みんな夜光鈴を買って大事にしているんですよ？」

みんなが集って海に居るといのは、みんな自分の夜光鈴を持って、石を海に返すためにもう集っていたのだ

それだけではない

愛人は集まってくる人を見て驚く

今は夜で暗い海なのに、みんなが夜光鈴を持って集まってくるせいで海が一層に輝いて光っていたのだ

「！」

すると、その光が海に落ちていくのが見えた

「まさか」

「ああ、もう始まったんだ。ほら？僕たちのも？」

見とれている間に愛人と灯里以外の夜光鈴の光が落ちてゆく。

もう別れが近づいていたのだ。自分の夜光鈴の光を愛人は夜光鈴と過ごした一ヶ月間の思い出を思い出してしまった

彼はそれを思い出して。『いろいろ楽しかったよな……』
と思っていた。

愛人が物に興味を持って、大事にしたことなど、全然なかったのだ

それを思い出していると

心から、物も命も儂いよな・・・と思った

だが、その儂さと共に美しかったのだ

愛人と灯里以外の人の夜光鈴の光が落ち終わる

そして

「じゃあな？また来年会えたらな？」

「またね？」

二人はお別れをする。決して二人は『さよなら』とは言わなかった。

夜光石はアクアの海底でしか採れない鉱石

だから最後の輝きを見送りながら、こうして海に還してあげなければならぬ

だが永遠のお別れではないのだ

また会えるのだ。来年に、また海底で採られて、再び夜光鈴として帰ってくるのだから、二人はまた来年にと、自分たちの光が落ちてゆくのを最後まで見えずに最後まで見ていた

こうして夜光鈴の寿命は終わった

だが

「おい？なんだこれ？」

「これは!? 愛人さんもまさか!!」

二人の光は確かに消えた

だが

愛人の夜光鈴にだけ、結晶なのがついていた

「おい!? まさかそれ!？」

「ごく稀に残らないって言う夜光石の結晶か!？」

「でつかいすごいです!! 兄さん!! これで灯里先輩の次に残った人に入りました!!」

なんと愛人の夜光鈴に夜光石の結晶が残ったのだ

実は灯里も去年に夜光鈴の結晶が残ったのだ。今年はどうやら愛人の夜光鈴が残ったらしい

だが

「これがなのか？でもあまりにもまだ光ってないか？」

「ん？なんかそれ違うぞ？」

「去年の灯里ちゃんの夜光石の結晶と形が違う」

晃が去年から灯里の夜光石の結晶が残ったを見ているからわかる

だが、愛人の夜光石の結晶は、去年の灯里の夜光石の結晶と形が違うのだ

更に、光は落ちたはずなのに、結晶の中で輝きが反射を繰り返しているように見える。しかも宝石のような石のような形だった

「ん!? それって!!」

アクトがその結晶を見て驚いた。なぜならアクトという団長しか知らないお偉い人しか知らない。貴重な鉱石だからだ

「アクト？知っているのか？」

「団長？これをご存知で？」

「ああ！晃もアレクシアも聞いただろ？『夜光宝石』だよ!! アクアにたった一つ無い!! 伝説の鉱石だよ!!」

「「「「夜光宝石!?!」」」」

「なんだ？夜光宝石って？」

「知らないのか!?! 愛人!?! それは家宝としても価値のある宝石なんだぞ!?!」

「なんだ? 夜光宝石って?」

夜光宝石とは

夜光石の中に一つだけ、結晶ではなく、宝石のような形をして中で光が輝き続ける宝石があるのだ

まだこのアクアには今まで一つしか存在しなかったのだ

そのもう一つはアクアの宝石展示店である

これはかなりの貴重なのだ

昔マンホームの地面からダイヤモンドの発掘と同じ様にアクアの海底にも宝石が存在した

しかも鉱石としても使えるため、それを材料に包丁などに使ったれば鉄よりも固い刃にもなるのである

アクアでも貴重な石である。マンホームやいろんな宝石にも負けない輝きを持っている

これの展示会でもできるほどに誰もが欲しくなるほど、貴重な石だった

「オークションに売れば3000億もする程の宝石だ。まさかたった一つしかない宝石がもう一つあったのか」

「愛人くん! すごいです!」

「でもどうするんですか? これ?」

「愛人くん? オークションに売るのは?」

『オークションで今調べました。今では貴重らしく、7000億円もします』

アラエルがもうネットに調べていた
だが

「愛人くんはお金なんか興味ないでしょ?」

「愛人は器用ですから、自分の剣の刃に使うんじゃないんですか?」

「どうするんだい? 愛人?」

「.....」

使い道は考えていなかった。こんな貴重な物が手に入ったのは嬉しいが、どうしたらいいか悩んでいた
これは宝石。愛人は宝石が欲しいなんてこれ一回も思ったことはない

だから、使い道がなかった。宝石なんてファッションに使うものだし、男の自分に宝石なんて似合わなかった
だから

「愛人？」

愛人はその宝石を紐からちぎり。ポケットからネックレスに使うような小さなチェーンを取り出した。宝石にはちようど紐を通す輪があり、それをチェーンに通し

夜光宝石のネックレスが完成した

そしてそれを持ち

「愛人くん？」

アリシアの方へ、愛人は行く

そして彼女の後ろに行き

「そのまま動くな？」

「え、うん」

愛人はそのままアリシアの首にネックレスを通し、チャックをして彼女の首にネックレスを付けてあげた

「あの？愛人くん？」

「それはお前にあげる？」

「え？でも……」

「俺には似合わない。これは大きなお礼だ？そんな輝かしい宝石は、綺麗なお前の方が似合うよ？」

「!？」

「だから、その宝石のようにいつまでも元気で輝いてくれ？俺にこんな面白くて楽しい夜光鈴を見つけてくれてありがとう」

「あ……どう致しまして」

愛人はただ感謝がしたかった。

愛する女として見ているようには見えないが

夜光鈴と一緒に楽しかったこの日々をくれたのは、アリシアだった。こんな綺麗な夜光鈴の宝石が出て来たのもアリシアのおかげだと

彼はそのすべてに感謝して、愛人にプレゼントした

アリシアもそんな紳士の彼もつと好きになってしまった

あの日から理由なくバカにしたあの大バカ愛人は自分のためにしてくれた。一体なぜそんなことしてくれたのかはわからない

でも、なんだっていい

アリシアは彼が欲しくなった。本当に結ばれるような彼の愛人になりたいとアリシアは決意した

だが

「うう！愛人さん!!」

「ふふふふふふ、もう殺るしかない!!愛人を殺るしかない!!」

「兄さん？兄さんはアリシアさんの色ではなく？私たちの色で染まるしかありません」

「アリシアちゃんを・・・やる」

「おい!?藍華たちがヤンデルぞ!!?アクト止める!!」

「無理だ晁!!僕に死ねと言うのか!!?アレクシア!!頼む!!」

「無理です!!神の力を使っても無理です!!ここは神の薬である！アイナです!!」

「ちよつと!?なんで私!?ここは彩音でしょ!?神の火でさ!!」

「無茶言わないで下さい!!こんな狂気な3人はどうしようもできません!!」

灯里は普通の嫉妬だからいいが、藍華は愛人を殺す気満々で、アリスとアテナはアリシアをどんな手段を使ってもやる気だった。この3人は目にハイライトがなかった

それを止めようと、晁とアクトとアレクシアとアイナと彩音はどうしようもできなかつた

平穩に終わるかと思いきや

愛人はアリシアを惚れさせると同時に藍華に命を狙われる日々を手に入れた

こうして夜光鈴の涼しい夏の話は終わった

「なんか？ 藍華たちが騒がしいな？ なんかあったのかなアリシア？」

「さ、さあどうなのかな？」

「なんか俺との喋り方おかしくないお前？」

「え？ そ、そんなことないわよ？」

「？」

ていうか愛人はいつになったらアリシアの気持ちに気づくのだからか

第十七話 愛人とアテナの間の赤子!?

それはある日、朝から始まった

「珍しいな、お前も休みだなんて?」

「うん、ここ最近ずっと仕事で忙しかったから、久しぶりに休みが貰えたの」

今日は愛人は久しぶりの休みで、アテナも仕事が休みだったため

たまには久しぶりに一緒に遊ぶことにしていた。

実は2人とも3連休の休みなので、久しぶりにどこかで遊びに行こうとしている

今は家に居るため、これからどこへ行くのかアテナと話し合っていた

「で?今日はどこへ行く?」

「そうだね、どこにしようか」

と言っても二人も昨日3連休だと知ったばかりなため、なにをしようか悩んでいた。アテナは今日愛人の家に居るのは、久しぶりに愛人の家に行きたいと昨日の仕事帰りに言い出して、そのまま会社の寮には戻らず、そのまま仕事帰りに愛人の家に寄り、そのまま泊まっていたのだ。

普段のアテナなら、アテナは休みの時間を利用して、アリスの指導に入るのだが、その肝心のアリスは今日明後日はミドルスクールという学校に通っているため、今日から明後日までは会社に出勤してこないのだ

愛人も、珍しく市民からの依頼も無し

更には、スカイボードの修理や調整も終わっている

書類もすべて片付いている

つまり二人はせっかくの3連休をどう使うか、考える前に暇を持て余していた

「とりあえず外に出てみるのはどうだ?街で出歩けば、なんか面白い

ものでもなんかやっているだろ?」

まずは街で出歩いてれば、なにか楽しむイベントでもあるのではないかと、街を出歩かないかと愛人はアテナに提案する

「そうだね?じゃあまずは街をお散歩で?」

アテナもその提案にのり、すぐに外に出かける準備をし、玄関に行き、靴を履き、玄関の扉を開ける

この時、二人は思っていなかった

二人そっくりな赤ん坊の面倒を見る事になるなど

プルルルルル、プルルルル

「ん?」

「どうしたのお兄ちゃん?」

『電話ですマスター。アクト様からです』

「アクトから?今出かけようとしたのになんかあったのか?」

愛人の腕時計から電話が鳴る。どうやら愛人の腕時計コントローラーはアラエルの操作だけでなく、電話としても使えるようだ。

それよりも愛人が休みだと知っているアクトは、なぜ愛人に電話をするのだろうか、また事件でも起きたのだろうか

「はい？もしもし？」

『ああ愛人か!？』

「ああ、どうしたよ？なんかあった？」

『大事な3連休の日にすまない!! 実は・・・(おぎやあ!! おぎやあ!!)・・・つてことなんだ!!』

「なに言っているんだが赤ん坊の声で聞こえねえよ!!? ていうか本部に赤ん坊が居るんだよ?」

『いいから来てくれ!!』

「・・・は?」

「なんだって?」

「エンジェル騎士団本部に來いだって?」

「なんかあったのかな?」

エンジェル騎士団本部から緊急要請の報告を受けた

どうやら緊急要請で休みの3連休は無しになり、愛人はすぐに制服に着替えて、すぐに本部に向かった。

アテナもその報告を聞いて、気になって愛人と一緒に本部へ向かう

本部に着き、まずはアクトから状況と内容と事情を聞く。

「エンジェル騎士団本部の玄関の近くに捨てられていた!？」

「ああ、僕も朝本部に着いた時は、朝玄関の扉を開けようとしたら、突

然赤ん坊の声が出たんだ」

「どうやら第一発見者はアクトらしい」

赤ん坊はエンジェル騎士団の本部の玄関のチツ買うに捨てられていたらしい

放っておくわけにもいかず、エンジェル騎士団本部で預かることになったらしい

「酷い。赤ん坊を捨てるなんて!」

「僕も驚いたよ。こんな事件は初めてだ。一応騎士団はその赤ん坊を保護することになったんだ?」

「事情はわかったけど、なんで俺を呼んだわけ?」

赤ん坊を拾ったのはわかる。だが

なんで愛人を呼んだのかわけがわからず、愛人に赤ん坊の世話でもさせる気だろうか

「ああ、それなんだけどさ?とにかくその赤ん坊を見てくれる?ちようどアテナも居てよかったよ?」

「どうして私?」

アクトは二人を赤ん坊の居る部屋に案内する

「これ？君たちの子だろ？」

「ばぶ、ばぶ」

「……………」

アクトの案内により、赤ん坊の居る部屋に案内された
その部屋に居たのは、アレクシアに抱きかかえられた

アテナと愛人の似ていた赤ん坊が居た

「これ？あなたたちの子よね？」

その赤ん坊は髪と目は愛人と同じ蒼髪のショートヘア。目もまる
でサファイアのような瞳

体の色はアテナと同じ、褐色肌だった。更にアホ毛もあった

この特徴のある外見

まさしく、アテナと愛人の遺伝を継いでいるような、二人そっくり
な赤ん坊が居た

「おい？なにアホなこと言ってんだ？バカ二人？」

「おい愛人！アテナと結婚しているならなんで言わなかった!!君たち
が子供生んでいたなんて聞いてないぞ!!」

「おいマジで殺すぞアクト？いつ俺がアテナと結婚した？いつ俺がア
テナのお腹に種をバラまいた？」

「愛人くん!!お父さんならしつかり子供の面倒見なきやダメでしょ!!
ほら？パパとママですよ？」

「ばぶばぶ」

「私のお兄ちゃんの子？」

アレクシアから捨て子の赤ん坊をアテナに渡された

赤ん坊は嫌がる様子も無く。アテナを拒んだりもしなかった

「子供を捨てるなんて！親失格だぞ愛人!!」

「おい？この街の海をお前の血で染めるぞ？こいつは俺のガキじゃね
え」

「まあ？パパは君に酷い事を言ってますよ。最低なパパですね？アテ
ナさんその子をしっかりと見守ってくださいね？」

「え？本当に私の子なの？」

「アテナ騙されるな!!そいつは俺たちに似ているが俺たちの子じゃねえ!」

アテナはなにを騙されたのか、生んだ記憶も無いのに、自分の子だと勘違いしていた。ぼんやりな生活しているから、すぐにでも自分の子だと勘違いしやすいアテナだった

「愛人さん!いくらなんでもそれはあんまりですよ!」

「そうよ!自分の子も責任も取れないの!!」

「なんでテメーらも俺ら二人の子だと勘違いしているんだ!!」

部屋に入って来たアイナと彩音にも二人の子だと断言して来た

こども外見が二人に似ているだけで二人の子だと勘違いするものだろうか

愛人は誤解だと言うが、もうなにを言っても無駄だと愛人は文句を言うのやめた

「まさかあの水の三大妖精の一人アテナ・グローリイと愛人に隠し子が居たなんて」

「まあ、一緒に住んでいるのですから、薄々はそんな関係だとは思ってましたが、まさか子供も居たなんて・・・」

「ある意味アテナさんと愛人くんはお似合いだと思うわね?兄妹にしては、仲が深すぎるものね?」

「まあ子供が居るのはめでたいが、これ?灯里ちゃんとアリシアには言えないな?」

「そうね?あの子達が愛人に子供が居るなんて知ったら、ショックを受けるわね?」

「逆にオレンジ・ぷらねっとのウンディーネたちは喜ぶんじゃない?遂にオレンジ・ぷらねっとのお兄さんとオレンジ・ぷらねっとのセイレーンが実は結婚していて子供も居るなんて聞いたらあの子たち、愛人がオレンジ・ぷらねっとの本物のお兄さんになることになるんだから?」

「なんでそうなるの?」

アテナと結婚して子供居たなんてことが発覚すれば、確実にオレン

ジ・ぶらねつとのウンディーネたちも黙ってはいないはず、果たしてこれを聞いたアリスたちウンディーネの反応はどのようなだろうか

どっちにしてもこのエンジェル騎士団四大天使騎士のようになにを言っても無駄なように、自分とアテナの子だと誤解をされるのがオチだろう。

もうこの赤ん坊を他の知り合いの連中に見せれば、面倒事が増えるに違いない。得に口の軽い藍華と晃に見られたら、街にとんでもないくらい言いふらされるだろう

とにかくこいつを連れて

逃げることにした愛人

「逃げるぞアテナ!! その子つれて逃げるぞ!!」

「え? でも・・・」

「いいから行くぞ!!」

愛人は赤ん坊を抱いているアテナを連れて、赤ん坊ごと連れて逃げる

「どこへ行く! 愛人!!」

「あの子! 赤ん坊をまた捨てに行くのね!!」

「させるか!!」

「愛人を追いかけなさい!!! あの子を取戻すのよ!!!」

四大天使は赤ん坊を救うために、愛人を逮捕しようとする。仲間なのに

四代天使は愛人の敵になったのだ。別に愛人は本当の親を探しに行っただけ、これ以上誤解を生むと本当に厄介ごとになってくる。

これ以上の面倒ごと増えるのもごめんだろう。3日間の休みを貰ったのにも関わらず仕事は超面倒に巻き込まれるなど、最悪以外なかった

しばらく本部から離れ、建物の裏に隠れる愛人とアテナ

「たく、また面倒ごとかよ……たくお前のパパはどこ言ったんだ？」

「ばーばぶ」

「パパじゃなくてママなら居るだつて？」

「なんでお前わかるの？アテナ？この子がなにを言っているのか理解出来るの!？」

アテナがマジで母親になったかのように、赤ん坊の言葉を理解していた

「それでどうするの？お兄ちゃん？このまま私と結婚してこの子連れで私とこの子と一緒に住める場所を探すの？」

「その子の親を捜して、さっさとこの面倒ごとを済ませますか？あいに俺はお前を妻にする気はないね。俺はいつまでもお前を妹にする方がいいんだわ？さりげなくお前らと一緒に逃げるような選択肢を俺に選ばせるのはやめてくれない？」

アテナはなにを血迷ったことをさせようとするのか、本気でこの赤ん坊を自分の子だと思いついていないだろうか？

「この子は私たちの子よ!!お兄ちゃん!……いえ愛人！」

「フルネームで呼んでいるよ!!こいつここのままでぼんやりしてたけ!?!お前の子じゃないから!!そいつは捨て子だから!!」

「愛人!!私とこの子連れてどこか遠くに逃げよう!!」

「なにアホなこと言ってるんだ!?!思い込んでじゃん!?!自分の子だと思いついて入るじゃん!!こいつここのままで思い込みが激しかったけ!?!」

アテナはアリシアに愛人を渡すなど認めていない。だから自分と

結婚すれば、いつまでも一緒に居られる。もう彼女は愛人の思うように兄妹だけの関係だけじゃあ満足できなかったのだ

アテナもますます面倒になってきた愛人

するとある放送が街に流れる

『エンジェル騎士団からのお知らせです!!!街の皆様!!エンジェル騎士団所属七海・愛人がオレンジ・ぷらねっと所属アテナ・グローリイと交際していたことが発覚しました!!更に子供も生んでいて、今その子を捨てようとしています!!ただちに七海・愛人を見つけたら、エンジェル騎士団に連絡して下さい!!私たち七海・愛人は犯罪者です!!』
「なんてことしてくれたんだあいつらあああああああああ
!!!??」

このことは誰にも見られず秘密にするはずが

エンジェル騎士団の緊急放送により、この子が自分の赤ん坊だと誤解をネオ・ヴェネツア全体に広まった

「くそーこのままじゃあまずい、とにかく逃げるぞ!!」

「え?私とこの子を連れて逃げるの?私と結婚してくれるの?」

「結婚はしないが厄介なことになった以上は逃げるぞ!!一刻も早く……本当の親を捜すんだ!!」

街ではもう愛人を捜そうとしている人が居る。今のところウンディーネが愛人を捜している様子はなかった。

「どうするの愛人?」

「とりあえず海に出るぞ?ゴンドラで海の上を渡りながら本当の親を探す」

「でもどうやって?」

「ゴンドラはオレンジ・ぷらねっとの会社の盗む。海の上なら奴らに掴まることもねえ!そして問題の本当の親は……アラエル!!」

『はー』

「この子を!!」

『調べます!!』

アラエルのスカイバードの赤外線レーザーで赤ん坊をスキャンする。

『スキャン完了です!! 本当にこの赤ん坊様がアテナ様とマスターの遺伝を引いているか調べます!!』

「テメーも誤解を受けているんじゃない?! この子の細胞を調べて本当の親を探せ!! そしてこの街の人をスキャンして調べれば本当の親が居るはずだ!!」

『了解です!!』

アラエルは誤解を受けるも赤ん坊の細胞データを活用して、本当の親を探しに行った

ここから先はアラエルを無しに進むしかない。一刻も早く誰も見つけずにオレンジ・ぷらねつとの会社を目指し、ゴンドラを盗んでひとまずは海の上に逃げる

「さてと、アテナこれを冠れ?」

愛人はどこからか麦わら帽子を出し、アテナに被せる

アテナの顔を見せないためだろう。愛人も帽子を冠って顔を隠す

愛人は制服をその場で捨て、どこからか私服に着替えた

「赤ん坊の方は顔を見せても問題ない。まだ住民の人は顔は知らないはずだからな? それにしてもこいつなんて名前だろうな?」

「この子はアレスよ!!」

「勝手に名前付けるな!!? だから俺らの子じゃないから!! ていうかアレスはやめておけ!! それは戦神としてはいいけど最後の結末は人間に殺されるから!! しかも親に反発な神の名前だからやめろ!!」

アテナも勝手にもう名前まで付けていた。お願いだからこれ以上厄介なことをしないでほしいしその子に変なことを吹き込まないで欲しかった

「さて? 行くぞ?」

「バレないの?」

「大丈夫だ? 帽子で顔を隠しているからな?」

二人は街の道を歩いている。街の人とすれ違うが、通報はされなかった。

顔をうまく帽子で隠れているため、愛人やアテナだとは街の人は気づかなかつた

うまくまた人が居ない道に入ったが

しかし

「見つけたわよ愛人!!」

「っ?!藍華!」

なんと後ろから藍華に見つかる

帽子で顔を隠しているのに、なぜバレたのか

その理由は

「アテナさんの褐色肌に気づかないとでも?」

「な!」

そう、顔が帽子で隠れていても、アテナの特徴のある褐色肌は隠すことはできなかつたのだ。赤ん坊を抱える腕は布で隠しては居ない。しかも暑い夏なため、身を隠すコートを着させるわけにもいかなかつた。どうやら藍華は顔ではなく、アテナの肌に気づいたのだ

「そこまでだ愛人!」

「く?!晁まで!!」

更にもう反対方向に晁が出現した

完全に囲まれた

「アクトから話は聞いている。お前せつかくアテナと結婚して生んだ子供を捨てるとは親として責任を取ろうとは思わないのか?」

「だから俺の子じゃねえ!俺はまだ結婚もしてないから!!お前らも騙されているんじゃない!!」

「嘘を言わない愛人!!あんたとアテナさんの子に決まっているでしょ!!」

「このあんたと同じ蒼髪と蒼い瞳やアテナさんと同じ褐色肌でそしてこのアホ毛まさしくあんたとアテナさんの子よ!」

「外見は確かにそうだが！マジで俺とアテナの子じゃねえから!!」

「アテナさん！かわいいですねアレスちゃん？男の子ですか？」

「うん、男の子だよ？」

「おい!?だからそいつはアレスって名前じゃねえ!!?」

「まったく、あいつにアテナは勿体ないな」

「おい!?二人とも人の話を聞かないだろ!」

「愛人がアテナさんと結婚してくれたおかげで、私たちのアリシアさんが結婚せずに済むわ!」

「なんで俺とアテナが結婚するから、アリシアが結婚せずに済むわけ?」

二人は、愛人の誤解を聞こうともせず、アテナの抱きかかえている赤ん坊アレスの方へ近づいて和んでいた

「ああ、いいなく、私も子供欲しいなく」

「ああ、私もこの子のような子を産んでみたいなく」

「え?」

藍華と晃が子供を持つことが羨ましいと言った。その言葉を聞いた愛人がおかしいと変に思った

「なによ愛人?あたしだって女なんだから、子供くらい欲しいわよ?」

「そうだぞ愛人?それになにか?私のような女が子供持つ事がおかしいと言うのか?」

「いや、別にお前らが子供欲しがるのは女として当たり前だけどさ?

俺が言いたいのはそこじゃなくて、お前ら二人はもう子供生めるじゃん?得に晃はすぐにもさ?」

「え?」

愛人は二人が子供を欲しがることには変に思っていない。愛人がおかしいと思ったのはそこでなく、二人がまるで子供なんて作れないような言葉に変に思ったのだ

「だって?どうせ晃はアクトと結婚して子供生むだろ?」

「な!?なんで私とアクトなんだよ!!」

「え!?お前らでつきり付き合ってると思った!?だってお前らいつも一

緒に居るじゃんかよ!!」

「アクトとは関係ねえよ!!」

「それに知っているだぜ俺? お前の携帯の待ち受け画面はアクトの写真だって? それにお前らお似合いだと思っぜ?」

「すわ!! なんてお前がそれを知っているだよ!! それに恥ずかしいから言うな!!」

「それと藍華? お前もそうだろ?」

「え!!? なんで私もなのよ!!?」

「お前にはアルが居るだろ? さっさと付き合っつて結婚でもすれば、すぐにでも子供が手に入るだろ?」

「禁止!! それ以上の恥ずかしいセリフ禁止!!」

「お前ら二人がアルとアクトのことが好きなことくらい、みんな知っているっての? まあ本人は気づいてないがな、そんなに欲しいなら今あいつに電話して・・・」

「それだけはやめて!! (やめろ)!!」

愛人はアクトとアルに電話して、藍華と晃が好きだと伝えようとしたら二人に止められた。

「なんで止めるんだよ?」

「そりやあ止めるでしょうが!! なんでアルくんに私が好きだと伝えるのよ!!?」

「だっつてお前? 欲しいんだろ子供? だっつたらまずは男を手に入れなきゃだよ? 晃ももう20歳だろ? もうそろそろ婚活の時期じゃねえのお前は?」

「20だからアクトと付き合い合わなきゃいけない道理は無いだろ!! それにそういのはいろいろしなきゃいけないことがあるだろ!! 告白するとか、結婚するならまずは両親に挨拶するとか・・・」

「うわ! お前もうアクトとそういうことしようとしてたんだ? なんだよ? お前やっぱアクトにぞっこんじゃねえか? 早くアクトが欲しいなら早くしろよ? あいつ案外いろんな女性にモテるから早くしないと取られるぞ?」

「なに!!? あのアクトが!!?」

「そういや、アルもモテるんだよなく、この前なんかノームの女の子たちに囲まれていたぜ？」

「え!?アルくんが!」

藍華と晁はアクトとアルがいろんな女性にモテると聞いた途端落ち着かずに居られなくなり、詳しい話を愛人から聞く

アクトはエンジェル騎士団の団長。24歳でかっこいい騎士様としても女性に人気なのだ。実はネットのサイトで、『ネオ・ヴェネツアに住んでいる結婚したい男ランキング』ってのがある。

そのランキングでアクトは載せられている。上位で第2位となっている。

エンジェル騎士団団長にしてイケメン騎士としても人気。まるで絵に描いた女の子に憧れる王子様のような顔つきなのだ

アルは3位、かわいい坊やとしてマスコットみたいなかわいい男子として女性に大人気。付き合いたいならあんなかわいい子と付き合いたいと言う女性も多く居る

だから二人はこの先結婚する可能性があるということだ

「まさか!!あの甲斐性なしのアクトがそこまでいろんな女性にモテるなんてな……」

「アルくんは確かにかわいいけど……私からすればそんな感じじゃない……でもありえるかも!!」

「というわけで電話するな?」

「だからやめて!!(やめろ!!)」

「なんで?別にお前らのためにやってあげてんじゃん?お前らがさつさと付き合わないからさ?」

「だから!!ここは自分で自分ですることであつてな!!」

「プロポーズは私たちがするからいいの!!」

「あつそ?じゃあ俺に協力してくれるよね?」

「え?」

「協力してくれないの?へえくじゃあこのことはアクトとアルに伝えて……」

「わかった!!協力する!!」

「だからアルくんには言わないで!!」

「よし、なら俺たちをオレンジ・ぷらねつとの会社までゴンドラで連れて行け?俺たちを乗せていることは必ず他の奴らには隠せよ?でなければわかっているよな?」

「わかった!!オレンジ・ぷらねつとの会社だな!!」

「今すぐゴンドラを用意するわ!!」

愛人は悪巧みをした

もしも自分たちに協力しなければあの二人の異性の男に好きだと言いつらす。二人を脅した正直悪いと思っているが、今の状況は二人にはまずい。状況を変えるには二人を利用するしか、この状況を二人を利用しなければ乗り越えることは不可能だった

晃と藍華にゴンドラを用意してもらい。今は海の上に居る。

「ばぶばぶ」

「たく、お前の父ちゃんどこに居るの?」

「ばぶばぶ」

「あら?愛人みたいな面白いパパだった?」

「おや?だから俺のことを怖がらないのか?母ちゃんはどんな感じ?」

「ばーぶばーぶ」

「私みたいな子供想いのお母さんだった?」

「たく、道理で俺たちが一緒に居ても泣かないわけだぜ?とりあえずアップルジュース飲め?」

「ばぶばぶ」

「お前らもう夫婦だろ?話し方が完璧夫婦の喋り方だぞ?」

ゴンドラの上で赤ん坊を和んでいた。オレンジ・ぷらねつとに着くまでには時間があるため、捨て子の赤ん坊の相手をしていた

「それでその捨て子の親を捜しているんだな?」

「ああ、どうにか見つければいいんだが、アラエルまだ見つからないのか?」

『申し訳ありません。さすがの私も700万人程居る人口を調べるの

は骨が折れます』

腕時計コントローラーからアラエルと連絡しているが、どうにも見
つからない様子

「とにかくこのままオレンジ・ぷらねっと会社に向かってくれ!!」

「だけど! アリスちゃんたちが見たら驚くんじゃない?」

「アリスたちだって誤解だってわかってくれるだろ? 俺の言葉を聞いて
わかってくれるさ?」

「確かにわかってくれるかも・・・」

オレンジ・ぷらねっとの会社のウンディーネたちはもう愛人の手の
中

アリスたちが愛人の言う言葉を聞かないわけがない

「とにかく会社に行けば、本当の親が見つかるまでアリス達に匿まっ
てもらおう。エンジェル騎士団からこの赤ん坊を守るんだ!!」

「あんたマジで神話通りになってんじゃない?! ルシファーがミカエルに
逆らってんじゃない?! あんたエンジェル騎士団の裏切り者になってん
じゃない?」

自分の所属会社のエンジェル騎士団に追われるなど、前代未聞だろ
う

本当の親にこの赤ん坊を返すまでは、オレンジ・ぷらねっとの会社
でこの子の世話をしながら、身を隠すしかなかった。ていうかいつに
なったら愛人とアテナの誤解が解けるのだろうか

こんなこと、ARIAカンパニーのアリシアと灯里が聞いたら、な
にをされるか

「あら? 晁ちゃん? 藍華ちゃん?」

「あ! 晁さん! 藍華ちゃん!」

「お、おお!! アリシア!」

「アリシアさん! 灯里!」

「あら? お客様?」

「ああ、そうなんだ?・・・」

そう思っていた先から、後ろからゴンドラでアリシアと灯里がやってきた

見たところ灯里の練習途中らしい

晃と藍華は一応二人を隠すためにお客として隠している

愛人はアテナの帽子を顔を隠すように被し直す

「申し訳ありませんお客様……楽しい観光の時に…….
あらか？愛人くん？にアテナちゃん？」

「え!？」

「あ！本当だ！愛人さんに！アテナさんだ!!」

帽子で顔を隠しているのにも関わらず。正体がバレた

「いや……なにを言っているのですか？私はとある夫婦ですよ？」

愛人がお客様のフリをして芝居をするが

「なにを言っているの愛人くん？男とは思えない綺麗な手と、そのイケボイスな声と愛人くんの体から花のような香りもするし、帽子で隠しているかもしれないけど、その海の色のような蒼、綺麗な肌にファッションセンスのある服、完璧愛人くんだよ？」

「愛人さんの特徴がわかりやすいですもんね？愛人さんが仮面ライダーのコスプレや人為変態やテラフォーマーのコスプレやアイアンマンやブラックパンサーやアントマンやスーパー戦隊のコスプレで姿を隠したとしても、私とアリシアさんは瞬時に愛人さんだって気づきますよ？」

「お前らどうなってるの!?!?なんですかすぐに俺だと分かるの!?!?普段お前ら俺のなにを見ているんだよ!?!?ていうか体から花の香りがするってなに?!?俺言っておくけど香水とかつけてないからな!?!?ていうかなんでお前ら俺の体の匂いがわかるんだ!?!?お前らストーカーか!?!?」

灯里とアリシアは愛人のなにを理解しているのだろうか……

愛人も冠っていた帽子を脱いで、姿を現した

あんな理由を聞いて姿を見せずにはいられなかった

どのみち、この二人から身を隠そうなど、無駄なことだった

「それでその子がそうなの？」

「見たいですね？エンジェル騎士団に追われているようですね？」

「ああ、言っておくがこいつは・・・」

「わかるわよ？この子は捨て子なのよね？」

「え？」

「わかりますよ？愛人さんとアテナさんの間の子じゃないですよね？」

「お前ら・・・」

なんとここに誤解だと初めて理解してくれた人が居た

アリシアと灯里はやっぱり愛人のことも理解してくれるように、言う言葉も信じてくれた

誤解を信じてくれた二人にはじめて感謝の気持ちになった愛人

だが

「だって？愛人くんが違う女の人と結婚するわけないものね？」

「・・・・・・は？」

「そうですよ？私たちのことも見ずに違う女の人とお付き合いしているうえに子供まで生んだなんてありえるはずがありません」

「なあ藍華と晁？なんか変じゃねえ？あの二人？まるで俺が女には縁がないみたいない言い方しているぞ？誤解だと理解しているんじゃないか？」

「あの二人、なにがあっても愛人が結婚だなんて認めない気がする」
「自分たちを差し置いて違う女の人と結婚して子を生んでいたことなど、認める気はないみたいだな？」

誤解だと理解してくれたのではなく、単に認めないだけだった

「もうめんどい！晁！藍華！そのままオレンジ・ぷらねつとの会社へ逃げ！！もう誤解だと言うのも信じてくれないなら、本当の親を見つめるまで！オレンジ・ぷらねつとの会社に隠れるしかない！！」
「わ、わかった！！」

愛人はもう誤解を話しても信じてくれないなら話しても無駄だと判断し

さっさと会社に急ぐ

無論納得いかないアリシアと灯里も追いかける

無事エンジェル騎士団に見つからず。オレンジ・プラネットの本社に着いた

事情を話し、匿まってもらえることになった

そして今アリスとアテナ寮の部屋で赤ん坊の面倒を見ていた

「事情はわかりました。つまり……………」

兄さんが遂にアテナ先輩と結婚したんですね!!」

「まったくもってわかってねえじゃねえか!? だから俺とアテナの子じゃねえって言うてんだろ!!」

希望だったアリスにでさえ、事情を話してもやっぱり誤解だと信じられなかった

「まったく匿まってくれるのはうれしいが、結局誤解は解かれずか……………」

「大丈夫です! 私は愛人さんとアテナさんの子じゃないって信じてます!!」

「テメーは信じているじゃなくて!! 認めてないだけだろ灯里!!?」

アリスは誤解を信じてくれないどころか灯里は認めてない

ここまで信用のなさは初めてだった

「まったくここで匿まってくれるのはうれしいが、おかげで他のウンディーネたちが赤ん坊を和みにこのアリスの部屋に集ってくるのは骨が折れるがな？」

「アテナさん！アレスちゃんかわいいですね！」

「兄さんとアテナさんにそっくりです！」

「兄さんがアテナさんを選んでくれると信じてみました!!」

「これで兄さんもオレンジ・ぷらねっとの本当のお兄さんになれます！」

「これでこの会社も安泰です！」

「もうこいつら、俺とアテナが結婚しなきゃ気がすまないみたいだ」

もうオレンジ・ぷらねっとのウンディーネたちは愛人とアテナを結婚させなきゃ気がすまないらしい。もうこのままエンジェル騎士団やめて、オレンジ・ぷらねっとの会社に転職しそうだった

「ん？」

「ん~~~~、ん~~~~!!」

赤ん坊が突然様子がおかしくなった

「どうしたんだろ？」

「ああ、お腹空いてるんだろ？待ってる？今ミルク持って来る」

愛人は本社の厨房を借りて、赤ん坊が飲むミルクの容器やミルクの元をどこからか持って来て、ミルクを作る。暑すぎるのもまずい。冷ましすぎるのもだめ、赤ん坊が飲むその中間の暖かさで冷まさせる
愛人は完全にパパになっていた

「ほれ？しっかり飲めよ？」

「ちゅむちゅむ」

「飲んだ！しっかり飲んだ！」

「アテナ？もう少し頭を上げさせてやってくれ？それじゃあ飲みづらいから？」

「うん」

アテナもしっかり赤ん坊を抱きかかえて、ミルクの容器を持って飲ませる

アテナもさつきから赤ん坊を抱きかかえているせいか、赤ん坊を抱き方もうまくなった。完全にアテナもママになっている

「愛人？完全にパパになってるわよ？ついでにアテナさんも？」

「仕方ないだろ？こいつも本気で俺とアテナのことをパパとママだと思ってるやがるし、親は相当俺らに似ているようだな？」

「その子の本当の親は一体どこに居るんだろうね？」

「この街に居る事は確かだろう？今アラエルが探しに行っている。それを待つしかない」

「でも、酷いよね？エンジェル騎士団本部の玄関に赤ん坊を捨てるなんて？」

「そうですよ！なんでこんな小さな赤ん坊を捨てるなんて」

アリスアと灯里はこの赤ん坊を捨てたことに酷いと言ひ張る

確かにこんな小さな赤ん坊を一人にして置いて行くなど親としてはありえない

だが

「それは違うんじゃないかな？アリスアちゃん？」

「え？」

「ああ、俺もこの子を捨てたとは思えねえ」

「え？どういうことですか？」

愛人とアテナは突然この赤ん坊は捨てられたのではないと言ひ出す

二人はなにを根拠に言っているのだろうか。二人はこの赤ん坊の親になったような口ぶりをする

「やっぱりアテナもそう思うだろ？」

「うん。アリスアちゃん？変だと思わない？」

「なにが？」

「この子が捨てられてた場所？」

「え？エンジェル騎士団本部の玄関の近くよね？それがどうかしたの？」

「それが変なんだ」

「え？」

「おかしいとは思わないのか？そんなところに捨てれば確実に騎士団に通報されやすいだろう？」

「確かにそれはそうだけど・・・」

「ああ悪い。言い方間違えた。俺の言いたいことは・・・・・・監視カメラが写るような玄関に捨てたつてことがおかしいつて言っているんだ」

「!?」

そう、赤ん坊を捨てるにははおかしかった。

普通は保護してもらおう施設に捨てるのが常識なのだが

エンジェル騎士団も一応保護はできる。だが

エンジェル騎士団本部の玄関の近くに捨てるなんておかしいにも程がある

実は玄関や本部の周りには監視カメラがついている

赤ん坊はその明らかにカメラに移るような玄関に捨てられたのだ

そんなことすれば一発で捨てた人を捜して通報される

愛人はアクトに事情を聞いたのだが、捨てられた場所は監視カメラが写る玄関の近くだったらしい

おかしい

普通監視カメラに写つてでも、その子を捨てるのか

だから二人は深く考えた

普通監視カメラに写つてまで捨てるなんてありえない

捨てた本人もカメラに気づかないはずがない

もしかしたらこの赤ん坊を騎士団に守ってほしいために置いたのではないかと仮説で考えた

この赤ん坊はエンジェル騎士団に守ってもらうためにあそこに置いたのだと二人は考えた

「つてことはなに？その子は何か追われてたつてこと？」

「仮説ではあるがな・・・俺はともこの子の親が捨てたなんて思え

ない」

「うん。私も思う。その証拠に……」

「あ!?それって!!」

そう、確かな証拠になるような物があつた

それは

赤ん坊が着ている服に血で描かれた手の跡がついていたこと

「おかしいだろ?普通こんな赤ん坊の服に血なんて付く分けないだろ?」

「どういうことなんだ!?誰かに追われているのか!!?こんなアクアに!!」

「今頃アクトが監視カメラに移っていた映像を調べているだろう。(プルルルル、プルルルル)……ほら?さつそくだ?はい?もしもし?」

愛人の腕時計コントローラーから通話が鳴る

『愛人か!?赤ん坊と一緒に居るよな!』

「捨ててないから安心しろ!!」

『疑ってすまなかつた!あの赤ん坊は君たちの子じゃなかつたんだな?』

アクトもやっと自分の子じゃないと信じてくれた。

「謝らなくていいから!わかつたんだろ本当の親が?」

『ああ、監視カメラから捨てた人を見つけた。その人は母親だつた』

「それで?その母親は誰なのかわかつたのか?」

『ああ、しかも厄介な人だつた』

「厄介な人?一体誰なんだ?」

『君も知っているはずだ?……マンホームの大財閥の家の者で『鹿波矢家』だ!』

「鹿波矢家!?こいつ!?あの鹿波矢家の子供だつたのか!」

「どうかしたのですか愛人さん?」

「灯里お前もマンホームの出身だから知っているだろ?こいつはあのマンホームの大財閥の子供。『鹿波矢家』の子供らしい!」

「鹿波矢家!?!あの大金持ちのお金持ちの!?!」

「なんなの灯里? 鹿波矢家って?」

「マンホームで大企業としても有名な大金持ちの家だよ?」

鹿波矢家とは

マンホームの大企業にして大金持ちの家である

その家は初めはただの独立した小さな車の会社だったが、その鹿波矢の主人がマンホームで大人気な程の高級車を作り、その売り上げが上がり、会社は大企業になった

マンホームだけでなく、ルナワンやルナツーとしても人気だった

いろんな星からたらっつく財産を手に入れた鹿波矢家はセレブを越える程のお金持ちになった。マンホームでは鹿波矢家を知らない者はいない

「なんで? そんな大金持ちの子がなんで本部に捨てられていた?」

『いや、捨てられてたんじゃない。その子は親と一緒にこのアクアまで逃げて来たんだ?』

「逃げてきた? どういうことだ?」

『調べたんだが、その鹿波矢の主人の部下の副社長に狙われているんだ?』

「狙われている? なんで?」

『実はマンホームの警視庁に調べてもらったんだが、鹿波矢家の主人が先週病気で亡くなったらしい。その赤ん坊はその主人の子だ。副社長は社長が亡くなった主人の財産を盗むためにその子供を会社に跡を付かせて、財産と権力を盗むつもりらしい』

「アクアに逃げて来たのはなんでだ?」

『鹿波矢の主人の奥さんはこのアクアの出身らしい。実家に戻って子供と一緒に身を隠そうとしたが、その副社長と財産を盗もうとする仲間と一緒にアクアまで追いかけてきたらしい』

「つまり母親は今?」

『ああ、子供だけ我々に捨てたのではなく守ってもらったために本部に置いたんだ? ちなみにその子の名前は歩くんって言うんだ?』

「なるほど、事情も状況もわかった?」

『まさか？お前？変な事は考えていないよな？』

「はん。心配するな？とりあえず母親を見つけたら連絡するから逮捕する準備だけしてろよ？」

『あーおい!?愛人!!』

ピ

通信を切る。

更に

『マスター!!母親が見つかりました!!ネオ・アドリア海に廃墟のある小島があります!!そこで変な男の5人の集団に連れてかれました!!』

アラエルから通信が入り、母親の場所がわかった

「さてと、場所もわかった。やることは一つだ！」

「うん、そうだね？歩くんを本当の親に返そう？」

愛人とアテナは突然立ち上がり、アテナは歩をしつかり抱きかかえ。愛人は剣を腰に付け、戦闘体勢に入るかのように部屋から出る

「まさか!?行くのか！」

「当たり前だろ!!行こうぜ歩？お前の母に会いに行こうか？」

「ばぶー！」

「私たちは君の本当の親じゃないけど」

「最後までお前を息子だと思って……」

二人は部屋を出て、アテナは歩を抱いたまま、片手でオールを持ち、ゴンドラ置き場に行き。アテナは自分のゴンドラをオールで漕ぎ出す。歩は愛人に抱く。そして向かう先はネオ・アドリア海の廃墟のある小島へ

「正義のパパとママとして!!君を本当の親のもとへ連れていくことを責任を持つよ!!」

「ばぶー!!」

ネオ・アドリア海の有数の多島海がある。そのうちの一つが廃墟のある小島

その廃墟の中で、

「う!!」

歩の母親が縄で縛られていた。母親はアテナのように紫色の髪ではないが褐色肌をしていた

男の集団に水をかけられていた

「あのガキをどこへやった!!」

「知らないわ! 歩は誰にも渡しませんわ!! あの子は私の子です! 主人の会社の財産なんてあげますわ! でもあの子は渡しません!」

どうやら子供の居場所を吐かせようと、拷問に入るところだった

「だめです副社長! この女吐いたりしません」

「なら、体に聞くまでだ」

副社長の男が刀を取り出し、鞘を抜き、刃を母親の前に見せる

「どうだ? 怖いだろう? 死にたくなかったらガキの居場所を吐け!!」

「死んでも構わないわ!! あの子が無事なら私は自分の命を捨てる覚悟もありますわ!!」

「なら………仕方あるまい!」

副社長は刀を上に向け、母親の顔を切ろうとする

「う!!」

だが

ドガン!!!

「なんだ!？」

突然母親の後ろにあった壁が壊された。そしてそこから

「おいおい？お母さん困るぜ？歩のために命貼るなんて母親としてもかっこいいけどよ？」

「歩く人にはね？まだ小さいんだよ？命を貼るのはいいけど？」

壊した壁の穴から

「子供には母親が必要なんだよ（なのよ）!!」

「ばぶ!!」

「歩!!」

愛人とアテナと歩が出て来た

愛人は母親の縄を切り、アテナは歩を母親に抱かせる

「ああ!!歩!!」

「ばぶばぶ！」

母親も息子と再会して涙を流しながら歩を抱く

「おいお前か？副社長さんは？歩の母親を殺そうとするなんて随分と副社長とは思えないことするんだな？」

「黙れ!!貴様等は何者だ!!」

「ほう？知らないのか？」

「副社長!!エンジェル騎士団です!!」

「エンジェル騎士団だ!!どうしてここが!!」

「おい？俺はあいにくエンジェル……天使じゃねえ？俺は歩の母親を殺そうとしたお前らを裁く……」

今の彼は正義のルシファーではない

ルシファーは初めは天使だった。だが神に墜されたルシファーはその後どうなったか、墮天使だけではなく

「魔王ルシファア様だ!!!」

悪魔の王、魔王ルシファアになったのだ

今の彼は息子の母親を殺そうとした副社長たちを犯罪人とみなし
天使ではなく魔王として裁きを下さす

夕方、副社長たちはアクトたちが逮捕した。

あのあと母親の救出と共に副社長を含む犯罪人たちは愛人一人で
ボコボコにした

今はオレンジ・ぷらねつとの会社に居る

アクトは歩の母親とこれからのことを事情聴取をしていた

「本当にありがとうございます!」

「これから?どうするのですか?」

「マンホームに戻ります。夫の会社を置いておくわけにはいきませ
ん。社長は私になり。歩のためにもこれからもあの会社を立て直し
て行きます」

「そうですか」

母親は夫の会社を立て直し、息子が継げるように会社をやり直すと
決めた

「あれ?歩くんは?」

「歩なら・・・あそこ?」

「ん?おいおい、アテナと愛人?完璧に歩くんの親になっているじや
ないか?」

歩はアテナと愛人と一緒に食堂で一緒にアップルジュースを飲んで
いた

「くう！上手いか？歩？」

「ばぶばぶ」

「歩くん？今日だけで短かったけど楽しかったよ？君と一緒に入れて？」

「俺もだ！歩本当のパパやママじゃなくて悪いがお前と会えてよかったと思ってる。お前と会えたことで俺はパパとして、アテナはママとして夫婦の気分を味わえた。もちろん……お前のことを本気で息子だと思ってる。本当に楽しかったぜ？」

「でもね歩？私とお兄ちゃんやんは兄妹なの？私たちはあなたの親にはなれないし、あなたには本当のお母さんが居る。あなたは本当のお母さんと一緒に居て？」

「う……う……」

「泣くなよ歩？また会えるって？またここに来い？俺とアテナはいつでも歓迎する。今度はお母さんと一緒にこの街を観光しよう？」

「約束しよ？大きくなったらあなたがここに来たら、私たちは必ず歓迎する」

「約束だ。男だろ？また会える。俺たちはずっとここに居るから？」

「う……う……ばぶ」

歩は涙をこらえて

歩の小さな手に指きりげんまんをする

歩にとってもアテナや愛人もこの暑い夏に夫婦のような思い出を作れたことを歩に感謝し、今度はお母さんと一緒に観光しに来たら、必ず歓迎することをまた会えることを約束して、

歩は

本当のお母さんと共にマンホームに帰った

愛人とアテナは歩の親として生きられたことは、永遠に忘れない思い出になるだろう

この時間は短かったけど、夫婦のように生きられた歩と過ごせたこの夏を忘れないように

歩を『さよなら』は言わずに見送った

第十八話 マンホームの料理

まだまだ暑い夏が続く季節

先週起こった事件『鹿波矢家・歩行方不明事件』を無事解決させた愛人とアテナ

その事件の活躍により、二人の評価がますます上がる
それと同時にネオ・ヴェネチア中に誤解をも生んだ

鹿波矢家の子供。鹿波矢・歩が愛人とアテナの子だと、誤解を受けた

事件は解決したあとは、すぐに誤解だと街の人々も理解しすぐさま誤解を受けた

だがオレンジ・ぶらねつとのウンディーネたちは出来たらこのままアテナと結婚してと世迷言を言う人も居た

だが一週間過ぎると、もうそんな話は誰もしなくなった。さすがに言い過ぎるのも限度だとわかってくれたのだろうか、もう誰もそういう話をしなくなった

今日のい愛人はあの事件の日は本来なら3日間の連休を貰っていたのだが、その事件のせいで3連休が無駄になってしまったので、今日という今日はその取れなかった3連休を今日もらった

残念ながら、今日はアテナは休みではない。他のみんなも仕事で忙しいため、今日は一人で出かけようと愛人は考えていた

よくよく考えていると、彼はこの街『ネオ・ヴェネツィア』を観光したことは一度もないまま、彼はこの街で働いていたのだ。

マンホーム^地に居た頃は、アクア^火に行こうなど、これ微塵も彼にはなかった

だから今日は私服に着替えて、騎士の仕事を忘れて、観光客になった気分で今日を過ごそうと思っていた

彼はとりあえず私服に着替えて街に出た

そして前回と同じく。目的地も無いままただ街を歩く。街の人に出会えば挨拶が必ずやってくる。もうこの街で彼を知らない人は誰もいないだろう。

街の人には『愛人さん』や『愛人にいちちゃん』や『七海ちゃん』や『愛人ちゃん』と呼んでくる人もいる

本人はできれば『七海ちゃん』はやめてほしいと言ってる。理由は呼び名が女の子ぽいから男で女の名前で呼ばれるのは男としても嬉しくないからだ

とまあ言ったようにこの街で彼は人気者というわけだ

「さて、外に出たはいいものの。なにしようか」

目的がないだけで、こうも暇になるとは彼も思っていなかった
だか

彼はどこを歩いても彼はまたこの前の事件のように、また巻き込まれるだろう

彼が暇になることは絶対にならない

どんな平凡な暮らしをしても彼はまたいろんな騒動に巻き込まれる『トラブルメーカー』なのだから

そして今日も

「あ！愛人さん!!」

「灯里？仕事か？」

そしてまた偶然と灯里と出会う

「今日はおやすみですか？」

「ああ、あの事件で取るはずだった3連休をな？」

「そうですか。今日はどちらへ？」

「いや、ただ街を出歩いているだけなんだ？」

「ほへ？せっかくのおやすみなのにですか？」

「ああ、休みを取れたのいいが、どうも……やる事が無く
てなっ。」

「あの……」

「ん？」

突然小さな女の子の声がした。よく見たら、灯里の後ろに小さな女の子が引っ付いていた

見た感じ10歳近くの女の子だった

「そいつは？」

「この子はアイちゃん。私の友達です」

「初めまして、愛野アイです。マンホーム出身で、アクアに遊びに来たんです」

「へえ、わざわざこのアクアに来るなんてな・・・」

「もしかして？七海・愛人さんですか？」

「そうだけど？」

「やっぱり！ネオ・ヴェネツィアを守るエンジェル騎士の墮天使！ジャステイス・ルシファーこと七海・愛人さんだ！本物だ！」

「何？俺マンホームでも人気者なのか？」

「雑誌見てないんですか？」

「雑誌？あいにく俺は新聞は読まないんだよな？」

「じゃあこれ読んでください？」

「ん？」

灯里が持っていた雑誌を愛人は受け取る。

内容は

『ネオ・ヴェネツィアを守る墮天使騎士・七海愛人』

彼はマンホームの大財閥の『鹿波矢家の子』を救出するなど数多くの事件を解決

さらに多くの人たちの災害から救出させるなど、騎士として最高の戦力を持っている

マンホームの人々から、彼を『スーパーヒーロー』と言う者もいる』

「おいおい、誰がスーパーヒーローだ。相変わらずだなマンホームのクソ共目、余計なことかしらない」

「愛人さん？これからよかったら私たちと遊んでくれませんか？」

「あ？灯里も休みなのか？」

「私は愛ちゃんの付き添いだけど。アイちゃんが・・・」

「ダメですか？」

アイが可愛い小動物のような眼差しで見る。

目が言っている『是非、遊んでください』と

マンホームの人々からすれば、愛人は有名人、そんな人と遊んでみたいはず、

これではまるで愛人がネオ・ヴェネツィアのアイドルになった気分だ

「わかったよ？二人に付き合ってやるよ？」

「やった!!」

「ありがとうございます!!愛人さん！」

「どうせ暇だしな？でもどこへ行く？」

「でしたら、このまま街を観光します？」

「別にいいけど、俺にとってこの街は俺の庭みたいなもんだから、まあ観光客になった気分で遊ぶか？金も多くあるしな？」

というわけで、愛人は灯里とアイと一緒に街を観光することになった

どうやらアイは愛人のファンらしく、会ってみたかったらしい

と言つても、行き先は全然考えていない

アイをどうにか楽しいところへ連れて行きたかったが、あまりの急な話で行き先を考えていない。

というより元からないが

「とりあえずどこ行こうか？」

「あの愛人さん？」

「何灯里？なんか面白いところでもあるの？」

「いや、そうじゃなくて？」

灯里は彼のやっているある光景に質問せずにはいられなかった
それは

「アイちゃんの首に、どうして犬の首輪をしているんですか？」

愛人はアイの首に犬の首輪をさせて歩いていた

無論愛人が飼い主になつたかのように首輪にはちゃんと紐も付いていて、愛人が紐を持つていた

「え？迷子になつたら困るじゃん？」

「そういう理由!?そんな理由でアイちゃんに首輪させたんですか!？」

「大丈夫だ。この首輪は人間用だ」

「愛人さん？ちよつと私と人権の話をしませんか？」

「仕方ない。では俺も首輪しよう。そうすれば迷子にならずに済むぞ。紐はお前が持て？」

「そういう問題じゃありませんから!?愛人さんがペットになるんですか!?愛人さんが私のペットになつてくれるのは嬉しいですけど、これはダメですから!？」

迷子にならない対策としては手を繋ぐつて言うのが一般的なのだが、あいにく愛人には常識などあるはずもなく。アイの首に首輪をさせていた

ついでに自分も

これでは二人は灯里のペットだ。これはもはや人権問題になる

アイなんて、何もわからないままされるがままに、首輪していた

否定しても構わないのに

いや、否定するべきなのだが

「まあどうでもいいや。それよりどこに行く?」

とりあえず首輪を外して、どこへ行きたいかを聞く

「そうですね。もう少しでお昼ですし、お昼を過ぎす間に行き先を考え流のほうですか?」

「そうだな、とりあえず昼を確保するか?」

愛人は行き先のことしか考えてなく、もうお昼の時間になっていたことなど忘れていた

「そうだ。実はこの先で最近知り合つた人の定食屋があるんだけど。そこでお昼を過ぎすか?俺奢るからさ?」

「いいですよ!!そんな悪い!」

「いいって?最近仕事ばつかで全然お金を使う余裕がなくてお金がありあまるんだよ。だから今日は俺に奢らせてくれ?アイもせっか

くの旅行だ。お金は自分が本当に欲しいものに使い？」

「す、すいません愛人さん」

愛人の言う知り合いの定食屋へ行く。愛人はお金は家賃や水道代やガス代など、必要最低限しかお金を使っていなかったため。遊ぶ分のお金は全然使う余裕も仕事の忙しさで使っていなかった

「それでその定食屋はお手伝いの時に知り合ったのですか？」

「ああ、前にフライパンを直して欲しいって言う依頼があつてな、それを受けて知り合ったんだ」

「何の定食屋なんですか？」

「井ぶり系の定食屋だ」

「井ぶり系の？このネオ・ヴェネツィアにですか？」

「ああ、実はその定食屋の店長さんな、ネオ・ヴェネツィアでマンホームの日本の食べ物を再現したいって言ってこの街で店開いたのさ。このネオ・ヴェネツィアに日本の食べ物を知ってもらいたいためにな？」

「へえ、そうなんですか」

「今の日本は機械で料理も家事もなんでもしてくれるだろ？その店長さんはそれを自分で作りたい理由もあつて店を開いたのさ」

ネオ・ヴェネツィアでは、ピザやパスタなど、洋食店しかあまりないこの街にマンホームに日本という国にある料理『井ぶり系』の定食屋がすぐ近くにあった

定食屋の名前は『井弁屋』

「ここがですか？」

「ああ」

「井弁屋？」

「この定食屋、その井ぶりの持ち帰りの弁当もやってるから、名前が『井弁屋』なんだ」

「へえ」

「でも、まだやってませんか？」

「まだもう11時ですけど、まだ開店してないみたいですね」

灯里達は愛人の言う店の前に着いたが、もう少しで昼なのに店は開

店していない

「おかしいぞ?もう10時半くらいには開店しているはずだが」

「え?そうなんですか?」

「なんかあったのか?中に入るぞ?」

「え!?まずいですよ勝手に入るなんて!!」

「でも鍵が空いてないんじゃない?」

「いや……空いているぞ?」

愛人はあまりにも店が開店していないことに不自然に思い。勝手に玄関に入る。鍵は空いているらしく。そのまま店に入る。

「おい井のおっさん!!いねえのか!」

「お、お邪魔します」

「中は暗いですね?」

店の中に入ると、明かりは付いておらず。更に料理の仕込みもしていなかった。音もまるでしない。まるで廃棄のようだった

だが

店の奥から

「お!愛人の旦那!」

厨房から、この定食屋の従業員らしき人が出てきた。どうやらこの店の店長さんらしい

「どうした井のおっさん?もう11時だぞ。あんたの店はもう開店しているはずだろ?なんで開店していないんだ?」

「それがトラブルを起きちまって、今日から店じまいにしようと思うんだ?」

「トラブル?なんかあったのか?」

「実は……」

どうやら店長さんはトラブルを起こしてしまい。今日はだけは店をお休みするらしい

果たしてそのトラブルの内容とは……

「食材の仕入れ先の配達船が壊れた？」

「ああ、今朝仕入れ先から連絡あつてな？今朝接触事故があつてな、なんでも今朝の海はすごい波が強かつたらしく海に出るには危険すぎるほど強かつたらしい。でもウチの店の遅れないために出向してくれたんだが……」

「あまりの波の強さに。他の配達船と接触事故を起こしたわけだ」

「その通りだ旦那」

「それなら、シルフに頼むのはどうです？空なら海の波は関係なしに配達できますよ？」

「ウンディーネの嬢ちゃんもそう思うだろ？だが問題はそこじゃあないんだ」

「どういうことですか？」

配達ならシルフに任せればいいのに、他になんのお問題があるのだろうか。その問題が店を休みにする原因なのだろうか

「実はその接触事故で食材のほとんどがダメにしちまったんだ」

「そんな！」

「じゃあおじさん！店をお休みにさせたのも」

「ああ、そうだよ嬢ちゃん。食材不足でお休みにしたんだ」

店をお休みさせたのは、食材不足で休暇にしたことだった

確かに食材がなければ始まらない

休んだ原因を3人は納得した

愛人は更に店長さんの先ほどの言葉が気になり再度質問する

「そういや、さつきあんた『今日から休みにする』って言ったよな？今日からってことは、まだこの休みがかなり続くのか？」

「え!?!」

「ああ、配達船の修理はかなりかかるらしく。更に今日の配達一週間の食材だったんだ。それを調達するのにも時間がかかる。シルフのエアバイクでもそんなに多くの食材を運びこむのは不可能だ。すまんがワシには休みする以外方法がない」

「そんな・・・」

「それじゃあ、おじさんが・・・」

「・・・」

愛人はこのまま見過ごせないと頭を考える

灯里やアイもなんとかしてあげたいと一緒に考える

なんとか方法はないかと、愛人はある質問をする

「確か？ほとんどの食材がダメになったんだよな？ってことはなにか他に残っている食材はないのか？」

「ああ、あるよ？ただ・・・あんなの食材として使えるか・・・」

「なんだ？その食材は？」

「うなぎだよ」

「うなぎ?!?!」

なんと残った食材はうなぎだった

ネオ・ヴェネツィアでは、うなぎはあまり料理に使われていない、マンホームの日本にしか存在しない『うなぎ丼』を知らないため、ネオ・ヴェネツィア出身である店長さんはその料理があることなど知らない

うなぎもほとんど料理として使うことが少ないため、調理で扱うのも難しいほど、あまり料理に出されていない
だが

ここにいる愛人と灯里やアイはマンホームの日本出身であるため、うなぎと聞かされた時は、頭の中ですぐに『うなぎ丼』を作れると頭に閃いた

だから愛人は

二人に協力を求めた

「灯里、アイ、俺に考えがあるんだが、協力してくれないか？」

「もちろんやります！」

「私にできるなら！」

2人も、愛人が何をしようかわかった上で、返事をした

愛人もせっかくの休日をもた潰してしまうが

店長さんのためにまた手伝いをしようとしていた

「よし！井のおっさん！店やるぞ！」

「え？でも！」

「いいから！こっからは……………」

「二俺たちに（私たちに）任せて!!!」

果たして三人はどうやって『井弁屋』を開店させるのだろうか……………」

「へえ、マンホームの日本という国の伝統料理『井ぶり系』か」
「もうお昼だし行ってみないか藍華？」

「はい！行ってみたいですよ！」

道の途中で藍華と晃があるチラシを見て、歩いていた
持っていたチラシは。マンホームの日本という国の料理が食べら
れる定食屋のチラシだった

マンホームに行ったことがない二人は、その日本の料理が気にな
り、定食屋のの井弁屋に向かっていた

そして道の途中で

「あら？藍華ちゃん？晃ちゃん？」

「アリシア！」

「あ！アリシアさん！」

道の途中、アリシアと偶然出会う

「もしかしてこれからお昼ですか？」

「ええ、どこかで外食しようろ思ってたね？」

「だったら私たちとどうだ？これから新しいお店ができたって言う定
食屋に行こうとしたんだ」

「あら？それって井弁屋？」

「なんだ？知っていたのか？」

「ええ、さつき多くのチラシが街にばらまかれているわよ？」

「これですよね？なんでも新しいメニューができたそうですよ？」

「とりあえず向かってみて確かめようか？」

「そうね」

三人はチラシの書いてある地図を見て店の居場所を探す。

そして三人は着くと、店の前では

「うわ！すっごい行列！」

もう店の前では行列ができていた

「それだけ人気なのかしら？」

「すっごい行列だな・・・少し待てば入れるし、少し外で待つてよう
か？」

「そうね？」

そこまで長い行列はなかった。せいぜい十人ほど並んでいた
アリシアたちが並ぶと、後ろからどんどん行列ができる

「そうだったの、配達船の事故で食材がダメに・・・」
「ですから、私たちが残った材料でこのお店のお手伝いをしているんです」

「だから愛人もここで手伝いをな・・・」

事情は三人も理解したが、問題は・・・

「それでどうやって店を開店させたの？まともな食材がなかったんでしよう？」

「それなんですけど・・・」

「アイちゃん！悪いけどまたソースを作ってくれ！もう無くなりそうなんだ!!」

「はい！では！私は行きますので新しいメニューを待つててください
い」

「う、うんわかった」

アイは愛人に呼ばれて厨房に戻りソースを作る。

事情を聞いた三人は

「二人もどう思います？灯里たちが何を作ってると思いますか？」

「さあ？何だろうな、確か野菜も肉もダメにしてしまったって聞くけど、それ以外でどうやって・・・」

「この定食屋はマンホームの日本という国の料理を作ってるって聞いたわ。愛人くんや灯里ちゃんはマンホームの日本という国の出身だから、何か考えのあったることなのよ」

三人はあの二人のことを信じて見守る

そんな中厨房で

「よし!!井のおっさんそのまま香ばしいタレの匂いをお客の連中に嗅がせてやれ!」

「任せてくれ!それ!!」

愛人が店長に合図を送ると、店長はある焼いてる食べ物にアイの作ったソースをかける
すると

「!?!」

その香ばしいタレの匂いが店の中に広がり、店の中が香ばしい匂いで包まれた

「な……なにこれ?」

「一体何の匂いなんだ?この匂いを嗅いでいるだけですますお腹が減ってくる……」

「何かしら……私たちが嗅いだことのない匂いだわ」

三人はマンホームの料理を食べたことがないため、この香ばしい匂いが一体なんなのかわからなかった

「ま、食ってみなつて?灯里!三人分できたから持っててくれ?」

「はい!」

愛人は三人分の料理が完成したため、灯里がその料理を持っていく「お待たせしました!」

愛人が作った品は

「マンホームの料理で、うなぎ丼です!」

彼らが作った料理は『うなぎ丼』だった

うなぎしか材料がなかったこの店が出せたメニューがうなぎ丼だった

「これ!?うなぎなの!」

「なんか……身が赤いぞ」

藍華と晃はうなぎ丼を見るのが初めてだった

一応二人もうなぎの料理は食べたことも見た事もあるが、このような米の上に乗ったうなぎを見るのは初めてだった

さらに身が赤い。二人には食べられるのか不安だった

更に二人はこの料理を知らない上、もっと食べづらいだが

一人を除いて

「でも、すごい美味しい匂いがするわよ?」

「え?」

「そういえば、さつきからこのうなぎから、外で嗅いだ香ばしい匂いと
同じ匂いがするな」

見た目で判断せず、アリシアは美味しそうだと評価してくれた

このアクア出身だからとかは関係なく、初めて見るうなぎ丼なんて
言う珍しい料理を食べるにしても、見た目で食べられない人も居ても
おかしくない

でも、アリシアは見た目で判断せず、口にうなぎの身をフォークで
運ぶ

これはお箸で食べるのだが、ネオ・ヴェネツィアでお箸は無いため、
お客様の食べやすいようにフォークとスプーンで用意されている

「あむ……」

「どうですか?」

「うまいのか?……」

アリシアが先に口にする

藍華と晃はまだ納得できないのか、アリシアの食べた感想を聞いて
から食べようとす

「……うん……うん……すごく美味しい!!」

食べた感想は大満足だった。

彼女はあまりの美味しさにフォークが自然に口に運んでいた

「どれどれ!」

「私も!」

アリシアの美味しそうな顔を見て、自分たちも食べずにはいられな
くなり、藍華や晃もうなぎ丼に手をつける

「うん!!うまい!!」

「なにこれ!?うなぎとは思えないほど美味しい!」

うなぎを使った料理はあまりに少ない。うなぎをうまい料理も少
ない

だが、マンホームはこういうB級料理『うなぎ丼』が存在している
ネオ・ヴェネツィアで味わえる料理だけでなく、違う惑星でしか味
わえない料理も悪くないと思う

「これはうまいな!!これがマンホームの料理か……」

「でも、どうやってこれを?」

「実は事情があつてな……」

とりあえず愛人は三人に事情を説明する

「なるほど、そんなことが……それで材料はうなぎしか無いのに、どうやってこれを作ったんだ?」

「うなぎしか無いこの店に出せるメニューはただ一つだけ、うなぎと米とソースだけで作れるマンホームの料理『うなぎ丼』としか作れないと瞬時に判断した。それで今ここにいるマンホーム生まれである俺と灯里とアイならうなぎ丼を知っている。作るのはあの二人にとって初めてではあるが、うなぎ丼がどういう物が知っている俺らならできると思う。これを実行した。」

愛人と灯里とアイはマンホーム生まれ。だからうなぎ丼を何回も食べているからどういふものなのかを知っている。

だからこの三人でこの店を助けようと三人は力を貸した

無論材料の調達には接触事故はうなぎしか無い。これだけの材料の少なさでうなぎ丼しか作れないと愛人は考えた。ここはマンホームの料理の定食屋

メニューとしてもぴったり。更に今は夏のこの季節にもうなぎ丼はぴったり

悪くないと考えた

問題としては作れるかだ。

だが

そんな問題は愛人には通用しない

なぜなら愛人はそれを作れるからだ。だから実行した

ちなみに二人は作ったことは無いのは、食事も家事も全部機械でやってもらっているからだ。マンホームではロボットなど機械で技術が進化している。ほぼ全てが機械で雑用している環境なため、マンホーム生まれでは料理をあまり自分で作ることは無い

だが、愛人は家では自分が仕事でできない時以外は全部機械に頼らず。自分にやっていた。更に学習能力の強い愛人は料理のレシピ本を1回読むだけで、すぐその作り方ができる

もう問題など彼がいる限りは問題なかった

分担して

まずは灯里が自分のゴンドラで仕入れ先の島でうなぎを取りに行く

灯里がうなぎを取りに行く間に、愛人はアイと店長のおくさんにソースの作り方を教える

ソースは調味料で作れる。わざわざ材料を買う必要はない。

そして愛人と店長で店にある米を炊く。米は店で大量に用意されていて無くなる心配はなかった

そして灯里がうなぎを持って帰ってくると、愛人はうなぎのさばき方を店長に教える。実は料理免許は無い。でもうなぎのさばき方を知っていた。ちなみにこれでうなぎをさばくのは5回目。愛人の知

力のあるおかげで灯里とアイが知っているうなぎのさばかれた形になつた。

その焼き方も店長に教える。そしてうまく完成した。味を知っているアイと灯里食べさせる。

二人は食べた感想は問題なく。美味しいと言ってくれた。アイからは機械で作ってくれるよりも上手いと評価してくれた

これで問題なく。客に出せる

灯里とアイは定食屋の制服に着替え接客をし。店長と店長のおくさんと愛人で厨房をやる

今日だけ灯里とアイと愛人はこの店のバイトをすることにした

そして今に至る

「つてばわけだ」

「なるほどな、それにしても……お前相変わらず何でもできるんだな?」

「何でもつてなわけじゃあねえよ。作ったことがあるだけだ」

「愛人ちゃんとアイちゃんと灯里ちゃんのおかげで今日は行列ができているよ」

店長のおくさんもかなりと三人に感謝していた

マンホームの料理をネオ・ヴェネツィアの人たちに喜んで食べているのだ

更にこんなお客も

「すみません!2名様でお願いします!」

「いらつしやま……彩音さん!アクトさん!」

「お?彩音じゃん?アクトじゃん?」

「え!?!愛人!?!灯里ちゃん!?!」

「何をやっているのですか!?!こんなところで!?!」

「事情はアリシアから聞け?お前らも食いたいのか?うなぎ丼?」

「はい!また私の故郷の惑星の料理が食べられると思って団長と一緒に足を運んできたのです!」

「そっぴやお前も俺らと同じマンホームだもんな、席はアリシアと一

緒になんか?」

「お!? アクト!?」

「あ! 晁にアリシアに藍華!? なんでここに!?!」

「私たちも食べに来たんだ。アクトは今昼か?」

「ああ、マンホームの定食屋があるって彩音から聞いて、気になってここに来たんだ」

「ところでどうして? あの二人がここに?」

「それは……」

「あ!? エンジエル騎士団長マスターミカエルのアクトさんにネイチャー・ウリエルの彩音さんだ!!」

「ん?」

アイがソースの作り方を終えて厨房を出てきた。アイが四大天使騎士団を見かけてびっくりしていた

四大天使騎士団ほどの惑星でも有名である

「この子は?」

「愛野アイです!! ミカエルのアクトさんにウリエルの彩音さんに会えて嬉しいです!」

「灯里と愛人の友達かい?」

「言うなれば、未来のARIAカンパニーのウンディーネだよ?」

「何? ウンディーネに憧れている子かい?」

「はい! 将来灯里さんの会社でウンディーネになりたいんです。今は遊びで愛人さんのお手伝いです。料理を自分から作ってとても楽しいです! 愛人さんにいろいろ教えてもらったんです。愛人さんは新聞やテレビが言ってるように最高の騎士です!!」

「もしかして愛人のことを気に入った?」

「はい!! 私は愛人さんのことが好きです!!」

「どうやら、アイも愛人のことが好きになっただらしい。」

愛人は子ども見いいみみたいだ。

アイも優しい愛人にいろんなことを教えてくれたりなどでアイのためにしてくれた

「ふふふふ、そうなのアイちゃんも愛人くんのことをね……」

「アリシア？これは多分違う好きだから？ロリコンじゃないからなあいつは？」

「このままロリコンになっちまえ愛人」

アリシアはアイが愛人のことを気に入った言葉を聞くと、何やらアリシアの背中からとてつもない黒いオーラが出ていた

アリシアは大人気ないことにアイに嫉妬をしていた

晁が正気に戻そうとツツコミする。藍華はアリシアにあんな男には渡せないとこのまま小さい子に出してロリコンになれとブツブツと呟いていた

「アイ！灯里！俺らも昼にするぞ！！丼のおっさんと丼のおくさんに昼にしていって言うからさ？」

「はい！」

「私たちもうなぎ丼食べられるんですか？」

「ああ、アクトと彩音の分も持ってきたぞ？ほいお待ちどうぞ！」

愛人と灯里とアイもアリシアとアクトたちの近くで同じうなぎ丼を食べる

「う〜ん！！美味しい！！何年ぶりだろううなぎ丼を食べるなんて！！」

「本当にうまい！これがうなぎか……とてもうなぎとは思えないぞ！」

彩音やアクトもうなぎ丼を美味しいと評価してくれた

「アイ？ほっぺに米粒付いているぞ？」

「え？あ、本当だ」

「ほら取ってあげるよ？アイちゃん？」

「すみません、灯里さん！」

三人で仲良くうなぎ丼を食べる愛人たち。

「こうしてみると家族に見えるな、愛人が夫で灯里ちゃんが妻で、アイがその子供みたいなの……」

「ふえ!?私が愛人さんの妻!?!」

「俺らがそう見えるのですか？」

「アクト！そういうことを言うな！それを言うとアリシアが……」
「あ」

愛人が灯里に取られそうな言い方をついアクトは言ってしまった
それを聞いたアリシアは

「あらあらうふふふじょうじ、あらあらうふふふじょうじ」

「久しぶりに言った!?アリシアが再びテラフォーマーになった!?」

「何!?アリシアは愛人の嫉妬でテラフォーマーになるの!?」

「私の知っているアリシアさんはどこ行ったの!?」

もうアクトたちの知っているアリシアは愛人に向ける嫉妬一つだけ
でキャラ崩壊した

もうこうなつたアリシアは誰にも止められない

「なんだ?アイはウンディーネになりたいのか?」

「ええ、今はまだマンホームで学校も行ってますので、すぐには……」

「じゃあ!今度アクアに来たときは、俺がゴンドラの操縦を教えるよ
?」

「本当ですか!」

「ああ、俺が教えれば藍華よりも早くプリマになれるよう。教えてや
るよ?」

「ありがとうございます!!」

「愛人?私に喧嘩売ってんの?」

「ただ上手く教えるって言ったただけだ。お前より早くな?」

「私を変な扱いに使わないでくれる!?何?私がプリマになるのが遅
いって言いたいわけ!」

「いや、別にそういうわけじゃなくて、単にお前よりも早くプリマにな
れるように教えてやるって言ったただけだ?」

「意味は同じでしょうが!?無自覚に私を馬鹿にするな!!」

「あれ?おかしいな?そういう意味で言ったわけじゃないの?」

アイを早くウンディーネになれるように愛人は今度来た時はゴン
ドラの操縦を教えると約束したが、無自覚に藍華を馬鹿にしてしまっ
た

「それでアリシアはどうした?ていいうかなんで久しぶりにテラフォー
マーネタ?」

「あらあらうふふふふじょうじ、なんでもないわよ?」

「なんでもないならなんでテラフオーマーになつてんだよ？」
とにかく

井弁屋の定食屋の赤字は免れた

この一週間で新メニューうなぎ井はかなりの評判になり、このネオ・ヴェネツィアで新しい名物になった

一週間過ぎても評判は高くなった

このきっかけを作った愛人と灯里とアイたちに店長さんがお礼にと3ヶ月間の『ただ食い権』をもらった。これはこのお店限定で3ヶ月間無料で料理が食べ放題の券

アイはしばらくはまだ夏休み期間なのでアクアにはまだ滞在するらしい

夏もまだ続きそうだ

夏バテになつた時は、井弁屋でうなぎ井を食べようと愛人は思つていた

こんな休日にまた手伝いをした愛人は相当お人好らしい

彼の休日はまだ続くが、また他の人の手伝いをしてしまうのではな
いかとアクトは思つていた

それだけ彼が優しいということだ

第十九話 愛人のレデントローレは夢いっぱい？

愛人たちが手伝った『井弁屋』は、愛人たちの活躍により、ネオ・ヴェネツィアの名物として名を挙げた

雑誌では『ネオ・ヴェネツィア風うなぎ丼』として売り上げが上がった

さてさて、皆さんは今日も皆さんはあの、人をバカにして、働きたくないと言っておきながら、みんなのために働いた。何を考えているのかもわからない。頭が天才で、顔はイケメンのくせにアホなことをする。ネオ・ヴェネツィアのエンジェル騎士にして、墮天使、七海・愛人のまたのほほんとした日常ではなく

全く誰も見ても『クソだ!!』と思う

アホな日常が起こる

起こすのはもちろん

愛人です

そしてあの灯里の勤めるARIAカンパニーに最悪な手紙が三通届いた

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「プイニユ」

その手紙は水無灯里様とアリシア・フローレス様と愛野アイ様と書いてあった

ここにいる会社の一員の人たちに届いたのは間違いない。アイに
関しては今A R I Aカンパニーで居候中ではあるが、

とにかく3人はそれを開けたくはなかった

なんでかって？

どうしてかって？

皆さんもこれを見れば絶対に開けたくないと思うほど最悪な手紙
だった。言い方を変えれば、これは不幸の手紙だと言ってもいいはず

なぜなら

黒い封筒で名前の文字は血で描かれたような手紙だからだ

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「ププ・・ププ」

これを誰が開けなくなるだろうか、ましてや血で文字を描かれた手
紙など、不幸の手紙か死刑宣告の手紙としかありえなかった

アリア社長はそれを見た瞬間、ブルブルと机の下に隠れて怯えてい
た

「あの・・・・・・・・・・アリアさん？」

「・・・・・・・・・・何？」

「私たち・・・・・・・・・・何か悪いことでもしたのでしょうか」

「していない・・・・・・・・・・はずよ？」

「な・・・・・・・・・・何なんですネ？これ？」

「さ・・・・・・・・・・さあ？」

さすがのアリシアも、こんな手紙のデザインは初めて見たらしく、

かなり震えていた

「と、とりあえず開けてみましょうよ!!中身は多分普通ですよ!!ね? 灯里さん?」

「そそそそそそそ、そうだねアイちゃん!!中身は普通なはずだよ!!もしこれが酷かったなら破いて捨てればいいだけだから!!」

灯里はこういう怖い系は嫌いだった。かなり震えて言葉もうまく喋れないが、とりあえず中身を開けてみた

書いてあった内容は

『前略 皆さん熱い季節なところを申し訳ありません

31日の夜19時にサンマルコ広場にお集まりください

できればラフな格好でお集まり頂けると助かります

もし来なかった者には

わかってますね?』

としか、血で書いてあった

「いやああああああああ!!まだ死にたくないよう!!」

アイがそれを見た瞬間、泣き叫ぶしかなかった

「d a d a d a d a 大丈夫だよアイちゃん!!ノープロブレムだよ!!
ノープロブレム!!こんなのただのイタヅラだよ!!」

震えている灯里が言っても説得力がないが、灯里がこの手紙を捨てようとするが、封筒にもう一枚手紙が落ちた

「え？なにこれ？」

そのもう一枚の手紙を開けて読む
書いてあったことは

『ちなみに来なかった者は

そうですねー、本物の天使が迎えに来てくれるでしょう

どこへ逃げても私はあなたを追いかけ、本物の天使のところへ送つてあげます

水無・灯里様の

住所は
??????
??????

ですね？必ず来てくださいね？』
と書いてあった

「.....」

その手紙を見た瞬間。黙って泣く以外、灯里は絶望するしかなかった

灯里が泣いていた理由は手紙が書いてあった『本物の天使のところへ送る』という言葉、これはつまり、本物の天使のところへというのは、つまり天国に本物の天使がいるという意味

つまり

来なかった者は殺されるということだ

ちなみに住所はネオ・ヴェネツィアだけでなく、実家であるマンホームの住所も書いてあった。

つまりどこを逃げても無駄ということだ

「大丈夫よ灯里ちゃん！私がなんとかするわ！」

「アリシアさん!!」

「こういう時こそ、エンジェル騎士団に頼みましょう！」

「はーその手がありましたね!!」

こういう時こそ、頼みの綱である愛人やアクトに頼んで、こういう手紙を送った犯人を逮捕してもらおう方が手っ取り早いだろう

アリシアたちは急いでエンジェル騎士団本部に行った

だが

頼みの綱であるアクトにも

その黒い手紙が届けられていた

「……………」

灯里たちがたどり着いた時には、アクトは自分の机の上に灯里たちと同じ手紙を前に頭を抱えていた

「アクトさん？」

「ん？……ああ、なんだい？アリシア？」

「えーと……………大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃない!!!今僕は命の危機が迫っているんだ!!!」

あのエンジェル騎士団団長であるアクトでさえ、涙を流して頭を抱えていたのだ。団長をも怖がらせる犯人なのであるだろうか

ていうか、もう団長としての立場がなくなっている

「アクトさんも脅迫されたんですか！来なかつたら殺すつて？」

「違うー！」

「「え？」」

アクトは泣きながら違うと言った

殺されないのなら、むしろ喜ぶはずなのに、なぜか涙を流して絶望している

「じゃあ、どうして泣いているんです？」

「今朝、僕のところはこの黒い封筒が届いたんだ。もし31日の夜19時にサンマルコ広場に集まらなかったら、僕の大事なフォルダをネオ・ヴェネツィアの人たちにばらまくそうなんだ!!!」

「.....はい？」

要するに、アクトはもし来なかったら、自分のパソコンに入っている大事なフォルダをネオ・ヴェネツィアの人たちにばら撒かれるということになるのだ

「そんなことになれば僕は“あいつ”に殺される!!確実に殺される!!」

「そう.....なんですか？」

「ちなみにそのフォルダの中身はなんですか？」

「え!?それは.....」

「「？」」

アクトは中身に関しては何も言えなかった

とりあえず、プライバシーに関わるということはわかった

そんなこんなで言っていると、

本部の玄関から

「アクト!!」

「アクトさんー！」

「ひい!!ああああああ、 晁!!どうしたんだ？」

玄関から、姫屋の晁と藍華がやってきた。晁がやってきた瞬間、何故かアクトは晁に怯えた。

やっぱりあの脅迫、晁に関係しているのだろうか、

あいつに殺されるということは、晁にだってことだな

「でっ?どうした？」

「頼む！今すぐ！この手紙を送った犯人を捕まえてくれ!!」

「私もです!!お願いします!」

晃と藍華が手に持っていたのは、アクトと灯里たちと同じ黒い手紙だった

「落ち着いて！まずは事情を聞こう！アリシアたちも話をよく聞かせてくれ!」

とりあえず、焦っても泣いても話がわからないので、一旦落ち着いてから話を伺うことにした

「なるほどね、つまりみんなもこの黒い封筒が届いて、脅迫されているってどこか」

現状が分かったとして、アクトはまずはいろいろ整理してから、これから脅迫の対応に入ることにする

「ところで？晃と藍華は何を脅迫されたんだ?」

「うーいや……………それは……………」

「ちよつとね……………」

「はい?」

二人は何を脅迫されたかわからないが、どうしても言いたくないほどの脅迫をされたようだ

「実はこの手紙な、僕たちだけに届いたわけじゃあないんだ」

「え!?まだ居るんですか!?!」

「ええ、私たちです」

「アレクシアさん!? アイナさん!? 彩音さん!」

なんと、あの四代天使騎士にもあの黒い封筒が来ていたのだ

「嘘でしょ、まさかあの四代天使騎士に脅迫の手紙を出すなんて、何て命知らずなの」

「いえ、私たちも困っています。私たちもかなりの弱みを握られているんです」

「犯人は私たちのプライバシーに関わることを知っているようです」

「私たちも打つ手が無いと言いますか、それをした瞬間、いつでもその弱みをばら撒くか酷い目に合わせると手紙で書いてあるんです」

「つまり、僕たちが下手なことをすればただでは済まないということだ」

「なんで、その人は私たちに脅迫を?」

「わからない、でも、僕たちだけでは対象できない。こういう脅しにも効かない。なんでもありで、悪党を見つけたら片っ端からイジメてイジメて、やりたいように、自由気ままに暴れて、暴れた後処理も僕たちに任せる無責任な、アリシアをなぜかテラーフォマー扱いして、無駄に器用で、オレンジプラネットのウンディーネの子たちには『お兄ちゃん』と呼ばれている。アホのくせにイケメンな、『もう全部あいつに任せてもいいんじゃないかな?』というくらい遠い目で見てしまうほど、なんでも事件をズバっと!! 解決する愛人に聞いてみよう?」

「すいません团长? あなたは愛人をなんだと思っているんですか?」
藍華はアクトの言葉にツツコミを入れてしまう。明らかに若干、自分の本音が入っている。アクトは愛人をなんだと思っているのだろうか

だが、それは頼れなかった

なぜなら、

愛人はいなかった

「……………」

アクトたちは愛人の仕事場を見た。

そこには

みんなに渡された黒い手紙も愛人に届いてたからだ

机に置いてあった。その上に置き手紙があった。こう書いてあった

『31日の19時にみんな逝こうか?』

と、置き手紙に書いてあった

「愛人おおおおおおおおお!!! 一番頼りなのに! チートのくせに!! なんでもありのくせに!! 僕が仕事しなくても君が片付けてくれて僕サボれてすごく楽なのに!! なんでこんな時に逃げるんだよ!!!」

「アクトさん!? 本音しか出てませんよ!? ていうかあんた!? 愛人にサボるなって言っておきながら、あんたサボってんじゃない!? このクソ団長!! このクソミカエル!!」

さすがに聞き捨てならない言葉を出てしまい、藍華のツツコミが炸裂する

真面目な団長かと思いきや、裏ではサボりまくりな団長だった

「愛人さんは逃げたりはしませんよ? ただ……何があったんでしょ

うか?」

「すいません。アクトさん居ませんか?」

「はい?」

本部の玄関から、アリスの声がした。

声をする方へアクトは行く。それにみんな付いていく

「どうし……た?」

「どうしましたアクトさ……ひい!!」

アクトはアリスを見た瞬間固まった

玄関に来ていたのはアリスだけでなく、アテナもだった

ところが

藍華は二人を見て怯えた。なぜなら

二人がかつてない程、怒った顔で赤いオーラを放っていたからだ
アリスならともかく、あのドジっ子であったアテナが怒る顔など見たことがなかった

ついでに目はハイライトもない。代わりにアリスは万華鏡写輪眼、アテナは直死の魔眼をしていた

「ど、どうしたの?」

「すいませんアクトさん。お兄ちゃんの倉庫からでっかい草薙の剣がありますので持ってきてください」

「何する気?!?ていうかあいっ?!?いつの間になんなものを?!?何に使うつもりで持ってきてるんだ!!」

エンジェル騎士団の団員一人一人に倉庫が設けられる。その愛人の倉庫には、確かアクトも若干だけ愛人の倉庫を見たことがある

確か………

全部、相手を確実に殺せる武器しかなかった

「あいつは………何をやる気で持ってきているんだ」

もう苦笑いしかできなかった。もうツツコミが無駄だと思い。苦笑いしかできなかった

「ごめんなさいアクトさん。私も刀持ってきてください」

（やばい。この二人一体何をするかは知らないけど、手に僕たちと同じ手紙持ってきているってことは、何かされたのかな？）

とりあえず、理由を聞いて見る

「えっとう？何かあったの？君たちも僕たちと同じ黒い手紙持っているみたいだけど？」

「とりあえず読んでみてください」

「なにになに？」

渡された手紙を読んでみる。ちなみに脅迫はみんなとそれぞれ違うことはわかっている

だが

アクトは青ざめた。かつてない脅迫を見たからだ。

いや

この脅迫はどう見ても、犯人の自殺行為なのだからなぜなら

「これは………」

『31日の19時にサンマルコ広場にラフな格好で来てください。
来てくちなきや』

「団長!?何を言っているんですか!？」

何を言っているのかは知らないが、とりあえず、A R I Aカンパニーとオレンジ・ぷらねつとが手を組んで、犯人を殺すということはわかった

そしてとうとう31日の日がやってきた。

午前中でA R I Aカンパニーの会社で灯里と藍華とアリスが今日の夜の話を話していた

「二人は今日の夜。どうするの?。」

藍華は二人に行くこと

「イザナミで永遠にループにします」

「魔神・妖○黎に殺してもらいます」

「はいはいはい。わかったわかった。あんたたちが犯人殺したいのはわかった。」

もう会話は無駄だった。二人はもう犯人殺すしか頭になかった
そんなことしていると

「もみ子?居るか?。」

「灯里ちゃん居いますなのだ?。」

サラマンダーの暁とシルフにウツディーがやってきた

「あれ?暁さんにウツディーさん?。」

「どうも?灯里さん」

「アル君!?なんでここに!?!」

なんと、A R I Aカンパニーの会社に暁とウツディーとアルがやってきた

「どうしたんですか?。」

「ああ、お前たちもこれ持つてるか?。」

「暁さんたちも!。」

なんと、ウンディーネだけでなく、サラマンダーやシルフとノームにも届けられていたのだ

「で、どんな脅迫なの？」

「脅迫？俺さまたちはは脅迫なんて書いてないぞ？」

「え!?嘘!？」

「俺さまの手紙は、なんか……」

暁の手紙に書いてあった内容は

『31日の夜19時、サン・マルコ広場にラフな格好で集まってください。』

来てくださいますね？熱い男の君なら来てくれるって信じている
バスケやってて、イーグルアイの目をしている。君なら来てくれる
よね？

信じているから』

「って書いてある。バスケはしたことはあるけど、イーグルアイの目はしてないぞ」

「何この犯人!?何で頼んでんの!?何で信じているの!？」

「でも、これ読んでいるとダジャレを言いたくなるな」

暁の手紙はなんか……脅迫じゃなくて、頼まれごとだった

「ウツデイーさんのは？」

「私は……なんか」

「ん？」

ウツデイーの手紙は……なんか

『31日の夜19時に、サン・マルコ広場にお集まりください。』

楽しくて、愉快で、ご馳走もいっぱいあるよ？

夢の国だよ？絶対に来てね？アハ！』

「って書いてあるのだ？」

「何のCM?ていいうかかなんで夢の国?遊園地でも連れっけてくれるの?」

ウツデイーさんの手紙は明らかに何かの遊園地の招待状だった

「そういえば、アルくんのは?」

「はい、僕のは……その……」
「ん?」

最後のアルの手紙は……

『31日の夜19時に、サン・マルコ広場に集まってください。

絶対に来てくださいね?」

あなたの良妻の、みこーんな姫屋のお嬢様も来てくださいますよ?』

「………つて書いてあったんですけど?………つて藍華さん?」

アルの手紙を読んだ瞬間、藍華が

「みこーん!上等じゃねーですか!!この犯人を私の水天日光天照八野鎮石で焼き尽くしてあげますわ!!私のご主人様をたぶらかしやがって!!!」

藍華がかつてないほど怒っていた。明らかにキャラは変わってしまっただけで、自分の愛しい人をたぶらかしたからには、妻として怒らずにいられなかった

「藍華ちゃん!やろう!!」

「ええ!!散り一つ残さないわ!!」

「私たちを怒らせたことをでっかい後悔させてあげます!!」

カオスな状況になってしまった。とりあえず怖がるどころか、この招待状に必ず参加して、必ず犯人を殺すということがわかった

「暁くん?誰なんでしょうね?恥ずかしいですけど……僕のお嫁さんって?」

「お前はもう少し、ガチャペンの気持ちに気づいてあげろ?」

「さすがに鈍感すぎるのだー」

とりあえず、招待状を渡された人たちは絶対に行くことにした。
(灯里と藍華とアリスとアリシアとアテナに関しては絶対に参加だ
た)

そして、その19時5分前の時間帯になった。みんなとりあえずラ
フな格好ではなく、仕事の格好であるが、

「フフフフフフフフフフ」

武器を持った女5人がかつてないほどのオーラを纏いながら待っ
ていた

「晁？これさ？愛人を心配するよりもさ？犯人が死なないかを心配す
るべきじゃねえ？」

「やっぱり？だよね？」

アクトと晁は、愛人よりも犯人を心配するべきだと思った。人類が
これを見たら、絶対に逃げ出すか、懺悔したくなるほど、怖い光景だ
からだ

コーン、コーン

と夜19時の鐘が鳴る。

だが、犯人らしき人物は来ない。

それから1分経っても、誰も来る気配もない

「おかしいな・・・もう19時1分だぞ？」

「時間間違えているとか？」

「いや、時間は確かに合っているぞ？」

一応手紙は持ってきていた。手紙を見る限り時間は確かに夜19時だと書いてあった

どういうことだ？

アクトは考えた。

時間は夜19時、そして夏休みが始まる前日の31日、なぜこの日に集められる。更にみんなの届けられた手紙はそれぞれ違う脅迫、しかもみんなの弱みになりそうなことばかり、特に自分の脅迫なんて、フォルダの中身を知ってるのは愛人だけ・・・

「ああ、俺だぞ？楽しかったろ？ヒヤヒヤして？楽しかったろアクト？」

「どこが楽しいんだ!? お前ヒヤヒヤして楽しいわけないだろ!! ヒヤヒヤと使いどころ間違ってるから!! お前の楽しみ方間違ってるだろ!!」

あの脅迫も愛人の仕業だった。理由を聞いたら、みんなが絶対に来てくれるようにするためだけに書いたらしい

ていうか、アリスとアテナに関して脅迫はもう2度とやらないで欲しい。軽はずみの行動一つだけで、ネオ・ヴェネツィアが血で染まることになるからだ

「とにかく。港まで行くぞ？そこで屋形船用意してあるから？」

「え!?、ちよつと!? レントーレをやるために、僕たちに黒い手紙の招待状出したのか!？」

「そうだよ？驚かそうと思って」

「いや驚いたよ。かなり驚いたよ。みんなすごく驚いたよ。お前がまさかみんなの弱みを知っていることに・・・」

明らかにこのサプライズに驚くことではなく、愛人がみんなの弱みを知ってたことに驚いた

「ま、驚くのはまだ早いから、今日呼んでいるのはお前らだけじゃないしな?。」

「え? どういうこと?。」

「まあ、いいから着いたぞ?。」

「「「おろろろ!!!」」」

愛人が用意した屋形船は和風の屋形船だった。

日本でもまだ宴会用として使う。床が畳式の屋形船だ

「これ愛人さんが一人で!？」

「ああ、今まで俺がいなかったのは、レントーレの準備を密かにしていたからだ」

「でも、大変じゃない愛人くん? 一人でこの人数の料理を出すなんて?。」

「全然平気だって、俺の飯は出来上がったら、1秒たりとも待たせないし、こう見えて行列のレストランのバイトをしたことがあってな、5

0分人の料理をたったの10分で出来あげることができるとかな？」

「本当にあんたつてなんでもなりね？」

「そんなことは心配せずにお前らは俺の作る料理を黙って楽しく食べてればいいんだよ？とりあえず、このアイパットに手をかざしてくれ？招待状を受けた人を認証しなくちゃならねえ」

「わかった」

愛人は手にアイパットを持っていた

そこに手をかざすと、招待状を受けた人を認証し、屋形船に乗る許可を得られる

愛人はそれだけをアクトに渡して、屋形船の中に行く

「おーい！早速みんな来たぜ？」

屋形船の中に誰か居るようだ。いったい誰が

「愛人さん？一体誰か居るのですか？」

「おやおや、灯里ちゃんよく来たな？」

「郵便屋のおじさん！」

「あらあら、みんなもよく来てくれたわね？」

「グランマ!!」

なんと、先に郵便屋のおじさんとグランマこと秋人が先にテーブルの前で座って待っていた

「無論、手紙を届けてくれた郵便屋のおっさんや、お前らの大好きな秋人も招待したんだ。まあこの二人が俺のレデントーレの一番目に早いお客かな？」

みんなより先にグランマと秋人は愛人の屋形船に乗っていたのだ。

「どうやらうまくいったみたいだね？愛人くん？」

「ああ、うまくいった。やっぱりあの脅迫でみんな来てくれると思っただぜ？」

「さすがにやりすぎだと思っけど、灯里ちゃんとアリシアは脅迫なんてしなくていいわよ？」

「じゃあ、なんて手紙に書いたらよかったんだ？」

「それはね・・・『あなたの愛しい愛・・・』」

「グランマ!! 恥ずかしいセリフ禁止です!!」

「うわ!? なに!? どうしたお前ら二人?」

グランマのとんでもないセリフにより、灯里とアリシアが止める

「愛人! あんた? あの脅迫はなによ?」

「ん? なんだよ? まだあれの一つもしてないのか? お前は16歳なんだから、取るもん取れよ?」

「ふぎけんじゃないわよ!! あんたのせいでいろんなことがあったんだからね!!」

「だったら、早く済ませろよ? やることやんねえからこういうことになるんだよ?」

藍華は脅迫について、愛人に講義をしたが、愛人は謝る気は無かった

そして

「ええ、皆様。まずはお集まりいただきありがとうございます。今回皆さんも気になるかもしれませんが、なぜ、まだ夏が続くと言うのに、先にレデントーレを始めるのか・・・」

「確かに気になるのなそれは・・・」

レデントーレというのは、夏の最後の日にやるものであって、夏の初めにはやらないのだ

「その理由は・・・アイ!」

「あ、はい!」

「お前? もうそろそろマンホームに帰るんだって?」

「!」「え!」「!」

「な!? なんぞそれを!?」

なんと、レデントーレを始めたのはアイのためだった

「お前の父親は俺の知り合いでな? 先日久しぶりにあいつから電話があったんだよ?」

「お父さんが!」

アイのお父さんが愛人の知り合いとはこれは知らなかった。

「あいつがそろそろお前も夏休みでもやらなきやいけないことがあるから、三日後にはマンホームに帰らなきやいけないんだろ?」

「はい、そうです」

「そんでな?お前が多分夏の最後まではネオ・ヴェネツィアにはいられないだろうと思つて、お前が帰る前に思い出作ろうと、このレデントーレを早めに味わってもらおうと始めたんだ?」

「私の・・・ために?」

「よく楽しんどけ?お前らもな!こっから俺がうまい料理と酒!用意するからよ!これから暑い夏を乗り切るための宴を始めようじゃねーか!!」

アイだけでなく、この屋形船にやってきたみんなにも楽しんでもらうためにも、愛人とアラエルだけで始める

『マスター?そろそろ?』

「ああ!それでは!!!夏の始まりの一夜!!アイの思い出作りとしても!!大いに楽しんでくれ!!!飲み物はみんな渡っているよな?」

それじゃあ!!

素晴らしきレデントーレに!!

乾杯!!!!

「「「「乾杯!!」」」」」

ワインのグラスとジュースのグラスをみんなで乾杯して、それを飲む

「うーん！うまい！」

「どこのワインだ!?これ!?うますぎる！」

「ジュースもおいしいです！」

みんな持っていた飲み物を飲む。おいしいと評価してくれた。どうやらそこら辺売っているような、飲み物ではないらしい

「そんじゃあまずはオムレツな？」

「「「早!?!」」」

みんなが乾杯してから1分もしてない内に、もう熱々のオムレツが4個もやってきた

「うーん！美味しい!!」

「これ！焼き立てだ!?どうなっているの愛人!?オムレツは最低でも10分はかかる料理よ!?!」

オムレツはは手料理で間違いない。手料理なのにもかかわらず、たったの1分未満で完成させたのだ

「彩音はこれがいいだろ?」

「え!?!嘘!?!これお寿司じゃないですか!?!どうやってこれを!?!」

ネオ・ヴェネツィアでもお寿司は有名である。よくネオ・ヴェネツィア人がお寿司をジャパニーズ寿司と呼んでいる者も少なくはないほど、ここでは珍しい食べ物だ

「無論、今俺が裁いた。おかわりもあるからじゃんじゃん食え?それと醤油とわさびもな?」

「わさびまで!?!」

「ネオ・ヴェネツィアじゃあ、醤油は日本産のは無いからな、アラエルに頼んで、ネットで購入して運んでもらった」

「本当になんでもありね?あんな?」

「そんじゃあ!?!どんどん!飯持ってくるぞ!次はステーキだ!」

「おお!このステーキ!素敵だな!」

「ごめんあかつきん。それ物凄くうざいのだ」

次から次へと1分未満待つことなく、料理がどんどん来る。ワインも頼めば、30秒で届けに来る

もう接客の対応がものすごく早かった

料理も早いのはいいが、それより気になるのは

「なんであんだ？執事服？」

「持て成しにはこれがいいかなと思つてな？制服つてわけにもいかな
いし」

「へえ、ならせつかくだから執事の真似してみてよ？」

「まあいいけど？」

アイナのご希望通り、執事の真似をしてみる

「アイナお嬢様？私に執事の真似をしてほしいだなんて？私はあなた
様だけの執事ですよ？」

「あなたつて執事でもやつてたの!？」

「やつてるわけないだろ？」

にしては、まるで本物の執事かのように、言葉使いもうまかったし、
何より笑顔が卑怯だった

アホとはいえ、顔はイケメン、そんな顔の微笑みは卑怯だった

「愛人くん？できれば私にも・・・言つて欲しいな？」

それ見て、アリシアが自分にも言つて欲しいとおねだりする

「言つて欲しいだなんて、やめてくださいよアリシアお嬢様？私は今
そんなこと言わなくても、私はいつでもお嬢様のお傍にいます。そん
なこと言わなくてもお嬢様が望むのなら、どんな命令の言葉でも実行
致しますよ？」

「・・・ボフ!!」

「おい!?アリシア!?どうした!?もしかしてワインの飲み過ぎか!?酔い
潰れるの早くね!？」

「いや、酔っているわけじゃないから？」

「愛人!!アリシアさんを誘惑するな!!」

「愛人!!アリシアさんの前で執事服は禁止よ!!」

「暁に藍華も、俺は誘惑してねえよ」

「確かに今のは愛人は悪くない」

そんなこんなでいろんな芸やイベントも多くやった。

夜中の12時が近くになると、みんな少しだけ酔い潰れていた

「そろそろだろう？アラエル？みんな起こすあれでも打て？」

『かしくまりました』

愛人はみんな疲れてきたところで、夜の空にある物を打った

パーン!!

と花火が夜空を舞う

「「「「「！」「」「」「」」」」」

「ふう！作った花火ができていてよかったぜ」

どうやら花火も手作りで用意しておいたのだ

「さてさてさて、皆さんがめっちゃ眠たそうだから、朝まで持ちそうにないから俺が手作りの花火を用意させてもらったよ」

「愛人さん！」

「ん？」

みんな集まって、グラスを持って言う

「今日はお招きありがとうございました！ございます！愛人くんのおかげで楽しいレデントーレを楽しめました！」

「たく・・・それはレデントーレの最後。朝方に言えよな？そんじやあ、アイの思い出作りとこれから暑い夏に負けないように」

乾杯!!!」

「「「「「乾杯!!!」」」」」

愛人のレデントーレは最後の最後まで楽しい時間で終わることができた

これはアイだけでなく、灯里たちにとっても楽しい思い出となった
これも全て愛人のおかげである

夏の始まりにしては賑やか過ぎる宴だった

第二十話 決して一人じゃない

新年を迎えましたね皆さん

え？更新が遅い？

早くして欲しい？早く愛人をアリシアと結婚させろ？それか灯里でもいいから愛人を結婚させろ

今年でこの作品を終わらせろ？

それは愛人くんに言ってくださいよ？この作品は愛人くんが主人公ですよ？

作者である私は単に仕事忙しいだけで更新は遅くなっているだけです

日曜だけが休みが無いのも苦しいです

まあ所詮彼はこうもダラダラと過ごすのでしょう

だって、もうこの人もう早速浜辺でお昼しているよ。制服で

「スースー」

剣を浜辺に刺して、日光浴していました。ほら皆さんもう早速サボりですよこの人

まあ一週間前の愛人レデントーレを見事成功させた愛人。いろいろ驚くところどころか街を血で染めようとした元凶であるこの人。アイは夏休み中はネオ・ヴェネツィアだけで過ごすことはできず、昨日で帰ってしまった。

そして遂に夏が始まった。

こんなクソ暑い季節は、浜辺でゆっくり、って制服で日光浴する奴がいますかね？

ブーブーブー

すると、アラエルから通信が入った

『マスター？アクト団長からです』

「わかった。繋いで？」

『はい』

愛人は寝ながら、通信に出る

『愛人。ちよつといいかな？』

『なんだ？今浜辺で制服で日光浴しているけど？』

『……暑くない？』

『全然』

『まあいい。今から姫屋に来てくれないか？僕もそこで待つてるから』

「ああ？どうかしたのか？」

『少しお見舞いにな』

「誰の？晃のか？だったら俺必要なくね？」

『いや……藍華のだ』

「……あいつが？何した？」

『風邪だそうだ』

「珍しくね？仮病じゃねえの？」

『あの子はああ見えて真面目なんだ。そんなことするはずないだろ？』

「一応プリマ目指している身だよ？」

「じゃああれだ。アルに遂に告白されて、頭から湯気が出て体調崩したんじゃねえ？」

『いくらあの子でも……ありえるかも、ていうかもしそんなことだったらまず風邪じゃあ済まないし、もう彼女嬉しすぎて死んじゃうと思うよ？』

愛人はアクトの連絡により、姫屋に向かう

姫屋の社長の娘、藍華

そんな彼女が風邪を引いたらしい。そのお見舞いに行こうとアクトに誘われる

愛人本人は自分じゃなくてアルを連れてくるべきだと思っている。それをアクトに言ったら、『そんなことしたら余計風邪の温度が上がるからやめなさい』と怒られた。

ま、そうだろうなと愛人は察して藍華の居る姫屋に向かう
食欲あるかわからないが、向かう途中甘い物を買って行く。風邪に
効くような食べ物を買っていき、アクトと姫屋で合流する

「え？あいつももう三日も休んでんの？」

「うん、酷かったらしいよ？でも今日熱が引いてきたらしくて、明日に
は仕事に出れるって？」

「ならお見舞いいらなくね？」

「そういうわけにもいかないだろ？一応友人だし？僕は知り合いの娘
さんの関係もあるし」

「知り合いの娘さん？お前藍華の親父さんの知り合いなの？」

「まあ、いろいろとね？」

「へえー」

とりあえず事情は知って、姫屋のウンディーネの人から、藍華の部
屋を教えてもらい。

今、彼女の部屋の扉の前に居た

「おーい藍華！風邪引いたって聞いたからお見舞いに来たぞ！」

「お腹も空いたでしょ？食べ物も買ってきたよ？」

扉の前で藍華の部屋の前にノックをかけた

だが

「帰って」

「は？」

「え？」

なんと、返事が『帰って』と言われてしまった。せつかく愛人とア
クトが美味しそうな物を買ってきたのにも関わらず

「なんで？」

「今あんた達に会うことはできないの！絶対に入室禁止だからね！」

「あん？」

「どういうこと？」

なぜか入室禁止を言う藍華。何かあったのだろうか、

「何かあったのかな？」

「仕方ない！いくぞアクト？」

「え!?でも！」

「いいから行くぞ！」

「あ、おい！」

なぜか愛人はアクトを無理やり引き下げて、藍華の言う通り二人は帰ってしまった

「そう、それでいいのよ。大人しく帰って」

だがしかし

コンコン

「だから!!入室禁止って言ってるでしょ！」

どうやら愛人は大人しく帰ったわけではなく、ひっこく藍華の部屋にノックをかける

だがしかし

「すみません。藍華お嬢様。床だけでも掃除をさせてくれませんか？」

「ごめんなさい!!お掃除屋さんね！はい。わかりました!!」

ノックをかけたのは愛人たちではなく、少しおばさん声のお掃除屋さんだった。藍華は誤解をして愛人と間違えて怒ってしまった。ノックをした掃除屋さんだとわかり。すぐさま鍵を開けるが

「んじや。入ります〜」

「なんで愛人とアクトさんがお掃除さんの服着て入ってくるのよ!!??」

出てきたのは、お掃除屋さんの服を着た愛人とアクトだった。ドアを開けてくれないようだから、何かに変装して無理やりでも入室するためにお掃除屋さんの服を借りてきた。ちなみに先ほどのおばさん声はアラエルの偽装音声だった

「いやだって、入れてくんないから、これなら入らせてくれると思って」

「服装の問題じゃないわよ!?私がいつ服装の身だしなみを整えてきてから来いっていつ言った!?ていうかお掃除屋さんの服で身だしなみ揃えても困るし!?それ以外で入ってほしくなかったの!!どうしても

!!

「じゃあなんなの？入らせてくれない理由は？・・・・・・・・・・藍華？君泣いているのか？」

「うー！」

「本当だ」

彼女の目は涙目だった。切なくも彼女の涙を見るのは二人も初めて、入るなつという言葉、何かあつて悲しいことがあつて泣いていたのだろう。

そんな姿を見せたくはないが故に、入室禁止と言い出したんだろう
「そうか・・・・・・・・アクト？今日は帰ろうぜ？」

「え？」

「そうだね？今日は帰ろう。藍華を一人にしてあげるべきだ」

「え？あの？・・・・・・・・私が何で泣いているかわかるんですか？」

「アルにフラれたんだろ？」

「違えわ!!なんかやけに大人しく帰るもんだから私の事情を知ってるかと思いきや、アルくんにフラれたら泣くつてどういことよ!!まだ私プロポーズもしてないから!!私は違うことで泣いていたの!!!あんなたちの理解力どうかしているんじゃないの!!」

「気にするな藍華？フラれてもまだ先はあるよ？」

「だから話聞いてください!!私はまだアルくんにフラれてない!!」

「藍華？俺・・・・・・・・実は酒のうまいおでん屋が知ってるんだ。

今日は俺らも付き合うよ？」

「だから聞いてよ!!なんで私がアルくんにフラれる前提で言ってるの!!なんで私がヤケ酒しないとならないの!!私未成年だし!!ていうかアクトさんも常識人なんですから、愛人の冗談に付き合わなくていいから!!!」

愛人とアクトは何を理解して言っているのだろうか、全くもって二人は誤解を生むどころか、藍華の話すら聞かない

「じゃあ、何で泣いていたんだよ？」

「それは・・・・・・・・リン」

「は？」

「プリンが悪いの……」

「……は？」

「プリンのせいでこんなことになっちゃったの」

「いや、意味わかんないから……」

「つまりあれかな？……アルがお見舞いに来ないから、プリンでやけど食いつたのかな？」

「そうか……俺あいつに頼んでくる」

「お願いだから最後まで私の話を聞いて!!?ていうかまだアルくんの話続いているの!?!」

全くもって愛人とアクトが藍華の話を聞かず

ここからは真面目な話、二人もその話はしつかり聞いてくれた

『藍華の回想』

そもそもなぜ彼女が泣いていたのか

それは、今日の事だった

今日は彼女が風邪で三日目の日

その日の彼女はとも元気だった。だが、悪化してはならないと、父親に今日も休まされた。

「アーーーーー!!ヒマヒマ!!」

彼女は退屈だった。外には出られず、部屋で安静するべきだと、上司である晃にも言われた。

だから余計暇だった。三日間も寝ていれば、眠くもならない。部屋に置いてある雑誌や本も全部読んで飽きた。

そんな時

「プリン……食べたいな……」

お腹が空いたのか、プリンが食べたくなり、外出しようと企む。だが、そんなことすれば上司である晁が許さない。そこは藍華もわかっている

だから

部屋に居たヒメ社長は置いて、自分だけバレないように脱出しようとした

運がいいのか、脱出に成功した。下に居た晁は仕事に夢中で、藍華のことをよく見てなかった。

「二日ぶりのシャバの空気は心地よいですなー」

久しぶりの外の空気を吸い。とても気持ちいいと背筋を伸ばすほど、外に出たかった

そんな時

「ん？お！やってるやってる！感心感心！」

灯里とアリスがしっかりとゴンドラの共同練習をしている姿を見つめる。

「私がいなくてもしっっかり練習しているわね。灯里達の練習を見れて得したかも」

藍華がいなくてもしっっかり二人は練習をしていた。そんな二人の真面目の練習。本当だったらそこに自分も居た

「！」

藍華はこの光景を見て気づいたことがある

「私が……いない」

そう、本当ならここには自分も居た。だが、そこには自分がいなく

て、それでも楽しくゴンドラの練習をしている姿を見て、彼女は「あれ……」

涙が勝手に流れた。徐々にその涙は止まらず、さらにどんどん涙の出る量が多く出てくる。誰が見ても泣いていると気づくほどに

あの光景を見ると、あの二人の練習の光景を見ると、涙が止まらなくなる

「うー」

自分がなぜ、二人の練習の光景を、自分がいないだけの二人の練習の光景を見て泣いていたのか理解できず、その涙を手で押さえたまま、晁や他の姫屋のウンディーネに見つからずに自分の部屋に向かって走った

走っても疲れることはなかった。涙が止まらなかったから

気を散らそうとかなり限界まで走った。息が切れることなく、疲れ

も足の痛みも

何もない

ただ

ただ

涙だけは止まらず

泣き叫びそうだった。

これは悲しみなのか？

自分は悲しいのか？

あの光景が？

ただ真面目に二人が練習している光景が？

わからない

自分が何で泣いているのか。自分の心がわからない。自分の気持ち
ちがわからない。

わからないまま。涙と口を押さえながら、誰もバレずに部屋にまた
閉じこもり、今度は鍵をかけ、誰も入らせないようにして、
ベットの中で

泣いていた

『回想終了』

「ずっと泣いていたの。あなたたちが来るまで」

「そうなの……」

「……」

彼女の話を聞いて、無言になってしまった。アクトは何か励ますよ
うな言葉をかけようとする

愛人は

なぜか無言。さつきまでふざけていた顔とはまったく違う顔。真
剣に藍華を見る

「愛人？」

「どうした？」

「悪い。隣座つてもいいか？」

「え、ええ」

愛人は突然立ち上がり、藍華が座っているベットに愛人も座る。

ちやうど藍華の隣に座る

藍華も愛人の様子がおかしいせい、ベットを座らせることを許可してしまう

愛人は座っても無言になるかと思いきや

「なあ？藍華？」

「何？」

「人間が何を見たら涙を出すか、わかるか？」

「それは……嬉しい時とか、悲しい時とかでしょ？」

「そうだ」

「それがどうかしたの？」

「お前は……寂しかったんだよ」

「え？」

「俺は、お前がわかって泣いているのかと思ったんだが、どうやらその気持ち、お前が初めてらしくて、よく理解できなかったみたいだな？」

「何言っているの？」

「簡単な話だ」

そう、愛人は慰めるために藍華の隣に座った

気持ちを分かち合うために

「お前は一人で寂しかった。二人の練習の光景を見て、二人で楽しんでいるのを見て、自分が一人になってしまったことに泣いていたんだよ。お前は」

「私が……」

「お前が涙流しているのは、あいつらと一緒に居れなくて寂しかっただけだ。今まで一人になったことが無いから、その涙を流す理由と気持ち、お前がわからないんだよ」

「私が……一人？寂しい？そんなこと……」

「じゃあなんで泣いているんだよ？二人が真面目に練習してたんだろ？いいじゃねえか？お前がいなくてもしつかりやれて、でも、お前がいらない。ただそれだけで泣いたんだろ？ってことは寂しいことなんだよ」

「……」

「あそこにすぐに戻りたくて、早く風邪を治して、またあいつらと練習したかったんじゃないのか？」

「……………」

愛人は、藍華に寂しいという気持ちを気づかせた。余程一人になるという寂しさが初めてで、言葉に出さないとわからないから、愛人はわざわざそばに行つてまで

「藍華？」

「はい？」

「僕たちも、その気持ちもわかる。実は僕と愛人は家族が生まれた頃からないんだ。」

「え!？」

アクトも、藍華の寂しいという気持ちを気づかせるために、自分たちの寂しさを教えた。

「僕は、エンジェル騎士団のある先代である団長に拾われて、家族の顔も知らないんだ。愛人もそう。親がいなくて孤児院育ちで、たった一人で生きていた。」

僕も愛人も寂しいんだ。一人になると、泣きたくなるんだよ？一人でもなくて、家族とも言えるような人がいなくて、寂しくて泣いた時もある。君もそうだよ？寂しくて泣いていたんだ。

灯里達と一緒に居られなくて寂しかったんだ」

「……………」

愛人もアクトも、藍華の寂しいという気持ちがわかる。親の顔も知らなくて親の名前も知らない二人。たった一人で生きていた二人は

「だから泣くなよ？」

「うわ!？」

愛人は自分の胸に藍華の顔を近づける

片手で藍華を抱いている

「お前は一人じゃない。俺やアクト、灯里やアリシアや晁もアルも含め、みんなお前の友人なんだ。一緒にいるから心配すんな？」

「う……うん」

藍華も愛人の制服にしがみながら、彼の胸で顔を隠しながら思いきり泣く

寂しかったら迷わず泣けばいい。みんなが側に行くから

と、愛人とアクトはそれだけを言い。彼女を慰める

「明日から頑張れよ？練習？」

「うん」

「ところでプリンを買えた？」

「あんな気持ちで買えませんでした」

「なら……」

「ああ。やっぱり買ってよかったよ」

「何を？」

愛人とアクトが後ろから箱のような物を出す

「ほいよ！プリンと！」

「おにぎり！お腹空いているだろうと思って僕と愛人が買ってきたんだ！食べるだろ？」

「た、食べますー！ー！！」

「うわ!?だから泣くくなって!?たく、お前がここまで泣き虫だったとはな」

愛人とアクトが買ってきた。おにぎりとプリンを三人で仲良く食べる

さつきまで泣いていた藍華は、愛人とアクトのおふぎけを見て大笑い

それから少し遅れたが灯里達やアリシアたちやアルも、みんな藍華のお見舞いにやって来た

藍華は決して一人じゃない。ここには多くの友人が居る

たとえどんなに離れていようとも、寂しかった時は側に行く

愛人とアクトが一番に駆けつけるだろう

二人はまた、今日もふざけた日常を送りながらも、誰かのために助ける

そんな騎士の夏はこれからも続く

第二十一話 幽霊より怖い男

暑い季節がまだ続中、暑い季節

暑い季節、ジメジメと続くこの暑い夏。誰も干からびるその暑さは、人の命を奪い取ろうとした。その暑さにより熱中症になり、次々と倒れていく人々。もはやネオ・ヴェネチアは人が住むことのできない。高熱な火山な街として成り果てていた

「おい、何この街を勝手に破壊し尽くされたような言い方しているんだ、君は？」

「え？違うの？」

つて、思っている愛人くん。

暑いのはわかる。でも人が住めない火山な街というのは言い過ぎである。ていうか火山な街って何？

どういう解釈ですか？

「もう、だめだよ今日の仕事。やっていける自信ないよ。この暑さもうマジ無理だから」

「街に居るウンディーネはこうも暑くても頑張っているぞ？」

「ウンディーネはウンディーネ。俺は俺。ウンディーネと一緒にすんなよ。お前はお前。お前は外で見回りして、俺は俺で中で書類仕事するから、外を頼んだぞ」

「つまりあれか？君は中でエアコンの温度全開で下げて、外の見回りは僕に任せて、君は涼しい中で書類仕事するってことかい」

「……………うん♪」

「外行つてきなさい！」

アクトに本部をつまみ出され、無理やり外に出された

「くそ、あのクソ団長。覚えてやがれよ」

愛人はアクトに恨みを持ちつつも、愛人はまたサボろうとサン・マルコ広場を歩いていて

「ん？」

すると、サン・マルコ広場の名物になっている2本の巨大な支柱に寄りかかる。黒いドレスを着た女が居た

「ほう……」

普通の人間なら、そんな真っ黒なドレスを着て、暑くないの？と聞くべきだが、愛人はそれ以外に目を行った。それは

「あの女……結構いい体しているな」

まさかセクハラ発言をした。ナンパにしようとしていた

「ありやあアリシアやアテナよりいい体しているな」

「へえ、愛人がまさかナンパする気？エンジェル騎士団がまさかのナンパですか？うわく、公務員のくせにないわく」

「うん、そうだな、俺はこれからアルをナンパしよう。俺男もイケるんだ」

「やめてよ!!アルくんがホモに目覚めたらどうすんのよ!!?ていうか何気にキモイことを言わないでよ!!」

ナンパしようとした愛人を見つけた藍華。ナンパしようとした愛人に制裁でも加えようかと思いきや。まさかの返り討ちに遭う

「お?どうした藍華?灯里たちと合同練習じゃないのか?」

「その待ち合わせよ。あんたは?」

「俺か?俺はあの柱に寄りかかる女がいい女だと思った」

「あんたそれセクハラじゃない。誰か通報して!ここにセクハラして

いる人が居ます」

「誰か助けてください！ここにノームに努めるか弱い小さな子供の童貞を奪おうとする淫乱なウンディーネがいます！」

「それアル君!? ノームに努めるか弱い小さな子供ってアル君!? アル君は私たちより年上で19歳だし!? 何アル君を勝手に子供扱いしているのよ!？」

そんな藍華のやり取りをしていると、

「何を・・・しているの二人とも?」

そんな大きな騒動している二人に、灯里がやってきた

「灯里! 聞いてよ! 愛人がねー」

「俺今藍華とデートしているんだ」

「は!?! 何言ってるの!?!」

「藍華ちゃん?」

「待って!?! お願い!! そんな怖い目をしないで!! 私は違うの!! 私はこんなクソ野郎と付き合っていないから!!」

「へえ、そうなんだ。私とアリシアさんが想いを寄せている愛人さんにクソ野郎って呼んでいるんだ」

「待って!?! わかった!! 私が悪かったからお願いだから話を聞いて!!」

愛人が灯里藍華とデートしていると嘘をついた瞬間。灯里の周りには多数の武器が、どこからかクリスタルのような輝きをしたような武器が灯里の周りに浮いていた

「なにそれ!?!」

「え? 剣、刃、弓、双剣、刀剣、投剣、盾、枉駕、杖、逆鉾、刀、父王の剣だよ?」

「王様!! 陛下? 最後にとんでもない武器が。それを使って私に一体なにをする気なの!?!」

「言いたいことは『調子に乗ってんなよ(○クティーガー風)』って言えばわかるかな?」

「灯里ってそんなキャラだっけ!?! お願いだから話を聞いてお願い!! 私は無実!」

「フハハハハハ、ダッセー! 藍華が殺されそうになっている」

愛人は完全に藍華をからかっていた

「嘘だよ。デートじゃねえよ。ただ珍しい女が居るって言うってただけだ」

「あ、そうなんですか、なんだくびつくりした」

嘘だとわかった灯里は、周りに浮かんで武器が消える。藍人と異性な関係じゃないと知った灯里は怒りが堪える

藍華は二度と灯里を怒らせないと誓う

「それでどうしたんですか？珍しい女の人って、もしかしてあそこにいる柱に居る黒いドレスの女の人ですか？」

「そう、あの女。こんな暑いのによくあんな黒いドレス着るよな？」

「ですね。私も思います」

「その黒いドレスを着ている女ってどこにいるのよ？」

「は？あそこに・・・あれ？」

「いない？さつきまであそこで」

藍華をからかっているうちに、柱に寄りかかっていた黒いドレスを着た女がいなくなっていた

「なんだ？幽霊か？」

「怖いことを言わないでくださいよ愛人さん！」

「だって、いつの間になくなるとか幽霊じゃん。あの女首がなかったりしてな？」

「まさか・・・」

「あ、もしかしてデユラハンだったりしてな」

「こんな大勢いる一般人が居るサン・マルコ広場で朝からデユラハンが居たら、そりゃあ驚くわよ!」

「仕方ない。首がないなら、俺があんぱんで作った顔を焼いてあげしかない」

「それアン○○ン○○ン!?明らかにアン○○ン○○ンだから!?幽霊の首がないからってアン○○ン○○ンの顔を付けたりするんじゃないわよ!」

バカ愛人はまさかの幽霊にまでイタズラをかまそうとしていた。お願いだから人がたたり遭うようなことを起こさうとしないで欲しいと藍華は思った。幽霊が絶対にその気にしちゃうから

「でも、確かこのヴェネツィアに昔怖い話があるって聞いたな？」

「え？なんですかそれ？」

「藍華も知っているだろ？」

「うん、あそこのサンマルコ広場にある巨大な支柱の話でしょ？」

「ああ」

「何なの藍華ちゃん？その怖い話って？」

「マンホーム時代のヴェネツィアからずっと、この街の表玄関とされてきた場所なんだけど、遙か昔、中世のヴェネツィア共和国では何と罪人達の公開処刑場としても使われていたそうなの」

「………嘘だよな？」

「まあ灯里はそういう話は信じたくないのはわかっているけど、昔は平和じゃない400年前は当たり前前に人間は戦争をしていたんだ。残酷な時代だったから、毎日人が死んで当たり前前の時代さその時は」

灯里は人が死ぬような話は当然信じたくない。わからないわけでもないと愛人も理解はしてはいるけど、残念だが嘘はつかずに歴史を知ってほしいと真実を告げた

「それでね？ある時処刑される一人の女性が自分の遺体を墓地の島である有名なサン・ミケーレ島で吊ってほしいと願いでた。当時の島の墓は過密状態で結局、彼女の願いが叶えられることはなかった」

「それ以来の夜から異変が起きた」

「異変？」

「お前らウンディーネという。昔では男がゴンドラを操縦をしている人たちゴンドリエーレって言う人たちが居たんだが、その人たちが毎日一人ずつと行方不明になる事件が多発した」

「え？どうして行方不明に？」

「ゴンドリエーレが夜一人であの柱の近くに居ると、『サン・ミケーレ島まで乗せてほしい』と頼む喪服の女性が現れる。そして最後その彼女の願いを聞いて一緒に行くと、そのゴンドリエーレがサン・ミケーレ島から戻ってくることはなかった」

「どうしてですか!？」

「なんでも神隠しにあったとか、もしくは彼女と一緒に冥界に連れて

かれるとかで、とにかく命の保証はないと伝えられている」

「それ以来ヴェネツィアの街のゴンドリエーレの仲間の中で長く語り継がれてきた怪談よ」

「こわー!!こわー!!」

まあ、無理もなかった。灯里は純粋さもある。だからこういう怖い系は苦手で当然。もしかしたら彼女は暗いところも苦手なのかもしれない

「でもそれはマンホーム時代のヴェネツィアの話ですよ？今のアクアのネオ・ヴェネツィアじゃあそんな怪談はないよね？」

「俺もそう思ってたんだがな」

「え？」

「行方不明になったウンディーネはいないが、つい最近それらしい女性があつた支柱の近くでうろついているっていう噂をアクトの方にも聞いた」

「嘘……ですよね？」

「噂だからまだわからない。噂は噂でしかないとも言いが、最近そればかりの噂を他の団員にも言われる。一応エンジェル騎士団はそれについても調査しようと、俺も2週間前から調査している」

「もし見つけたらどうするんですか？」

「事情聴取による。どうあつてもそんなことをしている人間を放っておくわけにはいかないだろうな」

愛人の話は嘘ではなかった。そんな怪談は多くいる。それで怖がるウンディーネの通報も多数ある。どのみち今日から愛人は徹夜をしても、その喪服の女性を探すことにする。こうなつてはエンジェル騎士団も黙っていない。怪しい行動すれば誰もが疑うに決まっている

一応アクトの命令で動いているのだが、アクトはできれば愛人に頼みたくはなかった

確かに彼は天才かと思うほどの人外超えた才能と知識、幽霊も探すことも可能だろうが

彼を心配するのは一つ。

バカやって幽霊を挑発しないでほしいこと

あつという間に夜になった。灯里と藍華とアリスは夜遅くまでゴンドラの練習をしていた。20:00で練習をやめ、会社に戻るのだが、

灯里はゴンドラでサン・マルコ広場の近くに居た

「・・・・・・・・」

灯里は少しその夜に恐怖を感じた。無限に広がる海。彼女は海が好きだ。泳ぐのも横たわるのも好きだ。

だが

この海に恐怖を感じる

灯里とは別に海が怖いという人間も居る。なぜなら海が広すぎて、海に落ちたら最後溺れて消えるのではないかと恐怖を覚える者も居る。

灯里は夜の海も好きはず、

だが

怖い

なぜかこの海が怖い。今日だけ怖いと感じるのか、あるいは今日愛人が言っていた怪談の話を聞いたせいで怖いか、どうしても急いでゴンドラを漕ぎ、会社に戻る

でない、この暗闇の海に飲み込まれる感覚をした
すると

「すいません、そのゴンドラ」

「は、はい」

昼間に居た黒いドレスを着た女性が居た

「どうか私を乗せてくれないでしょうか？」

「あ、いえ：私一人でまだ半人前でお客様を乗せることはできないんです」

「そうだったの困ったわね、もう他のゴンドラは営業を終えていますし」

「……………」

このままこの人を置いておくにはいかなないと灯里もウンディーネの意地があるのか、彼女を乗せることにする

「あの……規則でお客様を乗せることはできませんが、友達という関係で乗せることにしますので、どうぞ乗って下さい」

「ありがとうございます。あなたはいい娘ね？」

「いえ、では行き先をお願いします」

そして彼女からとてつもない行き先を口にする

「サン・ミケーレ島まで……………」

「……………え？」

まさかの愛人の言っていた。怪談の話と一致している要求となつた

喪服の女性が『サン・ミケーレ島まで』連れて行かれる話が、今灯里も逢っている

怪談と同じ状況になっているはずないと信じている

だからとりあえずその人を乗せることにした

一度言った言葉を断るわけにはいかない。

「わかりました。ではどうぞ」

「ありがとう」

こんな夜になぜあんな墓地の島にこの女性に行くだろう？だが、そうだったとしてもあの怪談を考えてしまう

そんなはずない。そんなはずない。そんなはずないと信じている
考えただけでも頭が真っ白になりそうだった。恐怖が体から震え
る

女性の顔は見えない。喪服も着ている。これほど恐怖になる夜は
灯里にとつて一度もない

気づいたらいつの間にかサン・ミケーレ島の門まで着いていた・頭
では恐怖し、体はいつの間にかサン・ミケーレ島まで漕いでいた

「どうもありがとう。本当に助かったわ」

「いえ、では私はこれで」

すぐにこの暗闇と怪奇のような空気からいち早く逃げたしたいと
すぐにゴンドラの角度を変える

だが

「え？」

彼女の手を喪服の女性が掴む

「貴方……とてもしい娘ね。いつまでも一緒に居たいわ」

彼女の腕に引っ張られ、サン・ミケーレ島のな中まで連れてかれる。

そこは墓だった。十字架の石像でできた墓の数々、そこに連れてかれ
た

「はあ……はあ」

走り疲れたのか、その場で膝を灯里は着いた。

「どうしたの？早く立て？」

灯里は喪服の女性の顔を見た

「大丈夫私たち上手くやっていけるわ？お友達ですもの？」

立てるはずがなかった。なぜなら

「違うだろ？お前の友達は愛と勇気が友達だろ？」

「……………え？」

「ああ……………愛人さん!!」

喪服の女性の後ろにアホ愛人が居た

「たく、灯里心配したぞ？アリスと藍華は会社に帰ってて、お前だけ会社に帰ってないってアリシアから連絡があったんだよ、ひよつとしたらなくって思ってたやっぱりサン・ミケーレ島にいたか、噂は本当だったわけだ」

「貴方!?!なぜ私が見えるの!?!」

喪服の女性も驚いたせいにか、灯里を離す

「そりゃあ見えるだろ？灯里？こいつの正体が分かったぞ？」

「え？」

「こいつが最近サン・マルコ広場をうろつく話を聞いてな？調べたら誰だかわかったんだよ？」

「誰なんですか？」

「それはな……………」

「アンパンマンだ!!」

「え?」

「え?」

アクトの言う通り、愛人はやっぱり幽霊をバカにした

「だってこいつ顔ないじゃん? 知っているか? アンパンマンは顔がなくなるって邪悪な存在になるんだぞ?」

「そんなわけないでしょ!? なんで私がアンパンマン!? 顔がないからってそういう扱いにするのやめてくれる!」

「そうだったんですね! そういうことは早く言ってくださいよ! そしたら私もあんぱんを作るのに」

「ちよつと!? なんてあなたまで騙されているの!? この坊やの言うことを信じちやだめよ!!」

喪服の女性があまりの言葉にツツコミした。愛人はやっぱりバカだった顔がないからアンパンマンってどういう解釈しているだろうか、灯里も恐怖が消えたのか、幽霊の正体を誤解している

「よし灯里! この墓の奥で厨房があるからあんぱん作るぞ?」

「はい!!」

「ちよつと私の話聞いている!? 私の顔がアンパンマンとか体的にバランス悪いんだけど!? ていうかそんな顔とか色々困るんだけど!」

美人の体にあの丸いアンパンマンの顔をつけるとかどんだけバランス悪いだろうか、ていうかサン・ミケーレ島に厨房なんてあったんだ? 食材は愛人が自前で

「じゃないとお前まともに戦えないぞ? ほら?」

「え?」

愛人は横にいるデカイデブ猫。ケットシーが戦闘態勢で待ち構えていた

「何よあれ!? 私今からあんなのと戦うの!」

「待っている! 灯里! 新しい顔を焼くよ!」

「はい!」

「『バタ子! 新しい顔を焼くよ!』みたいと言わないの!」

なんだかんだで喪服の女性はケットシーと戦う羽目になった

レディーファイ!

「ちよつと!?!何この格闘ゲームみたいな感覚!?!おかしいんだけど!?!」
「にゃん龍拳!!」

「あんたもあんたでおかしいでしょうが?!それ絶対??龍拳でしょ!?!」

ちなみにケットシーの体力1000、喪服の女性は体力200

「なんで私の体力こんなに低いのか?!これでどうやって勝てばいいの?!」
この格闘ゲームレベルでもあるのか!?!」

なんだかんだで30分かけてケットシーの体力を300にまで減らせた

「私今生きているのが奇跡よ」

「よしできたぞー!」

「本当に持つてきたわ!?!」

愛人の手には出来上がったあんぱんの顔。うまく焼き上がっている上に湯気が出ている。どうやら出来立てらしい

「ちよ!?!それ本当に私の顔に!?!」

「新しい顔よ!」

愛人は喪服の女性に向けてあんぱんを

メテオジャムで投げる

「それええ!!」

「グヘエ!?!」

あんぱんの顔は喪服の女性の腹に直撃し倒れた。明らかに恨みがあるかのような投げ方だった

そのまま喪服の女性は倒れたまま立ち上がることなくKO

にゃ!!無理ゲーもいいとこにゃ!!」

明らかにケットシーの勝敗はなくなっていた。これぞ弱肉強食

「喰らえお邪魔虫!!ハヒフへホ玉!!」

「なんにゃそれはあああああああ!!」

愛人は両手を上に上げ、元〇玉ぽいの出して投げた。ケットシーはその光の玉にぶつかり消えた。

「ち、逃げられたか。あのデブ猫め今度こそ食ってやる!」

「あの?愛人さん?」

「おおお、帰るぞ灯里?アリシアが心配しているから?」

「あ、はい」

ケットシーと喪服の女性はいつの間にか消えていた。あの後どうなったかは知らない、灯里は愛人と一緒にARIAカンパニーに帰った。まるで何事もなかったかのように

「てことがありまして」

「兄さん素敵です!」

「後輩ちゃん!?愛人に憧れている場合じゃないでしょ!?!完全に愛人がバイキンマンなんだけど!?!悪党に憧れちゃダメでしょ!?!」

次の日昨日の出来事を正直に話す愛人。アリスは素敵だと憧れるが、藍華は愛人が完全に悪党ということにツツコミする

それはそうだろう。ケットシーを食べるために幽霊を排除するために悪党になるなど外道以外他にない。悪党には悪党でか？

「しかも愛人さんの言う話だと、あの怪談はこのネオ・ヴェネツィアが作られた後誰かが広めたデマな作り話だったそうだよ。本当に良かった!」

「でも灯里達が出会ったその喪服の女性は誰なんだろうね？」

「愛人さんもそれはわからないって？一応エンジェル騎士団はその女性を調査はするみたいだけど？」

「ともかく良かったわあんたが無事で昨日は心配だったんだからね？会社に帰ってきてないアリシアさんから聞いてみんなで街中探したんだから!」

「ごめんなさい」

とにかく何はともあれ灯里が無事なのは何よりだ

「.....」

「どうしたの後輩ちゃん？もしかして灯里が無事で泣いているとか？」

さつきからアリスが黙っていた。さつきの話に何かきになることでもあるのだろうか？

「いえ、そういうわけじゃあないんですけど、二人は最近この町である噂が流れているんですけど？知りませんか？」

「え？また噂？」

「また怪談話？もう信じないわよ？」

「いえ、今回の噂は怪談は怪談なのですが、少し奇妙な噂で街の皆さんや私の会社もほとんどが目撃している噂なんです」

「な、なにそれ？オレンジプラネットの会社でも流れている噂」

「はい、内容は『街の地面に血だらけの足跡が残されている』という噂が流れているの知っていますか？」

「なにそれ!?血だらけ足跡!?不気味!」

「はい、最近夜でネオ・ヴェネツィアの街の地面に血だらけの足跡を見つけた人が多くいます。噂になっているのですが、夜中に誰かが街に通りにかかる人を無闇に殺すという噂が流れているんです」

「なにそれ!?怖い!!」

「本当に怖いよ!」

「まだ噂ですから大丈夫なはずです」

アリスの会社の人たちもそういう話をもう誰もがするようになってる。こんな平和な街に殺戮のような事件があるなど三人は信じたくはなかった

「おや?練習かい三人とも?」

「あ、アクトさん!」

三人の会話を聞いたのか、たまたまアクトがやってきた

「どうしたんですか?まさかあのバカ愛人がまたサボリやがったんですか?」

「藍華先輩?兄さんをバカにすると殺しますよ?」

「そうだよアリスちゃんの言う通りだ。あいつは引き続きある調査をしているよ?そこまでバカじゃないさ」

「まあ、あいつは根は真面目だしね」

「ところで何の話をしていたんだい?」

「あ、アクトさんは最近この街で流れている噂を知っていますか?」

「っ!まさか夜中の街の地面に血だらけの足跡が残るとい話かい?」

「はい!そうです!怖いですよそんな噂」

「そうか、君たちも聞いたか、なら君たちにも言っておく」

「え?」

「何をです?」

「その話は噂じゃない。本当だ」

「「?!」」

なんと噂ではなく、本当に血だらけの足跡がこの街にあるそうだ

「実は先日も明朝に発見した。これで10件だ」

「10件も!?!まさか誰かが人を殺したんですか!?!」

「いや、殺人事件じゃないんだ」

「え?どういふことですか?」

「実は最近それについて調査しているのだが、街で死人は誰もいなかった。街の住んでいる人を全員を調べたところ死人は誰もいなかった。信じられないかもしれないが、誰の被害もなく血だらけの足跡だけが夜中に出てくるという不可解な事件が最近多発しているんだ」

「まさか・・・血だらけの幽霊が夜中の街にうろついているとか?」

「怖い!!」

「とにかくエンジェル騎士団はここ一週間から夜勤も入れることにした。こんな不可解な事件を我々は見過ぎすことはできないため警備をすることになった。君たちも会社に戻れば言われると思うが、一週間あたりの夜は必ず一人にならないことは承知しておいてくれ?」

「「はい!」」

そんな不可解な事件により、アリシア、晁、アテナから三人に合同練習は18:00までとなった。身の安全のためである

「困ったわ。遅くなっちゃったわ」

アリシアは珍しく、会社の仕事で遅くなってしまった。エンジェル騎士団の警報により、一人での夜中の外出は禁止の規則があるのに、仕事のせいで一人で帰ることになってしまった。しかもゴンドラでの移動でなく。歩きの移動だった。下手をすればアクトの言っていた事件に関与する人と出くわす可能性がある。そのためアリシアは少し早歩きで帰る。海沿いの方を歩いていった

「あらっ？」

すると、前方に見える海岸沿いに古い壊れた船があった。その上で、白いTシャツと黒いスボンを着た青い髪の男性が居た。

「誰だろう？・あんなところで何をしているのかしら？」

壊れた船の上で海を見ていた。背中を向いてて顔は見えない。あんな古い壊れた船の上で何をしているのだろうか？アリシアはその男性に話しかけようとする

ところが

「えっ？」

男性はカチャと地面に置いてあった刀を掴み、抜く
そして

自分の首を斬った

「ひ!？」

あまりの衝撃にアリシアは驚く。男性の頭がコロと地面に転がる。首から大量の血が噴き出した

何と自殺したのだ。壊れた船の上で自分の首を自分で斬ったもだ。あまりの恐怖にアリシアは街の建物の裏に隠れてしまう。

「はあ・・・はあ」

怖いよりもとんでもないものを目にしてしまった。人が自殺する瞬間を見るなど、驚く以外ない。アリシアは呼吸がうまくできず、その場に膝を付く。吐き気はしない。ただ怖くてその場から動けなくなる

本当ならすぐにエンジェル騎士団に通報するべきだが、それすらできな。怖いと言う気持ちではなく、なんでそんなことをするのかという気になる衝動に心がいっぱいだった。あんなものを見たせいで心が落ち着かない

すぐにその人の顔を見ようと建物の裏から出てこようとするが

さらに衝撃が続く

「ああ・・・やっぱりダメか」

「!？」

なんと壊れた船の方から声がした。アリシアは手元に持っていた化粧用の鏡をその方向に移す。

「そ、そんな!？」

さらにアリシアは怯える。なぜなら

男性が首が斬れたまま立っていたからだ

「あの女みたいに、首を斬れば死ぬかと思ったがダメか、いい考えだと思っただがな」

「はあ．．．はあ．．．」

アリシアは口を手で押さえたままその鏡を見て怯える。あの男性が幽霊で間違えなかった。首が斬れているのに、刀を持って背伸びをして動いていた

「しばらくはやめるか、あいつらも夜勤調査を始めたし、死ぬ方法が他に見つかるまではしばらくはやめようか、見つかると厄介だし」

「．．．．．一体誰なの？」

アリシアは背中越しで顔は見えない。どうして首が斬れたのに生きているのだろうか

「やっぱり俺は何があっても死なないんだな」

その言葉を口にし、首が斬れた男性は壊れた船から降りた。そのままサン・マルコ広場の方へ歩いて行った

「はあ．．．はあ．．．はあ誰なの？」

その後アリシアは壊れた船の方へ歩いた。そこで壊れた船に血のよう跡が大量の付いていた。だが死体は何もなかった。斬れた首も無い。血だけがその場に残った。その男性を追うことなどできなかった。もしかしたら呪われると思ったから

それから1週間後、アリシアが見た壊れた船に付いた血の跡を発見して以来、夜中に血の足跡を見つかることはなかった。誰一人も犠牲者も出ないまま、その事件は単なる噂で終わった

アリシアがあの夜に目撃したあの光景は、さすがに誰にも言えなかった。信じてはくれないだろうし、そんな怖いことを他の人間に話せるわけがない。深く関われば自分の身を危険に晒すからである

それにもう夜に首が斬れた彼はあの壊れた船に現れることはな

かった

その光景からアリシアは一つ気になることがある
首が斬れた男性は確かに背中ごしで顔は見えなかった。
だが、

その男はアリシアが知っている友人の声と似ていた
ということだけ

「内容は聞いてない。君にしかできないことらしいから、とにかく君が行ってくれ?」

「え、嫌だよ。あいつメチャクチャ強いもん。俺があいつに剣を投げたら、あいつ俺の剣の刀身で搦んで、握り潰して壊す気だぜ? したら次はアクアを焼き尽くす気だぜ?」

「まださっきのあらすじの話続いてんのかよ!?! アリシアさんをあの死の女神と一緒にすんなよ!?! お前まだアリシアをバカにしてんのかよ!?!」

「最近あいつのいじくるの忘れててさ?」

「忘れろよ!?! 死ぬのお前なんだぞ!?! 物を忘れてたみたいと言うなよ!?!」

「とにかく嫌だ。めんどくさい」

「だろうね?」

「え?」

その瞬間。俺は眠ってしまった。アリシアの依頼をめんどくさいが為に、本部の部屋を出ずに粘っていたら、突然眠ってしまった

俺、読者のみんなが何考えているのか分かるよ？
どうしてこうなったのかって？
長い話になる

目を覚めたら

いつの間にか私服に着替えさせられて、大きな鎖に巻きつけられて身動きが取れないまま。小さな電車に乗せられていた。

灯里と藍華とアリスとアリアと一緒に

「あ、兄さん。でっかい目が覚めました？」

「……………」

「愛人さんの着替えのバックもここにありますよ？今着ている服はアクトさんが着替えさせましたから？」

「……………」

「あのさ？愛人？」

「……………何？」

「何があったの？」

「こつちが聞きたいわ!!？」

やっぱりごめん読者のみんな。俺にもわかんない。なんでこうなったのか。なんで私服に着替えてて、大きな鎖に巻きつけられて身動きが取れない。状態で電車に乗せられてたなんて、説明がつくはずない！どうしてこうなったのかなんて俺が聞きたい!!

長い話になっていると思うけど

「は!？」

俺は、さっきの灯里の言葉に気づいた

『愛人さんの着替えのバックもここにありますよ？今着ている服はアクトさんが着替えさせましたから？』

俺の服をアクトが着替えさせたってことは、灯里が事情を知っているということだ

「灯里？俺何があつた？」

「えくと、アリシアさんの依頼から逃げようと愛人さんが本部の裏から逃げたんですが、アリシアさんが先回りして逃げられなくなり、愛人さんが反撃するも、剣をアリシアさんに壊され、アリシアさんが彩音さんの剣を借りて、愛人さんを焼き尽くして気絶しました。その後アクトさんが無理やり愛人さんを私服に着替えさせ。逃げないようアリシアさんが大きな鎖で巻きつけて、私たちと一緒に城ヶ崎村まで電車に乗っているんです」

「……思い出した」

そうだ。読者のみんな。思い出したから説明するよ。

俺はあまりの暑さにアリシアの依頼が嫌で本部の裏に逃げ出したけど、アリシアが本部の裏で待ち伏せしてやがった。あいつ俺が逃げること分かってやがった。もちろん逃げ場なんてなかった。アリシアを倒さないと逃げられなかった。だから愛用の剣を投げて反撃したが、まさかあの女素手で俺の剣の刀身を掴みやがった。ちゃんと刃はあるっていうのに、血もたれずに素手で俺の剣の刀身を握りつぶしやがった。俺の剣は大きな石や鉄も斬ることのできる強度の硬さのある剣だつて言うのにあいつは腕力でぶつ壊しやがった。剣も無くなった以上、今度は足で逃げるしかないと思つたんだが、あいつ。俺が暑さで弱っているのわかつているせいとか、灼熱の炎が出る剣。彩音の愛用の剣を借りてやがった。その灼熱の剣で俺は燃やされ、気絶した

そんでアリシアはいないが、灯里と藍華とアリスと一緒に城ヶ崎村に向かつていた

「たく、ところでまだ依頼内容聞いてないぞ？なんでわざわざネオ・ヴェネツィアを出て、アクアの田舎ルート『城ヶ崎村』まで向かつて

いるんだ？あそこにはあいつの家しか何も無いんだぞ？」

「そう！そこよ愛人！私たちはそこへ向かっているの」

「あ？お前らまさか？」

「はい。私たちはでっかい夏バテになっている状態の私たちをグランマに鍛えてもらうために！」

「今からグランマの家に行くんです！」

「それって……合宿じゃねえか」

グランマ

通称グラントマザー

本名は天地秋乃。

灯里の勤めるARRIAカンパニーの創立者。元は姫屋で働いていたが、突然アリア社長と出会い。一緒にARRIAカンパニーで独立を始める。30年間に渡りウンディーネ業界のトップに君臨した「伝説の大妖精」。「グラントマザー」とは、その業績から現代ウンディーネの母と称えられた彼女に対する敬意と共に付けられた呼び名である。アリシアの師であり、いろんなウンディーネの憧れ。アリシアがプリマになったその日に引退し、今はこの村でのんびり暮らしている

そんなお偉いさんの家に向かい。合宿する

「でもなんで俺？俺付いてくる意味ある？」

俺はウンディーネじゃない。なんで俺が灯里たちの合宿に付き合わないといけないんだ？

「本当に合宿か？秋乃のはなんて言ってるんだ？」

「普通にいらっしやいとかしか言ってるわいよ？」

「海もないこの田舎でどうやって合宿するだか？」

こんな緑いっぱい田舎で秋乃の家で合宿することになった

電車で城ヶ崎村駅に着いた。

「それで？秋乃は駅まで迎えにくるんだろ？」

「アリシアさんの話によるとね？ていうか愛人？」

「何？」

「グランマって呼びなさいよ。名前で呼ぶなんて凶々しいわよ！私たちからすればおこがましいわよ！」

「俺初めて会った時から名前で呼んでんじゃん。それに俺はウンディーネじゃないし。別にグランマって呼ぶ必要はないだろ？」

俺はグランマって呼ぶ理由はなかった。お前らが憧れているのは知っている。だからと言って俺がグランマって呼ぶ理由はない

「藍華ちゃん。灯里ちゃん。アリスちゃん。アリア社長。そして愛人くん」

「よう秋乃。久しぶり」

後ろから日傘をさした秋乃が居た。

「ようこそ城ヶ崎村へ、アリシアから話は聞いているよ」

「ぷいにゅー！」

「あらあら、元気だった？アリア社長」

「今日をお願いします」

「ええ、明日まで楽しんできてね？」

「あのさ秋乃？アリシアから話は聞いているんだよな？」

「ええ」

じゃあ

「いい加減この鎖解いてくれない？」

電車に降りても俺は鎖に巻きつけられたままだった。灯里や藍華やアリスに解くように頼んだが、硬くて解くことができない。その鎖はまさに天の鎖だった

「わかったわ。じゃあ……えい！」

秋乃は小さなげんこつで、鎖を砕いた

「なあ？なんでお前まで素手で壊せるの？もしかしてアリシアに素手で物を壊せる技を教えたのお前？」

「……うん」

「お前かよ!?お前のせいでアリシアがとんでもないほど強くなっていくぞ!?お前今日俺が何があったか知ってる!？」

「アリシアに剣を壊されたんでしよう？アリシアの依頼から逃げ出すためだけに？」

「そうだよ！だって俺まだ他の依頼があったんだぞ！そっちの方が前々から依頼があったんだからそっちを優先するに決まっているだろ？俺なんて言えばいいんだよ!?前から頼んでた依頼の人たちに!？」

「それなんだけど、前から頼んでた依頼の人たちにアリシアが『お願い♡』って頼んだらしくてね？そしたらアリシアの美しさに見とれて前から頼んでた依頼の人たち。また今度でいいってアクト君から聞いたよ？さっき？」

「あの女ああああああああああ!!自分の美貌を使って、前から頼んでた依頼の人たちをお色気しがつた!?!あの泥棒女！ネオ・ヴェネツィアに帰ったらタダじゃ済まさない!!」

愛人の優先の依頼まで、アリシアは手を打っていた。アリシア。恐ろしい子。愛人を手に入れるなら。自分の体を使ってお色気をするなど、恐ろしい以外ない。ていうかあれが本当にウンディーネのスノーホワイトさん？

「ところで、そいつらを海のないここでどうやって鍛えるつもりだ？ていうかなんでお前のところで鍛えたいって言い出したのこいつら？」

「なんでも、夏バテ気味で私のようなプリマになれないって言い出して、そこで私に鍛えてもらうのがいいのでは？ってアリシアが言ったのよ」

「なるほどね、まあプリマになるためにお前に鍛えてもらうのはいい。でもなんで俺まで連れていく必要がある？」

「アリシアが何かしらの考えがあるってことじゃない？」

「前から頼んでいる依頼の人たちに色気をしてまでか？おかしくねえかそれ？」

「アリシアの場合。愛人くんを手に入れるためなら暴力をしてもやるかもしれないわよ？」

「それウンディーネとしてまずいよね？何冷静に言ってるのお前？」

もしそんなことになったら、アリスやアテナよりもやるのが悪党にしか、俺には思えなかった

とりあえず説明を受けて歩いていると、いつの間にか秋乃の家に着いた

「それで？まずは何をさせる気だ？あいつらに？」

「そうね……まずは荷解きを済ませて、畑のとうきびを取ってきてもらおうかしら？」

「それ絶対にウンディーネと関係ないよね？お前？まさか……」

「は！了解しました！」

「は、はい！」

「わかりました」

「お前らは秋乃の要望に文句無いのかよ？」

とりあえず家に着き、荷物を置き。秋乃の家の庭にトウモロコシの畑があった。もう採れたてのトウモロコシ。これを取ることにした

「ふふふ、これは数多くのとうきびの中から瞬時に最高のものをい見極めると言う。認識判断力の修行にようね？」

「そんなわけ無いだろ？全部採れたて。今のうちに取れないと、このトウモロコシがうまくならないだけだ」

「じゃあ全部取ればいいんですか？」

「ああ、見たところよくみんな実っているからな、全部取っていいからな！秋乃の奴。トウモロコシの育て方がうまいな、ここまで綺麗なトウモロコシは見たこと無いからな？」

「いっぱい取れた？すぐに茹でるからね？」

「は！秋乃！トウモロコシは茹でるより、焼く方がうまいに決まってるだろ！！」

「あら？そうなの？」

「待つてろ!!」

俺は秋乃の家のキッチンから、七輪を持ってきた。七輪の中に火をつけ、トウモロコシを焼く。焼くだけでなく、手作りソースでトウモロコシを塗る

「香ばしい匂いがします!」

「出来上がり!ソーストウモロコシ!トウモロコシならこれだろ!!」

俺は灯里たちが取ってきたトウモロコシをどんどん焼く

「美味しい!」

「兄さん。どんどんデツカイお願いします!」

「相変わらず料理うまいよね?あんた?」

「本当に美味しいわ。さすが愛人くんね」

「ぷい!ぷい!」

なんだかんだで、取ってきたトウモロコシを全部焼き。五人とアリアで全部食べてしまった。より多く食べたのアリアとアリスだが

「で?次はどうする気だ?秋乃?」

「次は……虫取りでもどうかしら?」

「もうウンディーネの訓練関係ない」

「二はい!わかりました!」

「そんでお前らは相変わらず文句はないと、出かける前に麦わら帽子かぶって行けよ?今日は暑いから?」

そして次はまったく関係のない虫取り。もはやウンディーネの訓練関係ない

「うし!取った!でっかい蝶々!!」

「すごい!」

「私も大量に捕まえました」

藍華と灯里とアリスは虫を大量に捕まえた。と言っても蝶々だけしか捕まえてないが

「捕まえるのはいいが、その後はちゃんと逃がしてやれよ?かわいいそうだから?」

「はい!」

「愛人は何匹捕まえたの?」

「俺か?俺は……」

俺は後ろからカゴではなく、紐をひっぱた。俺が捕まえたのは「デビル大蛇」

「おかしいでしょうが!!?なんでアクアに絶対に生息することのない生き物がいるのよ!?!」

「今日の夕飯はデビル大蛇ステーキな?」

「これ食べれるの!?!?ていうかどうやって捕まえた!?!」

「あらあら立派なデビル大蛇ね?洞窟から捕まえてきたのね?」

「おう秋乃?森から何捕まえてきた?」

「私はね……」

「あの……グランマ?それ?」

秋乃はとんでもないものを担いで着た

「般若パンダよ」

「絶対におかしい!?!明らかにこんな綺麗な田舎な自然に生息することのない生き物がいるわよ!?!」

「蒸すか、アリシアが居たら何捕まえてくるかな?」

「昔は私と一緒にここに来たけど、アリシアはリーガルマンモスの大人を捕まえてきたわ」

「なんであんたたちそんな凶暴な猛獣を捕まえることができるの!?!あなたたちどれだけ強いんだよ!?!」

明らかに俺たちの捕まえる生き物が違った

「すいません。兄さん私はあまりそういうものは捕まえることはできませんでした」

「後輩ちゃん真似しちやダメだから!?!あんな猛獣を相手にしたら死ぬから!?!」

「気にするな。代わりに何を捕まえてきた?」

「テラーフオマー1000匹分です」

「おかしい!?!確かにここ火星だけど、ここアクア!!そんなものをよく捕まえてきたわね!?!」

「でっかいスズメバチですから」

「愛人さん！私も捕まえてきました！」

「おう？何をだ？」

「あ……灯里？それ？」

灯里が両手に上を上げ持っていた食材は

「キングベヒーモスです！」

「何でここにキングベヒーモスがいるのよ!?ていうかどうかやって捕まえてきた!？」

「父王の剣で！」

「何であんたがそんなもん持っているの!？」

「よし、今日はご馳走だな？」

「アリスちゃん、そのテラーフオマーは薬にしましょうか？ワクチンの」

「はい、そうしましょうグランマ」

「わーい、キングベヒーモスのお肉おいしそう！」

「どうしよう。私以外の人がとんでもないものを捕まえてきているんだけど!？」

藍華の捕まえてきた蝶々は逃した。アリスの捕まえたテラーフオマーは愛人がワクチンの薬にして作った。愛人と灯里と秋乃が取ってきた、デビル大蛇と般若パンダとキングベヒーモスはこの後の夕飯になった

「美味しかった！」

「うん、確かに美味しかった。キングベヒーモス食べれるんだ……」

「でっかい美味でした」

「だとき秋乃？」

「それは良かったわ」

あんだだけ大量にあった食べ物が一瞬かのように無くなった。ほとんどアリスとアリアが食べた

「そろそろじゃねえか秋乃？」

「そうね？みんなちよつと来てくれないかしら？」

「はい！」

「やつと講習会始まるのね！」

かと藍華はウンディーネの講習会でもやるのかと思いきや

「……なにこれ？」

「蚊帳。ここは蚊や虫が多いから、この中なら刺されずに済むぞ？」

「明日は早いから、早く寝てね？」

「そんじゃさつきと休めよ？」

そう言つて愛人と秋乃はこの部屋に三人を残して他の部屋に行った。

「どうした？なんか言いたげだな藍華？夜怖いからトイレ一人で行けないって言うんじゃねえだろうな？」

「違うわよ。グランマ！」

「はい？」

「どうか私たちに立派なプリマになれるよう！貴重な助言をください！」

藍華はグランマにお願いした。それもそうだろうさつきから遊びのようなことしか、今日一日過ごしていかない。灯里たちは遊びに来たのではなく、あくまで合宿できているのだ

「たく、ほらだから言つたら秋乃？こいつらはなから遊びに来ているわけじゃないって？」

「そう見たいね？」

「そもそも合宿なんてできるわけないだろ？」

「え？」

「お前らの話を聞いて、夏バテ状態だから訓練して立派にプリマになるってこと自体の考えが間違いだ。夏バテしそうな状態で訓練なり激しい運動すれば帰って体を痛めるだけだ」

「愛人くんの言う通りよ。三人は少し暑くなりすぎよ？そういう時こそ、少しは体を休めるようにして、それから練習したほうがいいわ」

「正直お前ら頭の中が暑いほど考えすぎだ。そんな状態で秋乃から助言をもらっても頭に入んねえよ！」

「う！」

「なんかたまにあんたの言葉が正しいって思える」

「はい、兄さんはいつでもでっかい正しいです」

三人は起き上がり、愛人と秋乃の方へ向く

「たく、アリシアが俺をここへ連れてきた理由がわかったよ。秋乃の代わりにお前らに助言を与えるために俺がここへ連れてきた依頼だったわけだ」

「は!?!なんであんたが!?!」

「俺なら秋乃の分までまとめて助言できるからだろうな?」

「兄さんがですか?」

「って言いたいけど?この依頼はアリシアじゃなくて、お前だろ秋乃?」

「あらやっぱりわかってたのね?」

「あいつの依頼なら直線言ってくるはずだしな、でも今回は連絡で伝えたってことはそういうことだろう」

だからと言って無理やり俺を捕まえるのはどうかと俺は思うがな、まあ逃げ出した俺が悪いが

「まあとにかく、お前らはウンディーネの仕事が好きか?」

「え?ええ」

「それは・・・そうよ」

「はい。それはもう」

「だったら楽しめよ?」

「「え?」」

「ウンディーネの仕事が好きなら、楽しめよ?お前らに足りないのはそこだ」

「え?」

「どういうこと?」

「俺もちよつとしかお前らの合同練習しか見てないが、少しプリマに

なろうと焦っているようにしか見えない。そういう奴はお客様も楽しませることもできない」

「本来はね、ウンディーネと言う仕事はお客様に案内させるのが仕事。その案内をただするだけでなく、お客様を楽しませることも大切な」

「それができないとプリマになれない。言っておくがこれはウンディーネにとって基本中の基本だ。アリシアやアテナや晁だってそうだろう？お前からアリシアとアテナと晁の普段乗っているだろ？乗ってつままないか？」

「い、いえ」

「楽しいです。練習よりも」

「はい、アテナさんの歌も聞いたりして楽しいです」

「そう、そこからはお前らの工夫だ」

「え？」

「私たちの工夫？」

「そう、アリシアや秋乃はお前らに助言を与えることはこれぐらいしかない。なぜならお客様やゴンドラの操縦も楽しむ方法はお前らのやり方でしかないからだ」

「私たちのやり方で？」

「そう、アリシアやアテナや晁のようにお前らにしかできない方法で楽しめ。言っておくが今まであいつら三人がお前らに教えてきたのは技術だけだ。お客様を楽しませるのは当たり前なのはお前らもわかっているけど、その方法は三人には教えてもらってないだろ？」

「それは・・・」

「確かに・・・」

「ゴンドラの操縦と街の案内以外教えてもらったことはありません」

「お前らがシングル止まりなのはそこだ。操縦や町の案内はまあまあだ。あとはどうお客様を楽しませ、自分が無茶せずに現場やお客様の顔の表情を判断して己もその仕事に楽しめるかだ！そうすればプリマになることができる」

「私たちの・・・」

「やり方で・・・」

「楽しむ」

「この仕事が好きなら楽しめよう？まあ俺はこの仕事かめんどくさいからやればいいだけの考えをしているだけだからこんな中途半端なやり方しているだけ。秋乃はお客様とか人と触れ合うのが好きだから、ウンディーネ時代でもかなり仕事をバンバン出してたんだぜ？休む気なんてないみたいにな」

「え？なんで愛人くんそんなこと知っているの？」

「アラエルは情報を調べることができるの、あんたのウンディーネ時代から簡単に調べられるわ」

「グランマも・・・ですか？」

「ええ、夢中で仕事を休むことすらも忘れてたくらいにね？」

「やってみろよ？お前らも？プリマになろうとするな。楽しむことだけ考えろ。そうすればいつの間にかプリマになっているよ。アリシアみたいにも、じゃなかったら ARIAカンパニーで一人でプリマにやっついていけるわけないだろ？休まずにな？」

「二・・・二・・・」

「無理して考えるな。楽しめ。それだけが助言だ」

「はい！楽しみです！」

「まあ、確かにね」

「この仕事が好きですし」

「じゃあ寝ろよ？」

「明日は早いからね？」

「二はい!!」

灯里たちならできる俺は信じた。いや、信じる必要もない。三人ならできるとしか思っていないから

「そういえば、明日朝早いけど何をするの？」

「それはな・・・テラーフォマー100万狩り」

「・・・え？」

「さあ明日は楽しめ、壮大な狩りの日だぞ？」

「テラーフォマーがこの田舎の近くの森にいるの、何匹か捕まえに

「行きましょう?」

「うわー、楽しみです!」

「でっかいワクワクします」

「.....」

「その楽しむは明らかに間違いよね!」

次の日、藍華はただ見ていた。四人の獣がテラフォーマーを狩る姿を見て思うことは一つ

これはもはや楽しめない。ただの蹂躪だった